

あね さき み やま お だっ ペ むかいはら くも の さかい
市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡

— 不 特 定 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 (2) —

1 9 9 1

市 原 市 教 育 委 員 会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県のはぼ中央に位置する市原市は、市内を南北に貫流する養老川を擁し、自然環境に恵まれ、古くより多くの人々が生活を営み、現在に連綿と受け継がれてまいりました。

一方、昭和30年代にはじまる臨海工業地帯の建設を契機として、地域開発が急速に進展し、交通体系の整備、住宅建設等の都市基盤整備事業が続々とおこなわれてきました。このような開発は、現代に生きる住民にとってよりよい生活環境を提供する反面、社会資本としての自然環境、歴史環境の破壊につながることがあり、文化財にとってもその保護と開発との調和をはかる必要性が日に日に高まってきております。

今回ここで報告する姉崎宮山遺跡、小田部向原遺跡、雲ノ境遺跡も、開発にともなう記録保存を目的として発掘調査がおこなわれたものでありますが、市民の文化財に対する普及と啓蒙に、また、将来に残す歴史史料として、本書が広く活用されることを願うものであります。

なお、今回の発掘調査は、国庫ならびに県費の補助を受けまして実施されたものであります。ご指導、ご協力を賜りました、文化庁、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課ならびに関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げる次第であります。

平成3年3月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

- 1 本書は、県費補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した昭和61・63年度「不特定遺跡発掘調査」による、姉崎宮山遺跡、小田部向原遺跡、雲ノ境遺跡の報告書である。
- 2 小田部向原遺跡については、文化庁の国庫補助事業として実施した調査範囲を含めて今回報告する。
- 3 整理・報告書刊行については、市原市教育委員会独自の事業として、市原市教育委員会の委託により、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、下記のとおりである。

姉崎宮山遺跡（センター調査コード セ52）

所在地 市原市姉崎2278、2282－2

調査面積 380㎡

調査期間 昭和61年12月1日～昭和61年12月27日

調査担当 大村 直

小田部向原遺跡（センター調査コード セ80）

所在地 市原市小田部115－5 ほか

調査面積 調査対象5,500㎡のうち2,550㎡

（国庫補助事業）調査対象3,500㎡のうち1,350㎡

（県費補助事業）調査対象2,000㎡のうち1,200㎡

調査期間（国庫補助事業）昭和61年5月13日～昭和61年6月14日

（県費補助事業）昭和61年6月15日～昭和61年7月4日

調査担当 大村 直

雲ノ境遺跡（センター調査コード セ100）

所在地 市原市菊間字雲ノ境2842－1 ほか

調査面積 調査対象1,800㎡のうち410㎡

調査期間 平成元年3月6日～平成元年3月31日

調査担当 田中清美 田所 真 大村 直

- 5 姉崎宮山遺跡と雲ノ境遺跡については、調査段階と遺構番号をかえている。遺物注記は旧番号による。その対照については、各章にしめしてある。
- 6 本書の執筆、作成は大村直が担当した。なお貝類については忍澤成視の指導による。
- 7 本書を作成するにあたって、1968年に調査がおこなわれている「小田部古墳」に関して田中新史氏より資料、データの提供等、協力を得ている。当時出土したガラス玉について国立歴史民俗博物館永嶋正春氏が分析をおこなっているが、これは田中新史氏の依頼によるものであり、この件に関しては、永嶋正春氏にご配慮いただき、原稿を掲載することができた。また、「小田部古墳」の出土遺物について、上総博物館の山田常雄氏には田中新史氏を介して資料の借用の便宜をはかっていただいた。

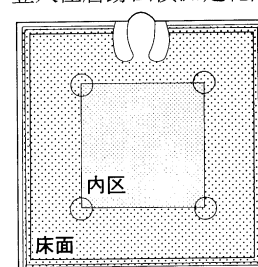
記して感謝の意を表したい。

凡 例

- 1 遺構、遺物の挿図の縮尺は、竪穴住居跡が1／80、土器・石器が1／3を基準とした。
- 2 方位は、座標北である。ただし、雲ノ境遺跡については、基準点測量を実施していないため、磁北、および1／2,500地形図より仮定したものである。
- 3 遺構断面図、水系線上の数字は、海拔高度を示す。
- 4 挿図遺物番号のうち、○を付したもの(①②③…)は、床面上から出土したものである。
- 5 竪穴住居跡平面図、床面破線部分は、床硬質部を示す。
- 6 遺構面積は、ウチダデジタルプランメーターKP-90を使用して測定した。竪穴住居跡、確認面(掘り込み面)、床面、内区各面積測定の基準は下図のとおりである。周溝部については、検出の有無の別があるため、これを基準化するうえで床面積に含めた。内区については、柱痕跡を基準としたが、不明確なものについては柱掘形中心部による。
- 7 玉類等の重量測定は、島津理化器械株式会社製電子分析てんびんAEL-200を使用した。
- 8 竪穴住居跡主軸の設定は、カマドおよび梯子穴の位置を基準とした。また、主軸長については、カマド煙道部を除いている。
- 9 土器観察表において、整形方向上下、左右とは、土器を正立させ、正面から見た場合を示す。
- 10 土器器面色調については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 1988年版』日本色研事業株式会社発行による。
- 11 土器実測図スクリントーンは、赤彩範囲を表現したものである。
- 12 土器胎土については、A白色粒子、B白色半透明粒子、C黒色粒子、D黒色半透明粒子、E赤色粒子であり、○を付したものは、径1mm以上のものを含む場合を示す。また、>は、混合量の多少を示す。
- 13 土器容量について、容量Aは実際に砂粒を入れ測定したものであり、容量Bは、土器実測図をもとに土器内径を1cmに輪切りにし、下記の数式により算出したものである。

$$\text{容量B} = \pi \left\{ \left(\frac{\text{半径}r_1 + r_2}{2} \right)^2 + \left(\frac{\text{半径}r_2 + r_3}{2} \right)^2 + \dots \right\}$$

竪穴住居跡面積測定範囲



確認面(掘り込み面)

本文目次

序 文

例 言

凡 例

財団法人市原市文化財センター組織表

I 調査の経緯と歴史的環境

1 調査にいたる経緯	1
2 調査の結果	1
3 遺跡の位置と歴史的環境	7

II 姉崎宮山遺跡

1 調査の概要	12
2 遺構と遺物	12
3 その他の遺構と遺物	31
4 小結	38

III 小田部向原遺跡

1 調査の概要	48
2 01号遺構(小田部墳丘墓)	48
3 竪穴住居跡と土坑	71
4 確認遺構と遺構外出土遺物	95
5 小結	97

IV 雲ノ境遺跡

1 調査の概要	118
2 遺構と遺物	118
3 遺構外出土の遺物	139
4 小結	139

V 付篇

小田部古墳出土のガラス玉に関する2、3の科学的知見	永嶋正春	146
---------------------------------	------	-----

挿 図 目 次

fig. 1	対象遺跡位置図(1/100,000)	2
fig. 2	姉崎宮山遺跡位置図(1/25,000)	3
fig. 3	小田部向原遺跡位置図(1/25,000)	4
fig. 4	雲ノ境遺跡位置図(1/25,000)	5
fig. 5	小田部新地遺跡全体図(1/800)	7
fig. 6	菊間遺跡全体図(1/600)	9
fig. 7	御社 2 号墳出土遺物(1/6)	9
fig. 8	姉崎宮山遺跡周辺地形図(1/5,000)	13
fig. 9	姉崎宮山遺跡全体図(1)(1/120)	14
fig. 10	姉崎宮山遺跡全体図(2)(1/120)	15
fig. 11	姉崎宮山遺跡断面図(1)(1/80)	16
fig. 12	姉崎宮山遺跡断面図(2)(1/80)	17
fig. 13	姉崎宮山遺跡断面図(3)(1/80)	18
fig. 14	01号遺構出土遺物実測図(1/3)	20
fig. 15	02号遺構出土遺物実測図(1/3)	21
fig. 16	03号遺構出土遺物実測図(1/3)	22
fig. 17	04号遺構出土遺物実測図(1/3、1/2)	23
fig. 18	05号遺構出土遺物実測図(1/2)	24
fig. 19	06・07号遺構出土遺物実測図(1/3)	26
fig. 20	柱穴・土坑深度(1)(1/180)	29
fig. 21	柱穴・土坑深度(2)(1/180)	30
fig. 22	中・近世掘立柱列(1/180)	31
fig. 23	土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(1)(1/3)	32
fig. 24	土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(2)(1/3)	33
fig. 25	土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(3)(1/3)	34
fig. 26	土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(4)(1/3、1/2)	35
fig. 27	古銭拓影(4/5)	36
fig. 28	小田部向原遺跡周辺地形図(1/5,000)	49
fig. 29	小田部向原遺跡全体図(1/600)	50
fig. 30	小田部向原遺跡主要部全体図(1/300)	51・52
fig. 31	01号遺構実測図(1)(1/160)	53・54
fig. 32	01号遺構実測図(2)(1/60、1/30)	55・56
fig. 33	01号遺構検出状況(1/320)	58
fig. 34	01号遺構復原想定図(1/120)	59
fig. 35	千葉県のパ丘系墳丘墓(1/300、1/900)	60

fig. 36	1968年調査出土遺物実測図(1/3)	61
fig. 37	01号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)	62
fig. 38	01号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)	63
fig. 39	01号遺構出土遺物実測図(3)(1/3)	64
fig. 40	01号遺構出土遺物実測図(4)(1/1)	65
fig. 41	02号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3、1/2)	72
fig. 42	03号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3、1/2)	73
fig. 43	04号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)	74
fig. 44	05号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)	75
fig. 45	06・13号遺構実測図(1)(1/80、1/40)	76
fig. 46	06・13号遺構実測図(2)(1/80)、06号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)	77
fig. 47	06号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)	78
fig. 48	07・08号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)	79
fig. 49	09・10号遺構実測図(1/80)	80
fig. 50	09号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)	81
fig. 51	09号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)	82
fig. 52	10号遺構出土遺物実測図(1/3)	83
fig. 53	11号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)	83
fig. 54	12号遺構実測図(1/80)	84
fig. 55	12号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)	85
fig. 56	12号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)	86
fig. 57	13号遺構出土遺物実測図(1/3)	87
fig. 58	14号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)	88
fig. 59	15・16号遺構実測図(1/80)	89
fig. 60	17・18号遺構実測図(1/80)	90
fig. 61	15・18号遺構出土遺物実測図(1/3)	91
fig. 62	16・17号遺構出土遺物実測図(1/3)	92
fig. 63	19号遺構実測図(1/60)	94
fig. 64	遺構外出土遺物実測図(1/3)	95
fig. 65	確認遺構、遺構外出土遺物実測図(1/3)	96
fig. 66	雲ノ境遺跡周辺地形図(1/5,000)	119
fig. 67	雲ノ境遺跡全体図(1)(1/600)	120
fig. 68	雲ノ境遺跡全体図(2)(1/300)	121
fig. 69	雲ノ境遺跡全体図(3)(1/300)	122
fig. 70	01・02・03号遺構実測図(1/80)、01・03号遺構出土遺物実測図(1/3)	123
fig. 71	04・05・06号遺構実測図(1/80)、04号遺構出土遺物実測図(1/3)	124
fig. 72	07・08・09・10・11号遺構実測図(1/80)	125

fig. 73	07・08・09・11号遺構出土遺物実測図(1 / 3 、 1 / 2)	126
fig. 74	12・13・14号遺構実測図(1 / 80)、12号遺構出土遺物実測図(1 / 3 、 2 / 3)	128
fig. 75	15a・16・17号遺構実測図(1 / 80)	129
fig. 76	15b・18・19・20・21・22号遺構実測図(1 / 80)、21号遺構出土遺物実測図(1 / 3)	130
fig. 77	15b・18・19・20号遺構実測図(1 / 80)	131
fig. 78	15b・18号遺構出土遺物実測図(1 / 3 、 2 / 3 、 1 / 2)	132
fig. 79	20・23・24・25・26・27号遺構実測図(1 / 80)、23号遺構(1)、26号遺構出土遺物実測図(1 / 3)	134
fig. 80	23号遺構出土遺物実測図(2)(1 / 3)	135
fig. 81	28・29・30号遺構実測図(1 / 80)、29号遺構出土遺物実測図(1 / 3)	136
fig. 82	22号遺構、遺構出土遺物実測図(1 / 3 、 2 / 3)	138

表 目 次

tab. 1	周辺の遺跡一覧表	6
tab. 2	姉崎宮山遺跡新旧遺構番号対照表	12
tab. 3	05号遺構出土玉類一覧表	24
tab. 4	姉崎宮山遺跡出土土器組成	37
tab. 5	貨幣一覧表	37
tab. 6	姉崎宮山遺跡竪穴住居跡一覧表	38
tab. 7	姉崎宮山遺跡出土土器観察表	39
tab. 8	「小田部古墳」(01号遺構)出土管玉一覧表	65
tab. 9	「小田部古墳」(01号遺構)出土ガラス小玉一覧表	66
tab. 10	18号遺構貝ブロック組成	93
tab. 11	小田部向原遺跡竪穴住居跡一覧表	94
tab. 12	小田部向原遺跡出土土器観察表	101
tab. 13	雲ノ境遺跡新旧遺構番号対照表	118
tab. 14	雲ノ境遺跡竪穴住居跡一覧表	137
tab. 15	雲ノ境遺跡出土土器観察表	140

図 版 目 次

- pl. 1 姉崎宮山遺跡と姉崎古墳群(1961年撮影)
- pl. 2 姉崎宮山遺跡 近景、調査区近景(調査前)
- pl. 3 姉崎宮山遺跡 確認調査状況(南西より)、拝殿基壇断面(1)(南東より)、拝殿基壇断面(2)(南より)
- pl. 4 姉崎宮山遺跡 拝殿基壇断面(3)(南西より)、拝殿基壇断面(4)(南西より)、本殿基壇断面(南東より)
- pl. 5 姉崎宮山遺跡 西側調査区(1)(北東より)、西側調査区(2)(西より)、01号遺構遺物出土状況(北東より)
- pl. 6 姉崎宮山遺跡 03・04号遺構(北より)、東側調査区(北西より)、05・06・07号遺構(東より)
- pl. 7 姉崎宮山遺跡 東側調査区(西より)、南東側調査区(南より)、02・16・17号遺構(南より)
- pl. 8 姉崎宮山遺跡出土遺物 01・02・03号遺構出土土器
- pl. 9 姉崎宮山遺跡出土遺物 03・04・07・17号遺構、遺構外出土土器
- pl. 10 姉崎宮山遺跡出土遺物 出土土器
- pl. 11 姉崎宮山遺跡出土遺物 出土石器、土製品、石製品、鉄器、青銅器、貨幣
- pl. 12 小田部向原遺跡と周辺の地形(1961年撮影)
- pl. 13 小田部向原遺跡 遠景(小田部新地遺跡より)、「小田部古墳残丘部」(田中新史氏1982年撮影)(南東より)
- pl. 14 小田部向原遺跡 遺跡全景(南西より)、住居跡群全景(南より)
- pl. 15 小田部向原遺跡 01号遺構全景(1)(北西より)、01号遺構全景(2)(南東より)
- pl. 16 小田部向原遺跡 調査前状況(南より)、確認調査状況(北西より)、01号遺構全景(3)(南より)
- pl. 17 小田部向原遺跡 01号遺構開口部(1)(東より)、01号遺構開口部(2)(西より)、01号遺構開口部(3)(南西より)
- pl. 18 小田部向原遺跡 01号遺構南側周溝(西より)、01号遺構西側周溝(西より)、01号遺構北側周溝(1)(南西より)
- pl. 19 小田部向原遺跡 01号遺構北側周溝(2)(北東より)、01号遺構d-d'断面(北より)、01号遺構c-c'断面(北東より)
- pl. 20 小田部向原遺跡 02号遺構(南東より)、03号遺構(南西より)、04号遺構(南東より)
- pl. 21 小田部向原遺跡 05号遺構(南西より)、06号遺構(南より)、06号遺構遺物出土状況(南より)
- pl. 22 小田部向原遺跡 07・08号遺構(南東より)、09・10号遺構(南西より)、11号遺構(東より)
- pl. 23 小田部向原遺跡 12号遺構(北東より)、13号遺構(南東より)、14号遺構(東より)
- pl. 24 小田部向原遺跡 15・16号遺構(北東より)、16号遺構(南東より)、17・18号遺構(南東より)
- pl. 25 小田部向原遺跡出土遺物 01号遺構出土土器
- pl. 26 小田部向原遺跡出土遺物 01・03号遺構出土土器
- pl. 27 小田部向原遺跡出土遺物 04・06号遺構出土土器
- pl. 28 小田部向原遺跡出土遺物 06・07・09号遺構出土土器
- pl. 29 小田部向原遺跡出土遺物 09・11・12号遺構出土土器
- pl. 30 小田部向原遺跡出土遺物 12号遺構出土土器
- pl. 31 小田部向原遺跡出土遺物 12・13・14・15・18号遺構出土土器

- pl. 32 小田部向原遺跡出土遺物 16・17・A3号遺構、遺構外出土土器
- pl. 33 小田部向原遺跡出土遺物 出土土器、石製品、土製品、貝
- pl. 34 小田部向原遺跡出土遺物 「小田部古墳」出土玉類(1)
- pl. 35 小田部向原遺跡出土遺物 「小田部古墳」出土玉類(2)
- pl. 36 雲ノ境遺跡と菊間古墳群(1961年撮影)
- pl. 37 雲ノ境遺跡 Aトレンチ全景(南より)、Bトレンチ全景(南東より)
- pl. 38 雲ノ境遺跡 01・02号遺構(南東より)、03号遺構(北東より)、04・05・06号遺構(南より)
- pl. 39 雲ノ境遺跡 07・08・11号遺構(南東より)、09号遺構(南東より)、09号遺構鏡出土状況(南東より)
- pl. 40 雲ノ境遺跡 12・13・14号遺構(南東より)、15a号遺構(北より)、16・17号遺構(南東より)
- pl. 41 雲ノ境遺跡 15b・18号遺構(北東より)、15b・18号遺構遺物出土状況(北東より)、22号遺構(北東より)
- pl. 42 雲ノ境遺跡 23・24・25・26・27号遺構(南東より)、15b・20号遺構(南東より)
- pl. 43 雲ノ境遺跡 23号遺構(南東より)、26号遺構(南より)、28・29・30号遺構(南東より)
- pl. 44 雲ノ境遺跡出土遺物 01・04・09・12・15b・21号遺構出土土器
- pl. 45 雲ノ境遺跡出土遺物 01・03・11・15b・18・22・23・29号遺構、遺構外出土土器、石製品、土製品、瓦
- pl. 46 雲ノ境遺跡出土遺物 09号遺構出土鏡

財団法人市原市文化財センター組織表

昭和61年度(姉崎宮山遺跡調査)

役 員

理 事 長	星 野 一 郎 (教育委員会教育長)	調査課		
副理事長	横 濱 辰 夫 (教育委員会教育指導部長)	課 長	清 藤 一 順	
常務理事	岩 見 一 民 (専任)	主 幹	石 田 広 美	
理 事	滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)	主 幹	山 口 直 樹	
理 事	寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)	主任調査研究員	宮 本 敬 一	
理 事	海 上 信 久 (姉崎神社宮司)	主任調査研究員	米 田 耕之助	
理 事	松 崎 良 一 (市企画部長)	調 査 研 究 員	田 中 清 美	
理 事	斎 藤 栄 亮 (市総務部長)	調 査 研 究 員	浅 利 幸 一	
理 事	地 引 希 壹 (市都市部長)	調 査 研 究 員	大 村 直	
理 事	松 下 隆 (市総務部財政課長)	調 査 研 究 員	近 藤 敏	
監 事	白 鳥 一 夫 (市会計課長)	調 査 研 究 員	高 橋 康 男	
監 事	斎 藤 崇 雄 (市教育委員会総務課長)	調 査 研 究 員	田 所 真	

職 員

庶務課		調 査 研 究 員	木 對 和 紀	
課 長	田 丸 萬 富	調査研究員(嘱託)	田 中 新 史	
主 事 補	大 鐘 光 江	調査研究員(嘱託)	半 田 堅 三	
事務員(嘱託)	秋 田 晴 美	調査研究員(嘱託)	鈴 木 英 啓	
事務員(嘱託)	石 渡 あ ゆ み	事 務 員(嘱託)	高 浦 貞 子	
		事 務 員(嘱託)	長谷川 いづみ	

昭和63年度(小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡調査)

役 員

理事長 星 野 一 郎(教育委員会教育長)
副理事長 大 野 義 規(教育委員会社会教育部長)
常務理事 須 田 昇 三(専任)
理 事 滝 口 宏(早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴(和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久(姉崎神社宮司)
理 事 根 本 正 夫(市企画部長)
理 事 宮 崎 芳 雄(市総務部長)
理 事 地 引 希 壹(市都市部長)
理 事 安 藤 隆 一(市総務部財政課長)
監 事 元 吉 末 喜(市会計課長)
監 事 河 野 徳 三(教育委員会総務課長)

職 員

庶務課
課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事務員(嘱託) 秋 田 晴 美
事務員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み

調査課
課 長 石 田 広 美
主 幹 加 藤 正 信
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直 敏
調 査 研 究 員 近 藤 康 男
調 査 研 究 員 高 橋 真 紀
調 査 研 究 員 田 所 和 史
調 査 研 究 員 木 對 新 三
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 子
事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子
事 務 員(嘱託) 田 中 裕 子

平成2年度(整理)

役 員

理事長 星 野 一 郎(教育委員会教育長)
副理事長 栗 林 繁(教育委員会教育指導部長)
常務理事 淵 本 献 司(専任)
理 事 滝 口 宏(早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴(和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久(姉崎神社宮司)
理 事 根 本 正 夫(市企画部長)
理 事 露 口 繁(市総務部長)
理 事 石 井 作 二(市財政部長)
理 事 坂 本 忠 夫(市都市計画部長)
監 事 佐 久 間 章(市会計課長)
監 事 小 宮 仁(教育委員会総務課長)

職 員

庶務課
課 長 田 丸 萬 富
主 事 大 鐘 光 江
主 事 永 野 健 一

調査課
課 長 矢 戸 三 男
主任調査研究員 田 中 清 美
主任調査研究員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直 敏
調 査 研 究 員 近 藤 康 男
調 査 研 究 員 高 橋 真 紀
調 査 研 究 員 木 對 和 史
調 査 研 究 員 忍 澤 成 視
調 査 研 究 員 田 中 茂 良
調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 子
主 事 高 浦 貞 子

I 調査の経緯と歴史的環境

1 調査にいたる経緯

姉崎宮山遺跡は、昭和60年火災により消失した姉崎神社社殿の再建に伴い発掘調査が実施されたものである。これに先だち、昭和61年11月17日付けで埋蔵文化財の所在の有無の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出され、これに対して昭和61年12月4日付けで、弥生土器・土師器散布地1か所が所在する旨の回答がなされた。これを受け、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会、事業者の三者による協議をおこない、神社建設部分について記録保存による発掘調査をおこなうことと決定された。

小田部向原遺跡は、手嶋一孝氏による牧草地造成に伴い発掘調査が実施されたものである。これに先だち、昭和63年4月12日付けで埋蔵文化財の所在の有無の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出され、これに対して昭和63年5月11日付けで、土師器散布地1か所、古墳2基が所在する旨の回答がなされた。これを受け、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会、事業者の三者による協議をおこなったが、牧草地造成であるため、すでに遺構が露出している部分については記録保存による発掘調査を実施し、その他は、確認調査後、現状で利用する方針が決定された。

雲ノ境遺跡は、西川直文氏によるゴルフ練習場造成に伴い発掘調査が実施されたものである。これに先だち、昭和63年11月2日付けで埋蔵文化財の所在の有無の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出され、これに対して昭和63年11月14日付けで、弥生土器・土師器散布地1か所が所在する旨の回答がなされた。これを受け、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会、事業者の三者による協議をおこなったが、防球ネット支柱部分については記録保存による発掘調査を実施し、その他の部分については、盛り土による保存とする方針が決定された。

(市原市教育委員会文化課)

2 調査の結果

ここでは、姉崎宮山遺跡、小田部向原遺跡、雲ノ境遺跡の調査結果について簡単にまとめておく。

姉崎宮山遺跡⁽¹⁾は、江戸期宝永4年(1707年)、富士山を起源とする火山灰層の直上につくられた姉崎神社社殿基壇部分を上層とし、その下層、旧表土下より、無数の柱穴とともに竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。竪穴住居跡は10軒以上、建替えを含めた総数で13軒以上。そのうち弥生時代後期2軒、古墳時代後期から終末期5軒(建替えを含めた総数で8軒)、時期不明が3軒である。時期不明竪穴住居跡のうち1軒は、古墳時代前期の所産である可能性が考えられる。また、掘立柱建物跡3棟以上、掘立柱列1列以上、溝1条、土坑4基以上が検出されている。掘立柱建物跡の時期については判然としない。また、溝、土坑については、中近世のものと考えられる。他に、多数検出された柱穴について、その性格、時期を特定することはできなかった。

小田部向原遺跡⁽²⁾では、弥生時代終末期墳丘墓周溝1基、竪穴住居跡30軒、建替えを含めた総数で33軒、土坑1基が検出された。このうち墳丘墓は、過去「小田部古墳」として調査されたものの周溝部



fig.1 対象遺跡位置図(1/100,000) (国土地理院発行地形図 1:50,000 千葉 姉崎より)

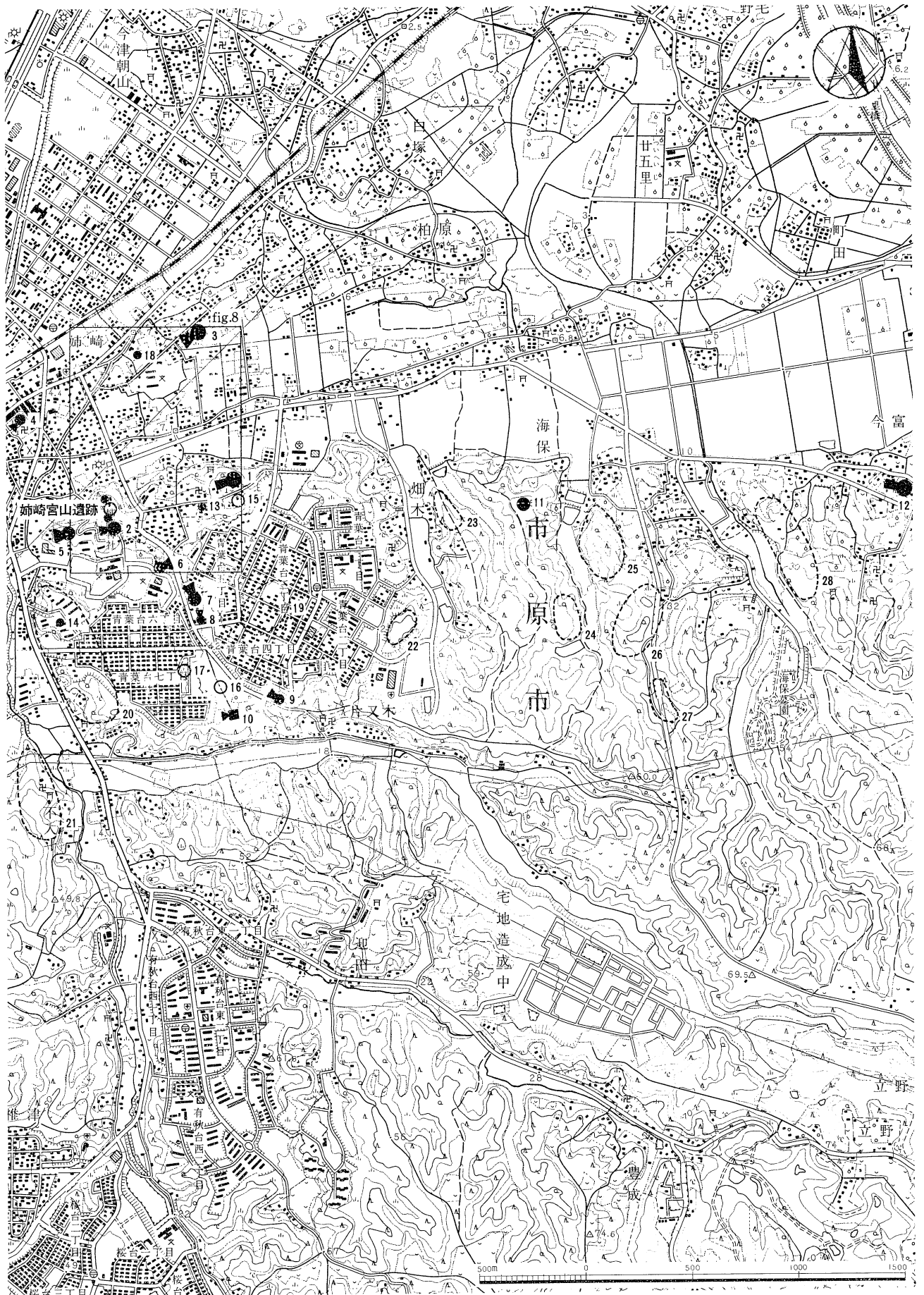


fig.2 姉崎宮山遺跡位置図(1/25,000) (国土地理院発行地形図 1:25,000 姉崎より)

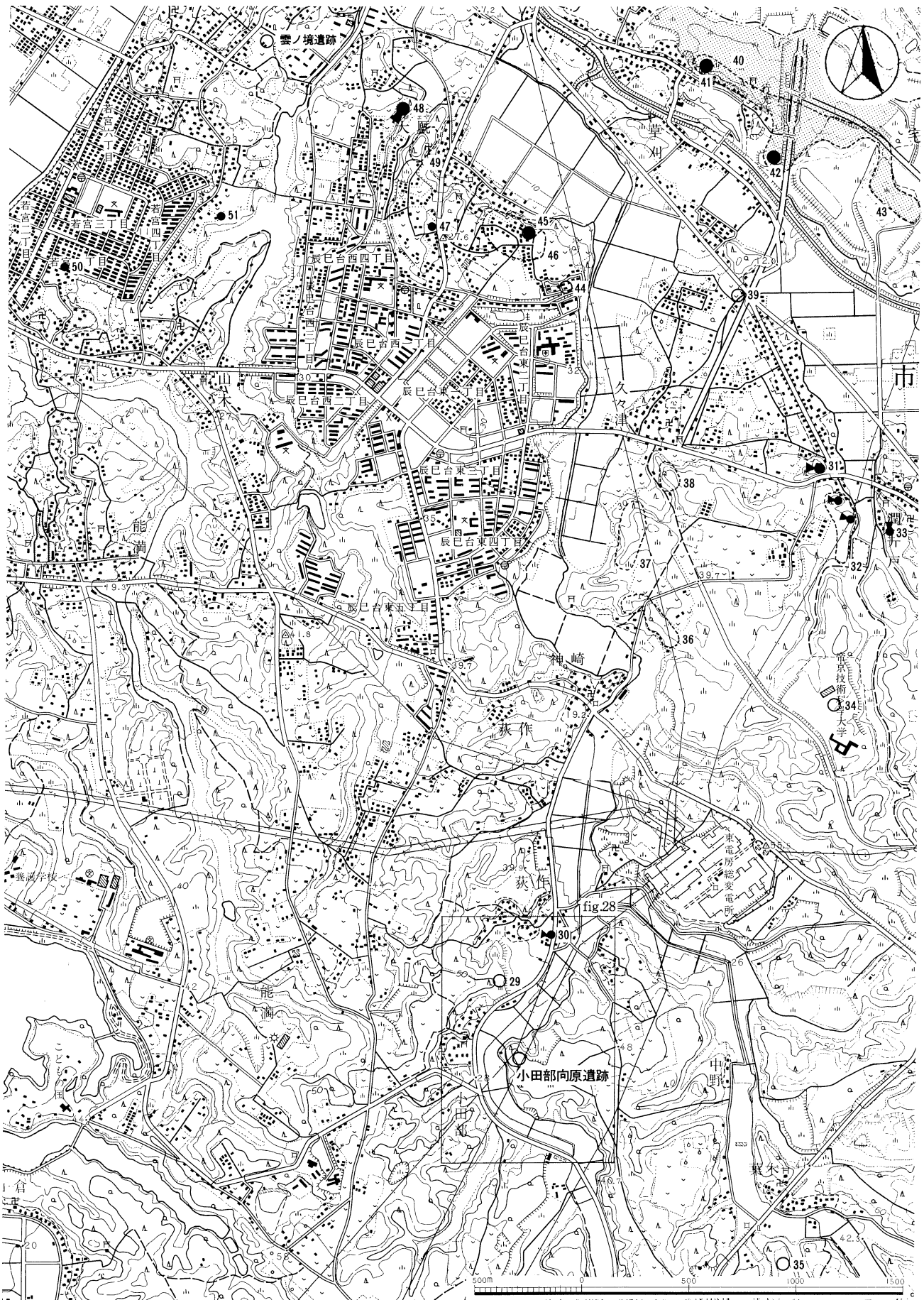


fig.3 小田部向原遺跡位置図(1/25,000) (国土地理院発行地形図 1:25,000 蘇我 海士有木より)

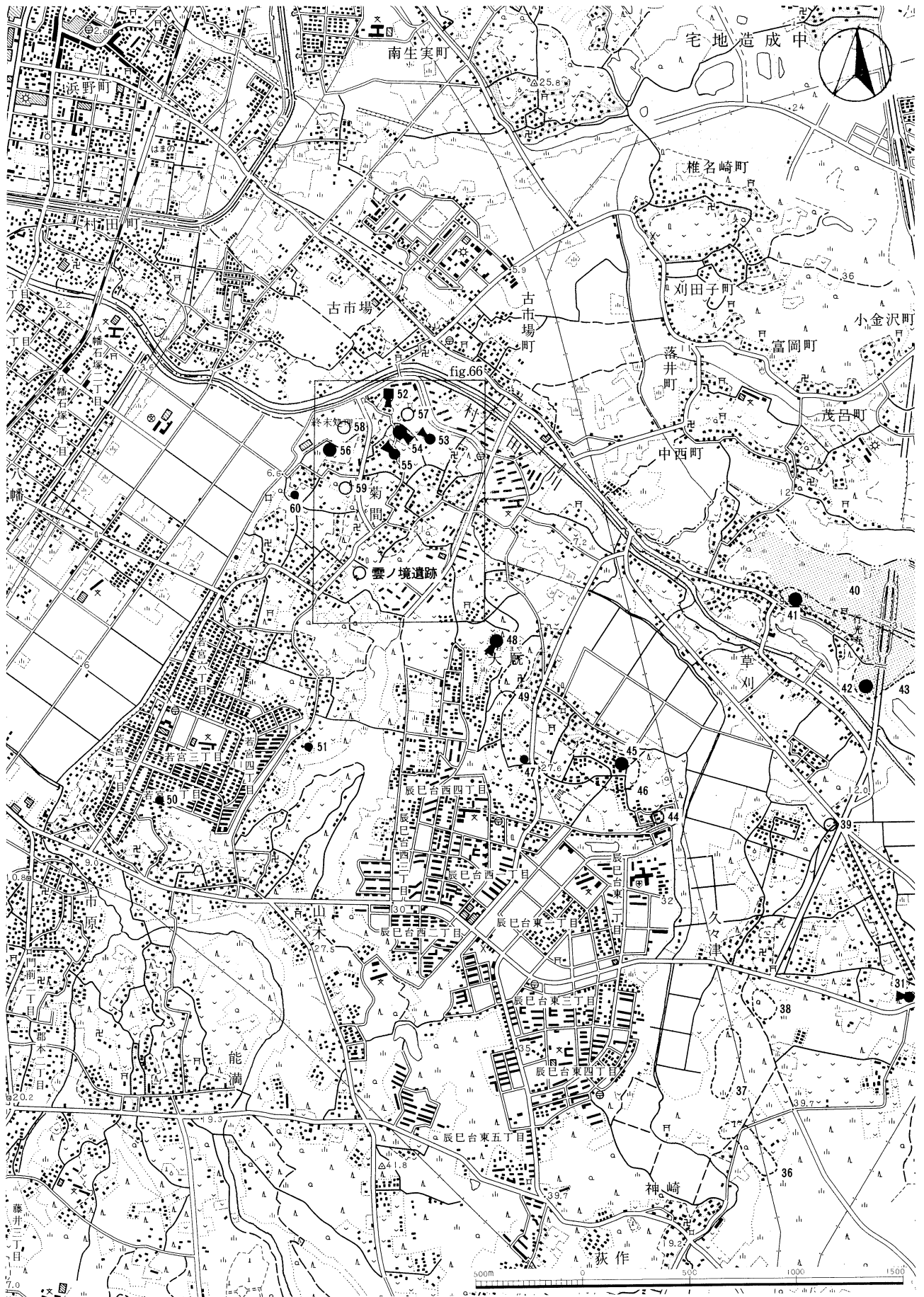


fig.4 雲ノ境遺跡位置図(1/25,000) (国土地理院発行地形図 1:25,000 蘇我より)

分に当たる⁽³⁾。堅穴住居跡は30軒のうち17軒(建替えを含めた総数で20軒)について本調査を実施している。その時期は、弥生時代後期から終末期が10軒(建替えを含めた総数で11軒)、古墳時代前期が3軒(建替えを含めた総数で4軒)、古墳時代中後期が4軒(建替えを含めた総数で5軒)である。土坑については、縄文時代の所産であろうか。

雲ノ境遺跡では、堅穴住居跡18軒、古墳周溝1基、掘立柱建物跡1棟ないしは掘立柱列2列以上、土坑3基、溝10条が検出された。堅穴住居跡の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期が5軒、古墳時代後期以降が6軒、時期不明が7軒である。なお、時期不明としたもののなかには、堅穴住居跡としての蓋然性が乏しいものも含んでいる。古墳については、時期を特定する遺物が出土していない。掘立柱列についても同様である。土坑は、縄文時代の炉穴が1基、いわゆる落とし穴が1基、平安時代のものが1基である。溝については、近現代の所産と考えられるが、かならずしも明らかではない。ただし、菊間藩庁に関連するものも含まれる可能性がある。

tab.1 周辺の遺跡一覧表

挿図No	遺 跡 名	遺跡cord	備 考	挿図No	遺 跡 名	遺跡cord	備 考
2	1 姉崎天神山古墳	328	前方後円墳 全長125m 文献(15)	3	31 杉山古墳	839	前方後円墳 全長60m
	2 釈迦山古墳	322	前方後円墳 全長79~91m		32 山王後古墳群	840	山王後古墳ほか 1977年調査
	3 姉崎二子塚古墳	327	前方後円墳 全長110m 埴輪 文献(20)		33 小谷1号墳	845	前方後円墳 全長45m 埴輪 文献(31)
	4 妙経寺古墳	325	前方後円墳 全長55m 削平		34 下鈴野遺跡	831	下鈴野古墳群 文献(32)
	5 山王山古墳	321	前方後円墳 全長69m 埴輪 文献(21)		35 文作遺跡	651	文献(33)
	6 鶴窪古墳	331	前方後円墳 全長60m 埴輪		36 潤井戸天王台古墳群南群	835	
	7 原1号墳	333	前方後円墳 全長70m 埴輪 文献(22)		37 潤井戸天王台古墳群北群	835	
	8 原2号墳	334	前方後円墳 規模不明 消滅		38 居鞍古墳群	836	1988年調査
	9 堰頭古墳	340	前方後円墳 前方後方墳か		39 潤井戸西山遺跡	937	草刈尾梨遺跡 文献(13)
	10 六孫王原古墳	339	前方後方墳 全長45.4m 文献(23)		40 草刈遺跡	941	文献(34)
	11 海保大塚古墳	335	円墳 径60m 中期か 文献(24)		41 草刈1号墳	950	円墳 径34m
	12 今富塚山古墳	419	前方後円墳 全長110m		42 草刈3号墳	950	円墳 径34m
	13 宝蔵寺古墳	329	円墳 径30m 消滅		43 草刈古墳群	950	
	14 富士見塚古墳	319	円墳 径25m 文献(25)		44 大蔵遺跡	934	文献(11)
	15 姉崎東原遺跡	330	文献(16)		45 大蔵浅間様古墳	935	文献(12)
	16 六孫王原遺跡	338	文献(26)		46 大蔵古墳群	935	
	17 毛尻遺跡	337	文献(27)		47 大蔵弁天台遺跡	934	大蔵弁天台古墳 文献(35)
	18 上野台遺跡		円墳ほか 文献(28)		48 大蔵二子塚古墳	926	前方後円墳 全長63.4m
	19 徳部台古墳	335	徳部台古墳 木戸窪古墳ほか		49 下郷古墳群	927	
	20 迎田古墳群	319			50 山木1号墳	905	円墳 径32m 文献(36)
	21 永藤古墳群	240			51 仙台原古墳群	907	
	22 房ノ久保古墳群	344		4	52 新皇塚古墳	921	前方後方墳? 後方部一辺38m 文献(14)
	23 畑木向古墳群	353			53 姫塚古墳	921	前方後円墳 全長51m
	24 小谷作古墳群	358			54 権現山古墳	921	前方後円墳 全長75m 埴輪
	25 海保吉谷前古墳群	403	海保古墳群 文献(29)		55 東関山古墳	921	前方後円墳 全長61m
	26 海保山王古墳群	407			56 菊間天神山古墳	921	円墳 径44m
	27 称宜台古墳群	412			57 菊間遺跡	912	文献(9)
	28 今富東部古墳群	416			58 菊間手永遺跡	917	文献(10)
3	29 小田部新地遺跡	783	文献(8)		59 菊間廃寺跡	915	
	30 萩作1号墳	784	前方後円墳 全長28m 文献(30)		60 菊間手永台古墳群	921	

遺跡cord、規模等は文献(37)による

3 遺跡の位置と歴史的環境

千葉県市原市は、中央に養老川が南北に貫流し、その下流右岸に、市原台地が、また下流右岸に袖ヶ浦台地が発達する。市原台地は、北を村田川、また袖ヶ浦台地は南を小櫃川河谷にはさまれ、その前面には東京湾に接する海岸平野が形成されている。

姉崎宮山遺跡は、市原市姉崎地先に所在する。姉崎宮山遺跡は、袖ヶ浦台地ほぼ中央を貫流する椎津川右岸の沖積低地と海岸平野をのぞむ接点の台地上に位置し、周辺には姉崎古墳群が形成される要地にある。

小田部向原遺跡は、市原市小田部地先に所在する。小田部向原遺跡は、村田川の支流である神崎川水系にあり、神崎川からさらに分岐した勝間川河谷の屈曲点台地上にある。

雲ノ境遺跡は、市原市菊間地先に所在する。市原台地北端部に形成された菊間古墳群に近接し、東側には、小支谷をはさみ大厩地区をのぞむ。

このうち、小田部向原遺跡01号遺



fig.5 小田部新地遺跡全体図(1/800)

構は、1968年「小田部古墳」として調査されたものであり、当時関東地方における最古期古墳として注視されている。その後、市原市国分寺台土地区画整理事業にともない神門3・4・5号墓⁽⁴⁾が調査され、弥生時代終末期の墳丘墓、ないしは出現期古墳として評価されていることは周知のとおりである。小田部向原遺跡01号遺構(「小田部古墳」「小田部墳丘墓」)⁽⁵⁾も、およそこれと対応する内容をもつことを今回確認することができた。また、袖ヶ浦町滝ノ口向台遺跡の調査により、同8号墓がその可能性を指摘されており(fig. 35)⁽⁶⁾、これを「纏向型」等普遍化しうるかどうかは別にしても、類例はさらに地域的に拡大する可能性が考えられる。これらの、円丘系墳丘墓の出現は、方形周溝墓の方丘系墳丘墓を前提とした場合特異であるが、神門墳丘墓群のある養老川右岸国分寺台地区については、それ以降定型化した前方後円墳を受け入れることなく、辺田1号墳⁽⁷⁾、諏訪台古墳群など円丘系墳丘墓が地点をかえながらも首長墓として継続する。これに対して、小田部墳丘墓の場合、その周辺地域において継起的な造営を想定できるものは現状で確認することができない。小田部向原遺跡においては、すでに五領式期において集落が形成されている。対岸の、小田部新地遺跡(fig. 5)⁽⁸⁾では、弥生時代中後期の方形周溝墓群が調査されているものの、直接的な継続性は乏しい。

これらの墳丘墓の成立は、この地域において、弥生時代中期以降、環濠をとまなうような拠点的規模の集落跡を中心として、遺跡群が濃密に分布することを歴史的な前提とすると考えることができる。これは、同じ東京湾岸地域においても、下総台地とは明らかに様相を異にする点である。市原市内における環濠集落は、現在、草刈遺跡F区、菊間遺跡⁽⁹⁾、菊間手永遺跡⁽¹⁰⁾、大厩遺跡⁽¹¹⁾、大厩浅間様古墳下層⁽¹²⁾、西山遺跡⁽¹³⁾、根田代遺跡、台遺跡C地点、南総中学校遺跡などで検出されており、市原台地縁辺部においては一般的であるとさえ考えることができる。ただし、これらは、いずれも弥生時代中期に位置付けられるものであり、後期におよぶ小櫃川流域以南とは様相を異にする。

定型化した前方後円墳は、弥生時代の墳丘墓群と地域をかえて出現する。市原市域における前期ないしは中期前半の古墳のうち、首長墳と考えられるものは、村田川右岸において草刈1・3号墳、千葉市域にはいつて大覚寺山古墳、七廻塚古墳が、村田川右岸では、新皇塚古墳⁽¹⁴⁾、大厩二子塚古墳、大厩浅間様古墳⁽¹²⁾がある。そして袖ヶ浦台地海岸平野に接して今富塚山古墳、姉崎天神山古墳(台大塚古墳)⁽¹⁵⁾、釈迦山古墳が点在する。これらはいずれも地点を大きくかえて存在し、継続的な古墳群を形成していない。姉崎古墳群では、姉崎二子塚古墳を含めた場合、継起的な古墳群は中期段階にはいまだ形成されていないと考えるべきであろう。姉崎天神山古墳では、隣接する姉崎東原遺跡⁽¹⁶⁾の調査によって、周溝を接する方形周溝墓(小規模方墳)が存在する可能性が想定されるが、これもおそらくは世代的に完結したものと考えられる。これは、豪族居館にもあてはまるものである。市原市においては、現在西山遺跡が和泉式期の居館跡である可能性が想起されているが⁽¹³⁾、これも群馬県、栃木県下で確認されているものと同様に、一時期、おそらくは一世代に限定される。都出比呂志氏は、畿内地方淀川水系を例とし、すでに前期段階において系列的な首長墳群の形成を想定している⁽¹⁷⁾。しかし、これは小地域において、首長層が互いに拮抗する関係下にあること、政治的に並列する首長層の支配域がより厳密に限られていたことなどによるものと考えられ、大王墓をみても、その系譜的な流動性は明らかである。少なくとも父系的秩序の形成が東国に先行するとは考えにくい。継続的な首長墳は、姉崎古墳群においては姉崎天神山古墳あるいは釈迦山古墳、菊間古墳群においては新皇塚古墳を擬制的、観念的な始祖として、後期以降に形成されると考えられるのであり、この段階において首

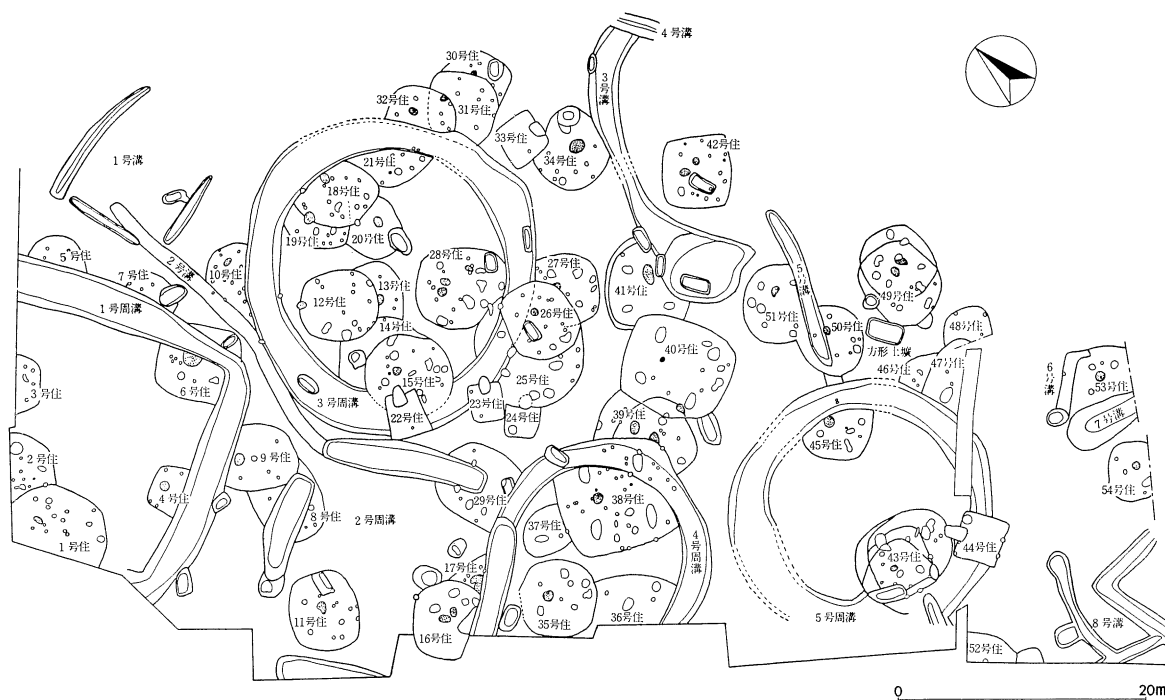


fig.6 菊間遺跡全体図(1/600)

長層の系譜的な秩序が明確化する。これは、関東地方における主要な古墳群においても同様であり、千葉県富津市内裏塚古墳群⁽¹⁸⁾においても、弁天山古墳などを含めて考えた場合、内裏塚古墳と九条塚古墳以降とは断絶が明確である。開始時期は若干前後するものの埼玉県埼玉古墳群においても同様である。

後期における円墳群も、その政治的、擬制的秩序と無関係に形成されたとは考えられない。菊間古墳群では、首長墳に付帯する小規模古墳群の構成は現状をみるかぎり明らかではない。しかし、新皇塚古墳に隣接する菊間遺跡では、円墳周溝が検出されている(fig. 6)。また、今回雲ノ境遺跡においても1基確認されている。墳丘を遺存しないものがまだ多数存在すると考えるべきであろう。

古墳時代以降の展開を考えると、姉崎古墳群内に位置する延喜式内社姉崎神社の存在は、直接的な関連は別にしても重要であろう。しかし、今回の発掘調査においては、その成立期についての具体的な判断根拠を見いだすことはできなかった。出土土器をみるかぎり、古墳時代終末期以降、奈良時代、平安時代初期は皆無であり、平安時代後半期も限られている。また、検出された掘立柱建物跡につい

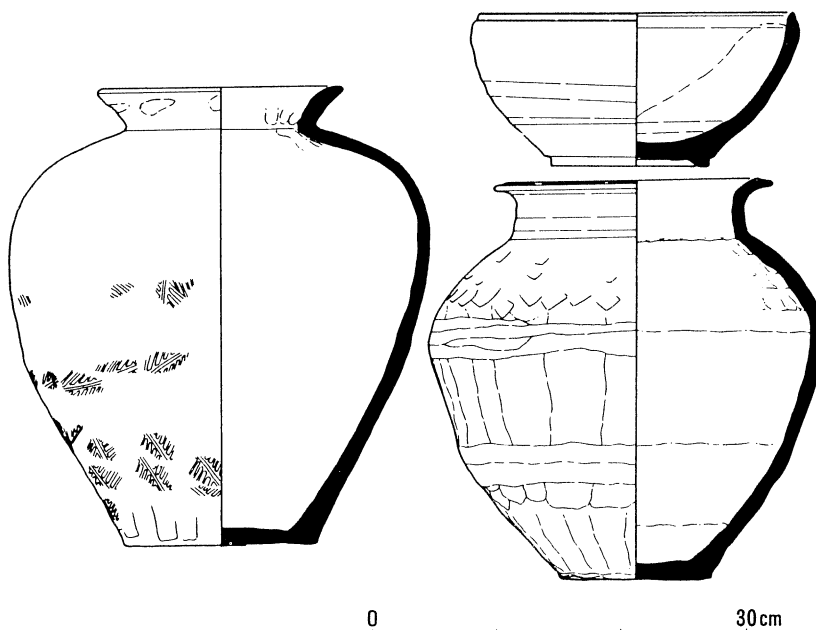


fig.7 御社2号墳出土遺物(1/6)

ては、確定的な時期は不明といわざるをえない。

なお、境内にある御社2号墳の崩落部分より、常滑窯甕、渥美窯鉢などが出土しており、これは笹生衛氏により報告されている(fig. 7)⁽¹⁹⁾。

姉崎宮山遺跡、小田部向原遺跡、雲ノ境遺跡の調査は、かならずしも歴史的、地域的な脈絡のもとでおこなわれたものではない。ここでは、弥生時代以降の市原市域における歴史的動向を、私見によって概説することにより、歴史的環境にかえておきたい。

註

- (1) 下記に概要を述べているが、本報告をもって正式報告とする。なお遺跡名について、下記では「あねさきみやまいせき」としたが、「あねさきみやまいせき」としたい。
大村 直 1987「姉崎宮山遺跡」『第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 財団法人市原市文化財センター
大村 直 1988「姉崎宮山遺跡」『市原市文化財センター年報昭和59年度 財団法人市原市文化財センター
- (2) 国庫補助事業分については、下記に概要を報告している。
大村 直 1989「小田部向原遺跡」『昭和63年度市原市内遺跡群発掘調査報告 市原市教育委員会
- (3) 杉山晋作・安藤鴻基・沼沢 豊・田中新史 1972「古墳時代研究 I 千葉県市原市小田部古墳の調査」古墳時代研究会
- (4) 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望 東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
浅利幸一 1988「神門古墳群 神門3号墳の調査から」『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 財団法人市原市文化財センター
浅利幸一 1989「神門三号墳」『市原市文化財センター年報昭和62年度 財団法人市原市文化財センター
- (5) 小田部向原遺跡01号遺構の個別呼称、「小田部古墳」ないしは「小田部墳丘墓」は、報告者が拘束できる性格のものではないので、各人各々が使用されたし。私見はあらためて述べない。
- (6) 小高春雄 1990「君津平川線滝ノ口向台古墳群第9号墳調査概要」『研究連絡誌』第27号 財団法人千葉県文化財センター
- (7) 米田耕之助 1986「根田遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度 財団法人市原市文化財センター
- (8) 山口直樹 1984「小田部新地遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第3集 京葉機材株式会社
- (9) 斉木 勝・種田齊吾・菊池真太郎 1974「菊間遺跡」『市原市菊間遺跡』千葉県都市部・財団法人千葉県都市公社
- (10) 近藤 敏 1985「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度 財団法人市原市文化財センター
- (11) 三森俊彦・阪田正一ほか 1982「市原市大厩遺跡」財団法人千葉県開発公社・財団法人千葉県都市公社
- (12) 浅利幸一 1985「大厩浅間様古墳」『市原市文化財センター年報昭和59年度 財団法人市原市文化財センター
浅利幸一 1991「大厩浅間様古墳」『第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 財団法人市原市文化財センター
- (13) 鈴木英啓 1986「潤井戸西山遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第9集 市原市街路課
半田堅三 1991「草刈尾梨遺跡(潤井戸西山遺跡B地区)」『第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 財団法人市原市文化財センター
- (14) 斉木 勝・種田齊吾・菊池真太郎 1974「新皇塚古墳」『市原市菊間遺跡』千葉県都市部・財団法人千葉県都市公社
- (15) 千葉県教育庁文化課 1980「姉崎天神山古墳」『千葉県記念物実態調査報告書』I

I 調査の経緯と歴史的環境

- (16) 高橋康男 1990『市原市姉崎東原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第37集 株式会社新昭和住宅
- (17) 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断続」『待兼山論叢』第22号史学篇 大阪大学文学会
- (18) 千葉県教育庁文化課 1986『千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書』千葉県文化財保護協会
- (19) 笹生 衛 1989「房総における中世的土器様相の成立過程」『史館』第21号 株式会社弘文社
- (20) 大場磐雄・亀井正道 1952「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第3号 日本考古学会
杉山晋作 1974「あらたに発見された姉ヶ崎二子塚の鏡」『史館』第4号 市川ジャーナル社
- (21) 上総山王山古墳発掘調査団 1980『上総山王山古墳』市原市教育委員会
- (22) 石井則孝ほか 1971『千葉県市原市姉ヶ崎原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会
越川敏夫 1984『原遺跡』原遺跡調査会
- (23) 中村恵次・沼沢 豊・田中新史 1988『古墳時代研究Ⅱ 千葉県市原市六孫王原古墳の調査』古墳時代研究会
- (24) 杉山晋作・高橋 学・風間栄一 1990「海保大塚遺跡の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館考古研究部(白石太一郎)
- (25) 中村恵次 1968『千葉県市原市富士見塚古墳』『日本考古学年報』16 日本考古学協会
- (26) 木對和紀 1989「六孫王原遺跡」『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター
- (27) 山武考古学研究所 1983『毛尻遺跡発掘調査報告書』市原市毛尻遺跡調査会
- (28) 木對和紀 1990「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
- (29) 中村恵次・市毛 勲・杉山晋作・安藤鴻基・沼沢 豊 1968「海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告書』4 市原市教育委員会
- (30) 中村恵次 1967「荻获古墳群第1号墳」『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書第3冊 市原市教育委員会
- (31) 高橋康男 1989「潤井戸小谷1号墳」『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター
- (32) 大村 直 1987『下鈴野遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第16集 市原市企画部企画調整課
- (33) 大村 直 1989『市原市文作遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第30集 社団法人千葉県農業公社・市原市教育委員会
- (34) 小久貫隆史 1983『千原台ニュータウンⅡ 草刈遺跡A区(第1次調査) 鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター・住宅都市整備公団首都圏都市開発本部
高橋康男 1985『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第6集 市原市街路課
高田 博 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡(B区)』財団法人千葉県文化財センター・住宅都市整備公団首都圏都市開発本部
小林清隆 1990『市原市草刈貝塚』千葉県文化財センター調査報告第171集 千葉急行電鉄株式会社
- (35) 大村 直 1989『大厩弁天台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第34集 辰巳鉄工株式会社
- (36) 市毛 勲・杉山晋作 1967「山木古墳群」『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書第3冊 市原市教育委員会
- (37) 市原市教育委員会 1987『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 南部編』
市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』

Ⅱ 姉崎宮山遺跡

1 調査の概要

姉崎宮山遺跡は、市原市姉崎2278、2282－2番地に所在する。調査面積は380㎡である。

調査は、姉崎神社社殿新築に伴う範囲に限定されている。昭和60年に焼失した姉崎神社社殿は、権現造り、銅板葺きの拝殿、幣殿、本殿からなる構造をもっていた。姉崎神社は、「延喜式神名帳」に収録される式内社であり、「三代實録」等にもその名をみることができる。

調査段階では、基壇周囲の縁石と、本殿石組の残すだけで、礎石は撤去され、山砂による整地土で被覆された状態であった。当初、現状および基壇部分についても調査を実施することがもとめられたが、トレンチによる確認調査の結果、旧表土下全面に遺構が確認され、予算、期間がきわめて限定された状況から、これを優先せざるをえないこととなった。整地土を除去した段階では、礎石据え付け跡等も検出されたが、図面として不完全であり、今回提示することはできない。旧表土上層に関しては、トレンチによる断面の所見のみによらざるをえないことをことわっておきたい。

旧表土下層からは、多数の柱穴とともに、竪穴住居跡10軒以上、建替えを含めた総数で13軒以上、掘立柱建物跡3棟以上、掘立柱列1列以上、溝1条、土坑4基以上が検出された。縄文時代の遺構は今回検出されなかったが、弥生時代、古墳時代の遺構も、その後の攪乱によって遺存状態はきわめて不良であり、竪穴住居跡についても、他に存在する可能性は高い。また調査区東側は、ハードルーム面まで削平されていたが、掘立柱建物跡の柱掘形等の底面レベルをみると、削平されたルーム面にそった傾斜が認められ、削平はあるいは周囲の古墳群の形成期にさかのぼる可能性もある。なお、下層についても、重複する遺構間の関係について、十分な配慮のもとに調査をおこなうことはできなかった。まず、遺跡自身に陳謝しなければならないであろう。

2 遺構と遺物

姉崎神社社殿基壇(fig. 11)

調査段階では、礎石等は撤去され整地された状況にあり、縁石によって区画された社殿範囲と、切り石積みの本殿基壇のみが遺存していた。まず、社殿主軸方向と、拝殿部分にこれと直交するトレンチを設定し、確認調査を実施した。a-a'断面は社殿主軸方向によるものであり、方位はN-78°-Eをしめす。これによって若干の説明を加えておく。現状において、社殿基礎部分は縁石において区画され、各辺とも基壇状を呈している。縁石は、長方体の切り石により、拝殿部分南北辺には割り石

tab.2 姉崎宮山遺跡新旧遺構番号対照表

新	旧	遺 構	新	旧	遺 構	新	旧	遺 構	新	旧	遺 構
01	1 A	竪穴住居跡	06	3 C	竪穴住居跡	11		掘立柱建物跡	16	1 C	土坑
02	1 B	竪穴住居跡	07	3 A	竪穴住居跡	12		掘立柱建物跡	17	1 D	土坑
03	2 C	竪穴住居跡	08	2 A	竪穴住居跡	13		掘立柱建物跡	18		土坑
04	2 B	竪穴住居跡	09	2 A	竪穴住居跡	14		掘立柱列	19		土坑
05	3 B	竪穴住居跡	10		(竪穴住居跡)	15		(竪穴住居跡)	20		溝

II 姉崎宮山遺跡



fig.8 姉崎宮山遺跡周辺地形図(1/5,000)

(1980年測図 市原市地形図E-2、E-3、F-2、F-3)

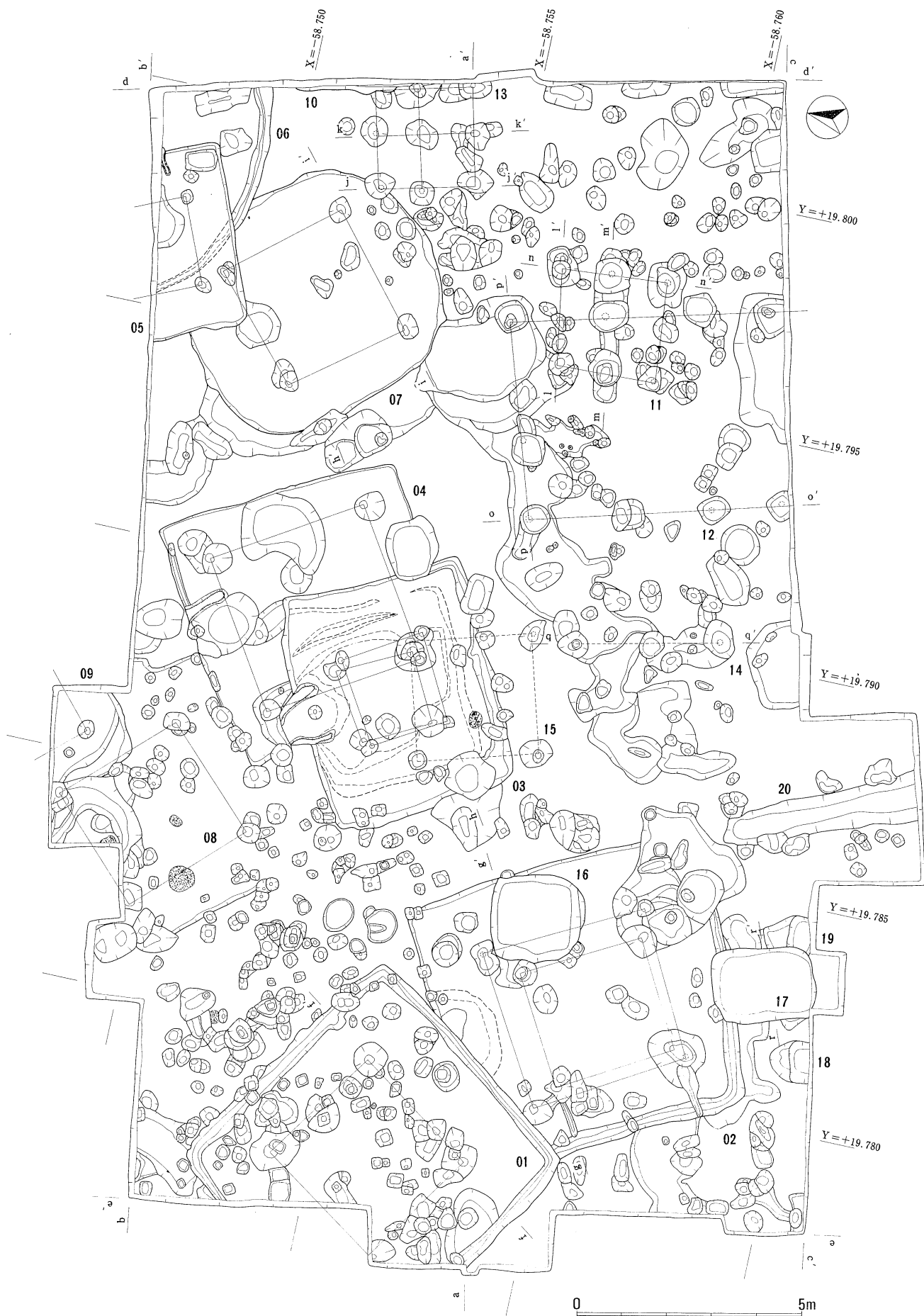


fig.9 姉崎宮山遺跡全体図(1)(1/120)

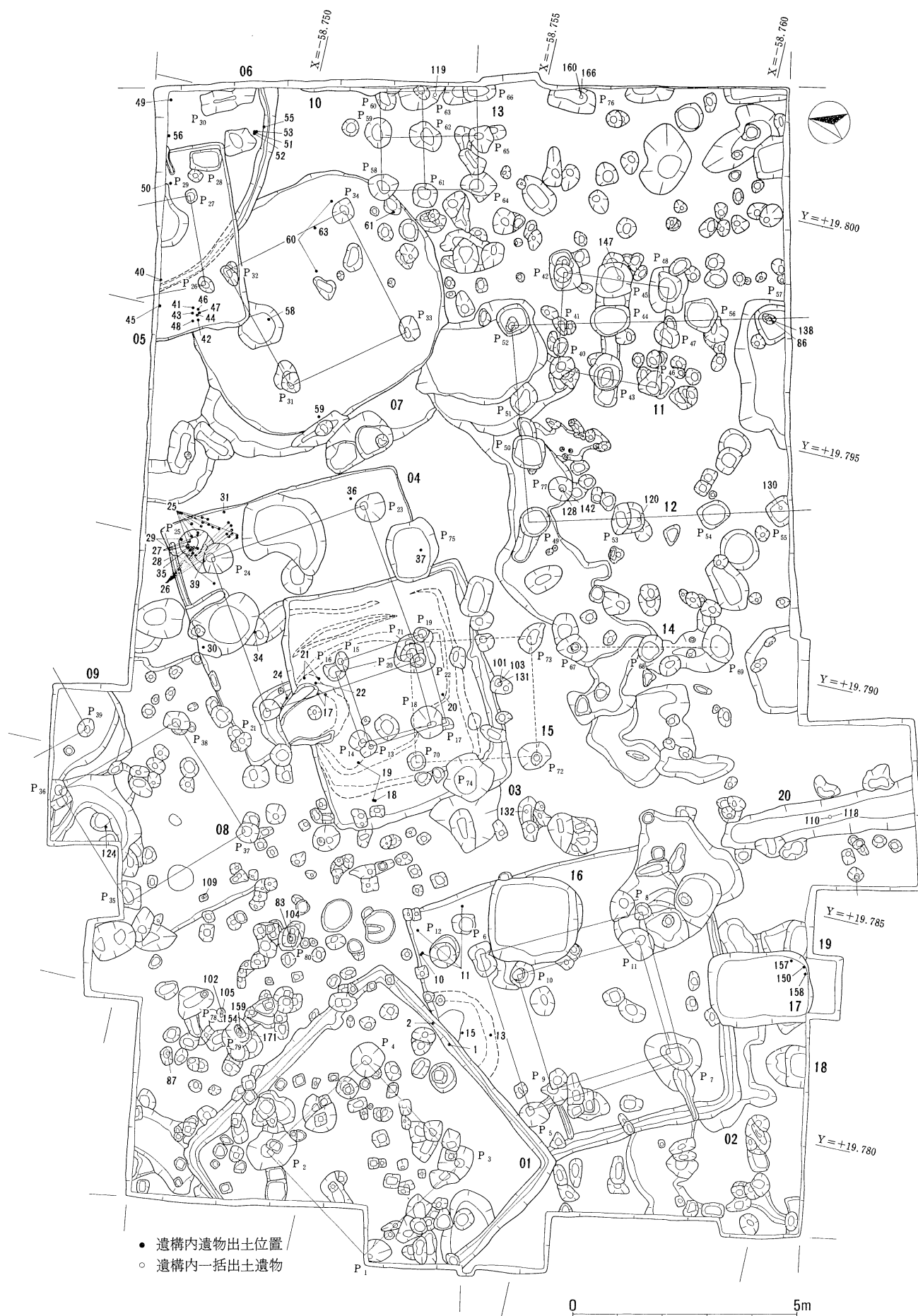


fig.10 姉崎宮山遺跡全体図(2)(1/120)

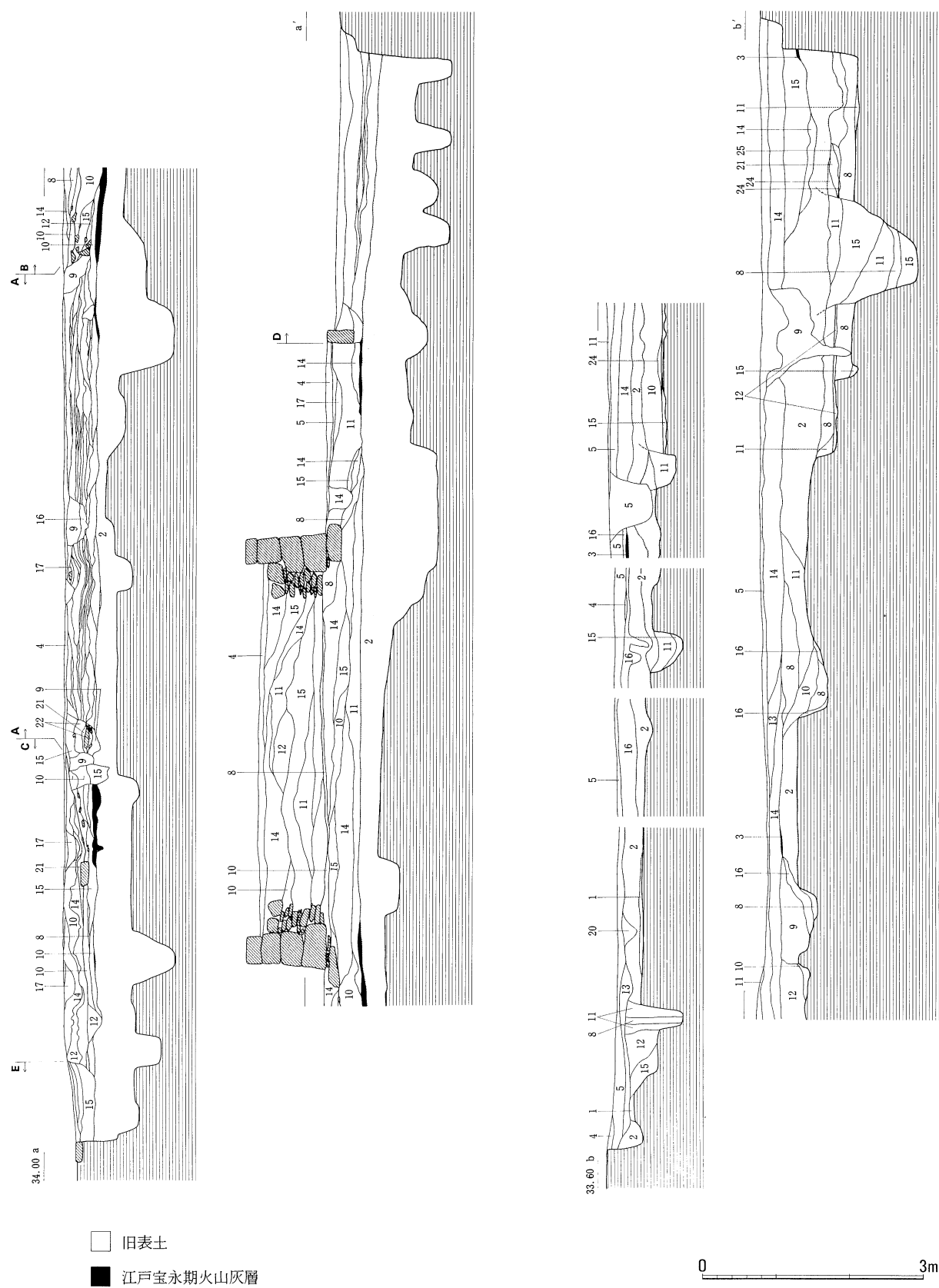


fig.11 姉崎宮山遺跡断面図(1)(1/80)

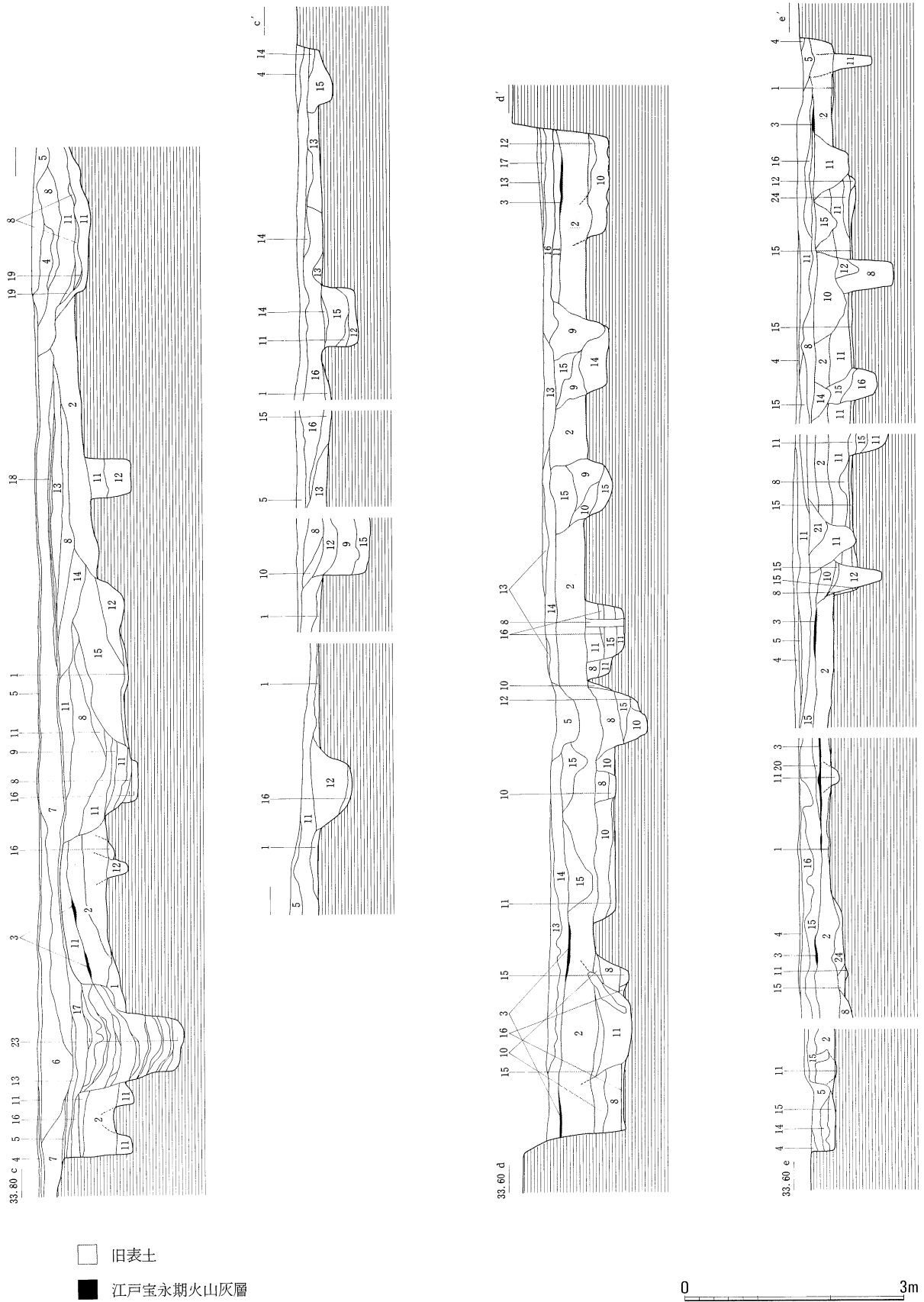


fig.12 姉崎宮山遺跡断面図(2)(1/80)

II 姉崎宮山遺跡

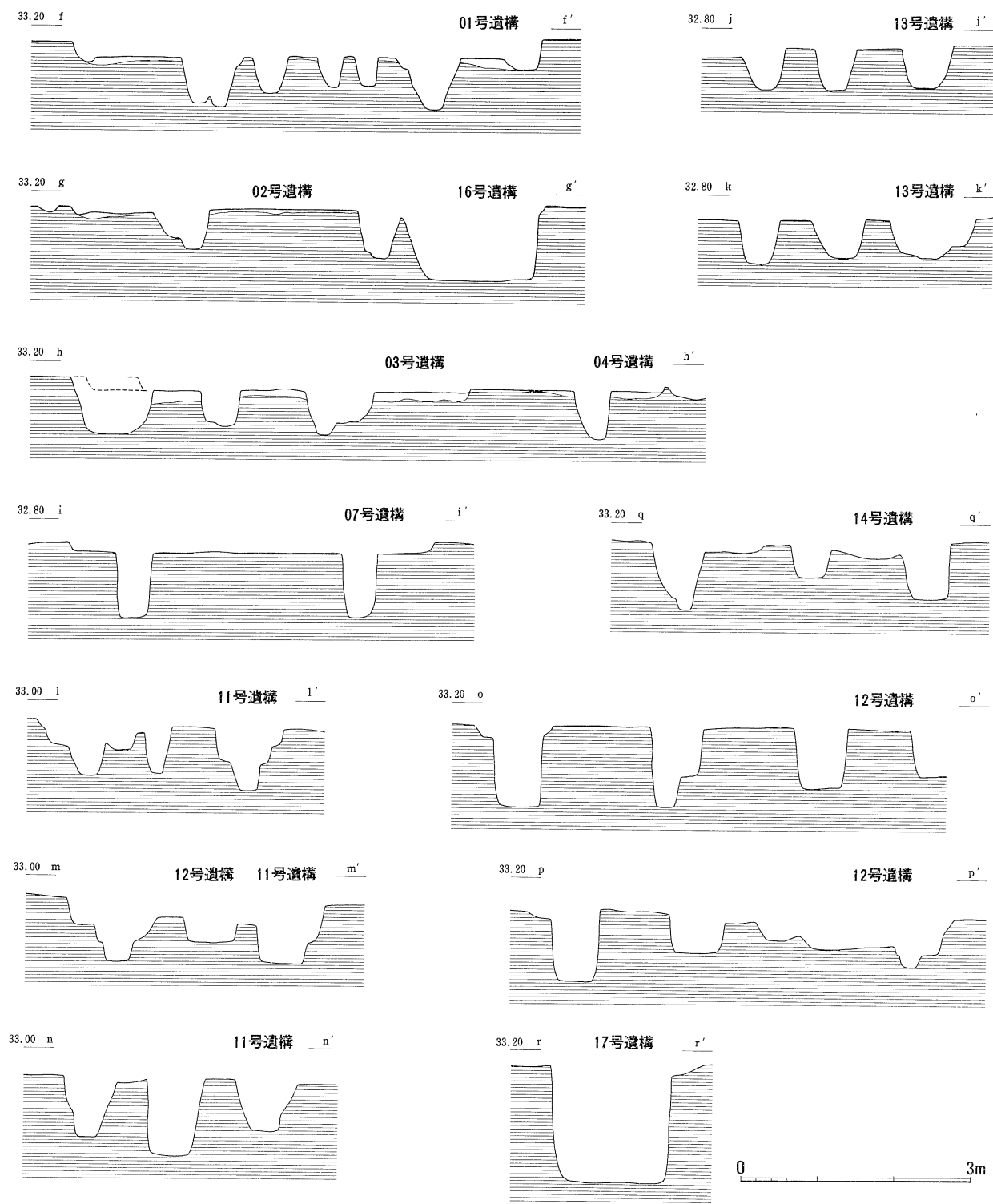


fig.13 姉崎宮山遺跡断面図(3)(1/80)

による控積みがみられる。基壇土ないしは整地土を掘り込んで据えられており、また一部にコンクリート使用されているなど、補修等を考慮しても、社殿そのものの地業とは時期差をもつ可能性がある。縁石範囲を問題としない場合、基壇土と外周の整地土との境界は断面によるかぎり判然としない。本来地業そのものが基壇を明確に意図したものではないと考えることもできる。社殿基礎構造は、掘り込み地業によるものではなく、旧表土面はほぼ安定したレベルで検出された。また、断面図においては部分的にしか表現されていないが、旧表土直上、基壇土ないしは整地土直下ほぼ全面に、江戸期

宝永年間の降灰層が検出された。これは、年代の根拠となろう。また火山灰層と同レベルより、寛永通寶(新寛永)が出土しているが、基壇築成の年代を問題とする上で、少なくとも火山灰層と矛盾するものではない。

基壇築成は、何段階かの工程による。断面a-a' 範囲Aは、第一段階によるものであり、あまり硬質ではないものの、ローム、ローム混合土、黒色土を互層とした版築による。範囲A西側境界部分は、白色粘土層(21層)、貝層(22層)、礫層が互層となり、とくに貝層は平面的に検出することができた(pl. 3)。ただし、その方位は、N-15° -Wであり、社殿主軸とは直交しない。また、範囲Aは、およそ拜殿中央から幣殿中央あたりとなり、建物と対応しない。しかし、これを先行する社殿基壇とした場合、宝永期火山灰層との関係が説明できない。おそらくは設計変更によるものであろう。この範囲Aを核として東西に拡張されていくが、とくに範囲Bは、きわめて簡略化された築成といえよう。

とくに問題となる、宝永期火山灰層降下前の社殿については、本調査範囲内では、明確な地業を確認することはできず、掘立柱建物であったのか、地点がことなるのか、今回の調査によっては判断できなかった。

以下、各断面の土層を述べておく。(1層)ローム層、(2層)旧表土層、(3層)火山灰層、(4層)山砂層、(5層)礫層、(6層)山砂と礫の混合層、(7層)6層に大形の礫、割石を含む層、(8層)黒色均質土層、(9層)粒状でボソボソの黒褐色土層、(10層)ローム粒を多少混合する黒褐色土層、(11層)ローム粒を多量に混合する黒褐色土層、(12層)ローム粒・ロームブロックと黒褐色土の混合土層、(13層)均質なローム質土層、(14層)5 cm以上を含む大小ロームブロックからなる層、(15層)5 cm以下のロームブロックからなる層、(16層)暗黄褐色土層、(17層)焼土・炭化粒・粒状ローム混合土層、(18層)焼土・炭化粒・ローム粒を含む黒褐色土層、(19層)炭層、(20層)粘土粒混合土層、(21層)粘土層、(22層)貝層、(23層)ゴミ・粘質黒色土・灰炭層・貝層を互層とする層、(24層)焼土を混合する黒褐色土層、(25層)粘土・焼土混合土層。なお、セクション線太線は、硬質面をしめしている。

01号遺構(fig. 9・10・12・13・14)

堅穴住居跡。建替えは認められない。堅穴住居02号遺構と重複する。本遺構が新。角柱を中心とする柱穴群に切られており、遺存状態は不良。また西隅部分は調査区外におよぶ。堅穴平面形態は方形を呈し、規模は6.40(主軸)×6.28m、確認面面積推定39.18㎡、内区9.21㎡を測る。主軸方位は、北西辺にカマドを仮定し、これを基準とした場合、N-56° -Wである。周溝は全周する。床面からの深さは6~15cm。残存壁高は確認面から床面まで17~32cmを測る。Pitは、P₁~P₄が主柱穴であり、P₁が床面より53cm、P₂が58cm、P₃が61cm、P₄が70cmである。貯蔵穴は検出されていない。また、カマドも検出されていないが、P₂脇床面上に粘土・焼土粒の分布が認められた。床面は貼り床であり、全体に軟弱であった。掘形は、主柱穴外側が深くなる構造をもつ。本遺構は、火災住居であると想定され、とくに北東壁周溝上床面レベルよりやや上から、焼土の流れ込み層が認められた。

図示可能な遺物で、床面直上から出土したものはない。9は砥石であり、半損する。4面とも使用され浅い線条痕が若干観察できる。現存長5.75cm、幅5.9cm、厚さ3.75cm、重量135.87g。石質は凝灰岩である。

02号遺構(fig. 9・10・13・15)

堅穴住居跡。建替えは1回(A・B)。新しいものからA・Bとする。また堅穴住居01号遺構、土坑16・

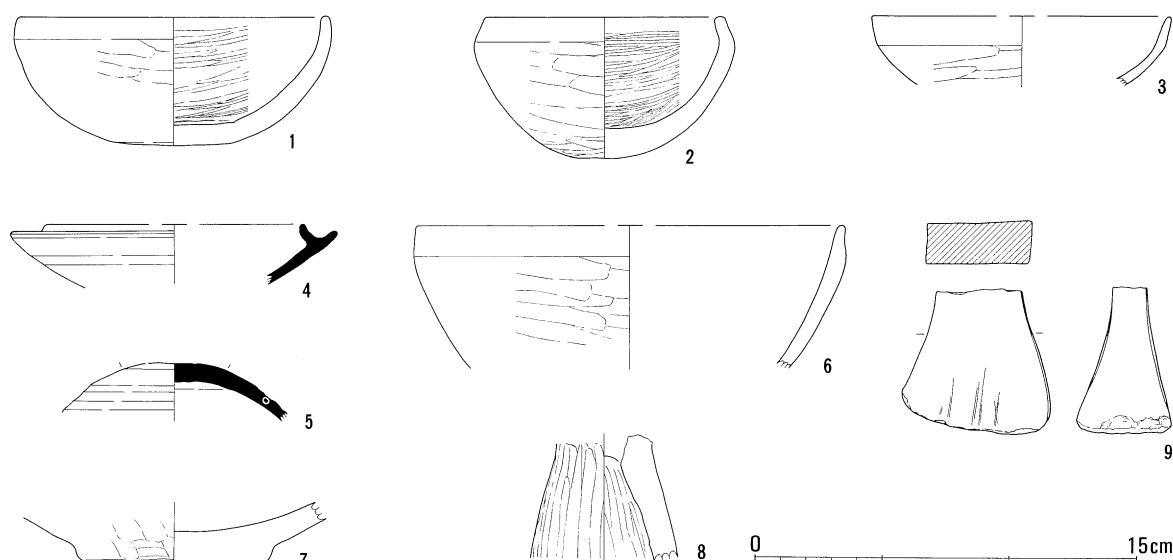


fig.14 01号遺構出土遺物実測図(1/3)

17号遺構と重複する。本遺構が古。01号遺構との床面の比高差20cmであり、本遺構が浅い。竪穴南東隅は後代の攪乱により範囲をとらえることができなかった。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は6.71(主軸)×6.31m、確認面面積推定40.22㎡、床面37.05㎡、内区12.66㎡(A)、7.18㎡(B)を測る。主軸方位はN-29°-Wである。周溝は南辺部、西辺部において検出された。床面からの深さは5cm前後と浅い。残存壁高は確認面から4~17cmを測る。Pitは、P₅~P₁₁が主柱穴であり、Aに対応するものがP₅~P₈、BはP₇・P₉~P₁₁である。P₇を基点として、北辺、東辺を拡張しており、おそらく拡張をともなう建替えと考えられる。深さは、P₅が床面より42cm、P₆が64cm、P₇が53cm、P₈が59cm、P₉が45cm、P₁₀が63cm、P₁₁が65cmである。なおP₇、P₉に付随して間仕切り溝が検出されている。貯蔵穴は、P₁₂がこれに対応する可能性があるがその帰属は明らかではない。深さは床面より56cmを測る。カマドは01号遺構に大半が破壊されており、右袖基部粘土範囲のみ図示した。床面は貼り床であり、全体に軟弱であった。掘形は、主柱穴外側が深くなる構造をもつ。

図示可能な遺物で、床面直上から出土したものは、10・11・13・15であり、土器は北東隅よりまとまって出土した。15・16は土製支脚である。15は基部を欠損し、現存長15.4cm、重量305.6gを測る。表面ナデ整形、胎土は緻密で、外面色調はにぶい褐色である。16は、頭部のみ遺存する。現存長は10.05cm、重量は134.59gを測る。外面はヘラナデ整形、胎土は大小砂粒を多量に含み、外面色調は橙色である。このうち、15はほぼ原位置から出土したと考えられる。

03号遺構(fig. 9・10・13・16)

竪穴住居跡。建替えは主柱穴によると1回であるが、掘形面によるかぎり2回とするのが妥当であろう(A・B・C)。新しいものからABCとする。その場合、Cは主柱穴をもたないと考えられる。竪穴住居04号遺構と重複する。本遺構が新。また15号遺構とも重複するが、新旧は不明。竪穴平面形態は方形、長方形を呈し、Aの規模は4.35(主軸)×5.37m、確認面面積22.64㎡、床面19.82㎡、内区3.75㎡。Bの規模は推定で3.85(主軸)×4.1m、確認面面積推定15.41㎡、内区2.77㎡。Cは推定で3.85(主軸)×3.55m、確認面面積推定13.65㎡を測る。主軸方位はN-30°-Wであり、北壁を共有し拡張されたものと考えられる。周溝は南壁側一部で検出されたものの明確ではない。床面からの深さは5cm

II 姉崎宮山遺跡

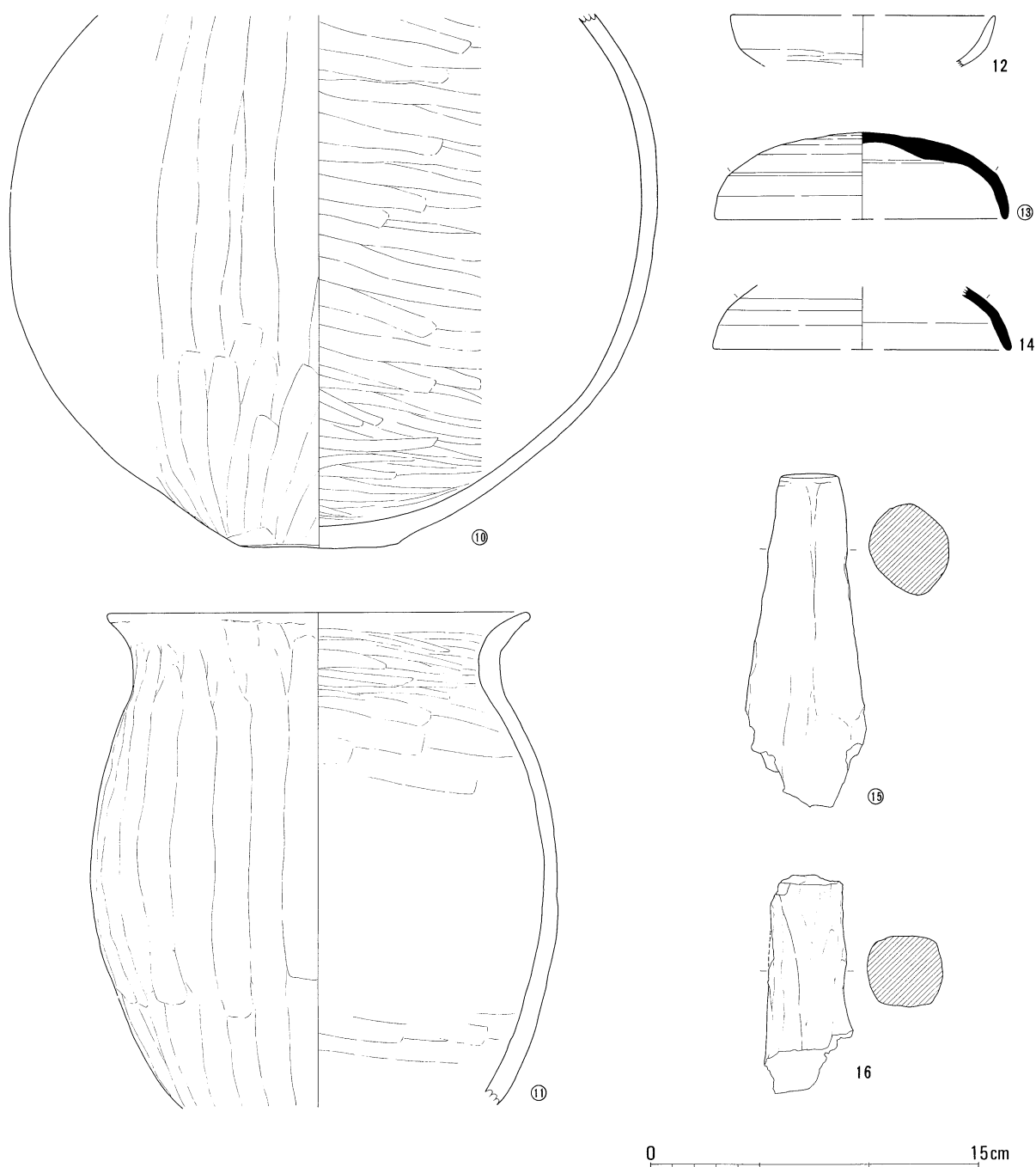


fig.15 02号遺構出土遺物実測図(1/3)

前後と浅い。残存壁高は確認面から12~30cmを測る。Pitは、P₁₃~P₂₀が主柱穴であり、建替えAに対応するものがP₁₃・P₁₅・P₁₇・P₁₉、BはP₁₄・P₁₆・P₁₈・P₂₀である。ただし、柱掘形において新旧はとらえてはならず、かならずしも明らかではない。深さは、P₁₃が床面より40cm、P₁₄が38cm、P₁₅が34cm、P₁₆が51cm、P₁₇が38cm、P₁₈が60cm、P₁₉が47cm、P₂₀が43cmである。貯蔵穴は検出されていない。カマドは北壁中央にあり、両袖は壁外側に張りだす。煙道長は不明。構築材は山砂と白色粘土である。火床面はあまり焼けてはいなかった。建替えに対応するつくりかえ痕跡は明確ではなかった。床面は貼り床であり、全体に軟弱であった。建替えによる貼り床の重複は認められなかった。掘形は、壁際が深くなる構造をもつ。なお、南側掘形面に炉状の火床が認められたが、15号遺構にともなうものであろうか。また、

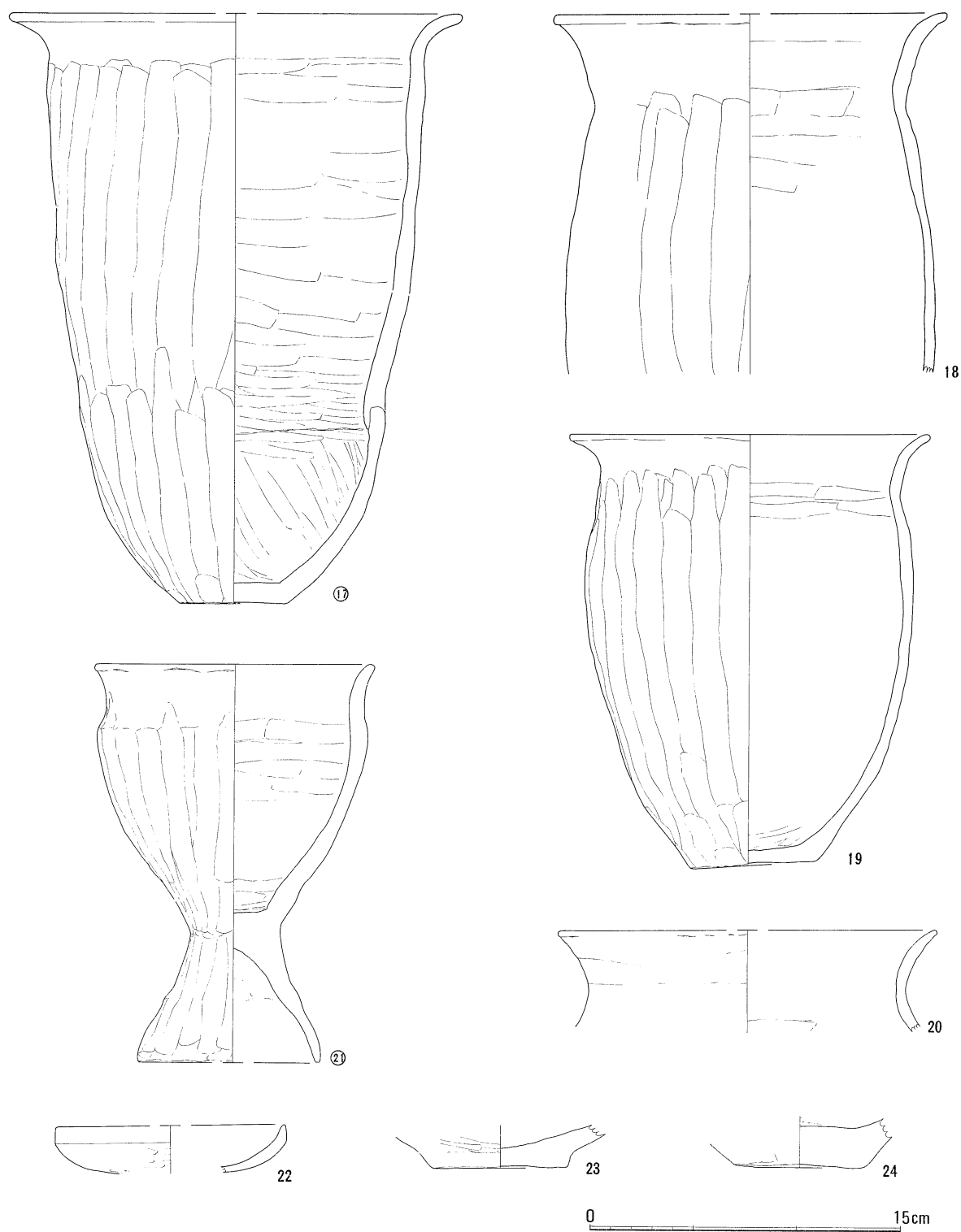


fig.16 03号遺構出土遺物実測図(1 / 3)

P₇₄の帰属は不明。

図示可能な遺物で、床面直上から出土したものは、17・21であり、カマド脇より出土した。

04号遺構(fig. 9・10・13・17)

竪穴住居跡。建替えは認められない。竪穴住居03号遺構と重複する。本遺構が古。また08・15号遺構とも重複すると考えられるが、新旧は不明。東壁際は攪乱を受ける。竪穴平面形態は方形を呈す。

II 姉崎宮山遺跡

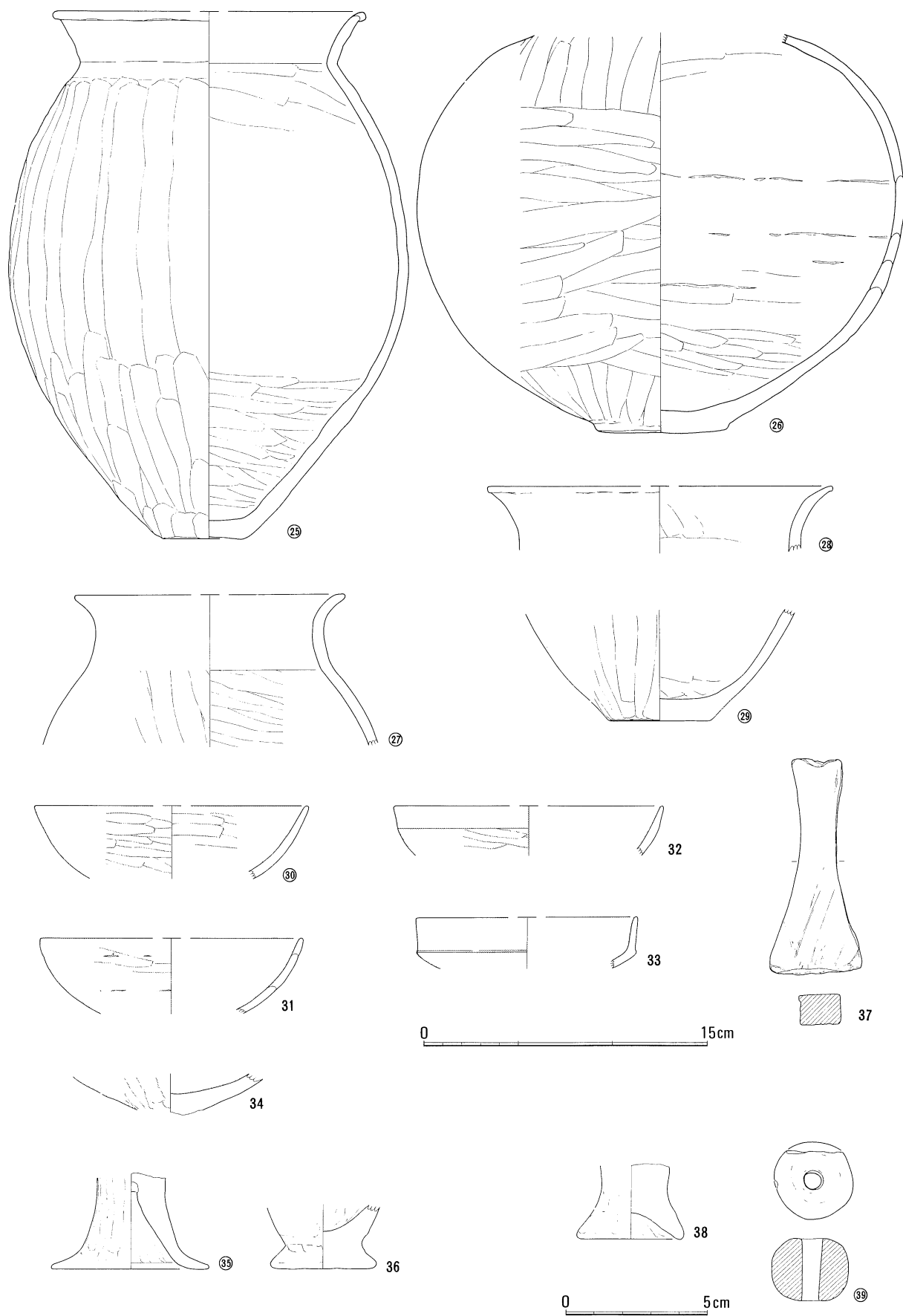


fig.17 04号遺構出土遺物実測図(1/3、1/2)

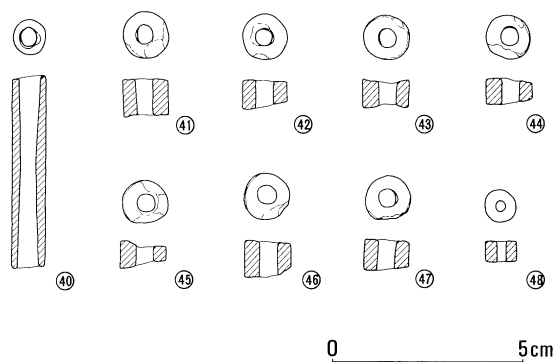


fig.18 05号遺構出土遺物実測図(1/2)

図示可能な遺物で、床面直上および貯蔵穴から出土したものは、25・26・27・28・29・30・35・39であり、とくに貯蔵穴周辺よりまとまって出土した。ただし、貯蔵穴から出土したものはいずれもその覆土である。37についてはP₇₅から出土したものであり、その帰属は不明。37は砥石であり、完存する。長さ11.46cm、最大幅4.88cm、厚さ3.90cm、重量178.76gを測る。4面とも使用され、線条痕を残す。石質は凝灰岩と思われる。39は土製丸玉であり、一部欠損する。最大径2.76cm、高さ2.20cm、重量12.75gを測る。胎土は緻密であり、色調は浅黄橙色。

05号遺構(fig. 9・10・11・18)
 竪穴住居跡。建替えは認められない。竪穴住居06・07号遺構と重複する。本遺構が新。北側は調査区外となり、全体のほぼ1/2のみ調査。竪穴平面形態は方形と考えられる。規模は南辺で4.14mを測る。主軸方位は、カマドを基準とした場合、N-66°-Eである。周溝は、06号遺構覆土上に床面が形成されていたこともあり、明確に認められなかった。06号遺構との比高差は、約25cmを測る。Pitは、P₂₆・P₂₇が支柱穴であり、P₂₆が床面より50cm、P₂₇が51cmである。P₂₈は貯蔵穴と考えられ、平面は長方形を呈す。深さは、71cmを測る。カマドは、右袖一部のみ検出された。竪穴平面形態を方形と仮定した場合、カマド位置は主軸線から南側による。床は貼り床であり、全体に硬質であった。掘形は調査区断面セクションによるかぎり、壁際がやや深くなるようである。

05号遺構(fig. 9・10・11・18)

土器は、細片が出土するのみであり、土器から年代は特定できない。ただし、カマド、貯蔵穴が一

tab.3 05号遺構出土玉類一覧表

(g、mm)

挿図	番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	備考
18	40	0.987	0.49~0.47	2.56	0.25	0.26	管玉。滑石製。
	41	0.350	0.62~0.61	0.51	0.23	0.22	上下面破面、未調整。滑石製。
	42	0.182	0.59	0.33	0.24	0.24	"
	43	0.218	0.60~0.58	0.41	0.24	0.24	"
	44	0.182	0.59	0.33	0.24	0.23	"
	45	0.162	0.60~0.59	0.39	0.24	0.24	"
	46	0.256	0.62~0.60	0.48	0.24	0.23	"
	47	0.227	0.61~0.58	0.39	0.23	0.24	"
	48	0.095	0.42	0.27	0.13	0.13	"

重量は小数点第4位を四捨五入した値

隅に寄る平面形態によるかぎり、カマドをもつ他の竪穴住居跡に比べて古い内容をもつ。床面上より、滑石製管玉1点、滑石製小玉8点が出土している(tab. 3)。

06号遺構(fig. 9・10・11・19)

竪穴住居跡。調査範囲での所見による限りでは建替えは認められない。大形の住居跡と考えられるが、大半は調査区外になる。竪穴住居05・07号遺構と重複する。05号遺構に対して本遺構が古。07号遺構とは重複範囲が限られていたこともあり、新旧は不明。床面高は05号遺構とほぼ同レベルであり、本遺構範囲は周溝によって確認することができた。竪穴平面形態は胴張り隅丸方形ないしは楕円形と想定される。規模、主軸方位は不明。周溝は全周する。Pitは、P₂₉が主柱穴と考えられ、深さは床面より61cmである。P₃₀は調査区断面d-d'の観察により、本遺構を切ると判断した。床面は部分的に貼り床様ではあるが、明確な掘形をもたない。

図示可能な遺物で、床面直上から出土したものは、50・56である。56は抉入石斧であり、石質は閃緑岩である。長さ13.75cm、最大幅4.52cm、最大厚3.50cm、重量428.8gを測る。全体は丁寧に研磨されているが、頂部に敲打痕が、また刃部は刃毀れ状の剥離が全体認められ、使用痕と考えられる。57は、土製丸玉であり、一部欠損する。最大径4.38cm、高さ3.08cm、重量43.69gを測る。胎土は緻密であり、色調はにぶい黄色。

07号遺構(fig. 9・10・13・19)

竪穴住居跡。建替えは認められない。竪穴住居05・06号遺構、掘立柱建物跡13号遺構と重複する。05・13号遺構に対して本遺構が古。06号遺構とは不明。西壁際は全体に攪乱を受けているが、壁の立ち上がりを検出することはできた。また、東、南側はハードルームを確認面とし、全体として遺存部分が限られている。竪穴平面形態は胴張り隅丸長方形を呈す。規模は5.77(主軸)×5.12m、確認面面積推定21.79m²、床面推定21.47m²、内区8.37m²を測る。主軸方位はN-42°-Wである。周溝は明確ではない。Pitは、P₃₁~P₃₄が主柱穴であり、深さは、P₃₁が床面より65cm、P₃₂が76cm、P₃₃が90cm、P₃₄が90cmである。貯蔵穴、出入口梯子穴は、南壁際のPit群が対応するものと考えられる。炉は、主軸線上北壁側にあり、径95cm程度を測る。火床面はあまり焼けていない。床面は掘形面を床とする。全体にあまり硬質ではない。

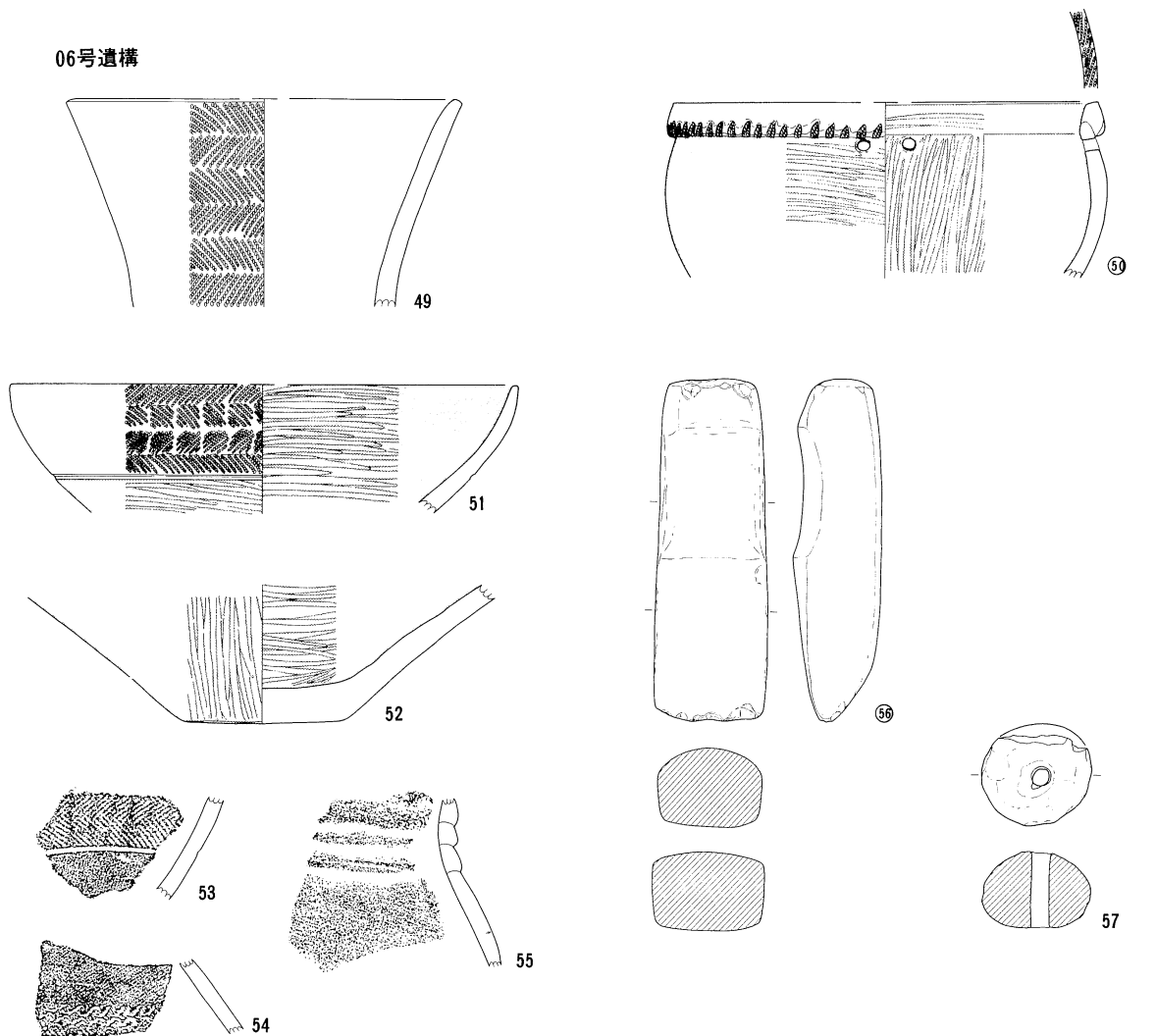
図示可能な遺物で、床面レベルから出土したものは、58・61である。

08号遺構(fig. 9・10・24)

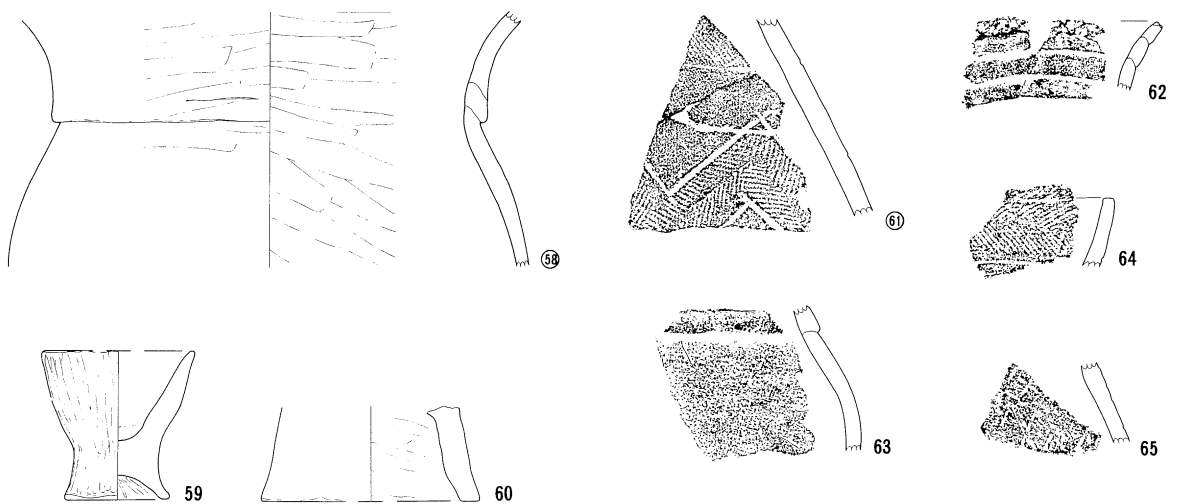
竪穴住居跡と考えられる。建替えは認められない。09号遺構と重複する。また、竪穴住居跡04号遺構とも重複関係にあると思われるが、新旧は判断できない。P₃₅~P₃₈が主柱穴であると考えられ、その北西辺、南西辺柱間中央に火床面が検出された。ともに掘り込みは認められないものの炉である可能性が想定される。床面はまったく遺存していない。規模は不明。ただし、南西側に柱列と平行する立ち上りが認められ、竪穴掘形範囲を示している可能性が考えられる。これを根拠とするならば、一辺が約5.2m、竪穴平面形態は方形ないしは長方形になると判断される。主軸方位はN-43°-Wないしはこれと直交する。Pitの深さは、P₃₅がルーム面より51cm、P₃₆が70cm、P₃₇が51cm、P₃₈が61cmである。

土器124は、北側火床面脇より出土している。竪穴平面形態が、方形ないしは長方形で、炉をともなうことを考慮するならば、これと矛盾しない。

06号遺構



07号遺構



0 15cm

fig.19 06・07号遺構出土遺物実測図(1 / 3)

09号遺構(fig. 9・10・11)

竪穴住居跡と考えられる。建替えは判断できない。08号遺構と重複する。新旧は不明。P₃₉を主柱穴とし、竪穴隅部分と想定される掘り込みから竪穴住居跡と判断した。また、調査区断面セクションb-b'では、貼り床面(15層)が認められた。また、24層は床面上焼土層である。ただし、掘り込みの立ち上がりはやや不明確で、その範囲は確定できない。竪穴平面形態は、方形ないしは隅丸方形と考えられる。P₃₉の深さは、掘形面より43cmを測る。

土器は細片が出土しているだけで、その型式も安定していない。

10号遺構(fig. 9・10・12)

竪穴住居跡と考えられる。建替えは判断できない。掘立柱建物跡13号遺構と重複する。本遺構が古。本遺構は、調査区東側端にそって確認された。検出部分はきわめてわずかであるが、掘立柱建物跡13号遺構に先行すること、立ち上がりが明確で底面がほぼ同レベルで平坦であることから竪穴住居跡と判断した。壁高は確認面から約35cm、確認範囲での平面規模は3.22mを測る。竪穴平面形態は、やや内向するようにもみえる。床面構造は貼り床をもたないと思われるが明確ではない。

遺物は出土していない。

11号遺構(fig. 9・10・13・25)

掘立柱建物跡。掘立柱建物跡12号遺構と重複する。本遺構を総柱建物と仮定した場合、直接重複する。ただし、調査段階では側柱建物と判断したため、新旧関係に充分配慮することができなかった。柱掘形P₄₀～P₄₈によって構成されるが、P₄₁、P₄₇は掘形平面規模、平面形態とも他に対して貧弱である。またP₄₄は、掘形をみるかぎりでは重複は認めにくい。その場合、桁行2間(2.22～2.36m)、梁行1間(2.15～2.23m)の側柱建物となる。ただし、その構造は不明確ではあるが、P₄₃、P₄₄、P₄₅に対応して溝状の掘形が検出されていること等から判断して、桁行2間梁行2間の総柱建物になる可能性も考えられる。2間×2間とした場合の柱間寸法は、P₄₀P₄₁が0.99m、P₄₁P₄₂が1.16m、P₄₀P₄₃が1.06m、P₄₃P₄₆が1.16m、P₄₂P₄₅が1.12m、P₄₅P₄₈が1.24m、P₄₆P₄₇が1.20m、P₄₇P₄₈が1.03mとなる。これは、検出されたものについては掘形底面硬質部柱痕跡を基準としたが、確定的な数値ではない。深さは、確認面よりP₄₀が63cm、P₄₁が50cm、P₄₂が82cm、P₄₃が81cm、P₄₄が51cm、P₄₅が98cm、P₄₆が69cm、P₄₇が68cm、P₄₈が70cmである。またその底面絶対高は、P₄₀が32.07m、P₄₁が32.22m、P₄₂が31.82m、P₄₃が31.89m、P₄₄が32.13m、P₄₅が31.62m、P₄₆が32.00m、P₄₇が31.99m、P₄₈が31.92mである。柱掘形平面形態はほぼ円形。主軸方位はN-24°-W。面積は5.02㎡を測る。

P₄₅より、土器147が出土している。ただし出土状況は不明。

12号遺構(fig. 9・10・12・13・24・25)

掘立柱建物跡。掘立柱建物跡11号遺構と重複する。桁行4間以上(6.1m以上)、梁行3間(4.40m)の南北棟の側柱建物である。南側は調査範囲外におよび、検出範囲では3間である。ただし、P₅₁はその帰属が不確定であり、その場合梁行2間となる。柱間寸法は、P₄₉P₅₀が1.78m、P₅₀P₅₁が0.90m、P₅₁P₅₂が1.78m、P₄₉P₅₃が2.05m、P₅₃P₅₄が2.00m、P₅₄P₅₅が1.57m、P₅₂P₄₄が2.13m、P₄₄P₅₆が2.10m、P₅₆P₅₇が1.60mである。その深さは、確認面よりP₄₉が100cm、P₅₀が53cm、P₅₁が21cm、P₅₂が62cm、P₅₃が104cm、P₅₄が76cm、P₅₅が60cm、P₄₄が51cm、P₅₆が48cm、P₅₇が59cmを測る。またその底面の絶対高は、P₄₉が31.85m、P₅₀が32.21m、P₅₁が33.41m、P₅₂が32.04m、P₅₃が31.84m、P₅₄が32.11m、P₅₅が32.28m、P₄₄

が32.13m、P₅₆が32.15m、P₅₇が32.06mを測る。柱掘形平面形態はほぼ円形であり、径65cm～90cmである。主軸方位はN-15° -Wを示す。

P₅₃より土器120が、P₅₅より土器130が、P₅₇より土器130・138が出土している。ただし、P₅₇は遺存部分が少なく、その帰属は不確実である。

13号遺構(fig. 9・10・12・13・24)

掘立柱建物跡。堅穴住居跡07・10号遺構と重複する。本遺構が新。調査範囲内で判断する限りでは東西2間(2.18m)、南北2間(2.15m)の総柱建物である。ただし、東西方向は調査範囲に接しており、東西3間になる可能性は当然考慮される。柱間寸法は、P₅₈P₅₉が1.17m、P₅₉P₆₀が1.0m、P₅₈P₆₁が0.96m、P₆₁P₆₄が1.1m、P₆₀P₆₃が0.95m、P₆₃P₆₆が1.21m、P₆₄P₆₅が1.19m、P₆₅P₆₆が1.0mである。その深さはP₅₈が54cm、P₅₉が52cm、P₆₀が33cm、P₆₁が51cm、P₆₂が35cm、P₆₃が84cm、P₆₄が60cm、P₆₅が53cm、P₆₆が58cmを測る。またその絶対高は、P₅₈が31.94m、P₅₉が31.95m、P₆₀が32.14m、P₆₁が32.00m、P₆₂が32.13m、P₆₃が31.64m、P₆₄が32.06m、P₆₅が31.99m、P₆₆が31.96mを測る。柱掘形平面形態はほぼ円形で径60cm前後。主軸方位は、南北棟を棟とした場合N-13° -W。面積は5.02㎡を測る。

P₆₃より、土器119が出土している。ただし出土状況は不明。

14号遺構(fig. 9・10・13)

柱掘形P₆₇P₆₈P₆₉より構成される。他のPit群に対して掘形が明確であることから抽出したが、建物とした場合、その組合せが明らかではない。ここでは掘立柱列としてあつかっておく。目隠し堀か。柱心々間の延長距離は3.19m、P₆₇P₆₈間が1.67m、P₆₈P₆₉間が1.52mを測る。その深さは、確認面よりP₆₇が94cm、P₆₈が45cm、P₆₉が77cm、また底面の絶対高はP₆₇が32.03m、P₆₈が32.50m、P₆₉が32.18mを測る。軸方位はN-12° -Wである。

柱掘形から遺物は出土していない。

15号遺構(fig. 9・10)

柱掘形P₇₀～P₇₃により構成される。また、東西軸線上西側、03号遺構掘形面において炉跡と考えられる火床面が検出されており、これらから堅穴住居跡の可能性を想定しておきたい。その場合、03号遺構との重複関係は、本遺構が古となる。ただし、柱掘形の深さが一定していないこと、また、炉を仮定し主軸を設定した場合、方位が南側へ傾斜することなど、堅穴住居跡としての妥当性には問題を残す。柱間寸法は、P₇₀P₇₁が2.67m、P₇₀P₇₂が2.70m、P₇₁P₇₃が2.70m、P₇₂P₇₃が2.68mである。またその深さは、確認面よりP₇₀が62cm、P₇₁が79cm、P₇₂が48cm、P₇₃が46cmを測る。主軸方位は南北軸を基準とした場合、N-16° -Wである。

柱掘形から遺物は出土していない。

16号遺構(fig. 9・10・13)

土坑。堅穴住居跡02号遺構と重複する。本遺構が新。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸長(南北軸)2.07m、副軸長1.97m、02号遺構床面からの深さ92cmを測る。主軸方位はN-10° -Wである。

実測可能な遺物は出土していない。土器破片資料は時期的に安定していないが、カワラケが主体的であると思われる。

17号遺構(fig. 9・10・13・25)

土坑。堅穴住居跡02号遺構、土坑19号遺構と重複する。02号遺構に対しては本遺構が新。19号遺構

Ⅱ 姉崎宮山遺跡

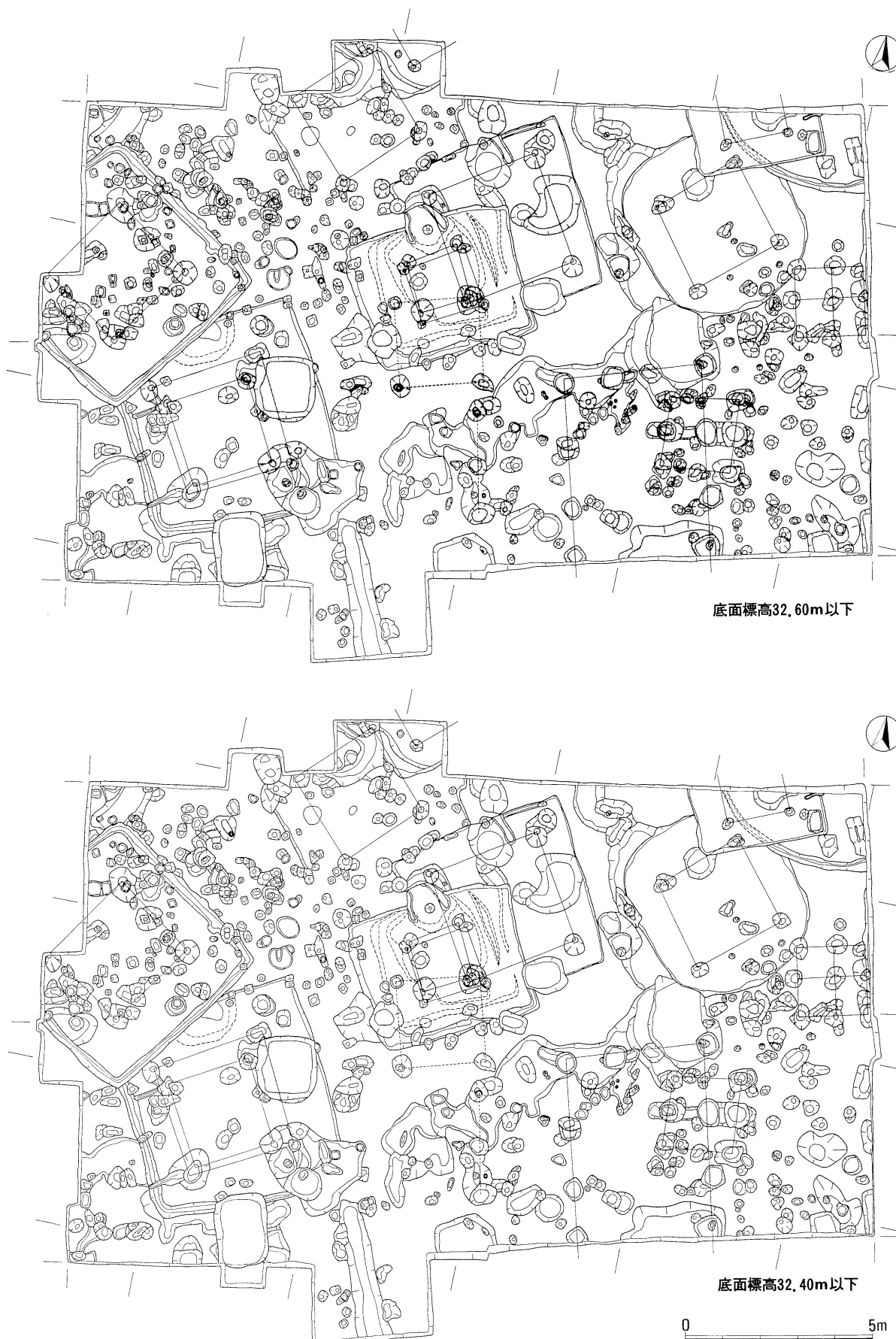


fig.20 柱穴・土坑深度(1)(1/180)

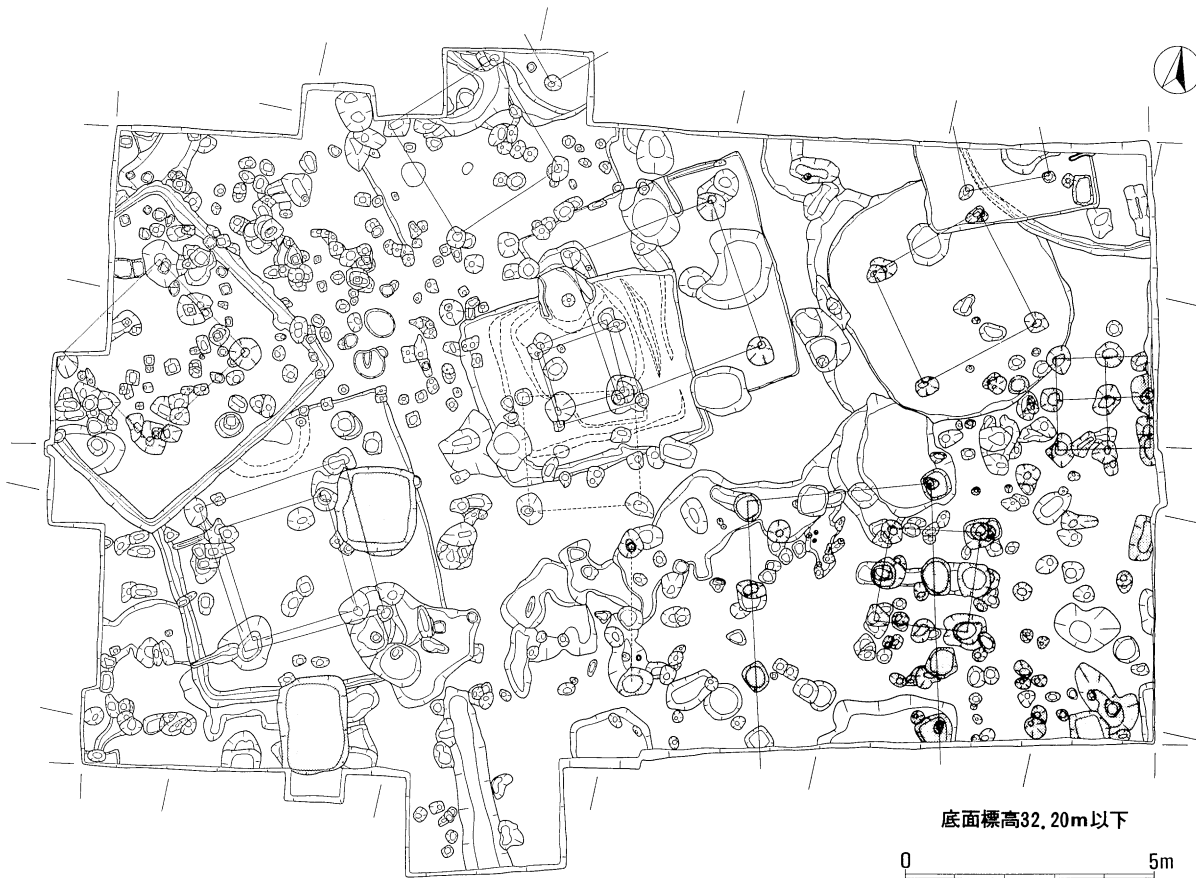


fig.21 柱穴・土坑深度(2)(1/180)

に対しては本遺構が古。平面形態は隅丸長方形を呈し、主軸長(南北軸)2.31m、副軸長1.69m、02号遺構床面からの深さ1.71mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。

出土遺物のうち図示可能なものは土器150・157・158であり、これらは底面より出土している。

18号遺構(fig. 9・10・12)

土坑。基壇土下にあると判断したが、基壇築成に対して、大きくさかのぼるものであるのかどうかは不明確である。東西幅92cm、確認面からの深さ47cmを測る。

図示可能遺物は出土していない。

19号遺構(fig. 9・10・12)

土坑。土坑17号遺構と重複する。本遺構が新。18号遺構同様、基壇土下にあると判断したが、基壇築成に対して、大きくさかのぼるものであるのかどうかは不明確である。東西幅57cm、確認面からの深さ67cmを測る。

図示可能遺物は出土していない。

20号遺構(fig. 9・10・12・20・21)

溝。基壇土下にあると判断したが、基壇築成に対して、大きくさかのぼるものであるのかどうかは不明確である。確認距離は4.42m、幅0.8~1.18m、深さは確認面から17~30cmを測る。走行方位はN-23°-Wである。

図示した土器110・118は一括出土したものであるが、本遺構に帰属する可能性はうすい。



fig.22 中・近世掘立柱列(1/180)

3 その他の遺構と遺物

前節で対象としたものの以外の遺構および、Pit群、遺構外出土の遺物について簡単にまとめておきたい。

弥生時代、古墳時代の遺構としては、P₇₈より久ヶ原式(102・105)が、またP₇₇より鬼高式(128・142)がまとまって出土している。とくにP₇₈は、隣接して炉とも考えられる火床面が検出されていることから、堅穴住居跡に関連する可能性は高い。ただし、P₇₇を含め、Pitの組合せを確認することはできない。他に、P₇₉よりカワラケがまとまって出土している。

本遺跡において、とくに問題となるのは、宝永期火山灰降下以前の姉崎神社に関連する遺構の存在である。02号遺構周辺には、径20cm前後を主体とする角柱のPit群が分布するが、これらはおそらく中近世の所産であると考えられる。ただしその組合せは判然としない。fig. 20・21は、Pit群の底面標高を図示したものである。またfig. 22は、その組合せを一案として提示したものである。性格として、建物あるいは建物に関連する足場、その他区画施設など様々な性格が想起されるものの、調査そのものが不完全であったこともあり、具体的な手がかりを得るにいたらなかった。

遺構外出土の遺物(fig. 23・24・25・26・27)は、とくに旧表土中より多量に出土している。これは、遺構の遺存状態と関連する。66～82は、縄文土器である。66・67は繊維を胎土に含有する。前期前半に比定される。69～79は前期後半の諸磯式と考えられるものであり、半截竹管による押し引き沈線文、押捺文、沈線文と充填縄文を文様要素とする。貼り付け浮線文は認められなかった。82は、加曽利B

II 姉崎宮山遺跡

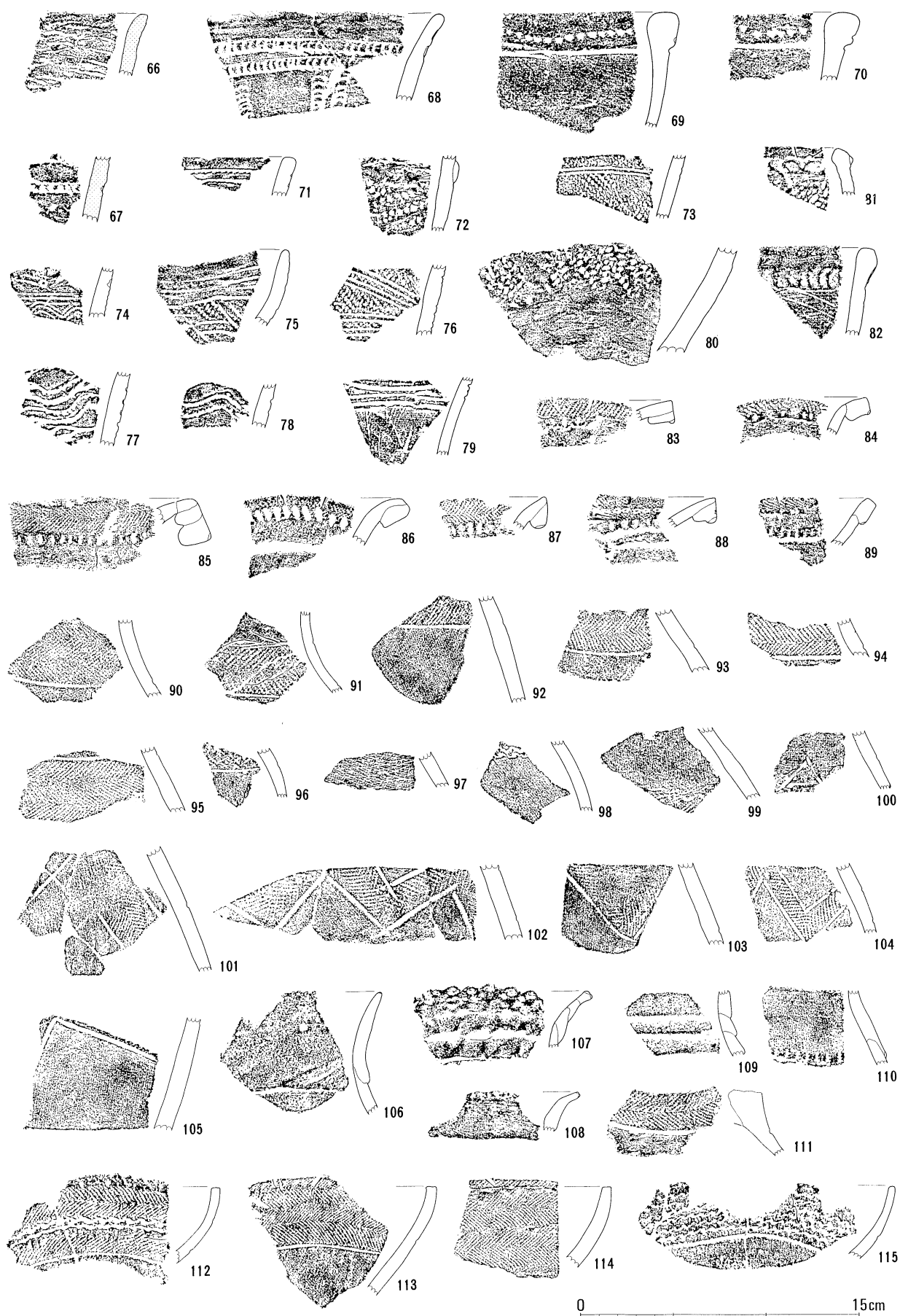


fig.23 土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(1)(1/3)

II 姉崎宮山遺跡

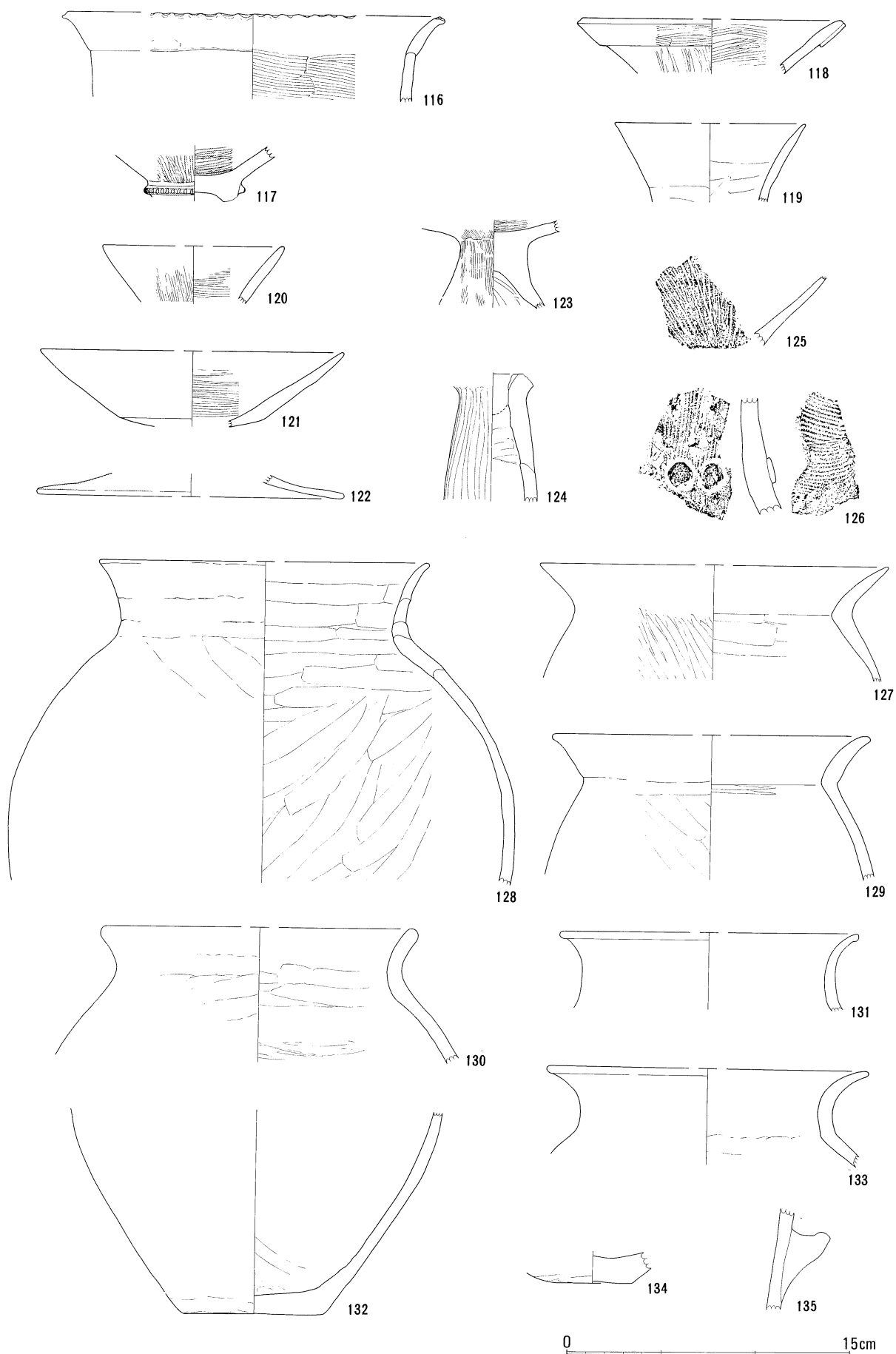


fig.24 土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(2)(1/3)

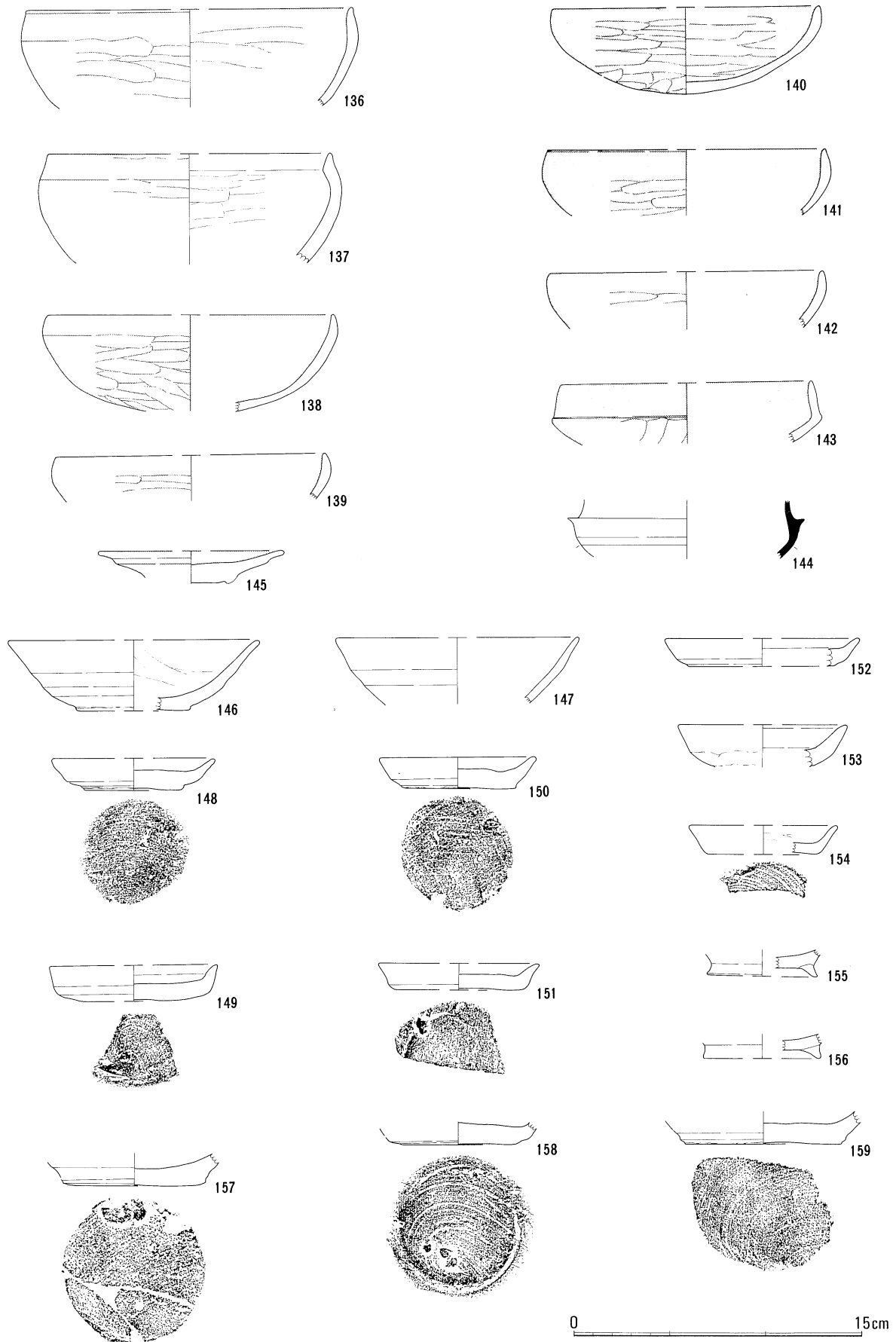


fig.25 土坑・溝・柱穴、遺構外出土遺物実測図(3)(1/3)

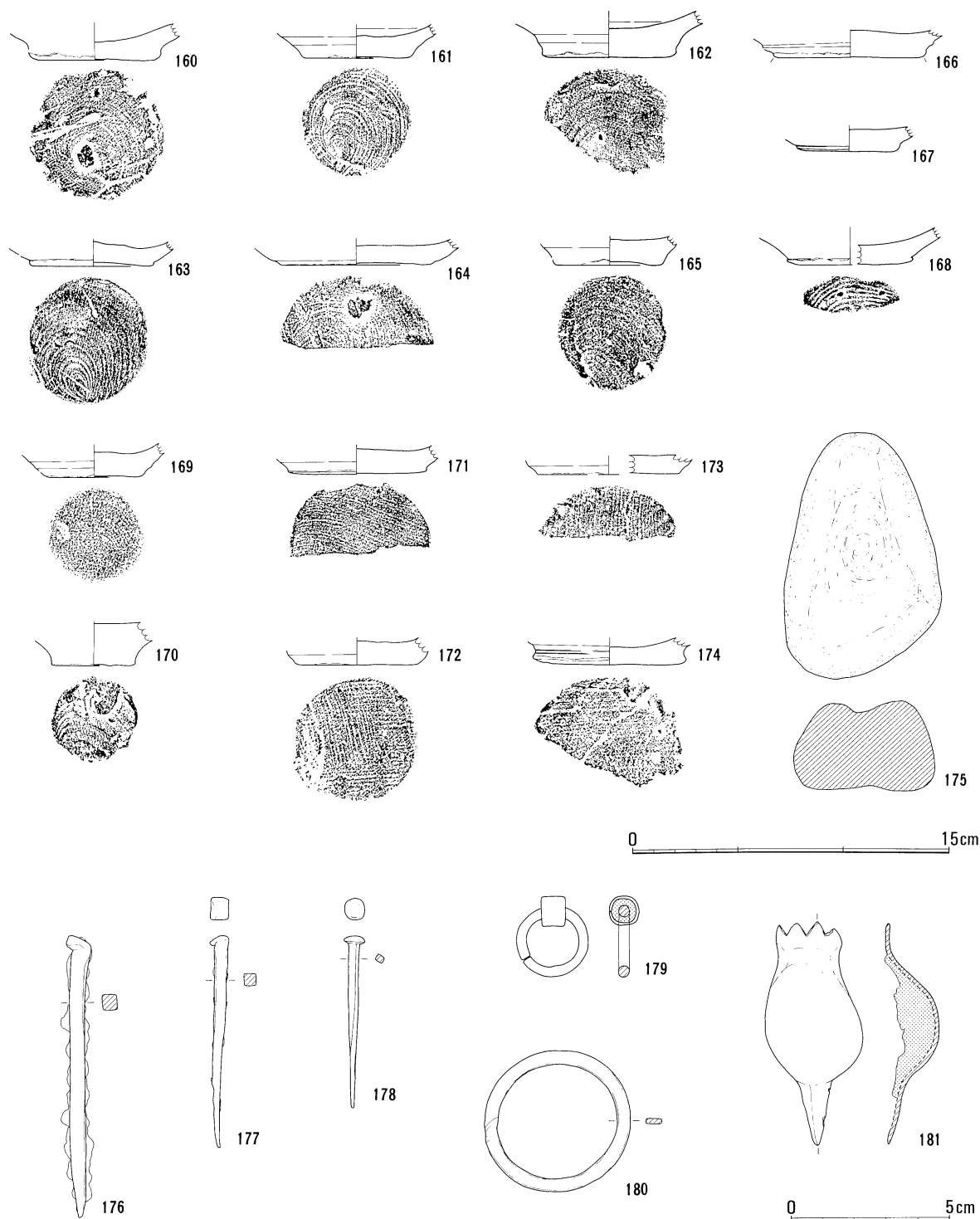


fig.26 土壌・溝・柱穴・遺構外出土遺物実測図(4)(1/3、1/2)

式の粗製土器である。なお、縄文時代の遺構は検出することができなかった。

83～117は弥生土器であり、いずれも久ヶ原式に比定される。tab. 4にその文様要素の組成を示したが、壺形土器の文様構成として、結節文は、区画、あるいは地文としても客体的である。久ヶ原式においても、時期的に限定されると考えられる。

118～125は、五領式に比定される。125はS字状口縁台付甕形土器であり、その胎土から搬入品と考えられる。

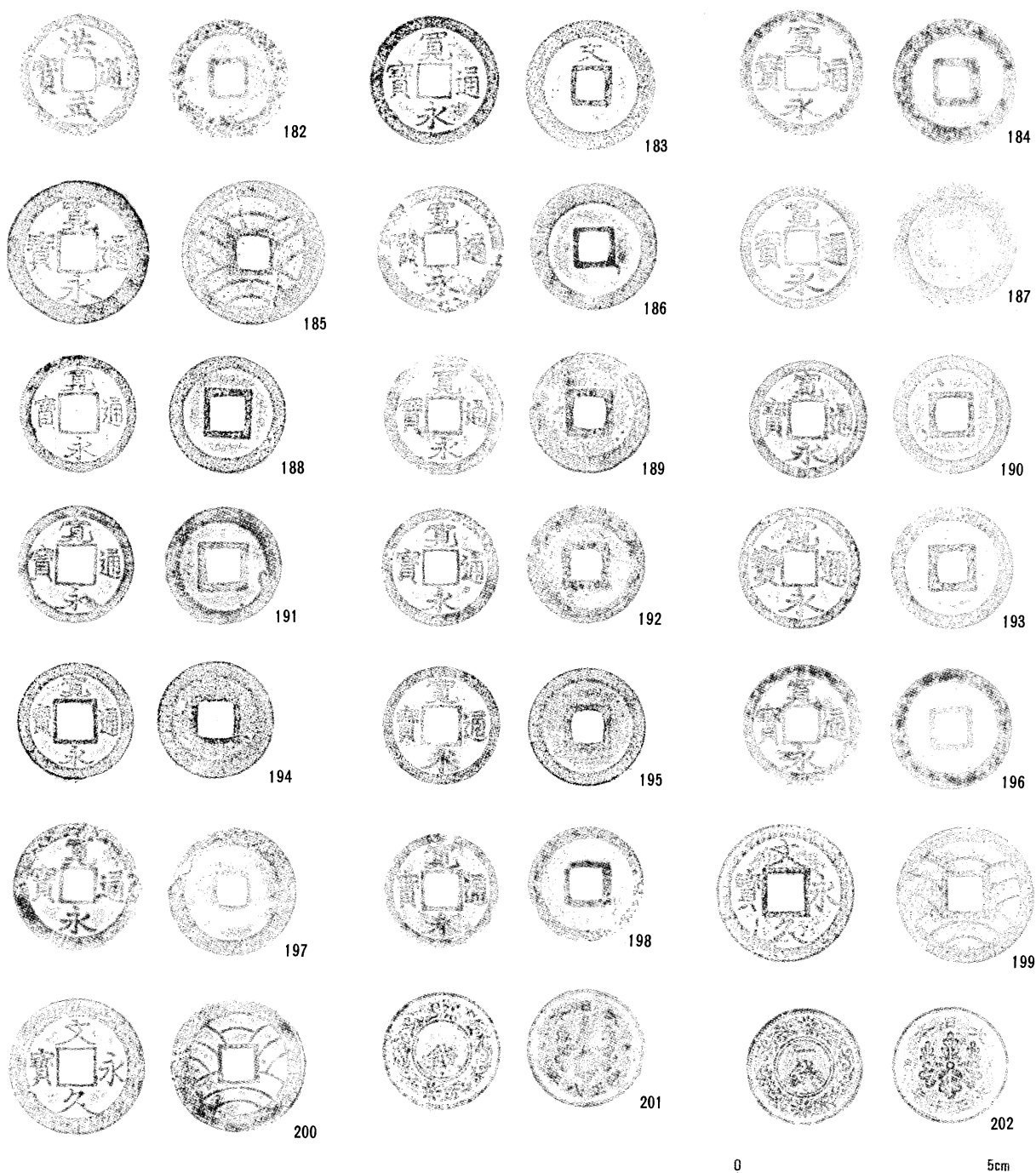


fig.27 古銭拓影(4/5)

126は、形象埴輪である。埴輪は他に出土していない。円形付文をもち、器面色調は褐色を呈す。人物埴輪であろうか。

127～143は、鬼高式である。竪穴住居跡出土土器を含め、時期的には数段階が設定できる。145もこの段階のものであろうか。144は、須恵器蓋杯である。

147・148は、ロクロ土師器である。149以降にこれと対応するものをふくむ可能性は否定できないが、この段階はきわめて限られている。

148～174は、カワラケである。時期を限定することはできない。前章でふれたように、隣接地で常滑窯甕などが出土しているが、本調査区では、陶磁器類は細片が若干出土しているのみである。

II 姉崎宮山遺跡

tab.4 姉崎宮山遺跡出土土器組成

縄文	116											
弥生	many	壺 (有文)	148	口縁	39							
				胴部 (有文)	115	単節	111	沈区	55	鋸齒	14	
						結区		8				
						結節	1					
		撚糸	2									
		甕	73	口縁	28							
				胴部 有段	45	胴 1	15	押捺	8			
		多段	37			無	11					
		椀 (高杯)	22	口縁	21	複合	4	押捺	3			
								無	1			
沈区	6											
結区	0											
土師	many	甕	42	口縁	128							
				胴部	many	ハケ	57					
		杯	63									
		高杯	45									
ロクロ	679											
須恵	45											
他	8											

胴部片など確定できないものは除く 結区 帯縄文結節文区画 高杯 鬼高式高杯脚部
単節・結節・網目 帯縄文原体 押捺・無 有段部、複合部下端押捺有無 ロクロ ロクロ土師器、カワラケ

されていたが、その遺存資料と考えられる。いずれも銅製品である。178は、釘ないしは鋌であり、円形の頭部をもち、幹は断面方形で1/4のねじりを加える。全長5.4cm、重さ2.49gを測る。179は、最大長2.55cm、円環部径2.31cm、重さ5.73gを測る。180は、外径4.58～4.61cm、重さ7.39gを測る。180は、全長7.06cm、最大幅3.13cm、最大高1.69cm、重さ14.53gを測る。内側に炭化物が付着する。

182～202(tab. 5)は、貨幣である。旧表土上、基壇土、整地土各所より出土している。明治期以前で約30枚以上になる。内訳は、洪武通寶1枚、文久通寶2枚で、他は寛永通寶である。寛永通寶のうち鉄銭は1枚、11波4文銭1枚である。古寛永は出土していない。

tab.5 貨幣一覽表

(mm, g)

挿図	番号	銭 名	徑	孔幅	厚さ	重量	挿図	番号	銭 名	徑	孔幅	厚さ	重量
27	182	洪武通寶	2.40	0.35	0.18	3.57	27	193	寛永通寶	2.41	0.58	0.13	3.44
	183	寛永通寶	2.525	0.56	0.15	3.27		194	寛永通寶	2.28	0.71	0.10	2.18
	184	寛永通寶	2.45	0.59	0.125	3.00		195	寛永通寶	2.30	0.63	0.11	2.85
	185	寛永通寶	2.81	0.64	0.11	4.54		196	寛永通寶	2.35	0.61	0.11	3.01
	186	寛永通寶	2.49	0.59	0.12	3.20		197	寛永通寶	2.53	0.61	0.11	2.94
	187	寛永通寶	2.42	0.59	0.075	2.44		198	寛永通寶	2.25	0.64	0.10	2.49
	188	寛永通寶	2.29	0.66	0.13	2.83		199	文久永寶	2.68	0.68	0.11	3.76
	189	寛永通寶	2.35	0.60	0.10	2.91		200	文久永寶	2.64	0.64	0.09	2.89
	190	寛永通寶	2.30	0.64	0.095	2.61		201	一銭(大正八年)	2.30	—	0.14	3.68
	191	寛永通寶	2.28	0.68	0.11	2.51		202	一銭(大正十年)	2.30	—	0.145	3.67
	192	寛永通寶	2.30	0.59	0.14	3.13							

175は、凹石である。
最大長11.71 cm、幅
7.45cm、厚さ4.61cm、
重量546.6gを測る。
両面に凹部が認められ
る。

176・177は、鉄釘である。176は、全長8.90cm、重さ7.36gを測る。177は、方形の頭部を造り出し、全長6.68cm、重さ4.27gを測る。

176～181は、姉崎神社社殿にともなう飾金具類であろうか。前述したように、焼失した社殿はほぼ完全に撤去

4 小 結

本遺跡は、長期にわたる土地利用の結果、各遺構自体の遺存状態はきわめて不良である。竪穴住居跡10軒(建替えを含めた総数で13軒)、掘立柱建物跡3棟、掘立柱列1列、溝1条、土坑4基を抽出したが、他にも存在する可能性は前節に述べたとおりである。とくに、東側部分は、ハードルーム面が露呈しており、竪穴住居跡についても完全に削平されている可能性は当然考慮される。その削平は、社殿下層旧表土が安定して認められることから、その形成期に近接する時期とは考えられない。掘立柱建物跡等の底面レベルも現状のルーム面に対応した傾斜が認められ、それ以前にさかのぼる可能性が高い。周辺古墳群の造営にともなう土取りによるものであろうか。

本遺跡における、弥生時代以降の経営時期を、出土土器から判断すると、断続性が認められる。弥生時代は、一部中期にさかのぼる可能性があるものの、ほぼ後期初頭(久ヶ原式古)に限定される。古墳時代は、前期、おそらくは前期末があり、後期、そして終末期、おそらくはその前半にいたる。05号遺構は中期末にさかのぼる可能性があるものの、鬼高式の範囲内であろう。また、01・03号遺構は、鬼高式に後出する。ただし、奈良時代に近接するものではない。これ以降、奈良・平安時代は、きわめて希薄であり、土器146・147を例示することができるにすぎない。

掘立柱建物跡の時期は、今回明確な根拠を提示することができない。当初、小片ではあるものの、柱掘形から出土した土器の大半が鬼高式ないしはそれ以前であったこともあり、古墳時代後期にさかのぼる可能性を想定していた。この場合、11号遺構P₄₅から出土した147が矛盾する。ただし、Pit群と重複することもあり、その出土状況は明確ではない。3棟の掘立柱建物跡が時期的に大きく異なることも考えられるが、いずれにせよ、隣接地における今後の調査に期待せざるをえない。

tab.6 姉崎宮山遺跡竪穴住居跡一覧表

(m、㎡)

遺構	時期	主軸×副軸	面積			主軸方位	柱穴	カマド	炉	貯蔵穴	備 考
			確認面	床	内区						
01	III c	6.40×6.28	(39.18)	—	9.21	N-56° -W	○	—	×	—	02遺構と重複。02号より新。
02A	III b	6.71×6.31	(40.22)	(37.05)	12.66	N-29° -W	○	○	×	△	拡張建替えか。01・16・17号遺構と重複。01・16・17号より古。
B	—	—×—	—	—	7.18	(N-29° -W)	○	—	—	—	
03A	III c	4.35×5.37	22.64	19.82	(3.75)	N-30° -W	○	○	×	×	拡張建替え。04・15号遺構と重複。04号より新。
B	—	(3.85×4.1)	(15.41)	—	(2.77)	(N-30° -W)	○	—	—	—	
C	—	(3.85×3.55)	(13.65)	—	—	(N-30° -W)	×	—	—	—	無柱穴か。
04	III a	5.45×5.65	(29.99)	(27.10)	13.11	N-33° -W	○	○	×	○	03・06・15号遺構と重複。03号より古。
05	(III a)	4.14×—	—	—	—	(N-66° -E)	○	○	×	○	06・07号遺構と重複。06・07号より新。
06	I	—×—	—	—	—	—	△	×	—	—	05・07号遺構と重複。05号より古。
07	I	5.77×5.21	(21.79)	(21.47)	8.37	N-42° -W	○	×	○	△	05・06・13号遺構と重複。05・13号より古。
08	(II)	—×—	—	—	—	(N-43° -W)	○	—	△	—	04・09号と重複。
09	—	—×—	—	—	—	—	○	—	—	—	08号遺構と重複。
10	—	—×—	—	—	—	—	—	—	—	—	13号遺構と重複。
15	—	—×—	—	—	—	(N-16° -W)	△	—	—	—	竪穴住居跡か。03・04号遺構と重複。

時期 I 期 久ヶ原式 III b 期 鬼高式
II 期 五領式 III c 期 鬼高式末～
III a 期 鬼高式

tab.7 姉崎宮山遺跡出土土器観察表

遺構	挿図 番号	種類	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外)	(cm)		(ml)
											口 径 器 高	最大径 底 径	
01	1	土師器	杯	ヘラケズリ(右左)。口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ。粗いミガギを加える。	覆土	体部3/4	ABE	良好	にぶい褐色 灰褐色	12.5 5.05	12.6 4.7	416
	2	土師器	杯	ヘラケズリ(右左)。口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ。ミガキ。	覆土	ほぼ完存	AB>DE	良好	にぶい橙色	9.45 5.6	10.4	180 204
	3	土師器	杯	ヘラケズリ(右左)。口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。平滑。		体部上半 1/8	㊥>AB	良好	橙色	(11.8) (2.8)		
	4	須恵器	杯	ロクロ調整。自然釉。ヘラケズリ範囲不明確。	ロクロ調整。		体部上半 1/4	A>B	良好	灰白色	(10.5) (2.4)	(13.5)	
02	5	須恵器	蓋	ロクロ調整。浅い回転ヘラケズリ。ヘラケズリ方向不明。	ロクロ調整。頂部に指頭痕。		天井部のみ	A	良好	灰白色 灰色	(2.3)		
	6	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。	ヘラナデ、ヨコナデ。		体部上半 1/4	E>AB	良好	橙色	(16.95) (5.7)	(17.2)	
	7	土師器	甕	ヘラナデ。	ヘラナデ。		底部3/4	ABE	良好	にぶい黄橙色 黄橙色	(3.35)	7.2	
	8	土師器	高杯	ヘラケズリ(上下)。	ナデ、ケズリ(上下)。		脚柱状部上半 1/2	㊥>AB	良好	にぶい褐色	(5.1)		
03	10	土師器	甕	ヘラケズリ(上下)。	ヘラナデ(左右)。	床面	胴部下半全周	ABE	良好	浅黄橙色	(24.4)	29.9 7.4	
	11	土師器	甕	体部ヘラケズリ(下上)。口縁部ヨコナデを加える。	ヘラナデ(右左)。口縁部上半ヨコナデを加える。	床面	胴部上半 3/4	ABCD	良好	橙色 黒褐色	19.5 (22.7)	21.5	
	12	土師器	杯	ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		体部上半 1/6	AB	良好	浅黄色	(12.2) (2.4)		
	13	須恵器	蓋	ロクロ調整。天井部回転ヘラケズリ(左右)。	ロクロ調整。	床面	体部1/4	A	良好	灰色	(13.4) 4.0		
03	14	須恵器	蓋	ロクロ調整。体部上半回転ヘラケズリ(左右)。	ロクロ調整。		体部上半 1/8	A	良好	灰色	(13.7) (2.9)		
	17	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	床面	胴部上半 3/4欠	㊥>A>CD	良好	褐色	(22.0) 28.6	5.3	4593
	18	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデを加える。	覆土	胴部上半 1/6	A>BCDE	良好	にぶい赤褐色	(19.1) (17.4)		

遺構	棟図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外内)	口 径		最大径 底 径	容量	
											器	高		A	B
03	19	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。	ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	覆土	一部欠	A>B>CDE	良好	赤褐色	17.5 20.9	6.2	2660 2802		
	20	土師器	甕	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。	覆土	口縁部1/6	A>BDE	良好	橙色 (18.4) (4.0)					
	21	土師器	台付甕	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(下上)。	ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	床面	脚台部3/4欠	A>BCDE	良好	明赤褐色 にぶい赤褐色	13.6 19.3	(8.7)	920 868		
	22	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。	ヘラナデ、ヨコナデ。	覆土	口縁部1/8	AB	良好	にぶい黄褐色 灰黄褐色	(11.2) (2.3)				
	23	土師器	甕	ヘラナデ。	ヘラナデ。		底部1/2	ⒶA>E	良好	橙色 にぶい黄色	(2.1)	6.5			
	24	土師器	甕	ヘラケズリ(下上)。	ヘラナデ。	覆土	底部のみ	AB>E	良好	にぶい橙色 橙色	(2.5)	6.5			
04	25	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	床面～貯蔵穴覆土	胴部上半 2/3欠	B>ACD	良好	にぶい橙色 橙色	(16.6) 27.9	21.2 4.25	5423		
	26	土師器	甕	縦方向のヘラケズリ(上下)のうち、胴部中に横方向のヘラケズリ(右左)。底部周辺より胴部中位黒化。	ヘラナデ(右左)。	床面～貯蔵穴覆土	胴部下半 3/4	AB>E>CD	良好	褐灰色 にぶい橙色	(21.2)	25.9 6.9			
	27	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(下上)。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	貯蔵穴覆土	口縁部1/3	ABCD	良好	にぶい橙色 (14.4) (8.1)					
	28	土師器	甕	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	ヘラナデ(右左、下上)、ヨコナデ。	貯蔵穴覆土	口縁部1/8	AE	良好	橙色 (18.5) (3.65)					
	29	土師器	甕	ヘラケズリ(下上)。	ヘラナデ。	床面～貯蔵穴覆土	胴部下半1/5、 底部完存	AB	良好	にぶい黄褐色 灰黄色	(5.9)	(5.4)			
	30	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	カマド	口縁部1/6	AB	良好	赤褐色 (14.6) (3.9)					
	31	土師器	杯	ヘラナデか。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	口縁部1/6	ABD	良好	にぶい橙色 (14.0) (4.0)					
	32	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		体部上半 1/6	AB	良好	赤褐色 (14.4) (2.7)					
	33	土師器	杯	器面状態不良。赤彩。	器面状態不良。赤彩。		口縁部1/8	E>AB	良好	橙色 にぶい橙色	(11.8) (2.8)				

II 姉崎宮山遺跡

04	34	土師器	高杯	ヘラケズリ(下上)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	杯部下半	AB	良好	橙色 にぶい橙色	(2.3)	
	35	土師器	高杯	柱状部ヘラケズリ(下上)、脚裾部ヨコナデ。赤彩か。	柱状部ヘラナデ(左右)。脚裾部ヨコナデ。	床面	脚部のみ	AB>E	良好	赤橙色	(5.1)	8.4
	36			脚接合部、ヘラ先による粘土のおさえにより波状。胴部横方向ヘラナデ。	ヘラナデ。	覆土	底部のみ	AB>CDE	良好	にぶい橙色 黒褐色	(3.4)	5.6
	38			指ナデ。指頭痕を残す。	ヘラナデ。		脚部のみ	D>AB	良好	にぶい赤褐色 橙色	(2.7)	3.8
06	49	弥生土器	壺	単節斜縄文6段以上。器面状態不良。	器面状態不良。	覆土	口縁部1/3	AB>E	不良	橙色 明赤褐色	(15.96) (8.4)	
	50	弥生土器	椀	複合部ヘラナデないしはミガキ。複合部下端縄文原体による押捺。口唇部単節斜縄文。赤彩。	ミガキ。赤彩。2個1対の小孔。	床面	体部上半 1/4	ABCD	良好	橙色	(17.15) (7.1)	(17.8)
	51	弥生土器	椀	沈線区画による単節羽状縄文帯。口唇部施文は不明。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土	体部上半 1/6	AB>E	良好	赤褐色	(20.3) (5.2)	
	52	弥生土器	椀	ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。		底部周辺のみ	E>AB	良好	赤褐色	(5.6)	6.4
	53	弥生土器	椀	単節斜縄文2段以上。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土		B>A>E	良好	橙色		
	54	弥生土器	壺	結節文3段以上。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。平滑。			AE	良好	赤褐色 にぶい橙色		
	55	弥生土器	甕	粘土紐による多段。横方向のヘラナデ。	器面状態不良。	覆土		B>AD>E	良好	橙色		
07	58	弥生土器	甕	ヘラナデ(右左)。	ヘラナデ(右左)。	床面	胴部上半1/3、 口縁部欠	D>B>AC	良好	にぶい橙色	(10.1)	
	59			ミガキ状のヘラナデ。上下逆になる可能性。	ヘラナデ、ヨコナデ。		体部上半 2/3欠	A	良好	にぶい黄褐色	(6.0) 5.9	4.1
	60			幅広の粘土板1枚ないしは2枚を巻き合わせて成形。ヘラナデか。平滑。	ヘラないしは指ナデ。		脚台部2/3	A	良好	にぶい赤褐色	(3.8)	8.6
	61	弥生土器	壺	単節斜縄文を地文とする帯縄文、鋸歯文帯。無文区ミガキ、赤彩。	器面状態不良。	床面		AB	良好	橙色 浅黄色		
	62	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。口頸部粘土紐による多段。ヘラナデ。	ヘラナデ。			AE	良好	橙色 にぶい黄褐色		

II 姉崎宮山遺跡

遺構 番号	埋図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容量A 容量B
07	63	弥生土器	甕	粘土紐による多段。横方向のヘラナデ。	横方向のヘラナデ。	覆土		A>B>CD	良好	にぶい黄褐色			
	64	弥生土器	椀	口唇部、口縁部単節斜縄文。沈線による区画。	ミガキ。赤彩。			④	良好	浅黄色 橙色			
	65	弥生土器	壺	単節斜縄文を地文とし、沈線による格子文、菱形連結文。	器面状態不良。			ABC	良好	明黄褐色			
	83	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文1段。ヘラによる押捺。	ミガキ。赤彩。	P ₈₃		④>B	良好	にぶい橙色			
	84	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文。ヘラ先による押捺。複合部を除き赤彩。	ミガキ。赤彩。			AC>E	良好	にぶい橙色 赤色			
12	85	弥生土器	壺	単節羽状縄文。縄文原体による押捺。	ミガキ。赤彩。			ABCD	良好	浅黄褐色			
	86	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文1段。棒状工具による押捺。	ミガキ。赤彩。	P ₈₆		④>CDE	良好	にぶい橙色			
	87	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文2段。縄文原体による押捺。	ミガキ。赤彩。			⑥>A	良好	赤褐色			
	88	弥生土器	壺	複合部竹管による刺突文、下端押捺。器面状態不良。	ミガキ。赤彩。			④>BE	良好	黄褐色 赤褐色			
	89	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文。縄文原体による押捺。複合部を除き赤彩。	ミガキ。赤彩。			C>AB	良好	にぶい橙色			
	90	弥生土器	壺	単節斜縄文3段以上。沈線による区画。器面状態不良。	器面状態不良。			C>BD>A	良好	橙色			
	91	弥生土器	壺	単節斜縄文2段。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	横方向のヘラナデ。上半部赤彩。			AB	良好	にぶい褐色 橙色			
	92	弥生土器	壺	単節斜縄文1段以上。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	器面状態不良。			④>BCD	良好	橙色 黄色			
	93	弥生土器	壺	単節斜縄文3段以上。沈線による区画。下に鋸歯文帯。器面状態不良。	ヘラナデ。			B>AD>C	良好	明赤褐色			
	94	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。沈線による区画。無文区赤彩。	器面状態不良。			④>BCD	良好	にぶい橙色 浅黄色			

Ⅱ 姉崎岡山遺跡

95	弥生土器	壺	単節斜縄文3段以上。沈線による区画。器面状態不良。					B>A C D	良好	橙色 浅黄色		
96	弥生土器	壺	網目状燃糸文。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。				ヘラナデ。	A E	良好	にぶい橙色 橙色		
97	弥生土器	壺	網目状燃糸文。				ヘラナデ。	A E	良好	浅黄橙色		
98	弥生土器	壺	結節文2段以上。器面状態不良。赤彩か。				ヘラナデ。平滑。	A>B	良好	橙色		
99	弥生土器	壺	単節斜縄文。結節文による区画。無文区ミガキ、赤彩。				ヘラナデ。	A B E	良好	明黄橙色 にぶい橙色		
100	弥生土器	壺	胴部上半有段か。有段部に押捺文。沈線による山形文。ヘラナデ。				ヘラナデ。	D>A B	良好	にぶい黄橙色 にぶい橙色		
101	弥生土器	壺	単節斜縄文を地文とする。沈線区画による鋸歯文帯。無文区ミガキ、赤彩。				器面状態不良。	A>B D	良好	橙色 浅黄橙色		
102	弥生土器	壺	単節羽状縄文、沈線区画による鋸歯文帯。無文区赤彩。器面状態不良。				器面状態不良。	④	良好	橙色		
103	弥生土器	壺	単節斜縄文を地文とする沈線区画による鋸歯文帯。無文区ミガキ、赤彩。				器面状態不良。	A>B D	良好	橙色 黄橙色		
104	弥生土器	壺	単節斜縄文を地文とする沈線区画による鋸歯文帯。無文区ミガキか?。				ヘラナデ。	A B>D	良好	明赤褐色		
105	弥生土器	壺	単節斜縄文。沈線区画による鋸歯文帯。無文区ヘラナデ、赤彩。				ヘラナデ。	A D>B	良好	橙色 にぶい橙色		
106	弥生土器	甕	口唇部押捺。頸部有段。横方向のヘラナデ。				横方向のヘラナデ。	C>B D	良好	にぶい橙色		
107	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。粘土紐による多段。指頭痕を残す。				横方向のヘラナデ。	A	良好	にぶい黄橙色		
108	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。頸部多段か。ヘラナデ。				ヘラナデ。	A E	良好	灰褐色 にぶい橙色		
109	弥生土器	甕	胴部粘土紐による多段。ヘラナデにより指頭痕はめだたない。				横方向ヘラナデ。	A B E	良好	灰黄褐色 にぶい橙色		
110	弥生土器	甕	胴部有段。縄文原体による押捺。横方向のヘラナデ。				横方向のヘラナデ。	A B>E	良好	にぶい黄橙色 にぶい橙色		

II 姉崎宮山遺跡

遺構 番号	棟図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容 量 A 容 量 B
13	111	弥生土器		単節斜縄文2段以上。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			B>ACD	良好	橙色 黒褐色			
	112	弥生土器	碗	単節斜縄文、結節文。沈線による区画。口唇部単節斜縄文。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。			AB	良好	橙色 赤色			
	113	弥生土器	碗	単節斜縄文3段。沈線による区画。無文区ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。			④	良好	にぶい橙色 赤色			
	114	弥生土器	碗	口唇部、口縁部単節斜縄文。	ミガキ。赤彩。			A	良好	にぶい黄褐色 赤褐色			
	115	弥生土器	碗	結節文6段。沈線による区画。口唇部施文不明。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。			ACE>B	良好	明黄褐色 褐色			
12	116	弥生土器	甕	口唇部押捺。2方向か。口縁部幅広いの粘土紐による有段。ヘラナデ。	ヘラナデののち、頸部にハケ(7/1cm)(右左)。		口縁部1/8	AB>D	良好	灰黄褐色 にぶい橙色	(20.4) (4.5)		
	117	弥生土器	高杯	体部ミガキ。突帯に刻目。施文具は縄文原体か。赤彩。	杯部ミガキ。赤彩。		脚接合部のみ	AB	良好	赤褐色	(2.8)		
	118	土師器	壺	複合部ハケののち粗いミガキ。口縁部ミガキ。	ミガキ。		口縁部1/6	ABE	良好	にぶい橙色	(14.4) (2.9)		
12	119	土師器	埴	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/6	B>AC>E	良好	にぶい赤褐色	(10.2) (4.2)		
	120	土師器	埴	ハケ(下上)ののちヨコナデ。	ハケ(右左)ののちヨコナデ。		口縁部1/4	AE	良好	にぶい橙色 灰黄褐色	(9.7) (3.1)		
	121	土師器	高杯	器面状態不良。	横方向のハケ。器面状態不良。		杯部1/5	⑤	良好	橙色	(16.2) (4.0)		
8	122	土師器	高杯	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。		脚縁部1/6	A>E	良好	赤褐色 にぶい橙色	(1.2) (16.4)		
	123	土師器	高杯	ハケ(12/1cm)。脚接合部より上下に施す。	杯部ミガキ。脚部ナデ。		脚部上半のみ	AE	良好	褐色 黒褐色	(4.7)		
	124	土師器	高杯	ミガキ状のヘラナデ。	ヘラないし指ナデ。		脚柱状部1/3	AB	良好	にぶい橙色 灰褐色	(6.8)		
	125	土師器	甕	ハケ。S字状口縁台付甕、搬入品。	ヘラナデ。			BD>A	良好	浅黄褐色 灰白色			

12	127	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。体部ヘラ先によるナデ(下上)。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(右左)。		胴部上半 1/4	AB>E	良好	橙色 にぶい橙色	(18.6) (6.1)	
	128	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部器面状態不良。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部強いミガキ状(下上)。	P ₇₇	胴部上半 1/2	AB>Ⓔ	良好	にぶい橙色 にぶい黄橙色	(17.2) (17.1)	27.1
	129	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(下上)。	ヘラナデ、ヨコナデ。胴部一部ミガキ状。		口縁部1/6	AB>CDE	良好	橙色 にぶい橙色	(17.0) (7.7)	
	130	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ(左右)。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(左右)。		胴部上半 1/6	ABE	良好	灰赤色 灰褐色	(16.9) (7.2)	
	131	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/5	AB	良好	灰褐色	(16.0) (4.1)	
	132	土師器	甕	ヘラケズリ。器面状態不良。	ヘラナデ、指ナデ。器面状態不良。		底部完存、胴部下半1/8	A>B>CD	良好	橙色	(10.8)	7.4
	133	土師器	甕	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/4	ABE	良好	橙色	(17.2) (5.1)	
	134	土師器	甕	ヘラケズリ(右左)。底部1方向ヘラケズリ。	ヘラナデ。		底部のみ	A>BE	良好	赤褐色	(1.7)	4.2
	135	土師器	甕	把手指ナデ。ヘラケズリ。	縦方向のミガキ。			AB>CD	良好	橙色		
	136	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		体部1/8	E	良好	橙色	(17.2) (5.1)	(17.8)
	137	土師器	碗	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ。一部ハケ状の条線。ヨコナデ。		体部上半 1/5	B>AE	良好	赤橙色 灰赤色	(14.9) (5.8)	(15.4)
12	138	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	P ₈₇	体部1/4	AB	良好	橙色	(15.05) (5.0)	(15.5) 554
	139	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		口縁部1/8	A	良好	赤橙色 橙色	(14.1) (2.3)	(14.7)
	140	土師器	杯	ヘラケズリ(右左)。口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		体部1/6	Ⓔ>ABC	良好	橙色	(14.1) 4.5	(14.2) 353
	141	土師器	杯	ヘラケズリ(左右)。口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		体部上半 1/6	AB>Ⓔ>CD	良好	赤橙色	(14.5) (3.5)	(15.2)
	142	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。器面状態不良。赤彩。	器面状態不良。赤彩。	P ₇₇	体部上半 1/5	AE	良好	明褐灰色		

遺構 番号	挿図	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径		容量A 容量B
											器	高	
143		土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	器面状態不良。赤彩。		体部上半 1/4	A	不良	赤橙色	(13.1) (3.2)	(14.1)	
144		須恵器	杯	ロクロ調整。底部回転ヘラケズリ。	ロクロ調整。		体部1/6周	A	良好	灰色 にぶい黄橙色	(3.1)	(12.5)	
145		土師器	高杯	ヨコナデ。赤彩。	ヨコナデ。赤彩。		脚接合部 3/4周	ABE	良好	橙色 浅黄橙色	(9.7) (1.7)		
17		土師器	杯	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。	覆土	体部1/6周	AE	良好	橙色	(13.2) 3.7	(5.9)	211
11		土師器	杯	ロクロ調整。	ロクロ調整。	P ₄₅	体部上半 1/4	ABE	良好	にぶい橙色	(12.8) (3.5)		
148		カワラケ	小皿	ロクロ調整。底部回転糸切り。浅いヘラケズリを加える。	ロクロ調整。指ナデを加える。		底部完存、体部1/3周	C>D>AB >E	良好	橙色	(8.6) 1.7	5.1	
149		カワラケ	小皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。底部にゆがみ。	ロクロ調整。		体部1/5	A	良好	橙色	(8.8) 1.9	(7.8)	
17		カワラケ	小皿	ロクロ調整。底部1方向の手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。指ナデを加える。	底面	口縁部一部欠	AC>BDE	良好	にぶい橙色	8.2 1.65	5.9	
151		カワラケ	小皿	ロクロ調整。底部ヘラナデ。	ロクロ調整。指ナデを加える。		体部1/4	A>B	良好	橙色	(8.4) 1.4	(6.7)	
152		カワラケ	小皿	ロクロ調整。	ロクロ調整。		体部1/6周	AB	良好	橙色	(10.2) 1.45	(7.6)	
153		カワラケ	小皿	ロクロ調整。体部下指ナデか。	ロクロ調整。		体部1/6	AE	不良	黄橙色	(8.9) (2.25)		
154		カワラケ	小皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。	P ₇₉	体部1/4周	A>B	良好	明赤褐色	(7.8) (1.5)	(5.7)	
155		カワラケ	高台付 杯	ロクロ調整。	ロクロ調整。		高台部1/6周	B	良好	にぶい橙色 褐色	(1.4)	(5.8)	
156		カワラケ	高台付 杯	ロクロ調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。		高台部1/6周	A	良好	にぶい褐色	(1.3)	(6.15)	
17		カワラケ	皿	ロクロ調整。底部静止糸切り。部分的にヘラナデを加える?。	ロクロ調整。指ナデを加える。	底面	底部のみ	AE	良好	橙色 にぶい橙色	(1.7)	7.5	

Ⅱ 姉崎宮山遺跡

17	158	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り。一部にヘラナデを加える。	ロクロ調整。指ナデを加える。	底面	底部のみ	A > C D	良好	橙色	(1.2)	6.1
	159	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。	P ₇₉	底部2 / 3	A E	不良	橙色	(1.75)	8.2
	160	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。	P ₇₆	底部のみ	⑤ > A B > C D	良好	にぶい橙色 灰褐色	(1.8)	5.9
	161	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。		底部のみ	A B E	良好	浅黄橙色	(1.6)	5.1
	162	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。		底部2 / 3	A	良好	にぶい橙色	(2.2)	6.4
	163	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。		底部のみ	E	良好	橙色 にぶい褐色	(1.2)	5.8
	164	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。		底部1 / 2	A C D E	良好	橙色	(1.3)	7.1
17	165	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。	覆土	底部のみ	A B D	良好	にぶい黄橙色	(1.4)	5.1
	166	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部1方向の手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。	P ₇₆	底部完存	B > A	良好	橙色 にぶい橙色	(1.4)	7.1
	167	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。器面状態不良。	ロクロ調整。器面状態不良。		底部のみ	E > A B C D	不良	橙色	(1.3)	4.7
	168	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。		底部1 / 5	E > A B	良好	橙色	(1.8)	(5.9)
	169	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。		底部のみ	E > A	良好	にぶい橙色 褐色	(1.6)	4.5
	170	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部回転糸切り無調整。	ロクロ調整。		底部のみ	A B	良好	明褐灰色	(2.05)	4.0
	171	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部静止糸切り無調整。	ロクロ調整。指ナデを加える。	P ₇₉	底部1 / 2	A D > C	良好	橙色	(1.4)	6.6
17	172	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部静止糸切りののち手持ちヘラケズリを加える。	ロクロ調整。指ナデを加える。	覆土	底部のみ	E	良好	灰黄褐色 黄褐色	(1.3)	5.8
17	173	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部1方向の手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。	覆土	底部1 / 3	A B	良好	黄褐色	(0.9)	(6.8)
17	174	カワラケ	皿	ロクロ調整。底部1方向の手持ちヘラケズリ。	ロクロ調整。指ナデを加える。	覆土	底部1 / 2	C B > A D > E	良好	黄褐色 橙色	(1.3)	7.2

Ⅲ 小田部向原遺跡

1 調査の概要

「小田部向原遺跡」は、以前「小田部古墳」⁽¹⁾として発掘調査が実施された部分、その下層および周辺部を含む地区を対象とし、新たに小字名を付し遺跡名としたものである。1968年に実施された「小田部古墳」(本調査における01号遺構)の調査は、送電線鉄塔にともなう部分的なものであり、また当時の状況からトレンチによる調査であったため、今回不十分ではあるが再調査を実施している。

小田部向原遺跡は、市原市小田部115-5番地ほかに所在する。調査は、現地の造成工事が行われてしまったため、急遽実施されることとなった。調査開始時、遺存していた「小田部古墳」残丘部(pl. 13)はすでに削平され、西側斜面部はロームが露呈している状態であった(pl. 16)。また、黒色土を掘り上げ、伐採した樹木を埋め込むためか、とくに01号遺構周辺から東側は大きく攪乱されていた。

調査対象面積は5,500㎡であり、まず、このうち10%に対して確認調査を実施した。その結果を受け本調査を実施することとなったが、予算的に限られた状況にあり、また、東側台地平坦部については表土層も厚く、牧草地としての利用が現状において可能であると判断されたことから、西側斜面部分2,100㎡のみを拡張し、さらにグリッド15列(fig. 29・30)まで、1,450㎡について本調査を完了することとなった。このため、01号遺構については、当初の意図とはことなり、部分的な調査に止めざるをえなかった。確認調査部分を含めた調査面積は2,550㎡である。

検出された遺構は、墳丘墓周溝1基、堅穴住居跡30軒(建替えを含めた総数で33軒)、このうち17軒(建替えを含めた総数で20軒)について本調査を実施した。他に土坑1基である。なお、調査区南側に隣接し、市遺跡分布地図にも古墳として記載されている墳丘状の高まり(fig. 29網部分)が認められたが、今回周溝を検出することはできなかった。また、fig. 30攪乱部については、一部を除き掘り上げることができなかった。

遺構番号については、調査段階のものをそのまま使用している。また、調査グリッド南北は、真北に対して8° 11' 08"東に振れている。

2 01号遺構(小田部墳丘墓)

遺構(fig. 31・32・33・34・35)

1968年「小田部古墳」として調査されたものにあたる。今回の調査では、円形に圍繞する周溝とその開口部(突出部)を検出した。ただし発掘調査に先行して着手された造成作業により、部分によっては壊滅的に破壊されている。遺存部分から判断すると、黒色土を掘り上げたためか、とくに開口部周辺はほぼ周溝底面レベルにそってバックホウで削平されており、細部における形状を復原することはいえない。なお、前述したように部分的な調査であったため、その調査範囲および攪乱状況についてfig. 33に図示しておく。

周溝は、ほぼ正円形に円丘部を圍繞し、確認面周溝外径27.48m、内径で21.52~20.92m、周溝底面内径で21.96mを測る。周溝断面形状は、逆台形を呈し、やや外側の立ち上がりの傾斜が急になる傾向が認められる。周溝は、断面d-d' (b-b')を基準とした場合確認面幅4.25m、底面幅2.8m、現

Ⅲ 小田部向原遺跡

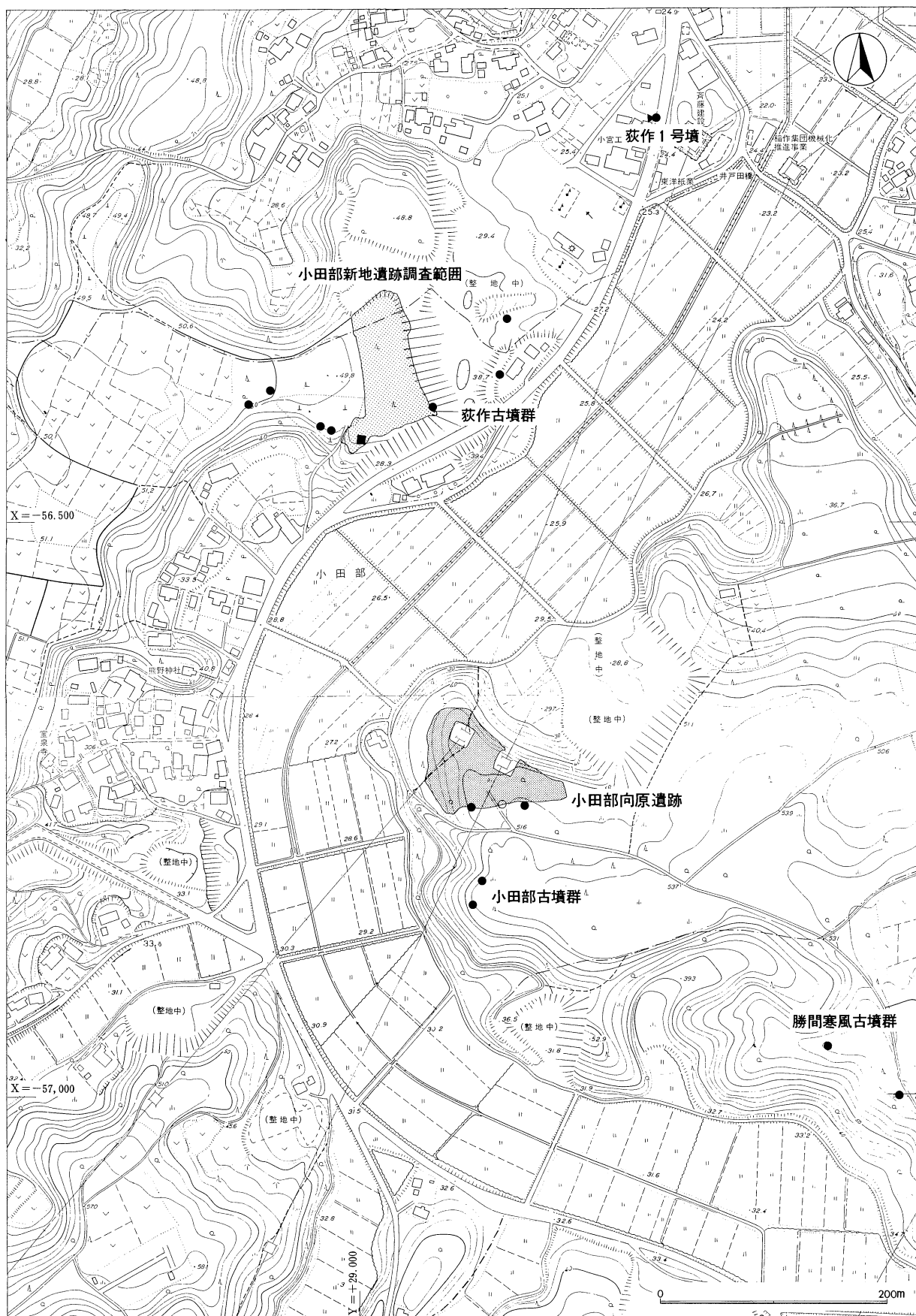


fig.28 小田部向原遺跡周辺地形図(1/5,000)

(1980年測図 市原市地形図D-6、E-6より)

Ⅲ 小田部向原遺跡

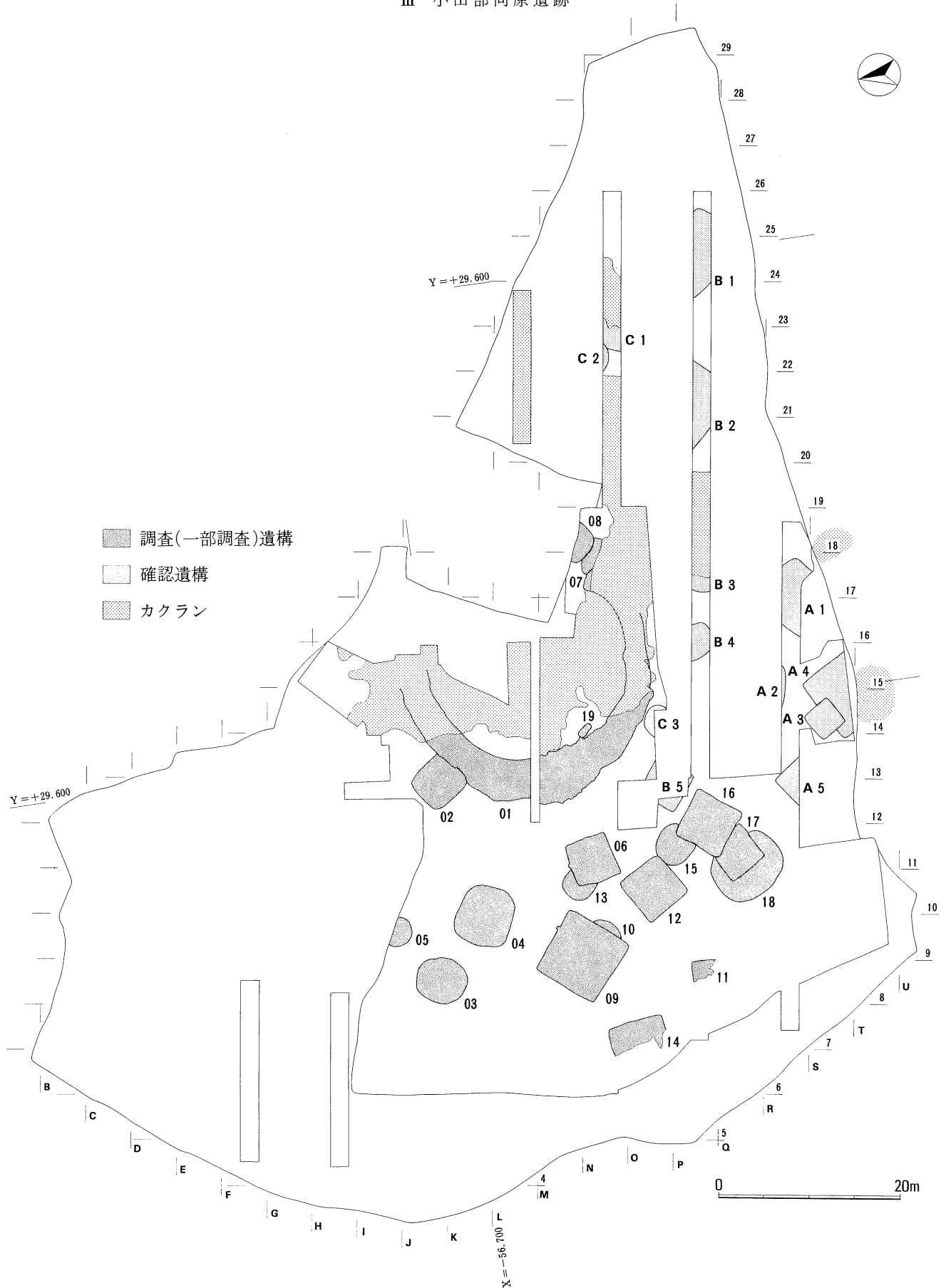


fig.29 小田部向原遺跡全体図(1/600)



fig.30 小田部向原遺跡主要部全体図(1 /300)

Ⅲ 小田部向原遺跡

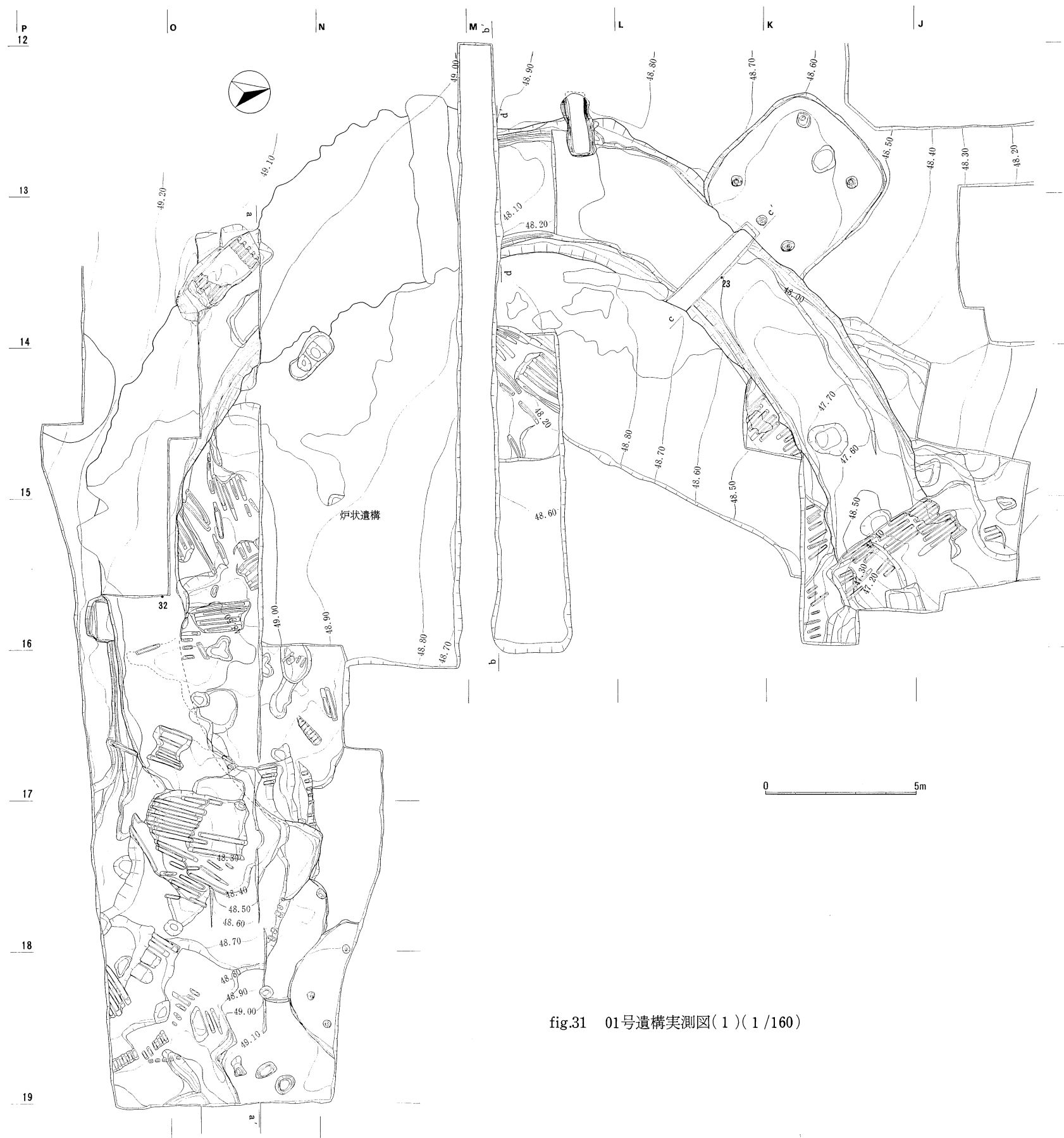


fig.31 01号遺構実測図(1)(1/160)

Ⅲ 小田部向原遺跡

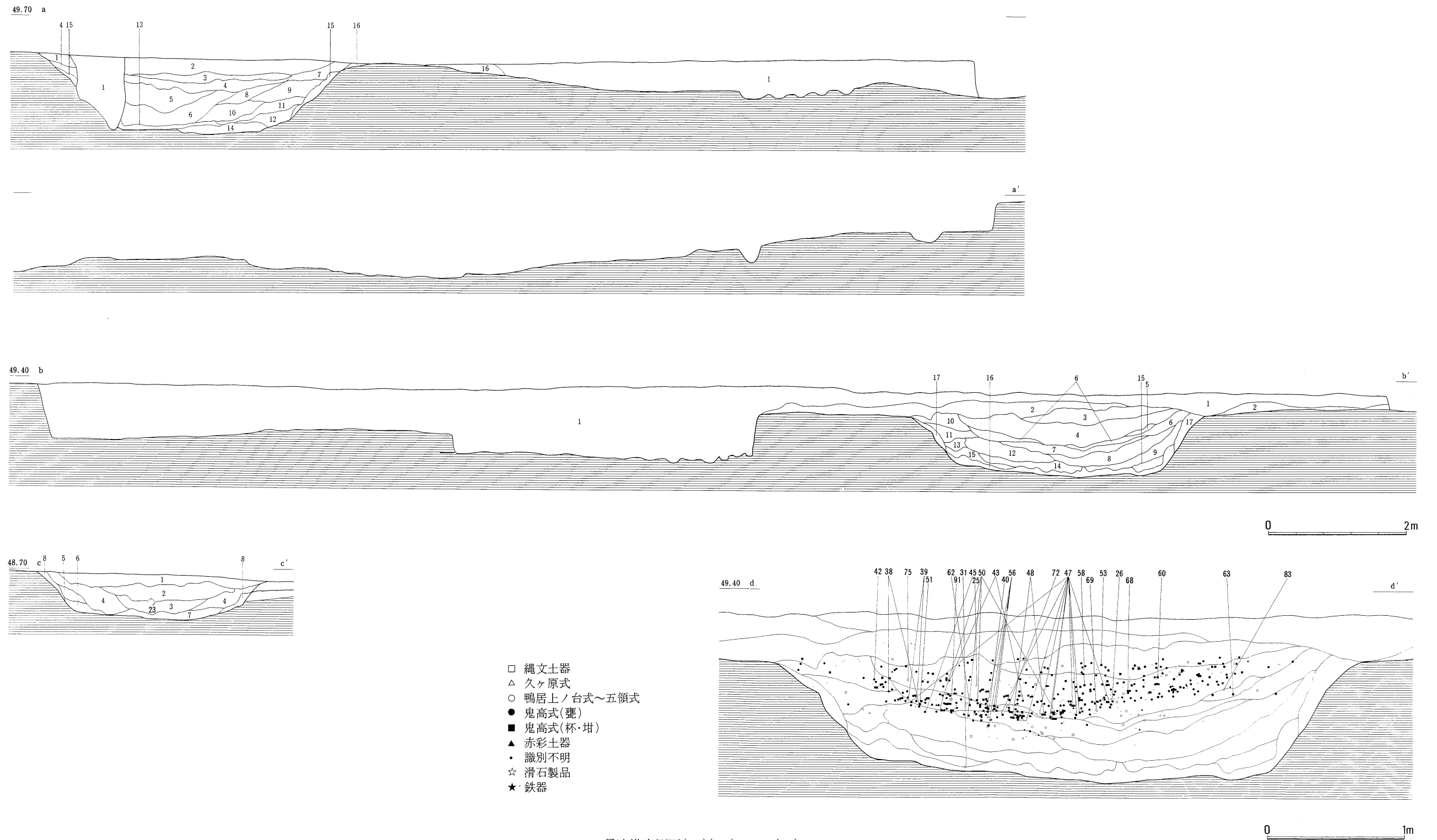


fig.32 01号遺構実測図(2)(1/60、1/30)

表土からの深さ1.20m、確認面からの深さ0.91m、断面c-c' を基準とした場合確認面幅3.37m、底面幅2.4m、確認面からの深さ0.64m、また、開口部側底面遺存部分で幅2.14mを測る。現状で確認できる範囲内では、一定の傾向をもった溝幅の振幅は明確ではない。底面レベルの絶対高は、開口部周溝端部で48.53m、南溝現存部で48.51m、断面a-a' 部分で48.02m、断面d-d' (b-b') で48.05m、北溝現存部で47.45mであり、北方向へ向って約1mの傾斜をもつ。これは地形自体の傾斜に沿うものといえよう。ただし、現状の等高線によるならば周溝先端部が深くなる傾向が認められる。fig. 31の等高線は当然本来の形状にそうものではないが、参考のため図示しておく。バックホウによる削平は、底面が遺存している部分と段差がなく、ほぼ同レベルで削っており、おそらく黒色土を掘り上げることを意図したと考えることができる。したがって、現状も、本来の形状に対して若干の参考にはなるものと考えている。なお、竪穴住居跡02号遺構側周溝底面外周は若干テラス状の段差をもつ。また、土坑状の落ち込みが北側溝底面中央および断面a-a' 部分で確認された。北溝部分の土坑は、平面規模1.28×0.98m、底面からの深さ約12cmを測る。ただし、攪乱が底面近くまでおよんでいることから、その帰属は不明。断面a-a' 部分は、底面からの深さ約15cmを測る。断面の観察によるかぎり、木棺痕跡は認められず、周溝埋没段階の新たな掘り込みとも判断しなかった。

周溝断面は土層は、断面a-a' 1層は攪乱層、16層はソフトローム地山層、4・6・8層は黒褐色土層、2・3・5・7・9・11・12層は明黒褐色土層、10・13・14・15層は暗褐色土層であり、人為的な埋め戻しは認めにくい。このうち4層が最も暗色を呈し、多量のスコリアを混合する。その上層2・3層も全体に粒子が粗い。13・14層はハードロームを多量に混合し、墳丘築成当初の崩落土と考えられる。これに後出し、墳丘側からの埋没が認められるが、とくに10層は、多量のローム粒、ロームブロックを含む。墳丘土の崩落によるものと考えることができる。3・4層から、多量の鬼高式土器が出土している。断面b-b' 1層は調査前の整地作業による攪乱層である。トレンチ東端部分は、円丘部中央にあたるが、完全に掘りきることができなかった。ただし、部分的な試掘による限りでは、トレンチ中央とはほぼ同レベルまで攪乱されている。2層は、整地作業に先行する表土層である。3・4・6・7・9・15層は黒褐色土層、8・10・11・14層は明黒褐色土層、12・16・17層は暗褐色土層、13層は黄褐色土層、5層は焼土層であり、基本的に自然堆積によると考えられる。このうち7・15層が最も暗色を呈し、7層は多量のスコリアを混合する。これに対して15層は緻密な均質土である。16層はハードロームを多量に混合し、墳丘築成当初の崩落土と考えられる。断面a-a' と比較すると、墳丘側からの埋没は弱い。ただし11層はハードロームブロックを多量に混合し、また11・12・14層はローム粒を主体として粒状である。遺物は、とくに4・5・6・10層より多量の鬼高式土器、滑石製品2点、鉄製品1点が出土している。fig. 32断面d-d' は、遺物の出土層位を示したものであり、周溝の埋没過程をおおよそ把握することが可能であろう。7・12層以下からは、基本的に鬼高式は出土していない。なお5層は焼土混合土であるが、明確な火床面は認められなかった。断面c-c' 1・2・7層は黒褐色土層、3・4・6層は明黒褐色土層、5・8層は暗褐色土層であり、基本的に自然堆積によると判断される。このうち2層が最も暗色を呈し、多量のスコリアを混合する。墳丘土の流れ込みはかならずしも明確ではないが、5・6層は他層に比較してロームブロックを多量に混合する。

各断面の対応関係は、断面a-a' の4層、断面b-b' 7層、断面c-c' 2層がKey層になるものと考えられ、断面a-a' 、断面b-b' トレンチにおける土器の出土状態もこれを傍証する。

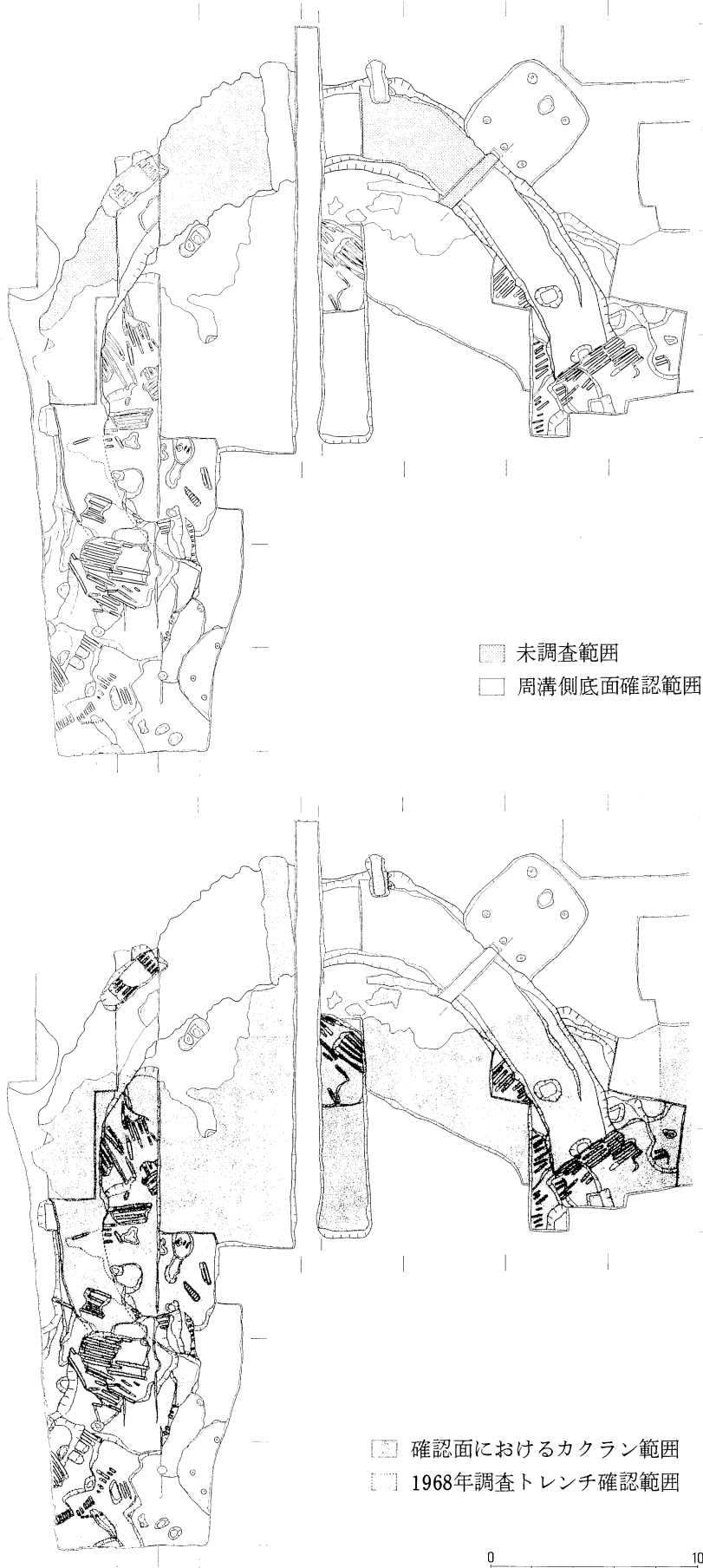


fig.33 01号遺構検出状況(1/320)

開口部は、送電線鉄塔下部、
 竪穴住居跡07・08号遺構検出
 部でソフトロームが遺存し、
 周溝延長部分より周溝端と考
 えられる立ち上がりを確認す
 ることができたため、ここを
 開口部と判断することができ
 た。しかし、全体の形状につ
 いて、ここから屈曲して突出
 部を形成・区画するものかど
 うかなど、細部については判
 断すべき根拠に乏しい。仮に
 前述したように削平が周溝に
 そって行われたものとするな
 らば、削平部が開口部から南
 南東方向へ連続することから、
 突出部を構成する溝が存在し
 た可能性も考えられる。fig.
 31等高線をみると、円丘部周
 溝については、攪乱部もこれ
 とほぼ同幅ないしはやや肥厚
 してで連続する等高線が認め
 られる(48.50m)。周溝は端
 部でいったん完結し、突出部
 を区画する施設が仮に存在し
 たとしても、そこから浅い溝
 が接続すると考えておきたい。
 おそらく、送電線鉄塔下部の
 方が遺存している可能性が高
 いと思われ、今後に課題を残
 しておきたい。

fig. 35は、千葉県におけ
 る円丘系墳丘墓を各報告から
 引用したものであるが、小田
 部墳丘墓01号遺構は、円丘部
 周溝がいったん完結する神門
 3・5号墓に類似点を求めて

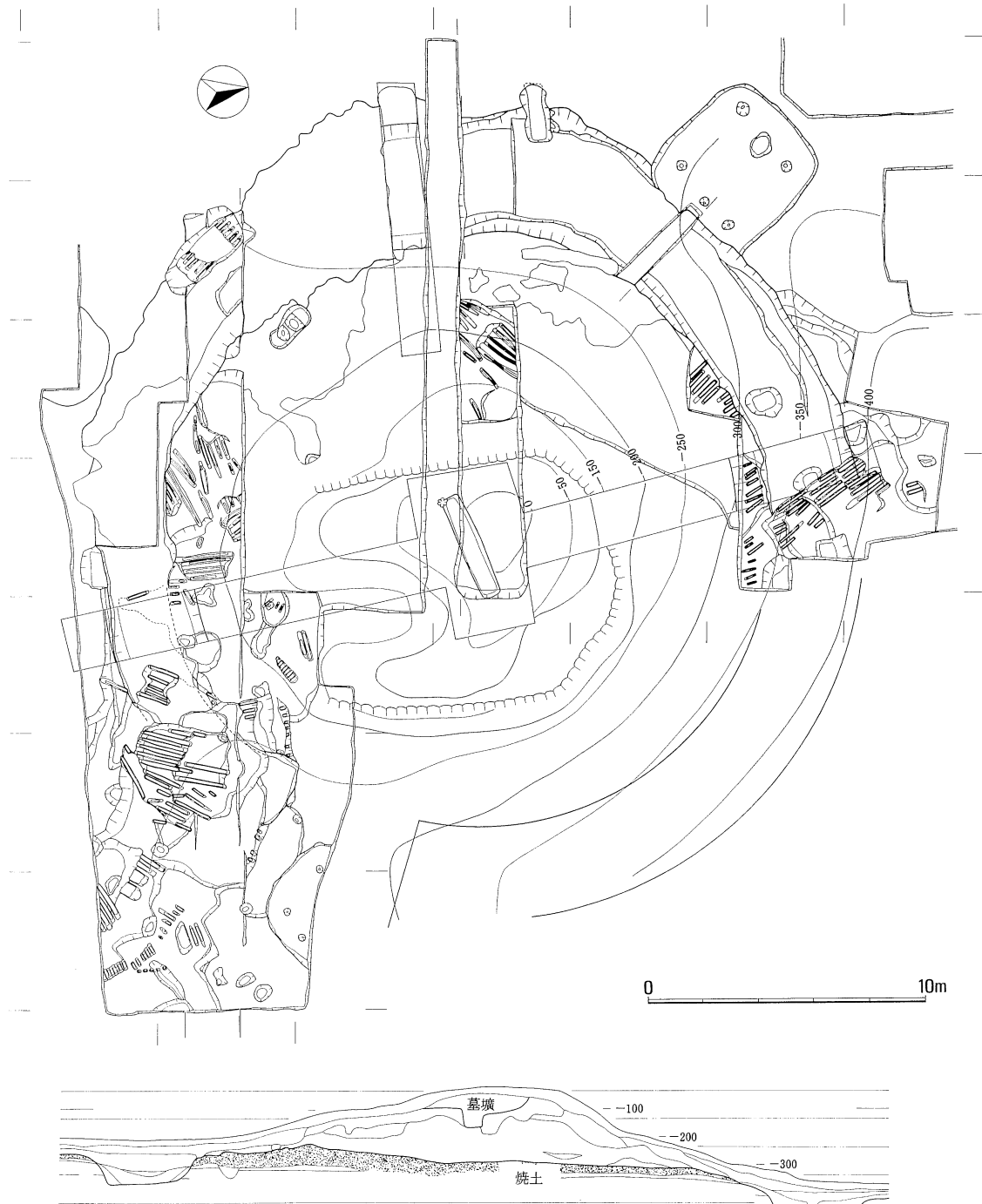
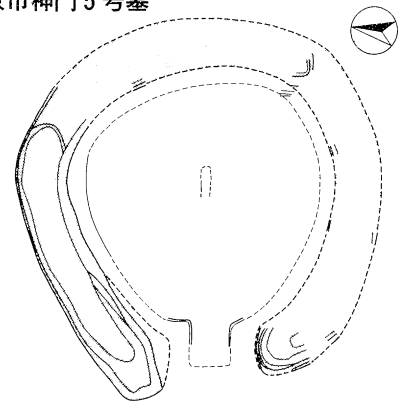


fig.34 01号遺構復原想定図(1/120)

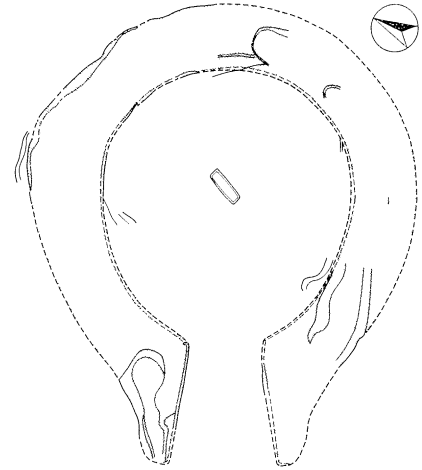
おきたい。ただし、墳丘規模は、小田部墳丘墓が下底径21.96m、外径で27.48mであるのに対して、神門3号墓下底径32~33m⁽²⁾、神門4号墓が30~34m⁽³⁾、神門5号墓が34m⁽⁴⁾であり、約1/3にすぎない。また周溝幅比も狭い。なお、開口部分周溝先端は、確認面において妥当と判断したが、その範囲も限られており、絶対的なものではない。前述したように、円丘部を正円形としたが、開口部反対西側周溝部に若干の頂部が認められることもあり、周溝端部の位置しだいでは、主軸方向にやや長い楕円形になる可能性もある。

fig. 34は、1968年の調査との対応関係を示したものである。今回調査において、当時の東西トレンチを確認することができたため、これを根拠として報告書掲載図面より合成した。1968年の調査結

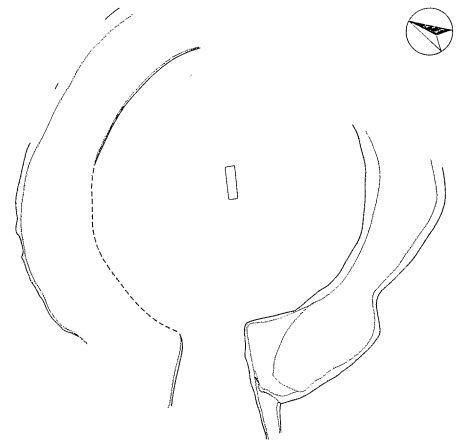
市原市神門5号墓



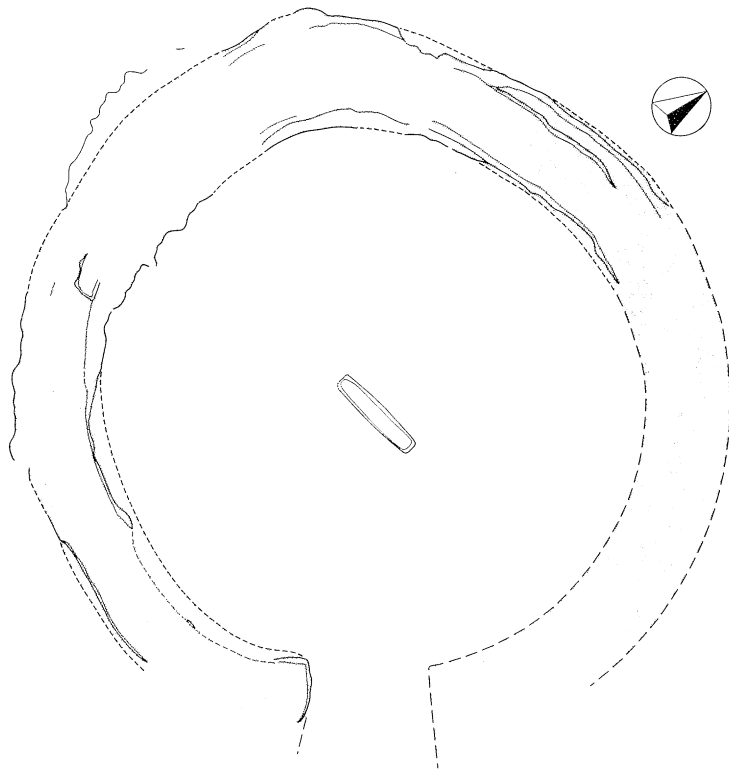
市原市神門4号墓



市原市神門3号墓



0 30m



0 10m

袖ヶ浦町滝ノ口向台8号墓



fig.35 千葉県のパ丘系墳丘墓(1/300、1/900)

Ⅲ 小田部向原遺跡

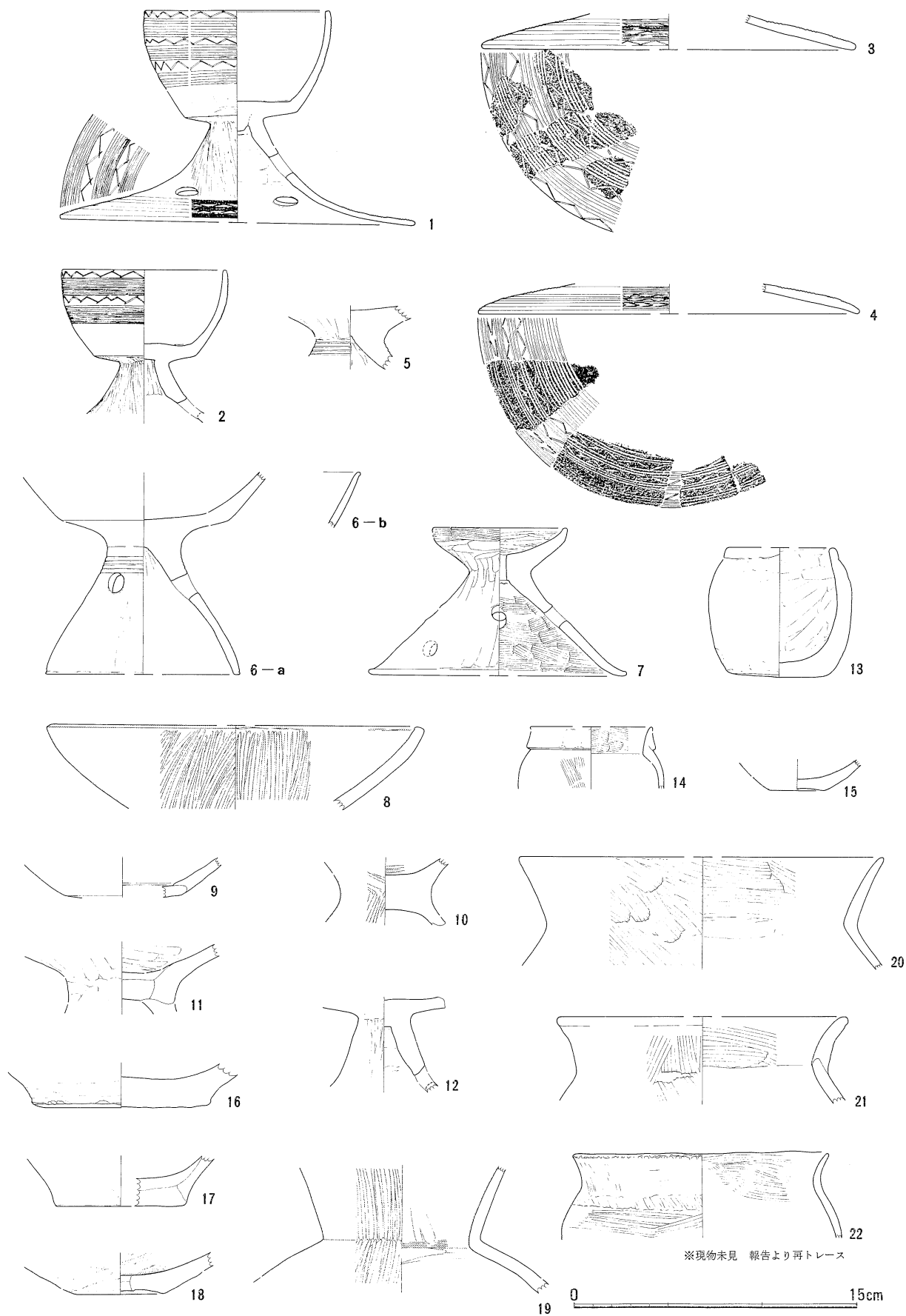


fig.36 1968年調査出土遺物実測図(1 / 3)

Ⅲ 小田部向原遺跡

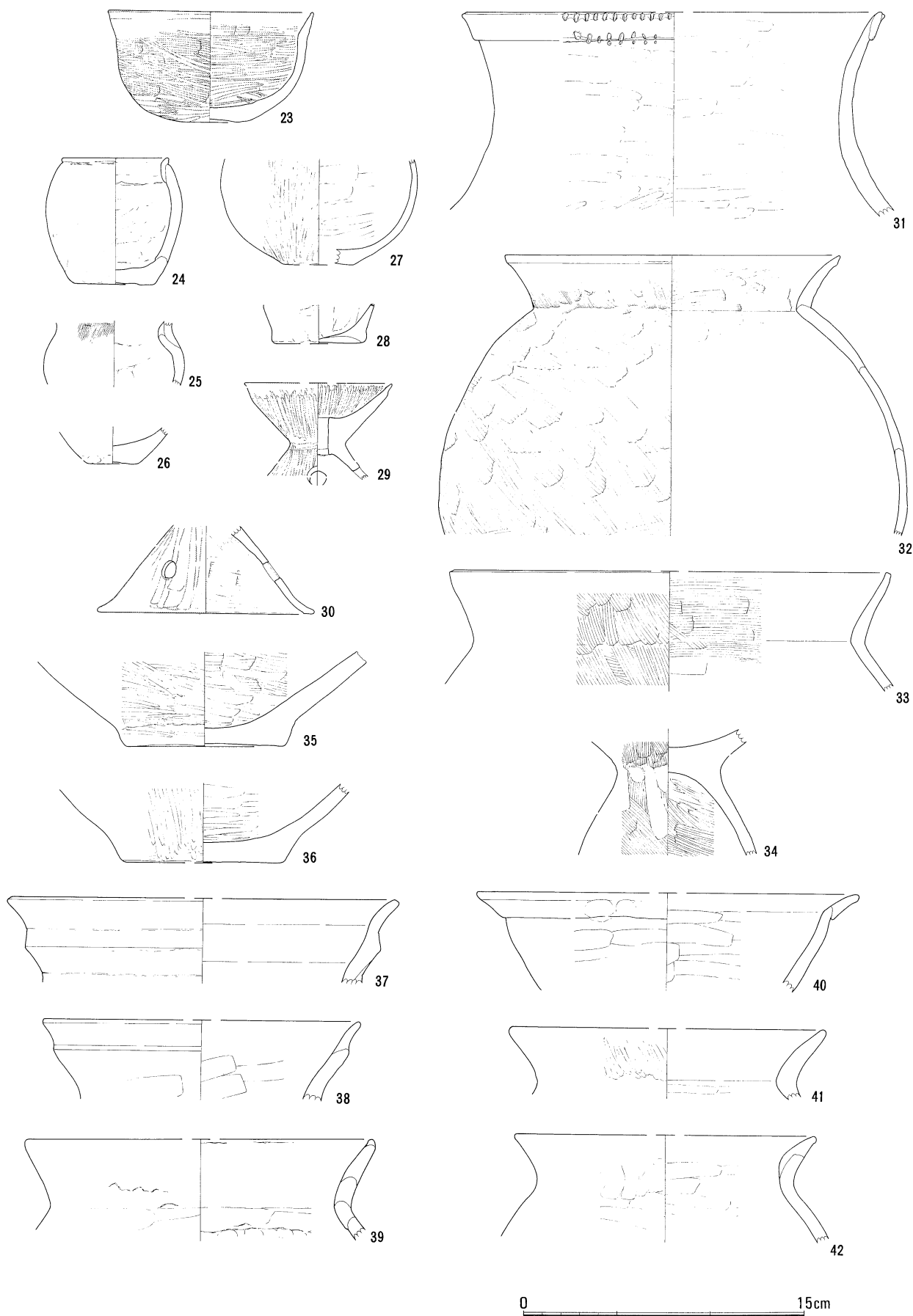


fig.37 01号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)

Ⅲ 小田部向原遺跡

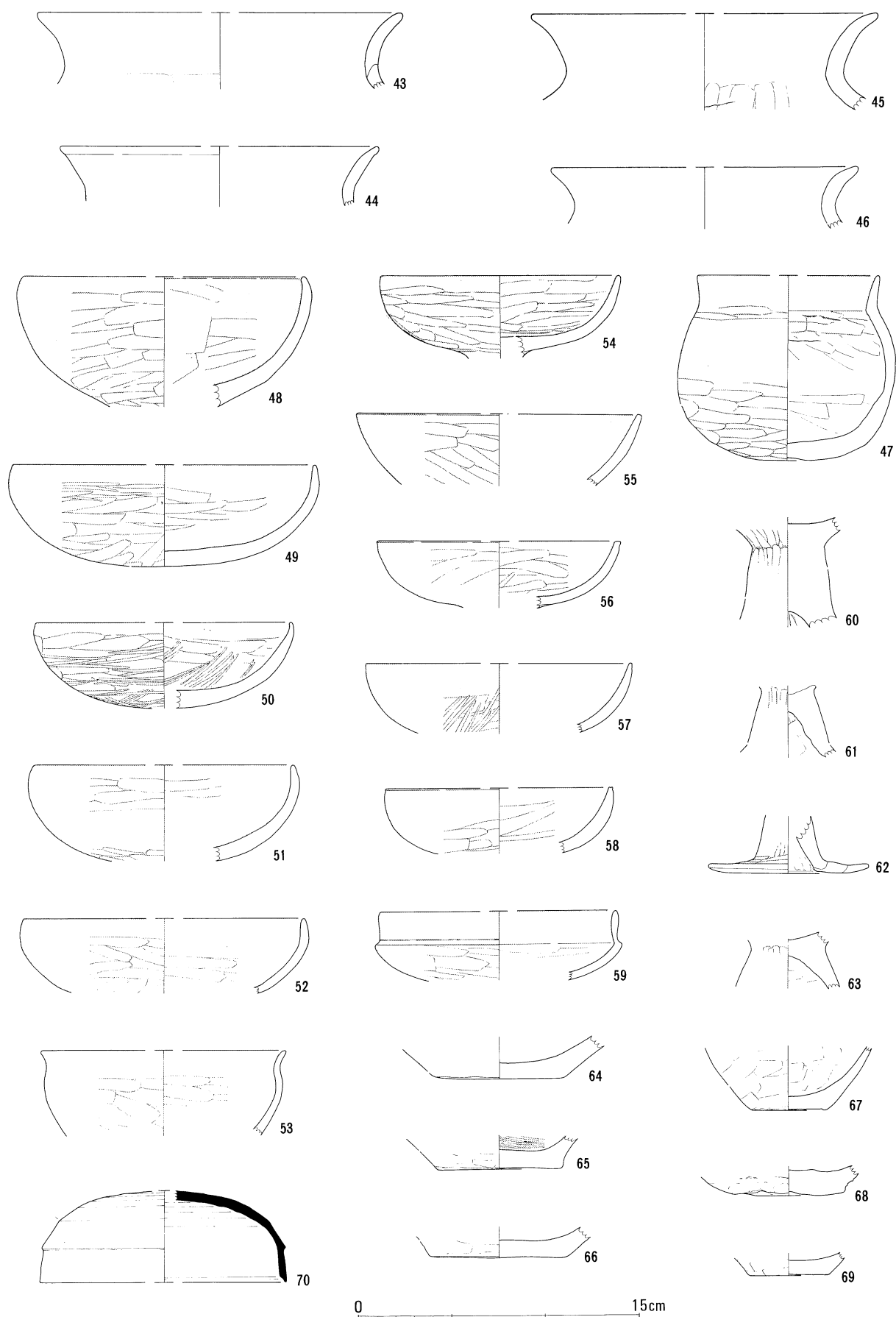


fig.38 01号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)

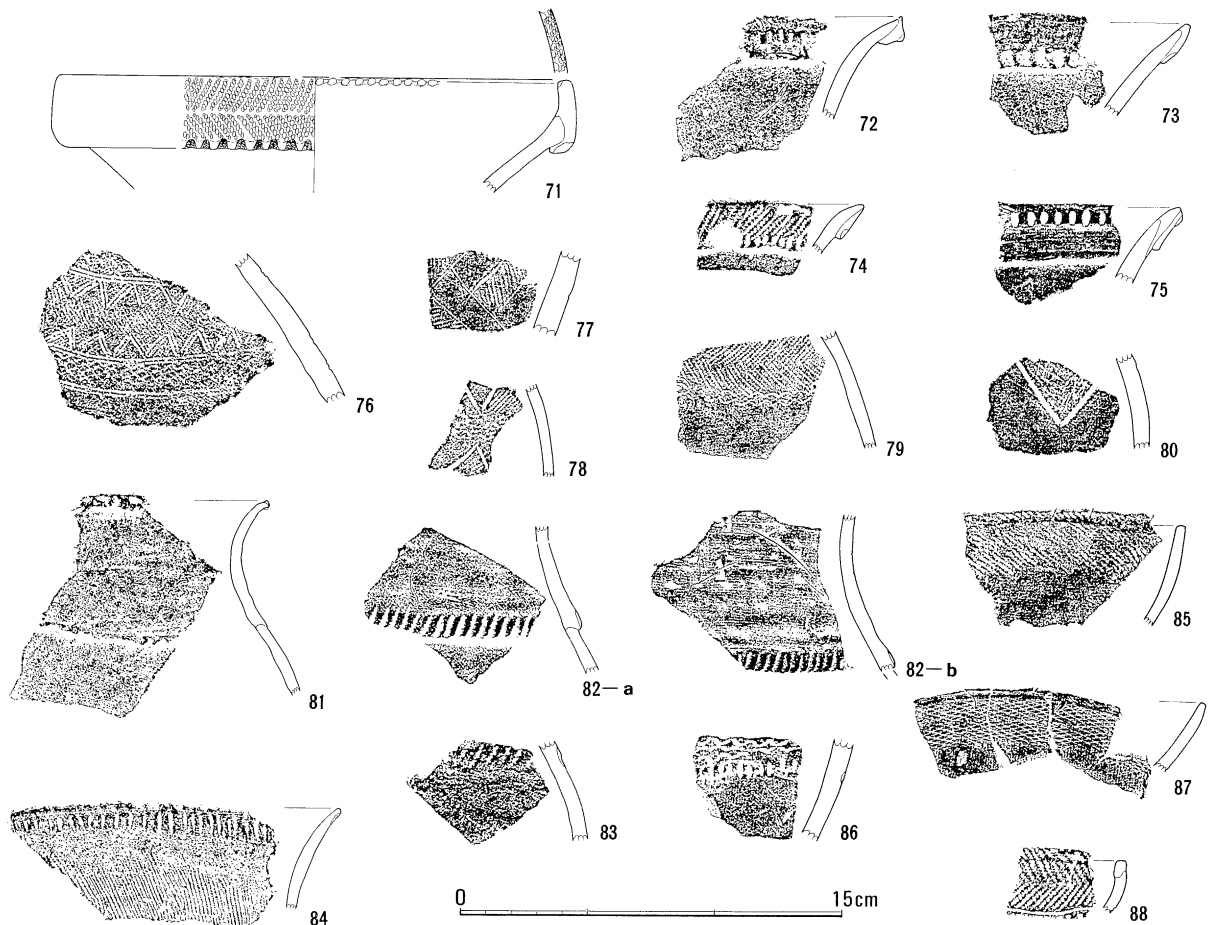


fig.39 01号遺構出土遺物実測図(3)(1/3)

果から補足すると、墳丘は、旧表土から約1.6m、互層に積み上げることなく、ローム系同質土によって盛土される。南北トレンチ北周溝底面から墳丘頂部までは、約5.5mを測る。主体部は、墳丘のほぼ中央に位置し、全長3.9m、中央部幅0.56mの平面長方形、横断面逆梯形の箱形状の土坑であり、木棺痕跡は検出されていない。玉類の分布、および底面の傾斜から東頭位と推定され、報告による主軸方位はN-82°-Eである。ただし、今回の復原図によると、真北N-84°-Eとなる。なお、当時の地形図においても、袖ヶ浦町滝ノ口向台8号墓⁽⁵⁾に明瞭にみることができる、突出部に対応する等高線の変化は認められない。

01号遺構は、堅穴住居跡02・07・08号遺構と切り合い関係をもち、02・07号遺構と直接周溝が重複する。本遺構がこれを切っている。08号遺構断面土層(fig. 48)3～8層は、ロームブロックを多量に混合し、01号遺構にともなう墳丘土ないしは埋め戻し土である可能性が考えられる。床面からは間層を挟み、遺構自体は01号遺構と直接関連しないが、埋め戻し土と考えた場合、01号遺構と時期的に近接する。

なお、円丘部南西よりにおいて、若干の掘り込みをともなう炉状の施設が検出されている。おそらく01号遺構に先行する堅穴住居跡が存在したものと推測される。

出土遺物(fig. 36・37・38・39・40)

1968年調査において、主体部土坑より管玉3点、ガラス小玉218点以上、ガラス丸玉64点以上、ガラス玉計約300点が出土している。ガラス玉は、前報告計測表による数値は、ガラス小玉215点、ガラ

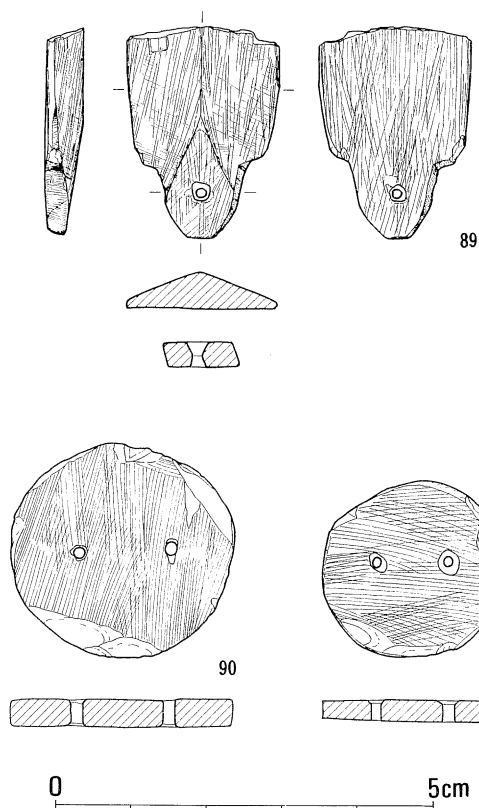


fig.40 01号遺構出土遺物実測図(4)(1/1)

出土したものであり、とくに9・22については、編年的に対応する可能性が高い。5・11・14・15・18・19・20は南側トレンチ周溝覆土、13が南側トレンチ周溝底面近く、7は西側トレンチ周溝底面近く、10が西側トレンチ周溝覆土、21が墳頂部と西側トレンチ周溝から出土したものである。なお、土器の注記によるならば3は西側トレンチ周溝から出土したとされる。

fig. 37~40は、今回の調査において出土したものである。このうち、25・26・31・38~40・42・43・45・47・48・50・51・53・55・56・58・60・62・63・68・69・75・83は、断面d-d' トレンチ周溝より出土したものであり、その層位はfig. 32に図示した。このうち31は、周溝底面近くから出土している。28・33・35・37・41・44・46・49・52・54・59・61・64~67・70・72~74・76・78・80~82・84~89は、断面a-a' トレンチ西側周溝より出土したものである。24・27・29・30・32・36・57・71・76・77・79は、開口部側拡張部より出土したものであるが、その大半は攪乱部であり、本来周溝内にあったものとは断定できない。このうち、32は周溝覆土確認面直下より出土したものであり、fig. 31にその位置を示してある。また、23・34は断面c-c' から北側周溝から出土したものであり、23についてはfig. 31・32に出土位置を示してある。また、89は断面a-a' トレンチ西側周溝より、90・91は断面d-d' トレンチ周溝より出土したものである。なお、fig. 32断面d-d' 図に鉄製品の出土位置を示してあるが、これは棒状の小片であり、実

tab.8 「小田部古墳」(01号遺構)出土管玉一覧表

(g, mm)

図版	番号	重量	径	高	孔径外	孔径内	色調	備考
34	1	4.808	10.25~9.90	32.55	5.5~5.1	4.7~4.3	にぶい黄緑色	光沢。両面穿孔。両面孔縁部面取り。碧玉質?。
	2	4.711	9.35~9.15	31.00	3.7~3.3	3.6~3.3	にぶい緑色	光沢。両面穿孔。碧玉質。
	3	3.639	9.25~8.95	24.55	3.55~3.4	3.3~3.2	にぶい緑色	光沢。両面穿孔。碧玉質。

重量は小数点第4位を四捨五入した値

Ⅲ 小田部向原遺跡

tab.9 「小田部古墳」(01号遺構)出土ガラス小玉一覧表

(g、mm)

番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	色調	透明度	備 考
1	0.870	9.05～7.75	8.40～7.90	4.0～2.2	3.5	A	不	細部欠。側面4面。孔形ゆがみ。分析。
2	0.891	9.05～8.60	8.70～8.05	2.5	2.5～2.3	A	不	側面4面。表面円気胞。
3	0.281	6.35～6.05	5.45	2.4～1.7	2.3～2.0	B	不～半	
4	0.357	7.25～6.80	5.30～5.10	2.2～2.0	2.5～2.4	B	半	側面1面。表面円気胞。
5	0.405	7.45～7.15	6.15～5.95	2.6～2.5	2.7～2.3	B	不～半	細部欠。側面3面。
6	0.394	7.60～7.00	5.50～4.95	2.3～2.0	2.5～2.0	C	不	表面円気胞。
7	0.444	7.60～7.15	6.20～5.55	2.2～2.0	2.2～2.1	A	不	表面円気胞。
8	0.490	8.10～6.10	7.25～6.60	2.4～2.3	2.5	A	半	側面2面。表面円気胞。
9	0.453	8.00～6.95	5.85～5.70	2.8～2.5	2.9～2.5	A	不	側面1面。表面円気胞。
10	0.442	7.80～6.75	6.60～5.90	2.8～2.6	3.0～2.5	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
11	0.291	7.05～6.55	4.85～4.55	2.0～1.8	2.0	A	不～半	表面円気胞。
12	0.484	8.20～7.70	5.95～5.35	2.7	2.8～2.6	A	不	側面1面。側面タテキズ。表面円気胞。
13	0.366	7.90～6.95	5.30～4.95	3.4～2.6	3.1～2.5	A	半	細部欠。側面1面。表面円気胞。
14	0.473	7.85～6.25	6.55～6.25	2.3	2.1～1.8	C	不～半	側面2面。
15	0.422	7.75～6.85	6.15～6.65	3.2～3.0	3.3～2.7	C	半	側面2面。表面円気胞。
16	0.640	9.20～7.10	6.70～6.65	2.7～2.3	2.7～2.2	A	不	復原。側面タテ凹線1条。側面4面。
17	0.394	7.20～6.70	6.70～6.05	3.0～2.8	3.2～2.6	C	不～半	側面タテ凹線1条。側面3面。表面円気胞。
18	0.376	7.20～6.45	6.25～6.15	2.8～2.7	2.9～2.8	A	半	側面2面。表面円気胞。
19	0.474	8.25～7.65	5.85～5.45	3.0～2.5	3.2～2.8	A	不～半	側面タテ凹線1条。
20	0.294	6.30～6.50	5.30～5.05	2.0～1.6	2.0～1.8	A	半	側面3面。表面円気胞。
21	0.528	7.90～7.25	6.75～5.70	2.9～2.1	2.8～2.5	C	不	側面3面。表面円気胞。
22	0.264	6.90～6.60	4.45～4.15	2.7～2.3	2.7～2.4	B	半	
23	0.436	7.75～6.75	6.15～6.05	3.0	3.0	A	不～半	側面4面。
24	0.401	7.30～6.60	6.40～5.90	2.7～2.2	2.7～2.5	A	不	側面4面。表面円気胞。
25	0.516	8.20～7.65	6.50～5.95	3.5～2.7	2.4～2.2	C	不～半	側面3面。表面円気胞。
26	0.436	7.00～6.40	6.80～6.55	2.15～2.1	2.2～2.0	A	半	側面3面。表面円気胞。
27	0.499	8.10～7.00	6.30～6.05	2.7～2.4	2.8～2.5	A	半	側面3面。
28	0.555	8.75～7.95	6.55～6.10	3.2～2.8	3.0～2.7	A	不～半	側面小平坦面6面以上。表面円気胞。
29	0.444	7.60～6.85	6.55～6.05	3.0～2.8	2.9	B	半	側面2面。表面円気胞。
30	0.468	8.35～7.75	5.65～5.50	2.9～2.4	2.7～2.5	A	不	側面小平坦面多。表面円気胞。
31	0.446	8.15～7.70	6.35～5.50	2.8～2.6	3.0～2.8	A	不～半	細部欠。側面3面。表面円気胞。
32	0.415	8.65～7.75	5.05～4.35	3.5～2.8	4.0～2.3	C	不～半	細部欠。側面4面。表面円気胞。孔形ゆがみ。
33	0.518	8.30～7.95	6.10～5.30	3.0～2.3	2.6～2.4	A	不	側面2面。表面円気胞。
34	0.414	7.35～6.35	6.80～6.45	2.6～2.2	2.4～2.3	A	不～半	側面2面。
35	0.602	8.00～7.85	8.10～7.95	2.8～2.3	2.8～2.6	㊤	不	側面小平坦面4面以上。表面円気胞。
36	0.446	7.55～7.20	6.20～6.05	2.7	2.6～2.4	A	不～半	表面円気胞。
37	0.349	8.05～7.20	4.80～4.35	2.8～2.6	2.8～2.6	A	不～半	表面円気胞。
38	0.440	8.10～7.65	5.85～4.65	2.6～2.3	2.8～2.3	A	不	復原。側面3面。表面円気胞。
39	0.374	7.05～5.55	6.50～5.60	2.7～2.2	2.8～2.2	A	不～半	側面4面。
40	0.422	7.60～6.65	6.35～6.00	2.3	2.3～2.2	A	不～半	側面タテ凹線1条。側面4面。表面円気胞。
41	0.552	8.95～7.25	6.50～5.90	3.0～2.9	3.0～2.7	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
42	0.412	8.00～7.70	5.00～4.70	2.4～2.2	2.5～2.0	A	不～半	表面円気胞。
43	0.447	7.70～6.45	7.35～6.10	3.7～3.0	4.1～3.1	C	半	細部欠。側面1面。表面円気胞。
44	0.517	9.10～8.60	5.60～4.55	3.3～3.0	3.5～2.9	A	不	表面円気胞。

Ⅲ 小田部向原遺跡

(g、mm)

番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	色調	透明度	備考
45	0.425	7.50～6.60	6.45～6.15	2.7～2.3	2.8～2.2	C	不	細部欠。側面1面。表面円気胞。
46	0.467	7.90～7.50	6.65～5.90	3.6～3.1	3.6～3.0	A	不～半	側面3面。表面円気胞。
47	0.482	8.05～7.20	6.45～6.00	3.6～3.5	3.9～3.6	B	半	側面5面。表面円気胞。
48	0.434	8.80～8.10	5.65～4.90	3.1～2.5	3.0～2.4	A	不	一部欠。表面全体にキズ。
49	0.422	7.25～6.55	6.25～6.05	1.8	2.0	C	不	側面1面。
50	0.560	8.65～7.05	6.90～6.05	4.0～2.5	3.6～2.7	A	不～半	側面3面。表面円気胞。
51	0.486	8.35～7.55	6.05～5.90	3.7～3.6	4.0～3.7	C	不～半	側面1面。平坦面上にタテ凹線1条。表面円気胞。
52	0.395	7.35～6.90	5.90～5.75	2.6～2.5	2.9～2.8	B	半	側面2面。
53	0.725	9.20～9.10	6.60～6.40	3.3～3.0	3.1	A	不～半	側面小平坦面多。表面円気胞。
54	0.439	7.40～6.85	6.45～6.15	2.6～2.4	2.8～2.4	A	不～半	側面3面。表面円気胞。
55	0.547	8.10～7.75	6.50～6.00	2.4～2.0	2.2～2.0	A	不	細部欠。表面円気胞。
56	0.303	7.15～5.95	5.25～5.05	2.7～2.3	3.0～2.3	A	半	側面2面。表面円気胞。
57	0.599	8.90～8.25	6.15～5.75	2.5～2.3	2.8～2.7	A	不	側面2面。表面円気胞。
58	0.411	7.45～7.00	6.05～5.80	3.0～2.8	3.1～3.0	A	半	側面4面。表面円気胞。
59	0.485	8.70～7.65	5.45～4.80	3.6～3.0	3.7～2.6	A	不～半	側面2面。表面円気胞。孔形ゆがみ。
60	0.354	7.00～6.85	6.90	2.5～2.4	2.7～2.6	A	半	一部欠。側面1面以上。表面円気胞。
61	0.418	7.80～7.50	5.25～5.20	2.5～2.1	2.3～2.0	C	不	細部欠。側面3面。
62	0.554	8.05～7.65	6.75～6.35	3.2～3.1	3.2	A	不～半	側面5面。表面円気胞。
63	0.547	7.90～7.75	6.70～6.20	2.2～1.8	2.1～1.8	A	不	側面1面。表面円気胞。
64	0.437	7.30～6.60	7.25～5.55	3.1～3.0	3.3～2.7	A	不～半	側面2面。
65	0.211	6.60～5.75	4.50～4.25	2.1～1.9	2.2～2.0	A	不	側面1面。
66	0.496	8.75～6.00	6.70～6.25	2.8	2.9～2.3	㊤	不～半	側面2面。
67	0.472	7.20～6.95	6.60～6.15	2.6～2.5	2.5～2.3	A	不	表面円気胞。
68	0.489	8.15～7.65	6.35～5.40	3.3～2.8	3.2～2.7	C	不	細部欠。側面2面。表面円気胞。
69	0.448	7.95～7.40	6.40～5.80	2.5～2.1	2.5～2.3	C	不～半	側面1面。側面タテ凹線1条。表面円気胞。
70	0.436	8.20～7.30	5.80～5.40	2.7～2.3	3.1～2.8	A	半	側面4面。表面円気胞。表面気胞痕内に褐色粒。
71	0.424	7.40～7.00	6.50～6.15	3.0～2.6	3.0～2.5	A	半	側面2面。表面円気胞。
72	0.735	8.80～9.10	6.95～6.85	2.5～2.4	2.7～2.3	A	不	表面円気胞。表面キズ多。
73	0.488	7.65～6.95	7.20～7.05	2.5～2.2	2.5～2.2	㊤	不	側面小平坦面5面以上。表面円気胞。
74	0.367	7.40～6.55	5.80～5.35	3.0～2.9	3.1～2.8	B	半	側面2面。表面円気胞。
75	0.281	6.85～6.05	5.60～5.25	3.0～2.5	3.0～2.5	B	半	側面タテ凹線1条。表面円気胞。
76	0.494	7.65～7.10	6.85～6.75	3.1～2.6	3.0～2.7	A	不	細部欠。側面1面。
77	0.449	6.60～6.45	7.40～7.10	2.3～2.2	2.3～2.2	A	不～半	細部欠。キズ状のタテ線多。表面円気胞。
78	0.406	6.15～6.00	8.10～7.90	2.4～2.2	2.4～2.2	B	半	側面5面。
79	0.415	7.55～6.30	6.65～6.25	3.0～2.3	2.9～2.4	C	半	側面3面。表面円気胞。
80	0.727	8.25～7.30	8.65～7.20	3.0～2.6	2.4～2.1	㊤	不	側面4面。表面タテ凹線2条。表面円気胞。
81	0.356	6.65～6.30	6.30～6.15	2.5～1.9	2.5～2.2	C	不	側面4面。表面円気胞。
82	0.188	6.55～6.10	3.90～3.65	2.5～2.2	2.3～2.2	A	半	細部欠。表面円気胞。
83	0.530	7.65～7.00	7.15～6.85	2.4～2.3	2.3～2.2	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
84	0.636	8.70～7.95	7.20～7.15	2.7～2.4	2.6～2.5	A	不	側面4面。表面円気胞。
85	0.412	7.90～7.55	5.70～5.60	3.0	3.0	B	半	側面1面。表面円気胞。
86	0.231	5.35～4.95	6.30～6.15	2.0～1.7	1.9～1.5	A	不	側面小平坦面多。色調やや紫味。分析。
87	0.454	7.95～6.70	6.85～6.25	2.1～1.9	2.0～1.9	C	不～半	側面小平坦面多。表面ワレ、キズ。
88	0.359	6.55～6.35	6.45～5.80	2.0～1.8	2.0～1.8	B	不～半	表面円気胞。

Ⅲ 小田部向原遺跡

(g、mm)

番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	色調	透明度	備考
89	0.545	8.20～7.65	7.80～7.00	3.3～2.8	3.2～2.8	A	不	復原。一部欠。側面5面。
90	0.376	7.55～6.40	6.20～6.00	3.0～2.7	2.9～2.3	C	不～半	側面5面。
91	0.441	7.45～5.90	6.35～6.10	2.6～2.0	2.4～2.2	A	不～半	側面2面。
92	0.271	5.80～5.05	6.45～5.65	2.1～1.6	2.2～1.7	B	半	側面2面。側面キズ状のタテ線多。表面円気胞。
93	9.248	6.65～6.10	4.60～4.05	2.7～2.6	2.6～2.4	B	不	側面2面。表面円気胞。
94	0.561	7.75～6.85	7.75～7.25	2.4～2.0	2.4～2.0	A	不～半	側面1面。
95	0.361	7.75～7.25	5.10～4.50	3.6～2.9	3.5～3.0	A	半	側面1面。表面円気胞。
96	0.531	7.95～6.80	7.20～6.55	3.2～2.2	3.0～2.3	Ⓐ	不	側面1面。表面円気胞。分析。
97	0.632	8.65～7.95	7.20～6.80	2.9～2.5	3.0～2.7	A	不～半	側面4面。表面円気胞。
98	0.514	7.70～6.45	7.40～7.00	2.7～2.3	2.7～2.4	A	半	側面3面。表面円気胞。
99	0.415	8.05～7.45	5.05～4.50	2.8～2.4	2.8～2.5	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
100	0.333	7.15～6.35	5.60～5.35	2.8～2.4	2.75～2.2	A	半	側面1面。表面円気胞。
101	0.344	6.90～5.80	6.70～5.85	3.2～2.3	3.2～2.3	A	不	側面2面。表面円気胞。孔形ゆがみ。
102	0.315	6.80～5.25	6.10～5.60	2.1～1.8	2.3～2.0	B	半	側面2面。表面円気胞。
103	0.450	7.45～7.00	6.20～5.85	2.4～2.2	2.2～2.0	Ⓐ	不～半	
104	0.439	7.05～6.30	6.80～6.35	2.2～2.0	2.5～2.3	B	半	側面2面。表面円気胞。
105	0.286	7.10～6.65	4.90～3.20	2.7～2.4	2.5	C	不～半	側面1面。表面円気胞。
106	0.476	8.30～7.50	5.65～5.35	2.5～2.3	2.6～2.4	A	半	表面円気胞。
107	0.286	6.60～6.10	5.15～4.95	1.9～1.6	2.0～1.7	A	不～半	
108	0.530	8.00～7.75	7.20～5.80	2.7～2.0	2.3	Ⓐ	不	表面円気胞。
109	0.426	7.45～6.30	7.40～6.20	2.4～1.5	2.0～1.7	C	半	側面2面。表面円気胞。
110	0.464	6.35～5.65	9.25～8.50	2.6～1.7	2.1～1.5	A	不	復原。細部欠。側面1面以上。分析。
111	0.542	8.80～8.05	6.35～5.50	3.6～3.1	3.5～3.1	A	不～半	細部欠。側面1面。表面円気胞。
112	0.651	9.40～7.20	7.50～6.75	3.7～3.4	3.7～3.5	A	半	側面2面。
113	0.370	7.05～6.90	5.70～5.05	2.7～2.3	2.8～2.5	A	不～半	側面1面。
114	0.395	7.65～6.95	5.85～5.50	3.0～2.6	3.0～2.6	A	不～半	側面1面。
115	0.421	8.10～7.60	5.95～5.20	4.4～2.8	3.1	B	不～半	細部欠。側面小平坦面多。表面円気胞。
116	0.272	6.60～6.20	5.50～5.25	2.7～2.6	2.6～2.3	A	半	側面5面。
117	0.638	8.60～7.35	7.95～6.30	3.2～1.9	2.9～2.6	Ⓐ	不	側面2面。側面タテ凹線他キズ多。表面円気胞。
118	0.457	7.85～6.75	6.10～5.95	3.0～2.7	2.8	A	不～半	側面1面。表面円気胞。
119	0.415	8.10～7.50	5.45	3.3～3.1	3.5～3.0	A	不～半	表面円気胞。
120	0.155	6.25～5.45	3.85～3.45	2.7～1.8	2.6～2.1	A	半	一部欠。側面1面以上。
121	0.229	6.10～5.45	5.35～5.20	2.1～2.0	2.1～2.0	A	不	側面1面。表面円気胞。
122	0.296	6.65～6.05	6.10～5.25	2.6～2.7	2.6～2.5	C	不～半	細部欠。側面小平坦面。
123	0.423	7.50～7.10	5.60～5.25	3.0～2.4	2.8～2.5	A	不～半	
124	0.547	8.15～7.50	7.30～7.10	3.1～2.5	2.8～2.3	C	不	表面ワレ、キズ。側面1面。表面円気胞。
125	0.709	9.10～7.90	8.15～7.25	3.0	3.0～2.8	B	不～半	側面2面。表面円気胞。
126	0.591	9.60～8.60	6.15～5.50	3.5～3.0	3.5～2.9	A	不	表面タテキズ。細かい剝離状のワレ。側面5面。表面円気胞。
127	0.310	7.75～6.95	4.45～4.20	2.9～2.6	2.9～2.7	B	半	表面円気胞。
128	0.446	8.05～7.75	6.00～5.10	3.1	3.1～3.0	A	不	側面小平坦面。表面円気胞。
129	0.212	7.00～6.80	3.70～3.50	2.9～2.8	2.9～2.8	A	不	表面円気胞。
130	0.246	7.00～6.55	4.50～3.90	2.9～2.5	3.0～2.4	C	半	側面2面。
131	0.244	6.60～6.15	4.65～4.25	2.3	2.7～2.5	A	不	側面3面。表面円気胞。
132	0.316	6.50～5.75	5.60～5.25	2.1～1.6	2.0～1.8	A	不～半	側面3面。

Ⅲ 小田部向原遺跡

(g、mm)

番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	色調	透明度	備考
133	0.277	6.00～5.75	6.05～5.85	2.3	2.5～2.1	C	不～半	側面2面。表面円気胞。
134	0.475	6.05～5.10	5.85～5.20	2.7～2.1	2.8～2.3	A	不	側面タテ凹線2条以上。側面2面。表面円気胞。
135	0.412	7.70～5.80	6.55～6.05	3.7～2.6	3.5～2.3	B	半	細部欠。側面4面。
136	0.428	7.65～7.00	6.05～5.85	3.0～2.6	3.1～2.7	A	不	側面2面。表面円気胞。
137	0.539	7.95～6.80	7.45～6.75	2.5～2.0	2.5～2.0	A	不	細部欠。表面剝離状のワレ。側面2面。
138	0.372	7.15～6.65	6.10～5.45	3.0	3.2～3.0	C	不～半	側面1面。表面円気胞。
139	0.804	8.95～7.65	8.15～7.90	3.0～2.3	3.0～2.4	A	不	側面2面。表面円気胞。分析。
140	0.555	9.00～7.80	6.35～6.25	2.8～2.0	2.7～2.2	A	不	側面3面。表面円気胞。
141	0.440	7.85～7.80	5.30～5.00	2.5	2.8～2.5	A	不	表面円気胞。
142	0.361	7.45～7.00	5.60～4.85	3.6～2.5	3.0～2.8	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
143	0.363	7.00～6.60	6.85～4.70	3.4～2.8	3.5～2.6	C	不～半	側面2面。表面円気胞。
144	0.531	9.00～8.70	5.40～5.05	4.0～3.7	4.0～3.6	B	半	表面円気胞。
145	0.636	9.05～7.45	8.00～7.65	2.8～2.5	3.0～2.6	Ⓐ	不	表面円気胞。
146	0.361	8.15～7.95	4.60～4.40	3.0	3.2～3.1	B	不～半	側面1面。表面円気胞。
147	0.330	7.00～6.85	5.60～5.10	3.0～2.3	3.0～2.5	C	不	一部欠。側面2面。表面円気胞。
148	0.581	8.35～7.25	6.80～6.50	2.8～2.5	3.2～2.8	A	不	側面2面。表面円気胞。
149	0.389	7.65～7.05	6.00～4.95	3.3～3.0	3.3～3.0	A	不～半	側面2面。
150	0.407	8.00～7.50	5.25～4.90	3.3～3.0	3.5～3.1	A	不	側面4面。表面円気胞。
151	0.482	8.75～7.80	6.75～4.05	4.0～2.7	4.0～2.4	B	半	側面1面。孔形ゆがみ。
152	0.483	7.60～7.05	7.10～6.10	3.0～2.7	3.0～2.7	A	不～半	表面剝離状のワレ。側面2面。表面円気胞。
153	0.753	9.45～7.30	8.45～8.00	3.0～2.7	3.0～2.8	A	不	側面2面。表面円気胞。
154	0.326	7.20～6.60	5.05～4.95	3.1～2.4	3.1～2.1	A	半	側面凹線状のタテキズ。側面5面。
155	0.515	8.90～8.60	5.20～4.75	3.4～2.8	3.2～2.7	A	不	側面小平坦面2面以上。表面円気胞。
156	0.421	8.25～7.50	5.40～4.35	3.0～2.4	3.0～2.5	A	不～半	側面5面。表面円気胞。
157	0.545	9.35～8.75	5.65～5.50	3.2～3.0	3.2～3.0	Ⓐ	不	表面キズ。円気胞多。
158	0.481	7.95～7.10	6.50～5.30	3.5～3.2	3.2～2.5	Ⓐ	不～半	側面2面。表面円気胞。
159	0.342	7.30～6.55	6.05～5.70	3.0～2.5	3.0～2.5	B	半	側面2面。表面円気胞。
160	0.271	7.00～6.40	4.80～4.45	2.3～2.0	2.7～2.5	B	半	
161	0.536	8.65～8.45	6.05～5.05	4.0～3.3	4.1～3.5	A	不	表面円気胞。
162	0.460	8.10～7.25	6.15～5.70	3.0	3.0	A	不～半	側面凹線状のタテキズ。側面1面。表面円気胞。
163	0.439	8.25～7.50	5.95～5.65	3.2～2.7	3.1～3.0	A	不	側面2面。表面円気胞。
164	0.838	9.00～8.80	8.50～8.25	3.9～3.6	3.7～3.5	A	不～半	側面5面。表面円気胞。
165	0.469	7.30～7.20	7.25～6.80	2.9～2.5	3.0～2.2	C	半	復原。側面2面。表面円気胞。
166	0.541	7.65～7.40	7.00～6.80	2.0	2.0	A	不	側面小平坦面。表面円気胞。
167	0.548	8.20～6.75	7.40～7.25	2.7～2.0	2.7～2.2	A	不～半	細部欠。側面2面。
168	0.535	8.75～8.20	5.95～5.25	3.2	3.3～3.0	Ⓐ	不	側面1面。表面円気胞。
169	0.465	8.55～7.45	5.75～5.20	4.1～3.5	3.6～3.3	A	不～半	表面円気胞。
170	0.463	8.55～7.75	5.70～5.25	3.5～2.9	3.6～3.1	A	不～半	細部欠。側面3面。表面円気胞。
171	0.409	7.90～7.50	5.65～5.45	3.3～3.2	3.5～3.0	A	不～半	側面5面。表面円気胞。
172	0.508	8.40～8.00	5.35～5.20	2.5	2.5	A	不～半	表面円気胞。
173	0.535	8.20～6.80	6.95～6.50	2.6～2.5	2.6	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
174	0.404	8.25～6.85	5.35～5.15	2.7～2.4	2.6～2.3	A	不～半	側面3面。表面円気胞。
175	0.488	8.90～7.80	5.40～4.95	2.8～2.0	2.9～2.0	A	半	側面小平坦面5面以上。表面円気胞。
176	0.402	8.20～7.60	5.35～5.05	3.5～3.2	3.4～3.2	B	半	側面5面。

Ⅲ 小田部向原遺跡

(g、mm)

番号	重量	径	高	孔径1	孔径2	色調	透明度	備考
177	0.465	8.20～7.60	6.15～4.95	3.4～2.7	3.5～3.3	A	不	側面4面。表面円気胞。
178	0.739	9.90～9.30	6.00～5.90	3.8～3.3	3.9～3.2	A	不	側面キズ。円気胞多。
179	0.699	9.30～7.85	7.75～7.10	2.6～2.1	2.7～2.2	A	不	復原。側面3面。表面円気胞。
180	0.373	7.65～6.80	5.60～5.40	2.9～2.5	2.8～2.6	A	不～半	側面2面。
181	0.495	7.90～7.20	6.50～6.25	2.7～2.0	2.8～2.0	A	不	側面4面。表面円気胞。
182	0.614	8.85～7.75	6.50～6.25	2.8～2.5	3.0～2.5	A	不	
183	0.398	7.30～6.65	6.70～5.25	2.8～2.5	2.7～2.3	A	不～半	側面1面。表面円気胞。
184	0.320	6.35～5.75	6.95～6.85	2.5～2.1	2.6～2.0	A	半	表面円気胞。分析。
185	0.417	7.95～7.50	5.70～5.15	3.7～3.2	3.8～3.3	A	不～半	側面1面。表面円気胞。
186	0.462	7.85～6.50	6.65～5.90	3.8～2.4	3.8～2.3	A	半	側面4面。
187	0.416	7.40～6.60	6.85～6.65	3.0～2.3	2.8～2.6	A	半	側面4面。表面円気胞。
188	0.485	7.35～6.90	6.85～6.40	2.6～2.5	2.7～2.4	A	半	側面2面。
189	0.549	8.70～8.65	6.50～5.50	3.2～2.8	3.2～3.0	A	不～半	側面4面。表面円気胞。
190	0.416	7.65～6.50	6.40～6.30	2.5～2.0	2.5～2.2	A	不～半	側面3面。
191	0.405	8.00～6.30	5.95～5.65	2.5～2.4	2.8～2.3	C	不	側面3面。表面円気胞。
192	0.437	7.60～6.65	6.55～5.65	3.0～2.8	3.1～2.7	A	不～半	側面2面。表面円気胞。
193	0.393	7.00～6.40	6.50～6.30	2.7～2.3	2.5～2.3	C	不	タテワレ。復原。細部欠。タテキズ。側面3面。表面円気胞。
194	0.453	7.75～7.05	6.55～5.80	2.6～2.5	2.7～2.3	A	不～半	表面円気胞。
195	0.419	7.20～6.50	6.80～6.70	2.7～2.4	2.7～2.3	A	半	細部欠。側面1面。表面円気胞。
196	0.559	8.35～7.55	6.85～6.60	3.5～3.0	3.5～3.0	B	不～半	側面3面。表面円気胞。
197	0.404	7.30～5.25	7.20～6.55	2.8～2.5	3.2～2.5	B	半	細部欠。側面2面。表面円気胞。
198	0.536	8.65～6.55	6.75～6.00	4.8～2.2	4.6～2.3	A	不	側面2面。表面円気胞。孔形ゆがみ。
199	0.357	7.45～6.80	5.70～5.35	3.1～2.6	3.2～2.5	B	半	細部欠。側面1面。表面円気胞。
200	0.339	7.40～6.50	5.35～4.80	3.2～2.7	3.2～2.6	A	不～半	側面3面。表面円気胞。
201	0.395	7.50～6.95	6.10～5.95	2.5～2.3	2.4～2.3	A	不	表面剝離状のワレ。表面円気胞。
202	0.455	7.90～6.50	7.35～5.30	4.0～2.3	3.3～2.4	A	半	側面2面。表面円気胞。
203	0.620	8.60～8.05	6.60～6.40	3.3～2.7	3.1～2.9	A	不～半	側面1面。表面円気胞。
204	0.481	8.90～8.25	5.40～4.85	3.5～3.1	3.5～3.1	A	不～半	側面タテ凹線1条。側面3面。表面円気胞。
205	0.418	6.95～6.65	6.55～5.85	2.3～2.1	2.3～2.0	A	不～半	側面1面。表面円気胞。
206	0.561	8.60～7.95	6.85～6.15	2.4～2.2	2.5～2.3	A	不～半	側面4面。表面円気胞。
207	0.531	8.60～7.90	5.95～5.45	3.5～3.0	3.9～3.0	㊤	不	側面1面。表面円気胞。
208	0.446	7.10～6.75	7.35～6.45	3.1～2.4	3.2～2.1	A	半	細部欠。剝離状のワレ。表面円気胞。
209	0.466	8.65～7.60	5.55～4.90	3.4～3.3	3.5	A	不	側面2面。表面円気胞。
210	0.385	6.70～6.20	6.70～6.35	2.3	2.5～2.2	B	半	側面1面。
211	0.448	7.55～7.10	6.55～6.40	2.5	2.5～2.3	A	不	
212	0.499	8.25～7.65	5.85～5.50	3.2～3.0	3.0	A	半	側面4面。表面円気胞。
213	0.372	7.85～6.80	5.45～4.60	3.3～2.5	3.3～2.5	A	不	側面1面。
214	0.532	8.20～8.05	5.95～5.80	3.0	2.8	A	不	
215	0.364	7.40～6.40	5.70～5.45	3.2	3.1～2.6	B	半	側面1面。表面円気胞。

重量は小数点第4位を四捨五入した値。

色調 A紺系 ㊤濃紺系 B明紺系 C青系

備考側面は平坦面の数。気胞は表面で確認できるもの。

円とは気胞が球形をしていることを示す。

測図を提示することはできなかった。今回出土した土器のうち大半は鬼高式であり、出土層位については前述したが、その範囲はおおよそ断面a-a' トレンチ西周溝部から、断面c-c' やや南側に集中する。37~39・41~66はその段階に比定されるものであり、また須恵器杯蓋70は、これと年代的に対応する。これらの土器は、その周囲に分布する竪穴住居跡出土土器と同時期の所産であり、その段階に投棄されたものと考えられる。

89は、磨製石剣である。身は片平片鎚造りであり、鈍角の関部から断面長方形の茎部へ連続する。茎中央には両面からの小孔が穿たれる。全長3.61cm、身最大幅2.62cm、厚さ0.65cm、重さ8.80gを測る。蛇紋岩製であり、表面に平滑に仕上げられているが、整形時の擦痕を明瞭に残す。90・91は、滑石製の有孔円盤であり、90は、径2.80~2.98cm、厚さ0.34~0.38cm、重さ6.12g、91は、径2.27~2.36cm、厚さ0.28~0.30cm、重さ3.35gを測る。

今回の調査では、本来小田部墳丘墓に帰属すると断定できる資料を追加することはできなかった。時期的に対応すると考えられるものは、23・31・78・84などであるが、23については、竪穴住居跡02号遺構との関連も考慮しなければならない。

3 竪穴住居跡と土坑

02号遺構(fig. 41)

竪穴住居跡。小田部墳丘墓01号遺構と重複する。本遺構が古。建替は確認できない。竪穴平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は、5.17(主軸現存値)×4.84m、確認面推定面積24.43㎡、床面推定22.24㎡、内区8.20㎡を測る。主軸方位はN-38°-W、残存壁高は12~24cmである。P₁~P₄は主柱穴、P₅は梯子穴と考えられるものである。その深さは、床面よりP₁が31cm、P₂が55cm、P₃が58cm、P₄が61cm、P₅が30cmを測る。炉は、主軸線上北側にあり、規模は96×73cm、深さ6cm、底面はよく焼けていた。床は貼り床構造をもち、全体に比較的硬質であった。周溝は明確ではなかった。土層1層は粒状の黒褐色土、2層は明黒褐色土層、3層は黒褐色均質土層、4層は焼土・灰混合土層、5層はロームブロックを含む明黒褐色土層であり、覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、9が床面から、2・3・4・5・6・7・8・10・12・13は床面から若干浮いて出土している。他は一括出土遺物である。13・14は、紡錘車形の土製品であり、13は、最大径4.70cm、厚さ1.46cm、孔径0.73cm、重さ17.7g、色調は橙色、器面には指頭痕を残す。14は、現存最大径4.28cm、厚さ1.46cm、重さ12.6gであり、色調は橙色、器面には指頭痕を残す。

03号遺構(fig. 42)

竪穴住居跡。建替は確認できない。竪穴平面形態は楕円形であるが、斜面部側の範囲については、やや不明確である。規模は、5.69(最大径)×4.93m、確認面推定面積23.08㎡、床面推定20.79㎡を測る。主軸方位は、炉とP₈を梯子穴と仮定して主軸線上においた場合、N-70°-Wとなる。残存壁高は4~26cmである。P₁~P₇・P₁₀・P₁₁は同心円状に展開する柱穴、またP₁₂は貯蔵穴と考えられるものである。その深さは、床面よりP₁が27cm、P₂が14cm、P₃が16cm、P₄が15cm、P₅が23cm、P₆が19cm、P₇が27cm、P₈が14cm、P₉61cm、P₁₀が25cm、P₁₁が34cm、P₁₂が24cmを測る。P₁₂平面最大径は58cmである。炉は、最大径58cm、深さ約5cmであり、底面はあまり焼けていない。床は貼り床構造をもたない。周溝は明確ではなかった。土層1層は粒状の暗褐色土層、2層は明黒褐色土層、3層は暗褐色土層で

Ⅲ 小田部向原遺跡

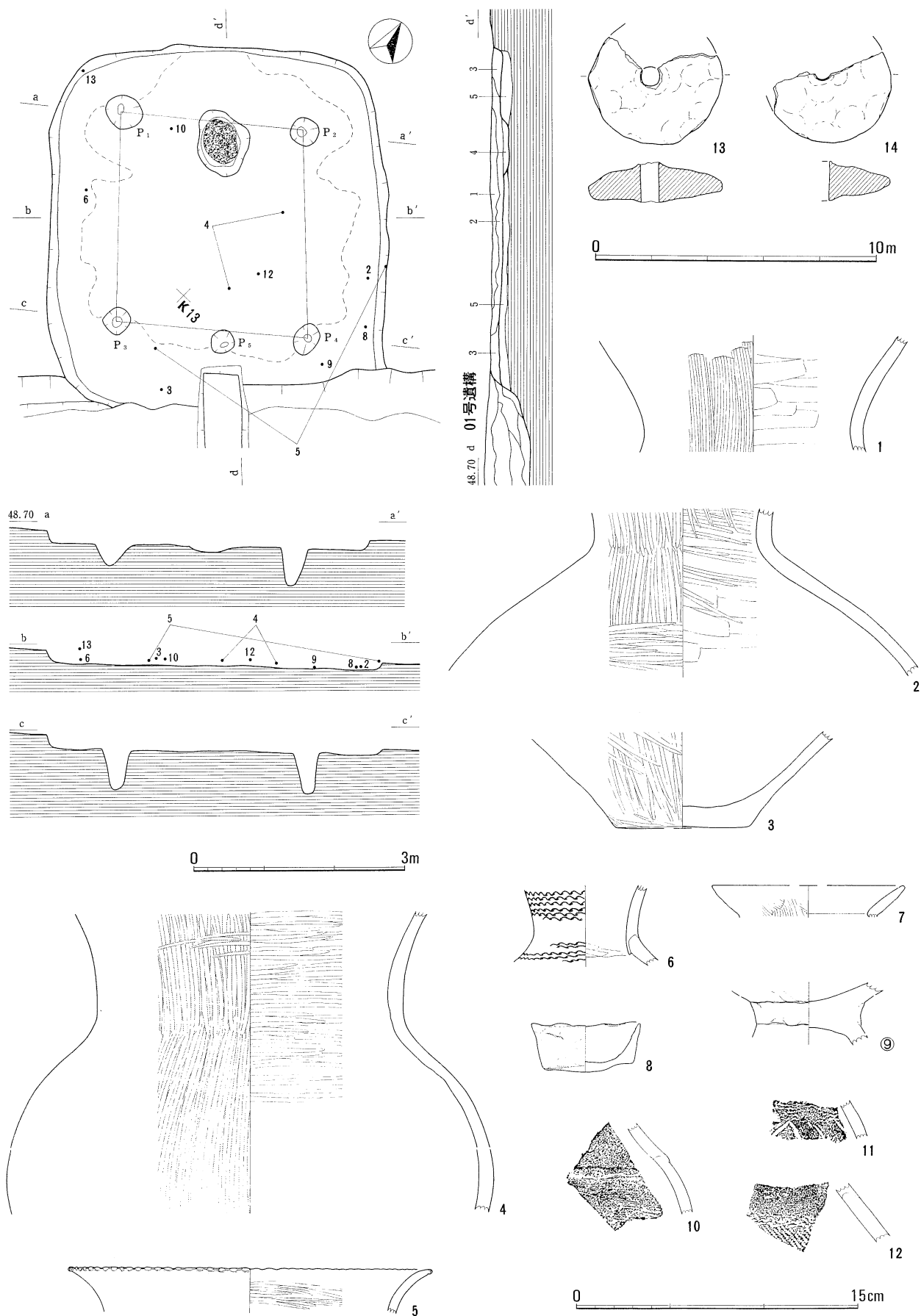
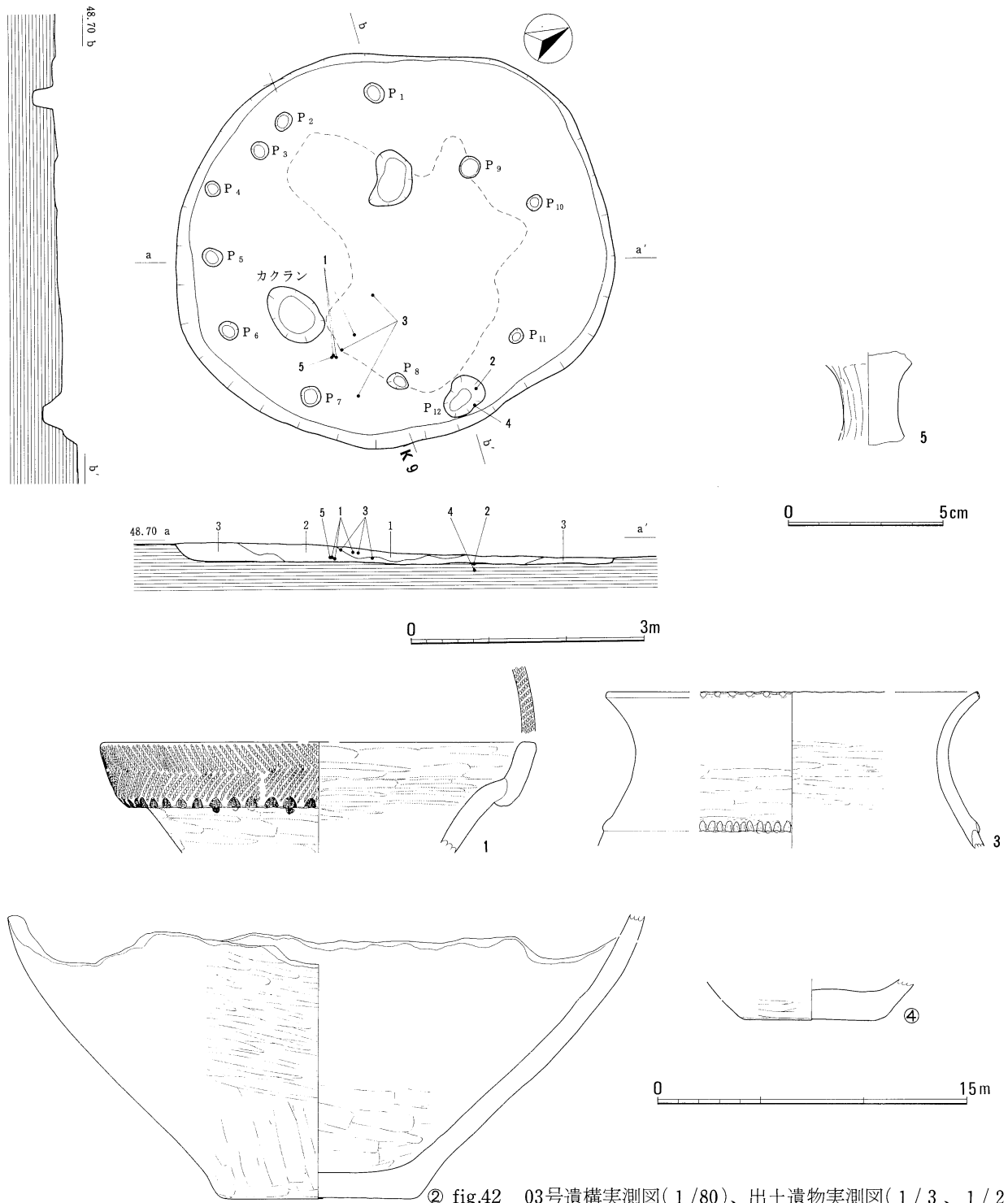


fig.41 02号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3、1/2)

Ⅲ 小田部向原遺跡



あり、焼土等の混合は認められない。基本的に自然堆積と考えられる。

遺物は、2・4がP₁₂覆土から出土した他は、床面から若干浮いて出土している。5は、ミニチュア品であるが、上下は不明確である。2は、胴部下半粘土紐積み上げ休止部ではずれており、上半部は出土していない。廃棄段階ではこの状態で使用されていたものと推定される。

04号遺構(fig. 43)

堅穴住居跡。同位置同規模での建替えが想定される。堅穴平面形態は隅丸長方形ないしは長台形を呈し、規模は、6.73(主軸)×6.03m、確認面面積35.30m²、床面推定31.99m²、内区9.71、9.08m²を測

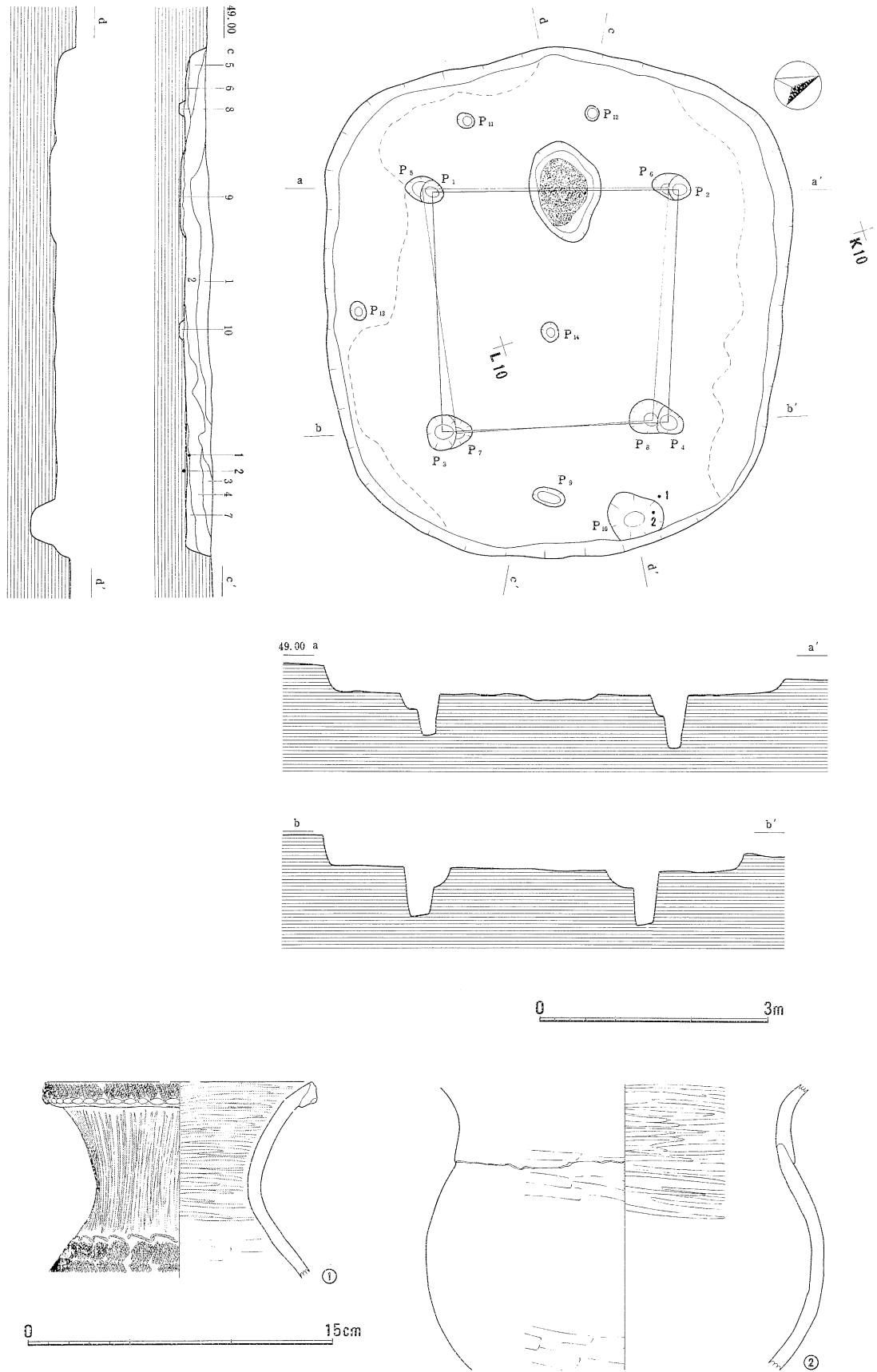


fig.43 04号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)

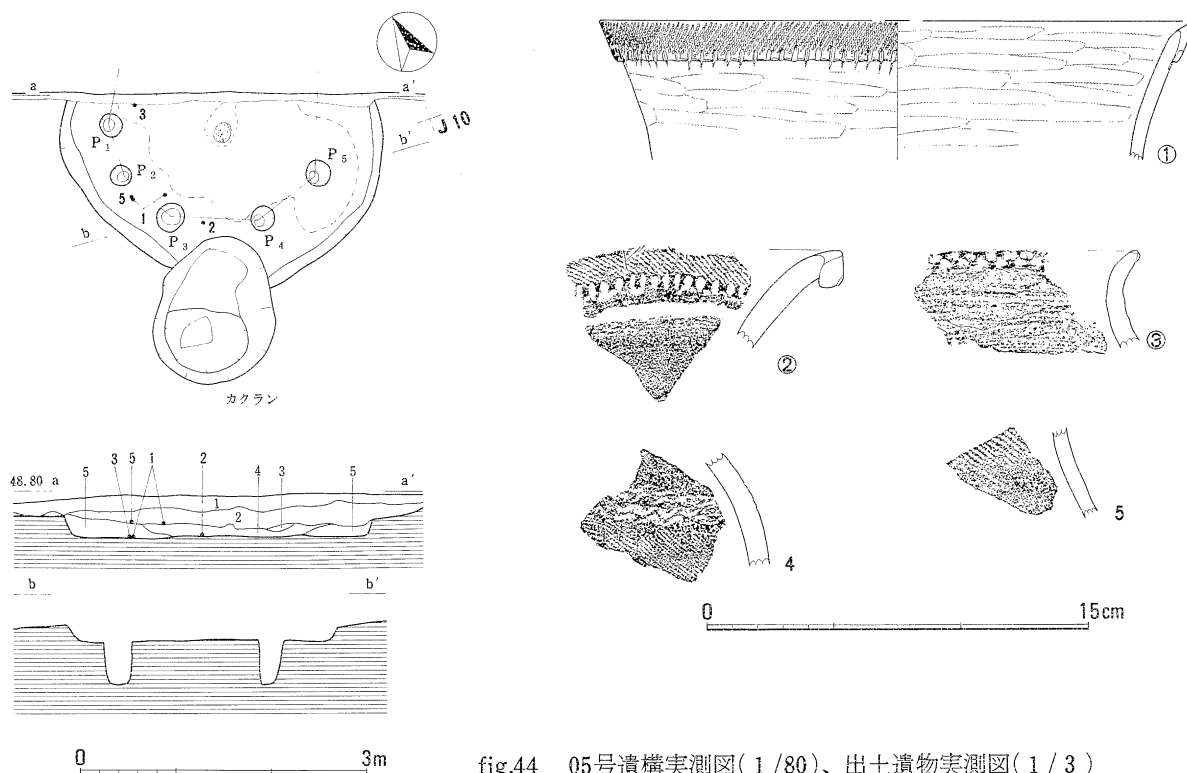


fig.44 05号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)

る。主軸方位はN-64°-W、残存壁高は24~42cmである。P₁~P₈が主柱穴であり、P₁~P₄が建替え新(A)、P₅~P₈が建替え古(B)に対応する。P₉は梯子穴、P₁₀は貯蔵穴と考えられるものである。その深さは、床面よりP₁が55cm、P₂が69cm、P₃が65cm、P₄が72cm、P₅が24cm、P₆が29cm、P₇が30cm、P₈が25cm、P₉が14cm、P₁₀が33cm、P₁₁が24cm、P₁₂が10cm、P₁₃が16cm、P₁₄が8cmを測る。P₁₀の平面規模は73×64cmである。炉は、主軸線上北側にあり、134×95cm、深さ9cmであり、底面はよく焼けていた。範囲は明確ではなかったが、その西側床面には、焼土・灰をかき出したと考えられる層が認められた。周溝は明確ではなかった。床は貼り床構造をもたない。全体に比較的硬質であった。土層1・3層は粒状の暗褐色土、2層は明黒褐色土層、4層は暗褐色均質土層、5層は褐色のしみ状ブロックを含む明黒褐色土層、6層は焼土・炭化物を含む黒褐色均質土層、7層はローム粒を多量に混合する明黒褐色土層、8・10層は粒状の明黒褐色土層、9層は焼土、焼けブロックを多量に混合する層である。覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、1が床面直上P₁₀脇より、2はP₁₀覆土より出土した。

05号遺構(fig. 44)

竪穴住居跡。ほぼ半分強を調査することができた。また、南西部には攪乱坑がある。竪穴平面形態は検出範囲では円形と考えられる。建替えは確認できない。規模は、検出部最大幅で3.40mを測る。主軸方位は不明。残存壁高は18~24cmである。P₁~P₅は柱穴と考えられ、同心円状に展開する。その深さは、床面よりP₁が42cm、P₂が39cm、P₃が45cm、P₄が46cm、P₅が48cmを測る。同様の柱穴の配置は、当該地域においては類例は少ないものの、弥生時代後期の比較的小形の円形ないしは楕円形の竪穴住居跡に認められる。炉は、掘り込みは明確ではないが、よく焼けていた。周囲床面上には、炭化物、灰層が分布する。床は貼り床構造をもたないが全体に硬質であった。周溝は明確ではない。土層1層は表土層、2層は明黒褐色土層、3層は焼土層であり、4層は粒状の暗褐色土層、5層はロー

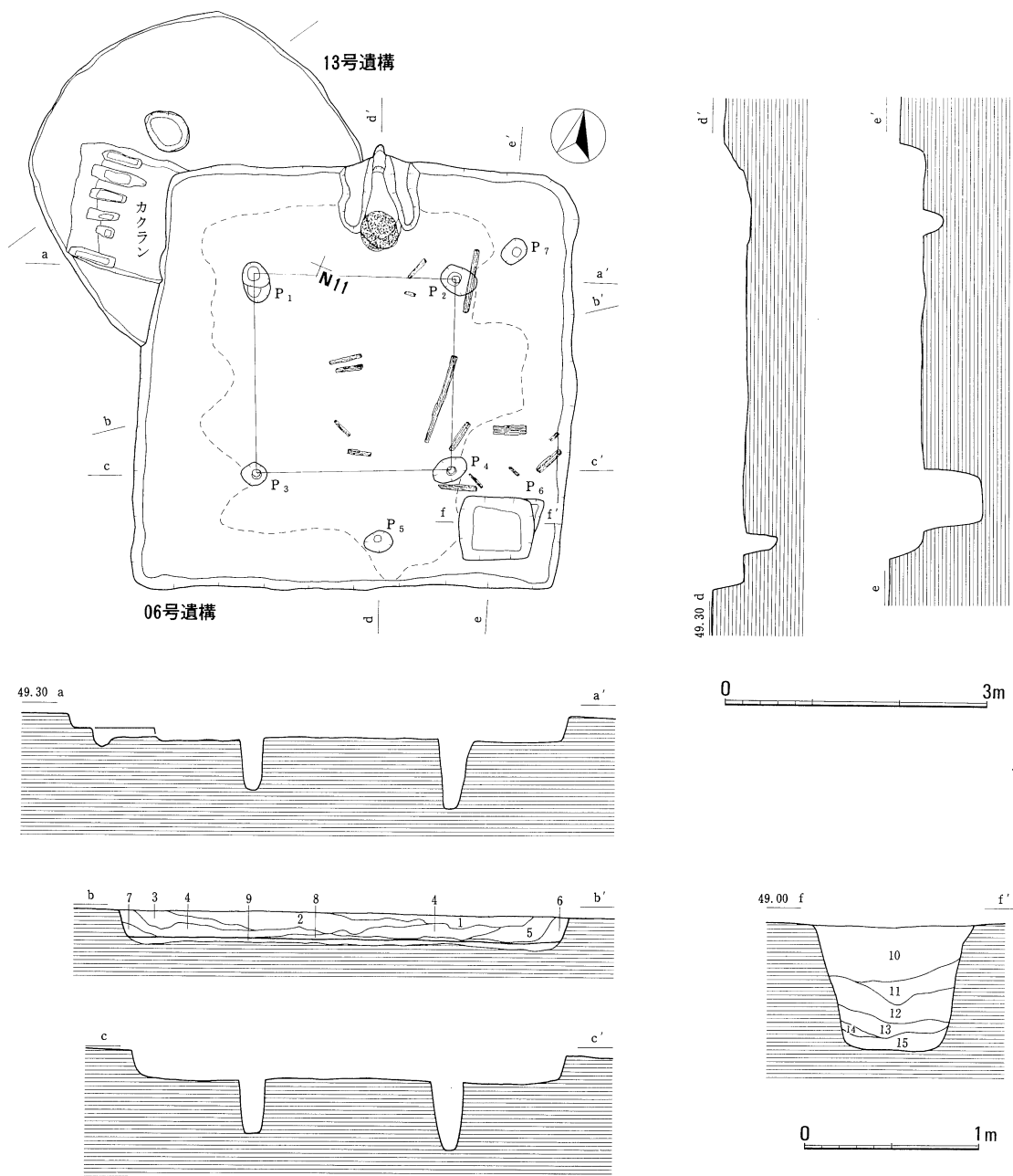


fig.45 06・13号遺構実測図(1)(1/80、1/40)

ム粒を混合する明黒褐色土層である。焼土の投棄を除き、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、1～3が床面より、5が覆土、4が一括出土土器である。

06号遺構(fig. 45・46・47)

竪穴住居跡。13号遺構と重複する。本遺構が新。建替は確認できない。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は4.87(主軸)×5.05m、確認面面積23.98㎡、床面21.18㎡、内区5.18㎡を測る。主軸方位はN-11°-Wである。残存壁高は36～43cm。P₁～P₄は主柱穴、P₅は梯子穴、P₆は貯蔵穴と考えられているものである。深さは床面よりP₁が61cm、P₂が77cm、P₃が62cm、P₄が80cm、P₅が38cm、P₆が72cmを測る。P₆平面形は長方形を呈し、87×71cmを測る。カマドはほぼ主軸線上にあり、袖構築材は白色粘土を主とする。焚き口は明確な掘り込みをもたないが、火床面はよく焼けていた。床はほぼ全体に硬質であった。掘形は、壁際周囲が多少深くなるものの全体に浅い。本遺構は火災に遭ったもの

Ⅲ 小田部向原遺跡

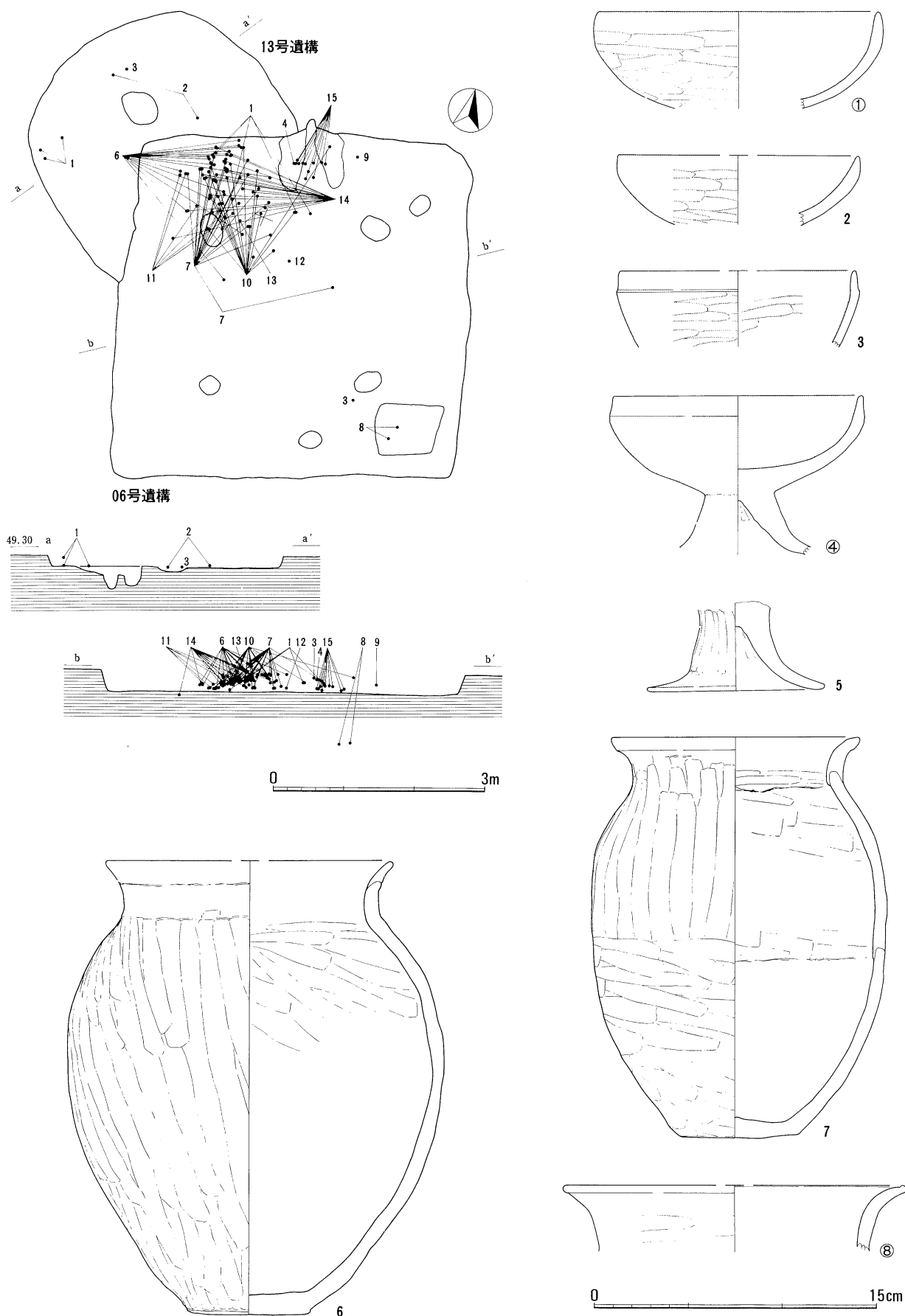


fig.46 06・13号遺構実測図(2)(1/80)、06号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)

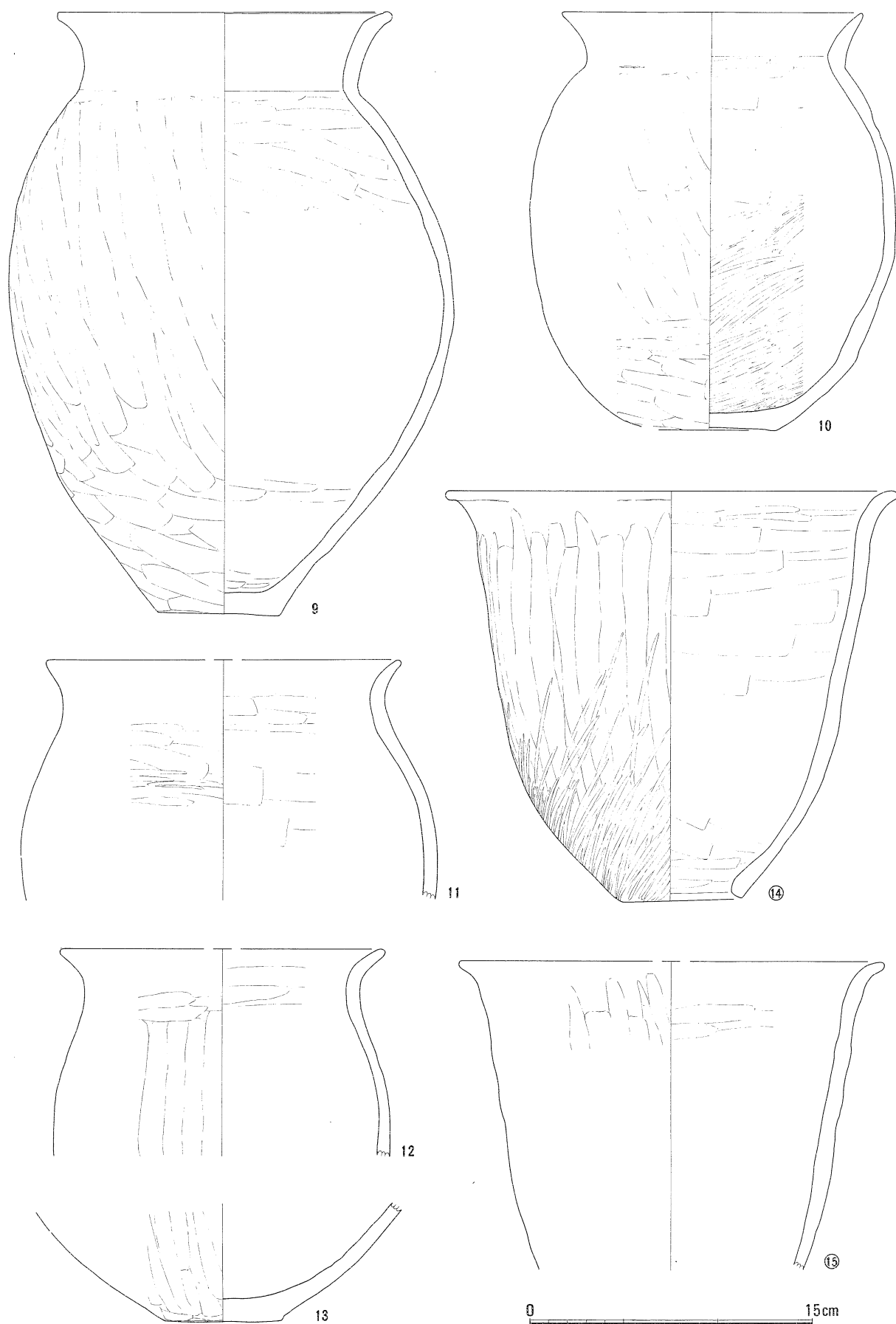


fig.47 06号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)

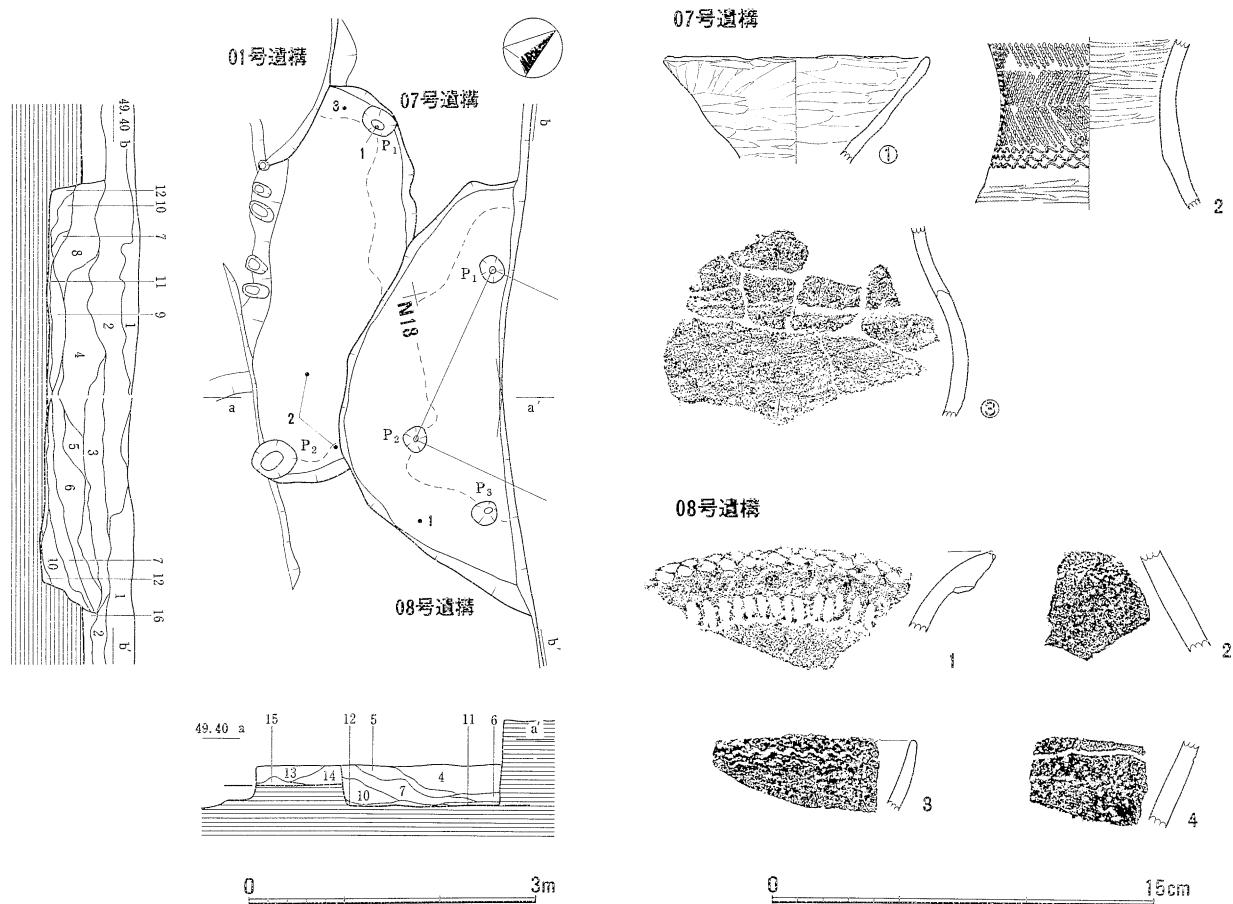


fig.48 07・08号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)

と推定され、とくに床面中央から東側にかけて焼土、炭化物が検出されている。壁際については床面と若干の間層をはさむ。また、貯蔵穴内の堆積は、やはり底面より若干の間層をはさむものの、下層より焼土が検出されている。遺存遺物も少なく、住居廃棄にともない焼去したものと考えられる。

出土土器は、4がカマド袖内、8が貯蔵穴下層、15がカマド崩落土内より出土している他は、一部床面レベルによるものもあるが、一括廃棄されたことが想定される。

07号遺構(fig. 48)

堅穴住居跡。01号遺構、08号遺構と重複する。本遺構が古。また南側は攪乱により破壊されている。建替えは確認できない。堅穴平面形は円形ないしは隅丸胴張りの方形と推定される。現存最大長は4.25mを測る。主軸方位は不明、北西方向であろうか。残存壁高は0～22cm。炉、支柱穴は認められない。P₁は深さ9cm、P₂は22cmを測る。周溝は確認できなかった。貼り床は認められない。焼土等の堆積より、火災をうけたことが想定される。土層13層は、黒褐色土層であり、褐色の斑状ブロックが認められる。14層は暗褐色土層、15層は焼土、ローム粒混合土層、16層は明黒褐色土層である。

遺物は、1がP₁底面、2が覆土、3が床面より出土している。

08号遺構(fig. 48)

堅穴住居跡。07号遺構と重複関係をもつ。本遺構が新。調査範囲内では直接重複しないものの01号遺構突出部(開口部)にあたる。一部調査区外におよぶ。建替えは確認できない。堅穴平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、主軸長約3.95m、主軸方位N-44°-W、残存壁高34～44cmを測る。P₁・P₂は支柱穴、P₃は梯子穴と考えられているものである。深さは床面よりP₁は64cm、P₂は62cm、P₃が

Ⅲ 小田部向原遺跡

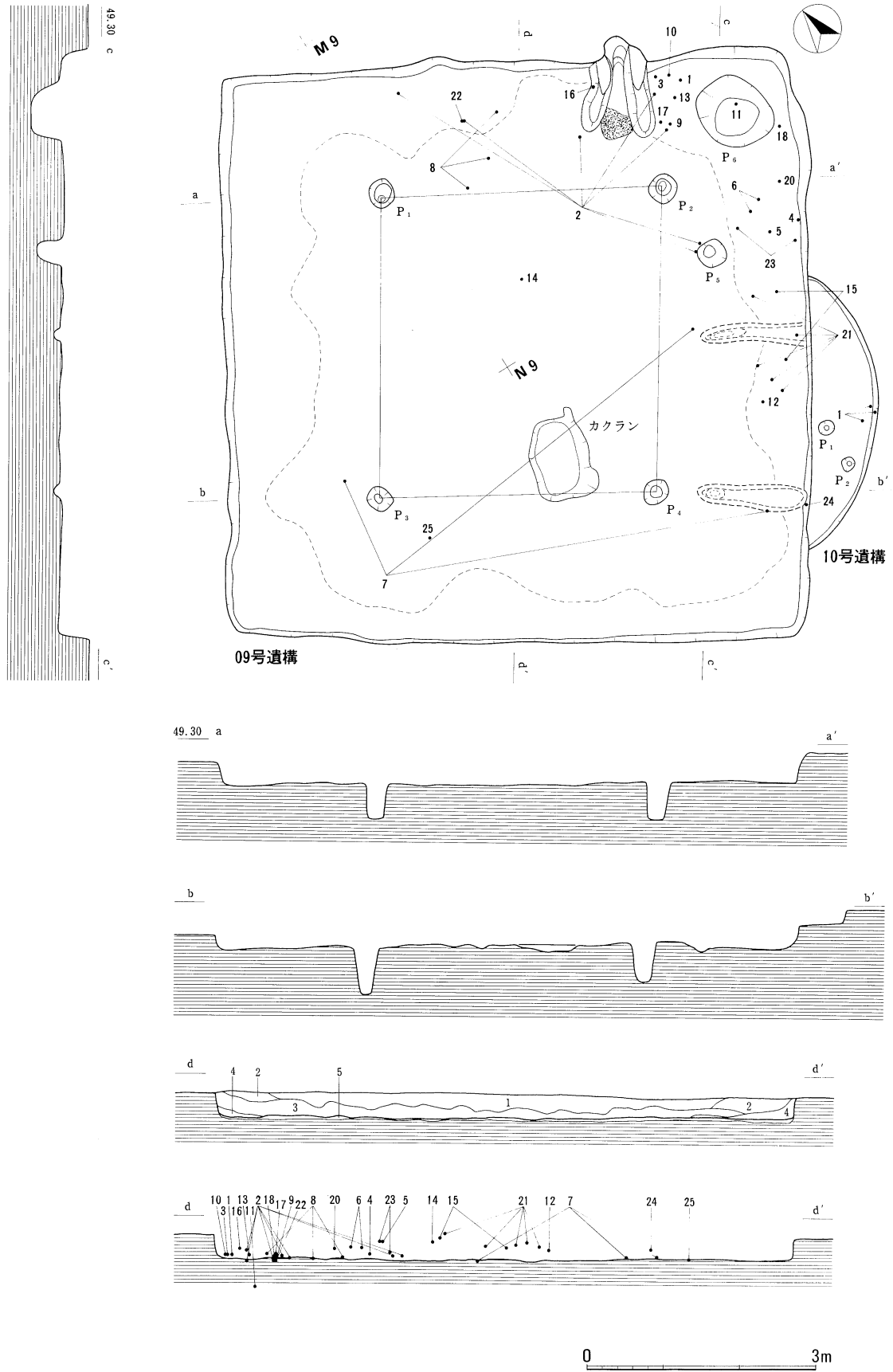


fig.49 09・10号遺構実測図(1/80)

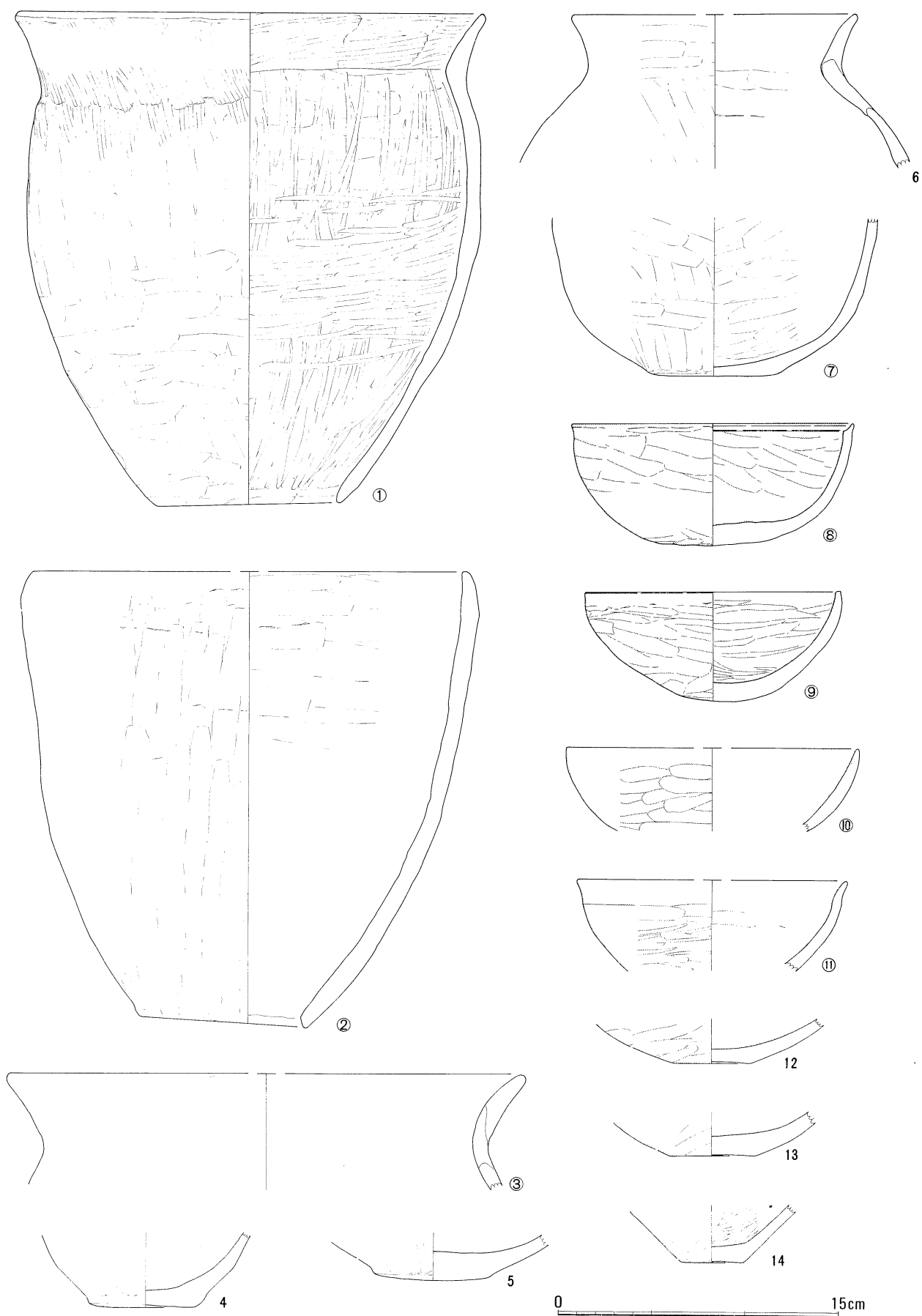


fig.50 09号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)

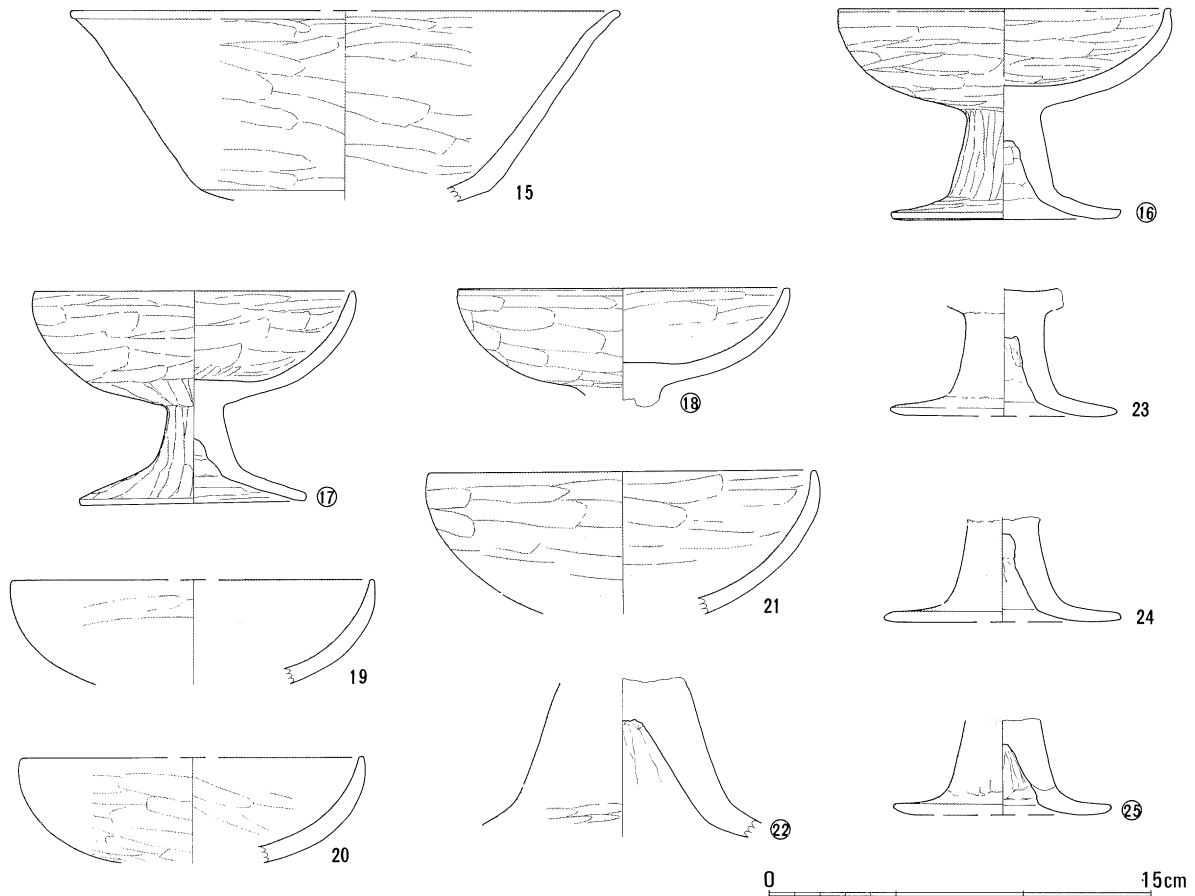


fig.51 09号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)

14cmを測る。炉は検出されなかった。貼り床は認められなかった。前述したように、土層断面より01号遺構とは大きな時間差はないと考えられる。土層は、1層がロームを主体とする整地土、2層が整地前旧表土、3層がロームブロックを局部的に混合する明黒褐色土層、4層が大小ロームブロックを主体とする黄褐色土層、5層は3層に似るがロームブロックが小形でやや少ない。6層は4層に似るがロームブロック大、7層はソフトロームをまだら状に混合する暗褐色土層、8層はソフトロームをまだら状に混合する黒褐色土層、9層は粒状の明黒褐色土層、10層は粒状の黒褐色土層、11層は黒褐色均質土層、12層はローム粒を主体とする暗黄褐色土層、16層は明黒褐色土層である。

遺物は、1が覆土下層、2～4は一括出土したものである。

09号遺構(fig. 49・50・51)

竪穴住居跡。10号遺構と重複する。本遺構が新。建替は確認できない。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は7.68(主軸)×7.77m、確認面面積60.20㎡、床面56.44㎡、内区15.11㎡を測る。主軸方位はカマドを基準とした場合N-39°-Eであるが、P₅梯子穴を基準とするならばN-51°-Wとなる。残存壁高は19～46cm。P₁～P₄は支柱穴、P₅はいわゆる貯蔵穴である。深さは床面よりP₁が47cm、P₂が45cm、P₃が55cm、P₄が64cm、P₅が35cm、P₆が41cmを測る。支柱穴は、同時期同規模の竪穴住居跡と比較すると、きわめて貧弱である。カマドは貯蔵穴脇、北壁東寄りにつくられている。袖構築材は白色粘土および山砂を主とする。煙道部長は壁より約33cmを測る。いわゆる間仕切り溝については掘形面において検出した。床はほぼ全体に硬質であった。掘形は全体に浅く、通常認められる周囲を深くする構造をとらない。周溝は掘形面においても検出することができなかった。カマド、貯蔵穴、梯

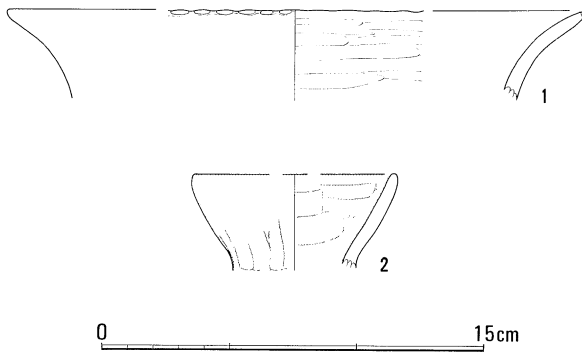


fig.52 10号遺構出土遺物実測図(1/3)

脇にまとまる傾向が認められる。11は覆土下層より出土している。

10号遺構(fig. 49・52)

竪穴住居跡。09号遺構と重複し、本遺構が切られている。建替は確認できない。竪穴平面形態は円形ないしは隅丸胴張り方形と推定される。検出部分最大幅は現状で3.59mを測る。主軸方位等は不明である。残存壁高は0～20cm、 P_1 深さ12cm、 P_2 が16cmを測る。支柱穴はもともと存在しなかったと推定される。床は貼り床が認められず軟質であった。

1は覆土下層、2は一括出土したものである。

11号遺構(fig. 53)

竪穴住居跡。西側斜面部分に位置する。北東隅のみが検出された。建替は確認できない。西側は、全体に攪乱を受けていた。竪穴の平面形態は、方形ないしは長方形と考えられる。主軸方位は南北辺を基準とした場合、ほぼ真北を示すと推定される。残存壁高は0～14cm、 P_1 は深さは29cmを測る。支柱穴はもともと存在しなかったと推定される。床は、周囲が若干深くなる貼り床構造をもつ。床面全体より焼土、炭化物が検出されており、火災を受けたと想定される。

1・2はともに床面に正立していた。4は覆土から、3は一括出土したものである。

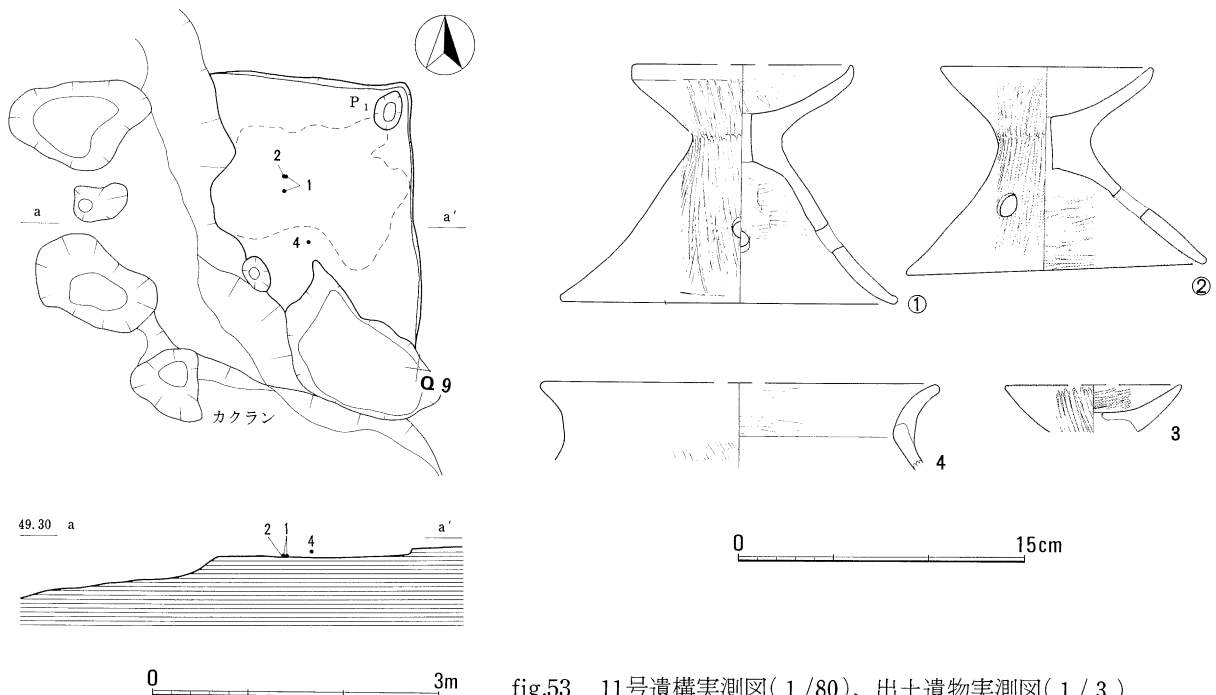


fig.53 11号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)

Ⅲ 小田部向原遺跡

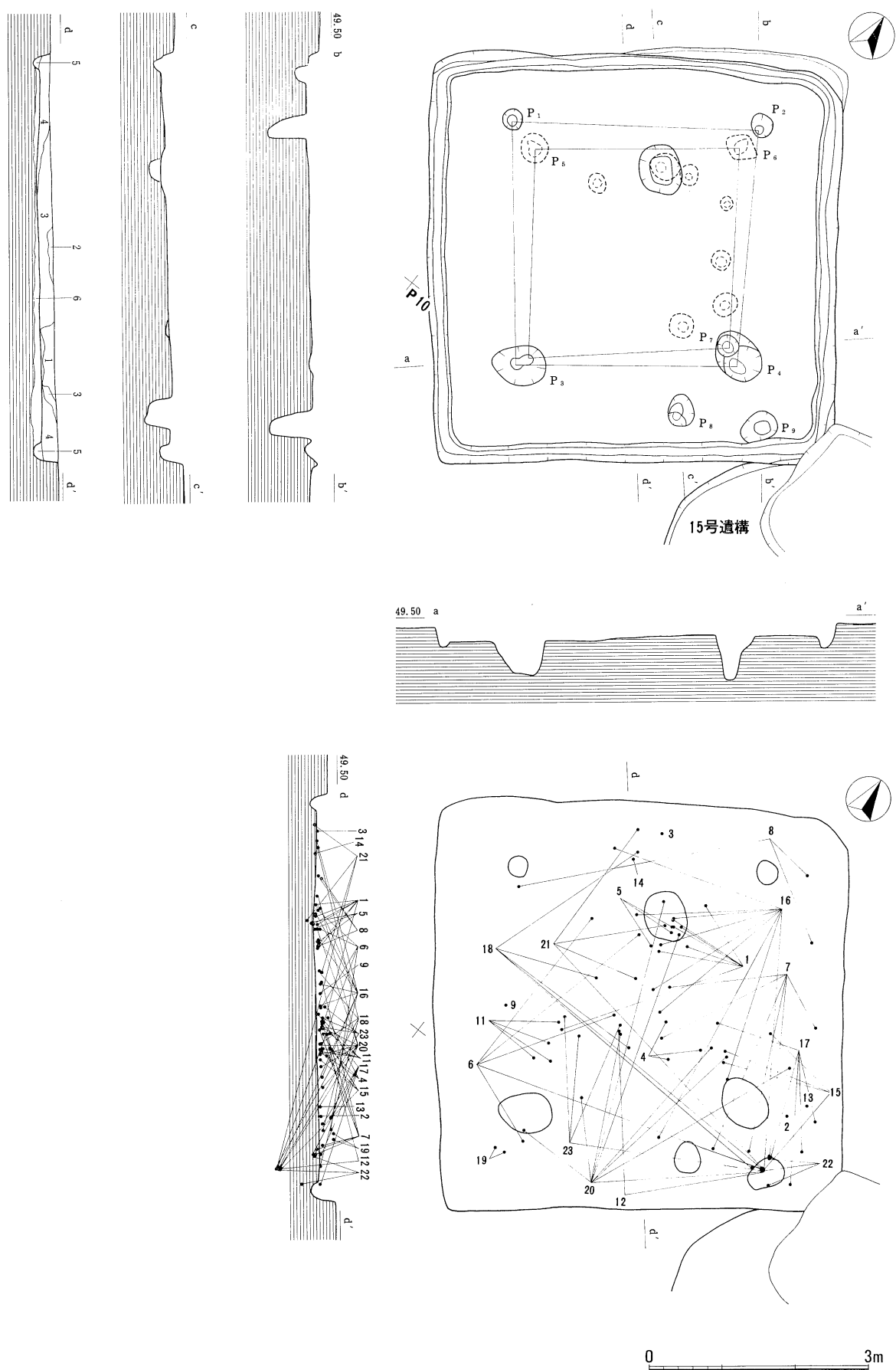


fig.54 12号遺構実測図(1/80)

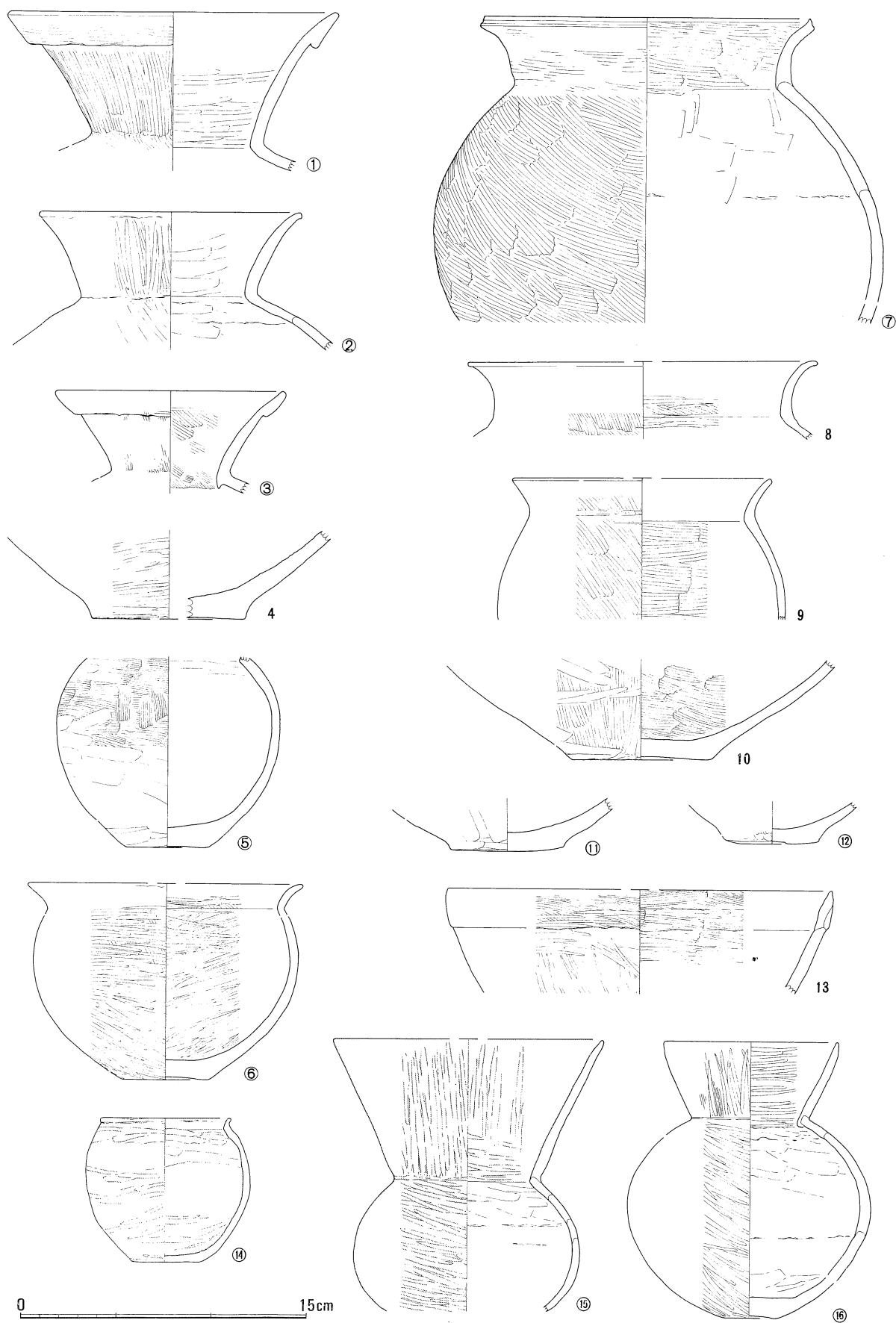


fig.55 12号遺構出土遺物実測図(1)(1/3)

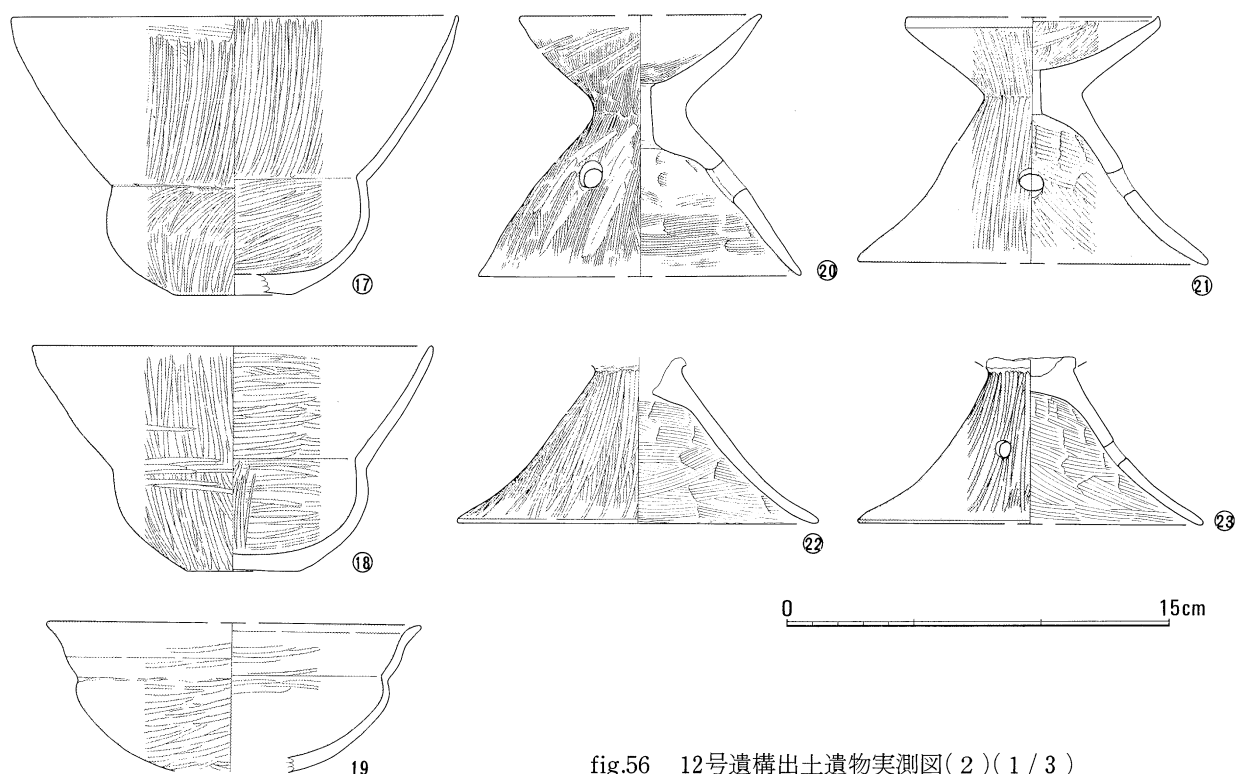


fig.56 12号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)

12号遺構(fig. 54・55・56)

竪穴住居跡。15号遺構と重複する。本遺構が新。支柱穴の重複より1回の建替えが想定される。掘形面においても拡張痕跡は認められず、おそらく同位置、同規模の建替えと考えられる。竪穴平面形態は方形であり、規模は5.60(主軸)×5.63m、確認面面積31.75㎡、床面29.71㎡、内区10.89㎡(建替え新A)、7.99㎡(建替え古B)を測る。主軸方位はN-31°-Wである。残存壁高は21~35cm。PitはP₁~P₆が支柱穴であり、Aに対応するものがP₁~P₄、BのものはP₃~P₆である。またP₈が梯子穴、P₉がいわゆる貯蔵穴と称されているものである。深さは床面よりP₁が60cm、P₂が51cm、P₃が48cm、P₄が63cm、P₅が72cm、P₆が48cm、P₇が57cm、P₈が42cm、P₉が57cmを測る。なお挿図上破線で示したものは、掘形面において確認したものであり、いずれも掘形面から10cm程度を測るにすぎない。炉は主軸線上やや北東側より検出された。68×59cmを測り、底面に若干の焼土が認められたが、底面はあまり焼けていなかった。周溝は全周する。床面は貼り床構造をもつが、全体に軟弱であった。土層は、1層が攪乱層、2層が焼土混合層、3層が斑状の褐色ブロックが認められる明黒褐色土層であり、4層が粒状の暗褐色土層、5層がローム粒、ロームブロックを混合する黒褐色土層、6層がしみ状に局部的にロームを混合する黒褐色土層である。基本的に自然堆積と考えられる。

床面レベルないしは貯蔵穴より出土したものは、1・3・5・7・11・12・15~18・20~23であるが、多くは若干床面より浮き、出土地点、接合関係もまとまりがみられない。覆土上層から出土した19および確認面で出土した10を除き、住居廃絶時ないしはそれに近接する時期に、一括投棄されたのではないと思われる。そうでなければ、遺棄されたものが、上屋崩落時に分散したのであろうか。なお、貯蔵穴より出土したものは、大半がその中層から下層にまとまっていたが、一括して取り上げたため、その出土高は厳密ではない。

13号遺構(fig. 45・46・57)

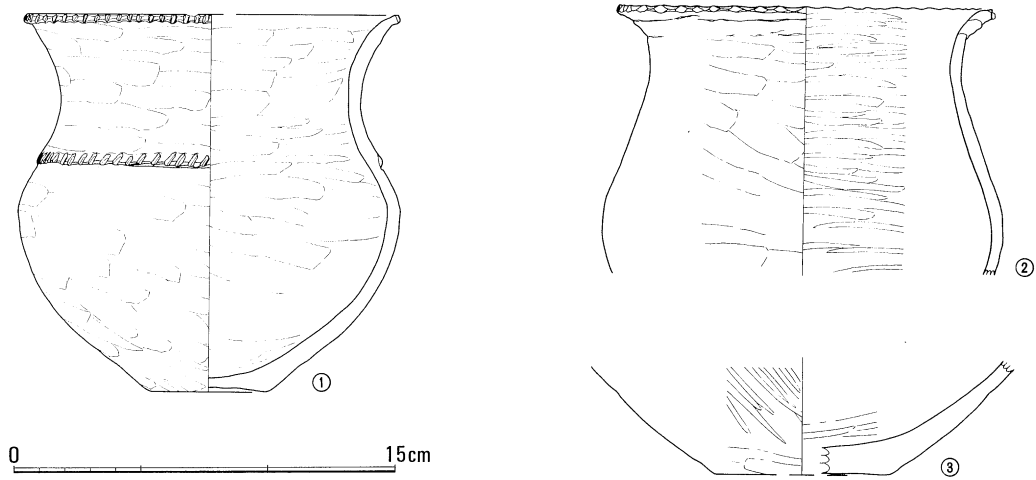


fig.57 13号遺構出土遺物実測図(1/3)

堅穴住居跡。06号遺構と重複し、本遺構が切られている。また、バックホウによる削平を受けている。建替えは確認できない。堅穴平面形態は隅丸胴張り長方形と推定される。最大幅は3.59mを測る。主軸方位はN-47°-Wである。残存壁高は0~23cmを測る。主柱穴は存在しない。周溝は検出することができなかった。炉は、57×44cm、深さ約8cmであり、底面はよく焼けていた。床は貼り床が認められず、全体に軟質であった。覆土は、自然堆積と考えられる。

1は床面から覆土、2・3は床面から出土したものである。

14号遺構(fig. 58)

堅穴住居跡。斜面部に位置する。西側は大きく削平されており、堅穴掘形、主柱穴も検出することができなかった。堅穴平面形態はやや隅丸の方形ないしは長方形と考えられる。建替えは確認できない。規模は、南北で6.24mを測る。主軸方位は南北を基準とした場合、N-10°-Wである。残存壁高は0~54cm。P₁・P₂は主柱穴であり、深さはともに57cmを測る。炉は検出することはできなかった。周溝は明確ではなかった。床は貼り床構造をもち、壁際周囲が若干深くなる。中央部を除きあまり硬質ではなかった。土層は、1・3層が粒状の褐色土層、2層は明黒褐色土層であり斑状の褐色ブロックが認められる。4層はロームブロックを多量に混合する黒褐色均質土層である。覆土は、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、2が床面より、1・5・6・8が覆土より、3・4・7は一括出土したものである。7は、面取りされた口唇部にクシによる刺突文をもつ。

15号遺構(fig. 59・61)

堅穴住居跡。12・16号遺構と重複する。本遺構が最も古。建替えは確認できない。規模は東西(主軸)が推定約4.2m、南北は4.04mを測る。確認面面積は推定値で14.6㎡前後と考えられる。主軸方位はN-44°-Wである。残存壁高は0~36cm。床面にいたる攪乱をうけ、炉を検出することはできなかった。主柱穴は存在しない。床は12層が貼り床に相当する可能性もあるが明確ではない。周溝は検出することができなかった。土層は、9層が暗褐色土層、10層が明黒褐色均質土層、11層は10層に似るがソフトロームを混合する。12層は暗黄褐色均質土層である。覆土は、自然堆積と考えられる。

遺物は、1・6が床面より、5・7が覆土より、他は一括出土したものであり、攪乱部分を含む可能性がある。

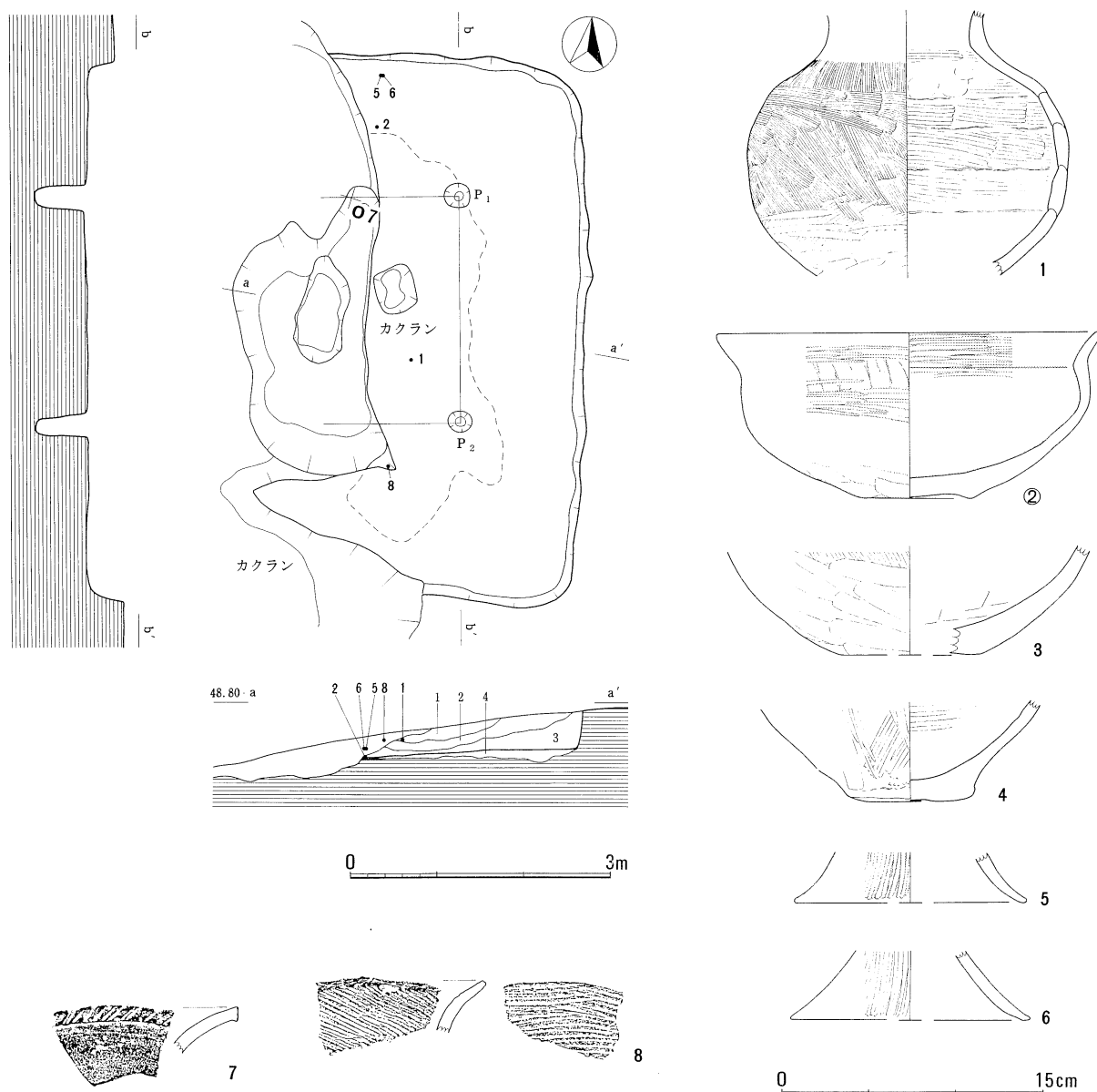


fig.58 14号遺構実測図(1/80)、出土遺物実測図(1/3)

16号遺構(fig. 59・62)

竪穴住居跡。15・17・18号遺構と重複する。本遺構が最も新。主柱穴の重複より、同位置同規模の1回の建替えが想定されるが、抜き取りによると考えられるものもある。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は5.75(主軸)×5.58m、確認面面積32.38㎡、床面29.33㎡、内区9.46㎡(建替え新A)、6.43㎡(建替え古B)を測る。主軸方位はN-55°-Wである。残存壁高は30~51cm。PitはP₁~P₆が主柱穴であり、Aに対応するものがP₁~P₄、BはP₃~P₆である。またP₇が梯子穴、P₈が貯蔵穴である。P₉については本遺構に伴うものであるか明確ではない。深さは床面よりP₁が74cm、P₂が78cm、P₃が71cm、P₄が64cm、P₅が39cm、P₆が34cm、P₇が21cm、P₈が39cm、P₉が19cmを測る。カマドは西壁中央につくられているが、上部を攪乱により削平されている。床面粘土範囲を図示。なお、カマド正面に炉状の火床が認められた。ただし貼り床硬質面上にあり、明確な掘り込みをもたない。床は貼り床構造をもつが、全体に浅く、周囲もあまり深くはならない。中央部を除き軟質であった。周溝は、掘形面

Ⅲ 小田部向原遺跡

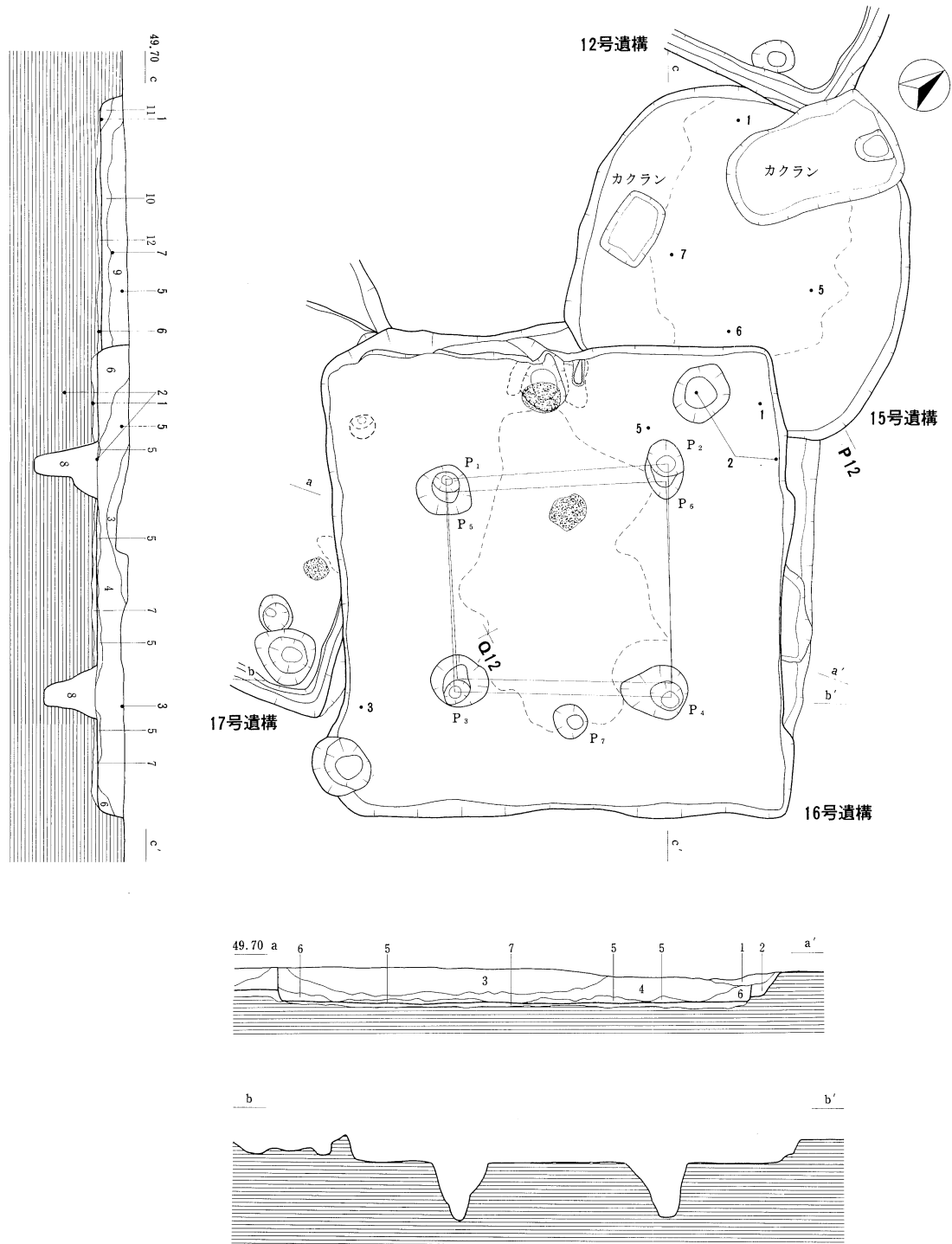


fig.59 15・16号遺構実測図(1/80)

0 3m

においても検出することができなかった。土層は、1層が攪乱層、2層がソフトローム層であり掘りすぎ。3層が粒状の黒褐色土層、4層が明黒褐色土層であり斑状の褐色ブロックが認められる。5層はロームブロックを全体に混合する暗黄褐色土層、6層は明黒褐色土層、7層はロームブロックを局部的に混合する黒褐色土層、8層は柱穴掘形部分であり未実測。覆土は、基本的に自然堆積と考えられる。

III 小田部向原遺跡

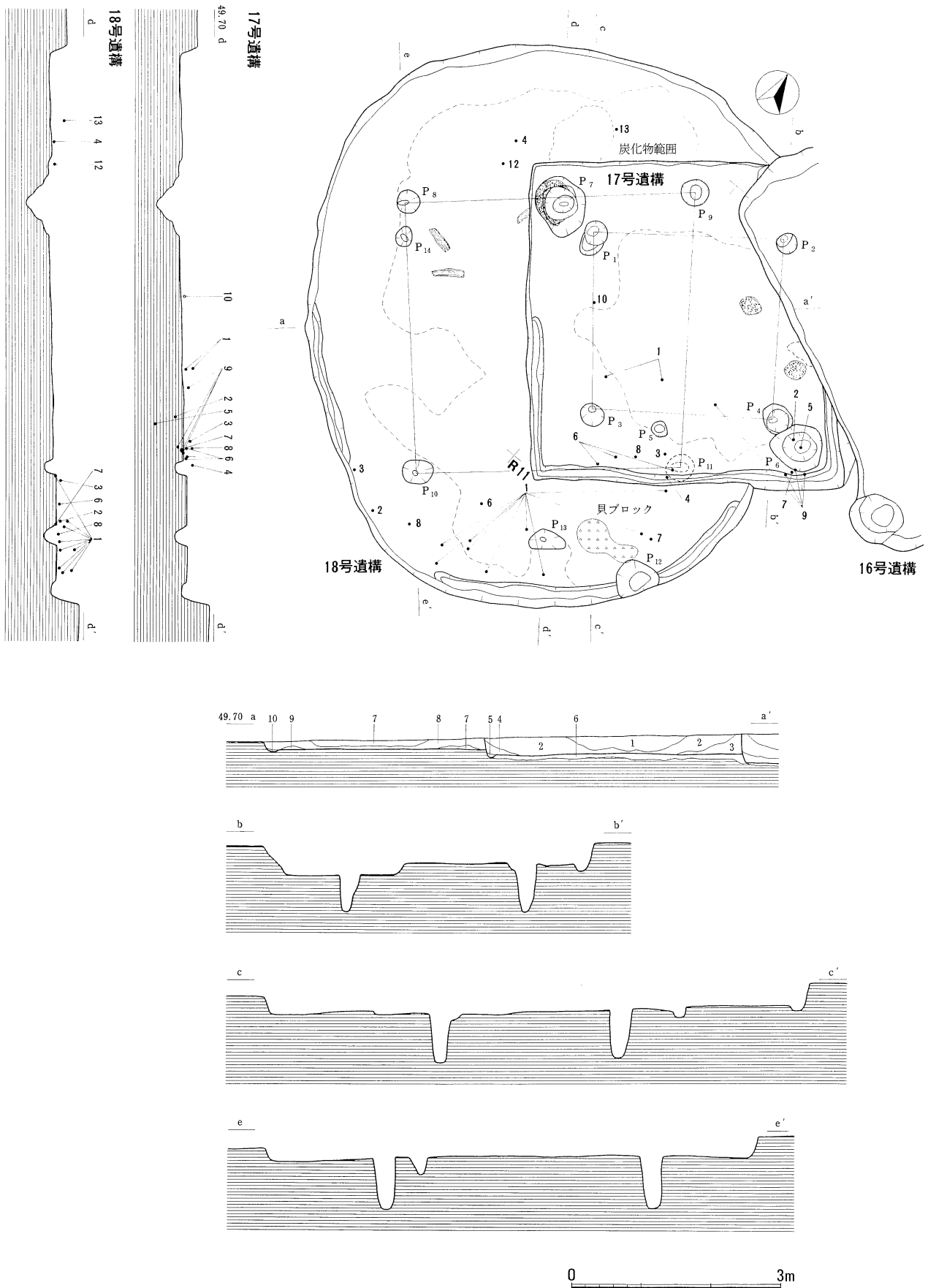
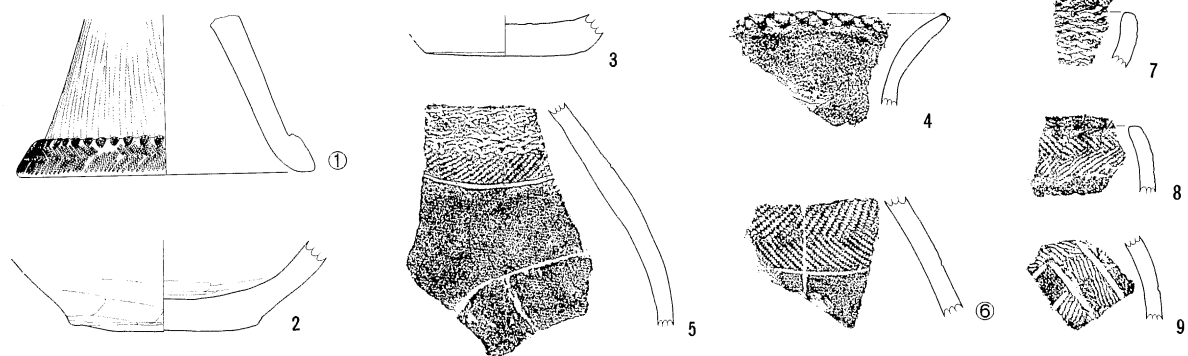


fig.60 17・18号遺構実測図(1/80)

Ⅲ 小田部向原遺跡

15号遺構



18号遺構

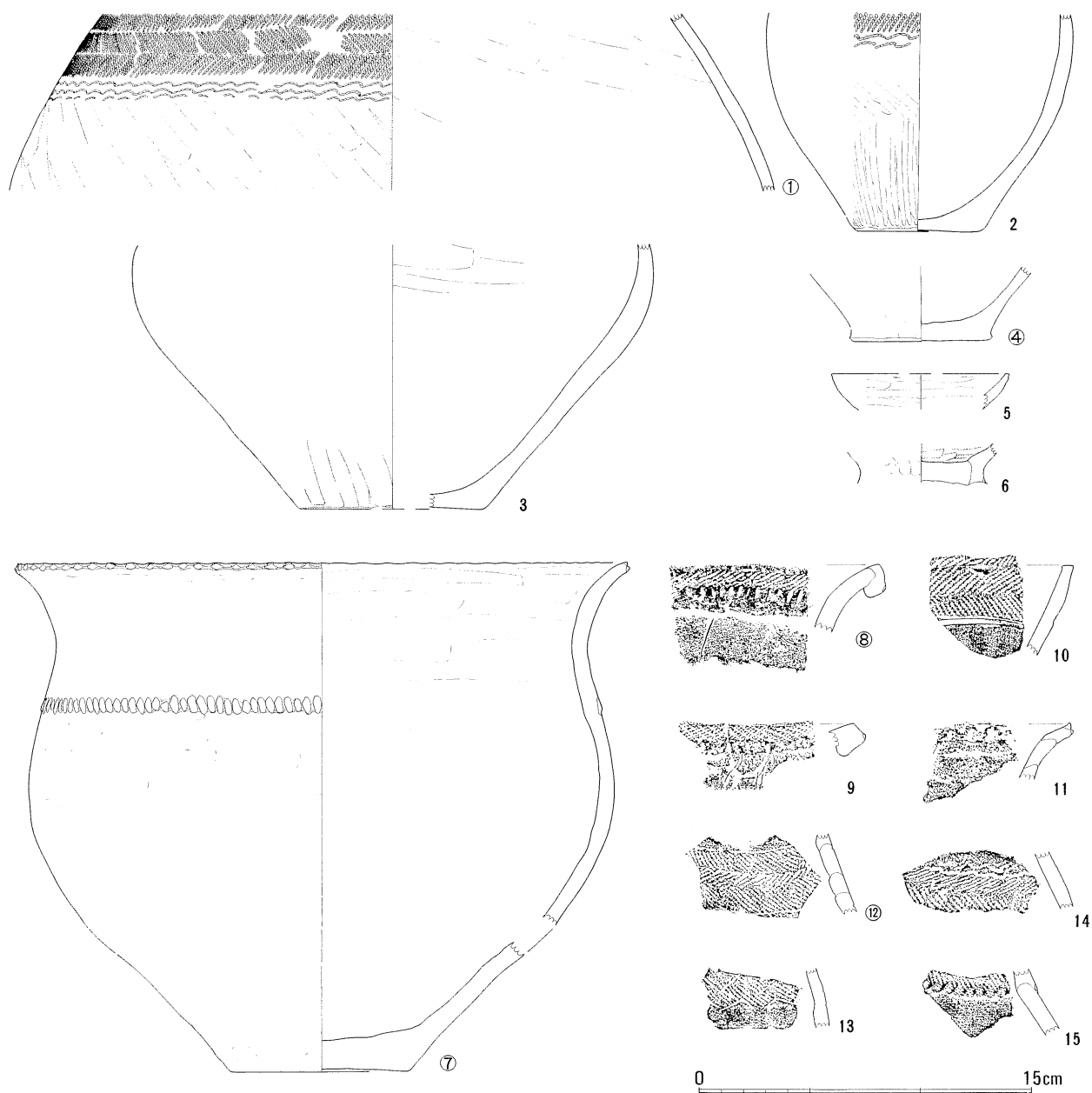
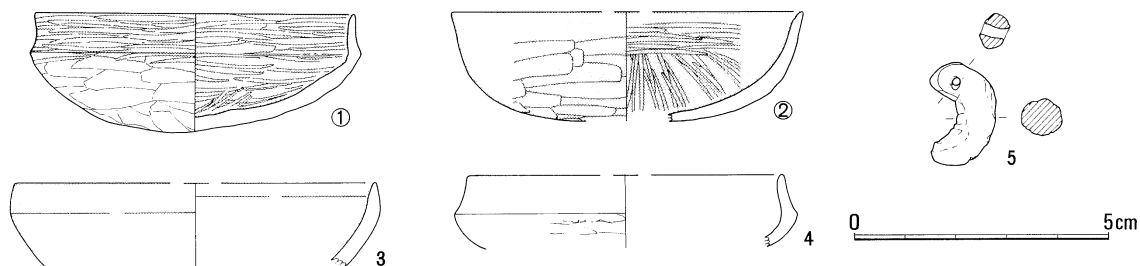


fig.61 15・18号遺構出土遺物実測図(1 / 3)

16号遺構



17号遺構

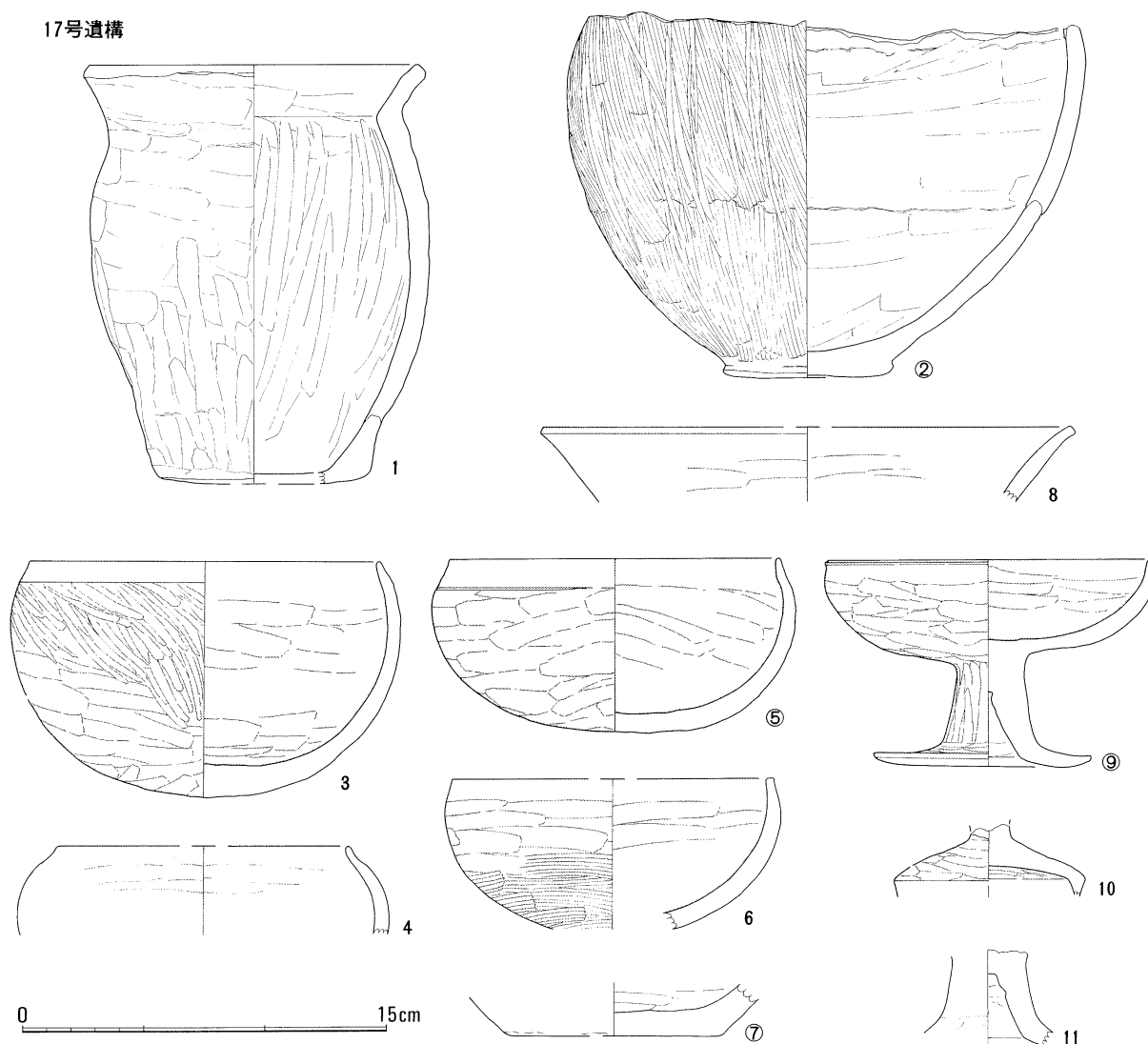


fig.62 16・17号遺構出土遺物実測図(1/3)

遺物は、1が床面より、2が床面から貯蔵穴覆土より、3・5が覆土より出土したものである。4は、一括出土。5は、土製の勾玉であり、器面は指ナデ調整により、色調はにぶい橙色である。最大長2.03cm、重さ1.30gを測る。

17号遺構(fig. 60・62)

竪穴住居跡。16・18号遺構と重複。18号遺構を切り、16号遺構より古。建替えは認められない。竪穴平面形態は方形であり、規模は4.47(主軸)×4.67m、確認面面積は約21.35㎡、内区7.02㎡を測る。

主軸方位は、カマドを基準とした場合N-58°-E、P₅を梯子穴とし、入口を南側に想定した場合N-32°-Wとなる。残存壁高は0~37cm。PitはP₁~P₄が支柱穴であり、P₆・P₇が貯蔵穴であろうか。P₇は18号遺構の炉を切っている。深さは床面よりP₁が71cm、P₂が52cm(16号遺構床面より)、P₃が67cm、P₄が70cm、P₅が12cm、P₆が42cm、P₇が34cmを測る。貯蔵穴の平面規模はP₆が75×67cm、P₇が径48cmを測る。カマドは16号遺構により破壊されていることもあり、全体に遺存状態は不良であった。火床面および袖の基部一部が北東壁際に認められたにすぎない。また16号遺構同様炉状の施設が認められた。これも明瞭な掘り込みをもたない。周溝は南東辺、北東辺および南西辺の一部で検出された。床は貼り床構造をもち、壁際周囲が深くなる傾向が認められる。土層は、1層がロームを多量に混合する暗黄褐色土層であり、あるいは整地にとまなう攪乱層の可能性もある。2層は明黒褐色土層であり斑状の褐色ブロックが認められる、3層は粒状の暗褐色土層、4層は黒褐色均質土層、5層はローム粒を多量に混合する明黒褐色土層、6層はローム粒を多量に混合する明黒褐色土層である。基本的に自然堆積によると考えられる。

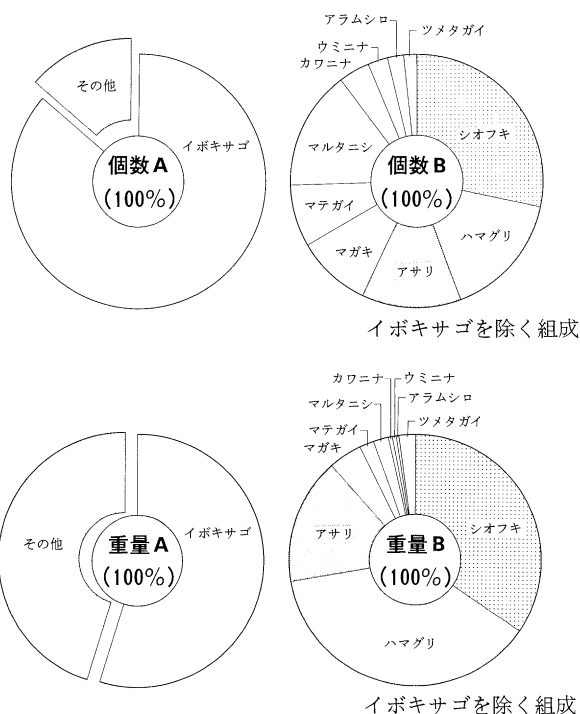
出土遺物のうち2・5・7・9はP₆覆土ないしは、その周辺床面より出土している。1・3・4・6・8・10は覆土からの出土である。

18号遺構(fig. 60・61)

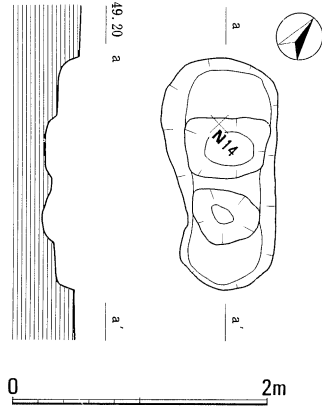
堅穴住居跡。16・17号遺構と重複。本遺構が古。堅穴平面形態は楕円形を呈す。建替えは確認できない。規模は8.05(主軸)×約7.1m、確認面面積は約48.7m²、内区16.1m²を測る。主軸方位はN-32°-W、残存壁高は0~38cm。PitはP₈~P₁₁が支柱穴であり、P₁₃が梯子穴、P₁₂が貯蔵穴と考えられるが、P₁₂は周溝と重複する。深さは床面よりP₈が76cm、P₉が59cm(17号遺構床面より)、P₁₀が73cm、P₁₁が84cm、P₁₂が72cm、P₁₃が19cm、P₁₄が28cmを測る。炉は17号遺構P₇と重複し破壊されている。ほぼ径

tab.10 18号遺構貝ブロック組成

貝 種	個 数	組成(%)	重量	組成(%)
シオフキ	76	3.7(28.5)	380.0	16.2(34.6)
ハマグリ	44	2.1(16.5)	420.0	18.0(38.2)
アサリ	35	1.7(13.1)	180.0	7.7(16.4)
マガキ	26	1.3(9.7)	50.0	2.1(4.5)
マテガイ	18	0.9(6.7)	20.0	0.9(1.8)
イボキサゴ	1,788	87.0(—)	1,240.0	53.0(—)
イボキサゴ(稚貝)	(30)	—	—	—
マルタニシ	40	1.9(1.50)	18.7	0.8(1.7)
カワニナ	11	0.5(4.1)	3.7	0.2(0.3)
ウミナ	8	0.4(3.0)	2.3	0.1(0.2)
アラムシロ	5	0.2(1.9)	1.4	0.1(0.1)
ツメタガイ	4	0.2(1.5)	23.6	1.0(2.1)
小 計	2,055(267)	100(100)	2,339.7 (1,099.7)	100(100)
オカチョウジガイ	22	—	—	—
フジツボ	4	—	—	—
総 計	2,081	—	—	—
貝ブロック乾燥後全体重量			16,020.0	100
貝総重量			4,685.7	29.2
土壌重量			11,334.3	70.8



組成()%はイボキサゴを除く
二枚貝個数・重量は左右一方の値



約60cmを測り、周囲はよく焼けていた。また炉北側には炭化物、灰の分布が認められる。これとは別に、床面上には焼土、炭化物の堆積がみられ、火災が想定される。床は全体的に硬質であったが、貼り床ではない。周溝は、南壁際に断続的に認められた。土層7層は暗褐色均質土、8層は焼土、炭化物をブロック状に混合する黒褐色土層、9層は粒状のロームを混合する焼土層、10層は暗黄褐色土層である。

出土遺物は、1・4・7・8・12が床面より、2・3・6・13が覆土より出土している。5・9・10・11・14・15は、一括出土である。7は、ほぼ完存と考えられたが、器壁が脆く全体を復原するにいたらなかった。また床

fig.63 19号遺構実測図(1/60)より5cmほど浮き、貝ブロックが認められた(tab. 10)。

19号遺構(fig. 63)

土坑。01号遺構円丘部内にある。規模は、1.84×0.92m、主軸方位はN-39° -Wである。深さはPit部分を除き最大23cmを測る。北側Pitは10cm、南側Pitは12cmである。覆土は黒褐色均質土であった。縄文時代の所産であろうか。

tab.11 小田部向原遺跡堅穴住居跡一覧表

(m, m²)

遺構	時期	主軸×副軸	面積			主軸方位	主柱穴	カマド	炉	貯蔵穴	備考
			確認面	床	内区						
02	II	(5.17)×4.84	(24.43)	(22.24)	8.20	N-38° -W	○	×	○	—	01号遺構と重複。01号より古。
03	I	4.93×5.69	23.08	20.79	—	N-70° -W	○	×	○	○	
04A	I	6.73×6.03	35.30	31.99	9.71	N-64° -W	○	×	○	○	同位置同規模での建替えか。
B	—	—×—	—	—	9.08	(N-64° -W)	○	×	—	—	
05	I	3.40×—	—	—	—	—	○	×	○	—	
06	IV b	4.87×5.05	23.98	21.18	5.18	N-11° -W	○	○	×	○	13号遺構と重複。13号より新。
07	I	(4.25)×—	—	—	—	—	×	×	—	△	01・08号遺構と重複。01・08号より古。
08	II	(3.95)×—	—	—	—	N-44° -W	○	×	—	—	07号より新。直接重複していないが01号開口部にあたる。
09	IV a	7.68×7.77	60.20	56.44	15.11	N-39° -E	○	○	×	○	10号遺構と重複。10号より新。
10	II	(3.59)×—	—	—	—	—	×	×	—	—	09号遺構と重複。09号より古。
11	III	—×—	—	—	—	(N-1° -W)	×	×	—	△	
12A	III	5.60×5.63	31.75	29.71	10.89	N-31° -W	○	×	○	○	同位置同規模での建替えか。15号遺構と重複。15号より新。
B	—	—×—	—	—	7.99	(N-31° -W)	○	×	—	—	
13	I	—×3.59	—	—	—	N-47° -W	×	×	○	—	6号遺構と重複。6号より古。
14	III	6.24×—	—	—	—	(N-10° -W)	○	×	—	—	
15	I	—×4.04	(14.6)	—	—	(N-44° -W)	×	×	—	—	12・16号遺構と重複。12・16号より古。
16A	IV b	5.75×5.85	32.38	29.33	9.46	N-53° -W	○	○	○	○	同位置同規模での建替えか? 15・17・18号遺構より新。
B	—	—×—	—	—	6.43	(N-53° -W)	△	—	—	—	抜き取り穴か。
17	IV a	4.47×4.68	(21.35)	(20.44)	7.02	N-58° -E	○	○	○	○	16・18号遺構と重複。16号より古、18号より新。
18	I	8.05×(7.10)	(48.70)	(45.45)	16.10	N-32° -W	○	×	○	△	16・17号遺構と重複。16・17号より古。

()現在値

()推定値

時期 I 期 久ヶ原式期 IV a 期 鬼高式期
II 期 鴨居上ノ台式期 IV b 期 鬼高式期
III 期 五領式期

Ⅲ 小田部向原遺跡

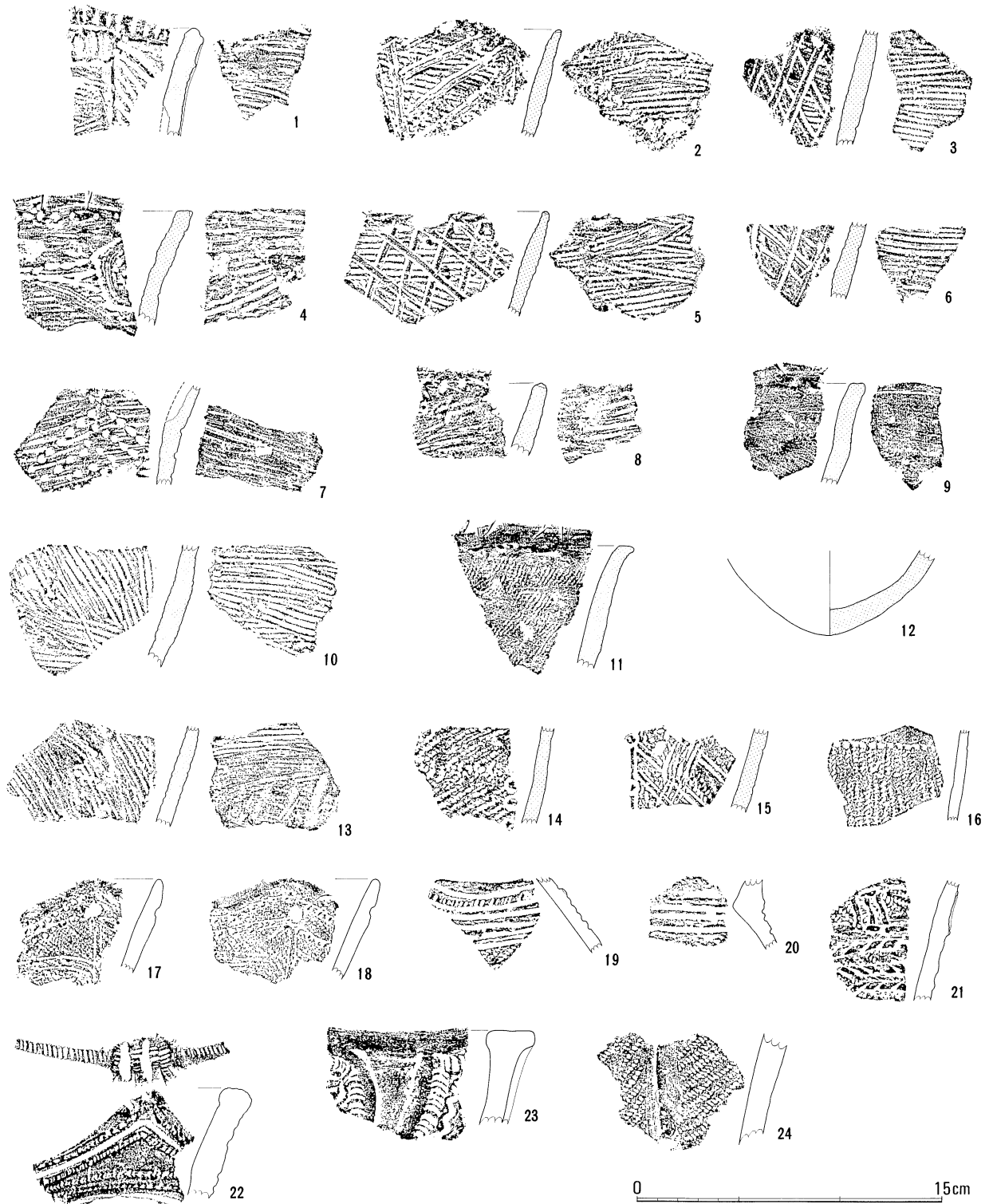


fig.64 遺構外出土遺物実測図(1 / 3)

4 確認遺構と遺構外出土遺物

調査対象地東側、確認調査部分では、竪穴住居跡13軒分が検出されている。全体に攪乱が著しく、斜面部側には土を押し出している。本来これ以上に存在したものと思われる。また、確認された各竪穴住居跡は全体に大形であり、あるいは重複を含む可能性もある。このうち、A1・A3・B2号遺構

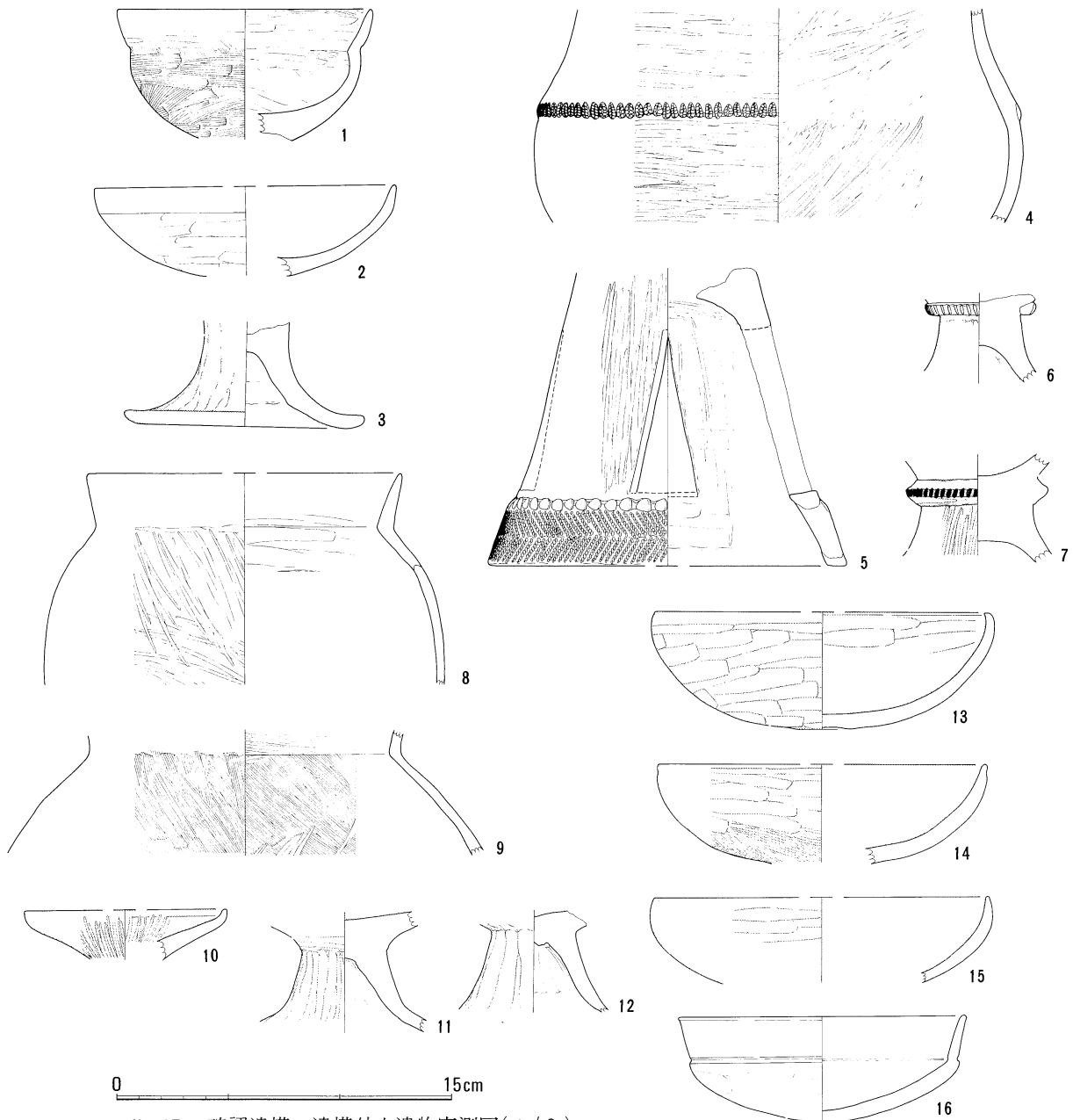


fig.65 確認遺構、遺構外土遺物実測図(1/3)

(1、A3号遺構 2、A1号遺構 3、B2号遺構 4～16、表土・カクラン)

確認面より土器が出土している(fig. 65)。これらから判断するかぎりでは、本調査遺構と時期的に大きく異なる遺構は認められない。なお、調査範囲南側に隣接して古墳状の高まりが存在する(fig. 29)が、周溝は明確ではなかった。ただし、西側のものについては、竪穴住居跡等の重複によりやや不明確である。

fig. 64は、縄文土器であり、1～12は早期条痕文系、13～15は前期前半、16～18・21は前期後半に比定される。19・20もこの段階のものであろうか。22は中期五領ケ台式、23は阿玉台式、24は加曽利E式と考えられる。遺跡内における分布は全体に散漫であった。

fig. 65は、弥生土器、土師器である。このうち5は、孔数は不明であるが、長三角形ないしは台形の透孔をもつ。久ヶ原式内においても散見することが可能ではあるが、その出自は中部高地であろうか。

5 小 結

今回の調査によって、不完全ではあるが、小田部向原遺跡01号遺構、小田部墳丘墓(「小田部古墳」)の概要を確認することができた。遺物については、確実に01号遺構に帰属すると断定できる資料を追加することはできなかったが、周辺部における調査の結果、集落を含めた小田部向原遺跡としての変遷過程を問題とすることが可能となった。堅穴住居跡は、編年的には、久ヶ原式の新段階期⁽⁶⁾から弥生時代終末期鴨居上ノ台式期、五領1式期と連続するが、実際の継続性を想定した場合、各段階は断続的である可能性が考慮される。小田部墳丘墓は、堅穴住居跡02・07・08号遺構と重複関係をもち、これらに後出するが、堅穴住居跡02号遺構とは、形式的には同時期であると判断される。

02号遺構出土土器は、基本的に無文化しているものの頸部内面に稜をもたない。5の口唇部押捺は1方向からであり、交互押捺ではない。また、4の頸部の収縮の弱い壺形土器の器形は、佐倉市上座矢橋遺跡⁽⁷⁾などにみることができる、臼井南式に後出しこれからの在地的な系譜を想定すべきであろうか。9の台付甕形土器脚接合部の粘土紐の付加は、静岡県に比較的類例が認められるものである。

おそらくこの段階の集落を前提として、小田部墳丘墓が出現すると考えられる。その後、堅穴住居跡12号遺構を基準とする段階の集落が展開するが、12号遺構出土土器は、食卓用土器が所謂小形丸底埴(鉢)形土器にほぼ集合化し、そのなかで機能分化が明確化する段階にあたり、五領1式においても後出する段階と考えられる⁽⁸⁾。これ以外の五領式期の堅穴住居跡は出土土器に限られており、かならずしも明確ではないが、12号遺構出土土器を基準とするならば、小田部墳丘墓とは時期的に若干断続する可能性が高い。

1968年調査出土土器のなかで、墳頂部出土高杯形土器は、現状の東海地方西部の編年によるならば、元屋敷式新段階、廻間Ⅱ式に比定されると考えておきたい⁽⁹⁾。これは、当該地の編年における、鴨居上ノ台式(前野町式)と基本点において対応する。細部における枠組みとしての併行関係については、具体的な根拠に乏しく、感覚的な部分に踏み込むおそれがあり問題とはしない。

高杯形土器1・2は、杯部立ち上がりが内向し深い点が古相を示す。1の文様構成は、杯部がヘラ先による山形文3段、平行線文3段、脚部が山形文2段、平行線文3段から構成される。平行線文は、杯部口唇部側から8本/0.94~1.1cm、7本/0.85~0.9cm、6本/0.8~0.9cm、脚部は端部から8本/1.0cm、9本/0.7~0.9cm、7本/0.53~0.7cmである。山形文をみる限りでは、杯部は上からみて半時計回転、脚部は時計回転に施文される。2の杯部の文様構成は、ヘラ先による山形文2段、平行線文2段であり、平行線文は、杯部口唇部から9本/1.05~1.13cm、10本/1.0~1.22cmである。山形文は、上からみて半時計回転に施文される。また3は、ヘラ先による山形文3段、平行線文3段であり、平行線文は、脚部端部から7本/1.1~1.15cm、7本/1.15cm、5本/0.95~1.0cmである。山形文は、上からみて半時計回転に施文される。4は、ヘラ先による山形文2段、ヘラ先による横羽状文1段、平行線文4段であり、平行線文は、脚部端部から3本/0.38cm、3本/0.35cm、3本/0.35~0.4cm、12本/2.1cmである。山形文は、上からみて半時計回転に施文される。これらの平行線文は、ピッチが安定せず、断続部は1単位においても一定の場所で認められないように思われる。施文具は、クシではなく、1本の棒状工具ないしはヘラ先によって施文されたのではないかとと思われる部分が見うけられる。なお、全体の施文順序は、平行線文に対して山形文が先行するのではないかとと思われる。

が、全体としては確定できない。また器面ミガキは、施文に先行して施される。9も1・2と同形式と考えられる。また、5・6の平行線文は、きわめて不明瞭であり、凹部は認められず、光沢によって確認できるにすぎない。6は、大振りの深い杯部をもつと考えられ、在地における同形式の高杯形土器では相対的に古相を示す。しかし、当該地域のこの段階の高杯形土器と比較すると、底部が平坦であり、これは後出する特徴である。脚部形態、施文を含め、やはり東海的といえよう。杯部下端に稜をもつ高杯形土器の系譜は、東海地方からの影響を当然考慮しなければならないが、同時に在地においては、久ヶ原式における椀状の杯部をもつ高杯形土器があり、相互の形式的な結合によって成立し、型式変化をとげる。直接東海地方、畿内地方と対比する場合には注意が必要である。なお、3について清水芳裕氏により、含有岩石鉱物による胎土分析が行われているが、その結果は「在地の土器」であるという⁽¹⁰⁾。私見でも、東海地方西部からの直接の搬入品はないように思われる。

小田部向原遺跡全体としての変遷過程、および小田部墳丘墓墳頂部出土高杯形土器群を基準として、あらためて小田部墳丘墓の他の出土土器を検討すると、今回の調査による出土土器のなかで23・31・76・84は、型式的には墳頂部出土高杯形土器群と対応すると判断される。23はこの段階の食卓用土器の一形式であり、いわゆる小形丸底埴(鉢)形土器に先行する。口縁部高の低い器形は、直接庄内式との対比が可能であるかもしれない。31は無文であること、またその胴部の張る器形から久ヶ原式に後出する。また、76は帯縄文を地文としてその上に鋸歯文を描く、この段階の「装飾壺」の基本的な文様構成をもつ。ただし、23は、その出土層位からみても、竪穴住居跡02号遺構からの流れ込みを考慮する必要があるし、他も破片資料であり、少なくとも小田部墳丘墓の供献土器とは考えにくい。これらに対して、24・29・32などは、竪穴住居跡12号遺構の段階に比定されると考えられる。24については、12号遺構-14と酷似する。

また、1968年調査7・13・19・20・21は、12号遺構出土土器の段階の所産であると考えなければならない。ただし、7・13は、前報告では、周溝底近くからの出土であるという。13については、他に類例が少なく、系譜を確認することはできないが、やはり12号遺構-14との対応を想定すべきであろう。なお、7については、田中新史氏の当時の調査メモによると周溝底面から10cm程度浮くという。甕形土器20・21は、口唇部が丸くおさまリ、頸部内面に明確な稜をもつ。これに対して、22は墳頂部高杯形土器と時期的に対応する。出土位置は墳頂部であるというが、高杯形土器群との位置関係は不明である。また、今回実物を確認することができなかった。

鴨居上ノ台式の甕形土器は、久ヶ原式系譜の胴部段部を器形変化にともない口頸部に限定したものを基本型とし、新要素を加えていく。後接する五領式を指標とすると、主要要素の変化は、口唇部押捺・刻目(新出)→無文口唇部面取り→無文口唇部丸、ヘラナデ整形→ハケ整形、口頸部胴部段部消失、頸部内面有稜化であるが、これらは個体によって選択され、かならずしも一致した変化を示さない。南関東地方においても、ハケ台付甕形土器地域が弥生時代後期から漸移的に五領式に移行するのに対して、その周辺地域では急速な型式変化をとげる一方で、その過渡期はさまざまな要素が取捨選択され、流動的である。たとえば北陸系の甕形土器を多量に出土する市原市中台遺跡⁽¹¹⁾、タタキ整形甕形土器を多量に出土する佐倉市大崎台遺跡⁽¹²⁾、あるいは養老川中流域、市原市土宇遺跡⁽¹³⁾、市原市南岩崎吉野遺跡⁽¹⁴⁾など、前後の脈絡を欠き、ハケ台付甕形土器が主体的に出現する遺跡があるように、五領式への移行は跛行的である。石田川式では、S字状口縁台付甕形土器が一律的に選択されるが、こ

これは、当該地域における他地域との交流の活発化が、北関東に対して一段階はやく開始されることによると思われる。おそらく庄内式併行期においては、交通が地域的により不安定かつ多様であり、また後期をとおして東海地方との恒常的な交通をもつハケ台式甕形土器地域(弥生町式)に対して、それはきわめて急激なものであったと考えられる。その中で、受動的な選択がおこなわれたと思われる。いずれにせよ、たとえばハケ整形の有無といった一点をもって新古を問題とすることには慎重である必要がある。ただし、予測として、頸部内面有稜化が明確化する段階には、他の要素の変化も基本的に達成される傾向があり、またその段階は、前野町式から五領式への変化に対応する。なお、タタキ整形土器については、その当初から有稜化が認められる。

器形変化については、現状の作業方法では、具体的な基準を与えにくいと考えられ、まず可能な限り、定性的な、あくまでも分類可能な特徴をもって基準とする必要があると考えている。また、現状の編年研究では、型式分類があいまいなまま、形式構成が優先される傾向がある。これは、本来不完全な集合からなる一括遺物に対して有効性が乏しいと考えざるをえない。大きくなる小さくなる、多くなる少なくなるといった基準にならない傾向ではなく、分類そのものを機械的に単純化する必要があろう。それが今後の統計的な前提となる。そろそろ編年研究そのものが見直されなければならない時期にさしかかっている。

小田部墳丘墓は、型式的には、神門墳丘墓群と同時期と考えることができる。直接的な新古については、小田部墳丘墓の出土土器の絶対量と器種構成が不足しており、明確な判断基準がない。周溝形態からは、小田部墳丘墓周溝は方形周溝墓的ではあるが、神門墳丘墓群とは質的な格差を考慮する必要もある。正式報告をまって、あらためて検討しなければならないであろう。

小田部墳丘墓は、その後、累積的な埋葬、墓域としての展開も認められず、祭祀の継続性も確認できない。そして時間幅をおかずまた集落が出現する。弥生時代においてしだいに明確化する首長墓は、首長墓自体が地点をかえ、地域的に断続するのに対して、その周辺部に同時期の従属的埋葬が付属する。前述した滝ノ口向台墳丘墓群もそうであるし、福岡県津古生掛墳丘墓⁽¹⁵⁾、あるいは古墳時代前期における福井県安保山2号墳⁽¹⁶⁾もその例である。また、方丘系墳丘墓の場合、付属埋葬は首長家族員をこえる範囲が集合する可能性があるが、埼玉県広面遺跡⁽¹⁷⁾、中耕遺跡、あるいは市原市草刈遺跡でも99号跡を中心とした配列が確認できる⁽¹⁸⁾。愛知県朝日遺跡⁽¹⁹⁾、東京都神谷原遺跡⁽²⁰⁾は、地点をかえ移動する首長墓と、墓域自体の変遷過程を明瞭に説明してくれる。この段階の従属的埋葬は首長個人を中心とし、世代単位に完結しているのではないかも知られるのである。これは、後期における古墳群構造と明らかに異なる点である。そのなかで、時期的な累積がみとめられる長野県森將軍塚古墳⁽²¹⁾はいわば萌芽的といえようか⁽²²⁾。

小田部墳丘墓は、小田部向原遺跡における鴨居上ノ台式期の集落を前提とするならば、基盤そのものが貧弱であるといえよう。

註

- (1) I 章註(3)
- (2) I 章註(4)
- (3) I 章註(4)
- (4) I 章註(4)
- (5) I 章註(6)
- (6) 本書における編年は下記による。現状では型式名の使用方法は混乱した状況にあり、型式名自体が消滅しつつある。今後新しい型式名を含めて再検討したい。
大村 直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式 南関東地方における弥生時代後期の諸様相(予報)」『史館』第16号
株式会社弘文社
- (7) 末武直則 1986『千葉県佐倉市第2 ユーカリケ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書 上座矢橋遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第4集 山万株式会社
- (8) I 章註(32)
- (9) 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- (10) 清水芳裕 1984「古墳時代初頭～前期土器の胎土分析」『千葉県文化財センター研究紀要』8
- (11) 比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会
- (12) 柿沼修平ほか 1985『大崎台遺跡発掘調査報告 I』佐倉市大崎台遺跡B地区遺跡調査会
- (13) 柿沼修平ほか 1979『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告 6
- (14) 清藤一順・大村 直 1988「吉野 1 号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会
- (15) 宮田浩之ほか 1987『津古生掛遺跡 I』小郡市文化財調査報告書第40集
- (16) 青木豊昭ほか 1976『安保山古墳群』福井県教育委員会
- (17) 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集
- (18) I 章註(34)
- (19) 石黒立人ほか 1987「朝日遺跡」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報昭和61年度』
- (20) 大村 直ほか 1981『神谷原 I』八王子市教育委員会
- (21) 矢島宏雄ほか 1981～1988『森將軍塚古墳 保存整備事業第1～8年次発掘調査概報』更埴市教育委員会
- (22) 大村 直 1989「考古学における家族論の方向」『史館』第21号 株式会社弘文社

Ⅲ 小田部向原遺跡

tab.12 小田部向原遺跡出土土器觀察表

遺構番号	構図	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	出土位置	現存量	胎土	焼成	色調(外)	(cm)		容量A	容量B	
											口径	最大径			
01	1	弥生土器	高杯	ヘラナデののちミガキ。杯部整形痕不明瞭。杯部施文方向(左右)。脚部(右左)。	杯部ミガキか。脚部ヘラケズリ、ヘラナデ。小孔上2孔下2対4孔。	墳頂部	杯部2/3、脚部3/4欠	ABC>DE	良好	にぶい赤褐色 橙色	9.9 11.0	(19.0)	270 280		
	2	弥生土器	高杯	ヘラナデののちミガキ。杯部整形痕不明瞭。杯部施文方向(左右)。山形文のち平行線文か。	杯部ミガキか。脚部小孔1対2孔。ヘラナデか。脚部小孔1対2孔。	墳頂部	杯部上半2/5、脚部下半欠	ABC>DE	良好	にぶい赤褐色	8.8 (8.2)		180 167		
	3	弥生土器	高杯	整形痕不明瞭、平滑。山形文ののち平行線文か。施文方向(左右、反時計回転)。	ヘラナデか。	西周溝 墳頂部	5片、3片接合	AC>BDE	良好	にぶい黄褐色 褐灰色	(1.9)	(20.0)			
	4	弥生土器	高杯	整形痕不明瞭、平滑。平行線文、山形文、横羽状文。施文方向(左右、反時計回転)。	ヘラナデか。	墳頂部	4片、3片未接合	ABCDE	良好	暗赤褐色 にぶい橙色	(1.6)	(20.4)			
	5	弥生土器	高杯	杯部ヘラケズリ(下上)ののちナデ?。脚部現存部で4条のクシ?による条線。全体に磨滅。	杯部平滑、ミガキか。脚部シボリ痕。	南周溝	脚接合部のみ	AB>㊥	良好	橙色	(3.4)				
	6	弥生土器	高杯	器面磨滅。脚部ミガキか。平行線文5条。小孔3孔。口縁部未接合。	器面磨滅。整形痕不明瞭。脚部シボリ痕。	墳頂部	脚部上半全周	ABE>D	良好	にぶい赤褐色	(10.7)	(10.4)			
	7		器台	器受部ハケ、ヘラナデ。器受部下半〜脚部ケズリ状のヘラナデ。ミガキを加えている可能性。	器受部ミガキ状のナデ。脚部ハケ。小孔上4孔。下1孔のみ確認。	西周溝	脚部下半5/6欠	E>AB	良好	灰赤色 にぶい黄褐色	7.2 7.9	(13.8)	40 25		
	8		高杯	口唇部面取り。ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	墳頂部	杯部1/6周	A>BCE	良好	赤褐色 橙色	(20.2) (4.5)				
	9		高杯	平滑、ミガキか。	磨滅。	墳頂部	杯部下半1/5周	A>BC	良好	灰黄褐色 黄褐色	(2.15)				
	10		高杯	器面状態不良。ミガキ。ナデの可能性。赤彩。	杯部器面状態不良。ミガキか。赤彩。	西周溝	脚接合部全周	AB	良好	橙色 にぶい橙色	(3.65)				
	11		台付甕	脚台部接合部より上下ヘラナデ。	ヘラナデ(右左)。	南周溝	脚接合部のみ	E>AB	良好	にぶい黄褐色	(3.2)				
	12		高杯	整形痕不明瞭。ミガキか。脚部2孔確認。	整形痕不明瞭。	墳頂部	脚部上半全周	B	良好	明黄褐色	(5.1)				
	13		土師器	ナデ整形。指ナデか。平滑。	ヘラケズリ(下上)。	南周溝	体部1/4欠、口唇部一部	㊥>AB	良好	にぶい橙色	(5.75) 6.9	7.65 5.7	140 142		
	14		土師器	口縁部指ナデ。胴部ハケ、ヘラナデ。	口縁部ハケ(右左)(11/1cm)。胴部ナデ。	南周溝	胴部上半1/6	B	良好	明赤褐色 にぶい橙色	(6.6) (3.35)	(7.8)			
	15		椀	ナデ。ミガキか。赤彩。	ナデ。赤彩。	南周溝	底部全周	㊥ACD	良好	灰褐色	(1.7)	2.95			

III 小田原市原遺跡

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径		容量A 容量B
											器	底	
01	16		壺	横方向のヘラナデ。	ヘラナデ、指ナデ。	墳頂部	底部5/6	㊶㊷㊸>C E	良好	黄橙色 灰黄橙色	(2.4)	9.5	
	17			ヘラナデか。整形痕不明瞭。	ナデ。	墳頂部	底部1/2周	A㊸	良好	にぶい黄橙色	(2.7)	6.9	
	18			底面及び底部周辺ヘラケズリ(右左)。一部にハケ。赤彩。焼成前穿孔。円形(径1.3~1.45cm)。	ミガキ。赤彩。	南周溝	底部2/3	B>A	良好	灰赤色	4.7 (2.2)		
	19	土師器	壺	ミガキ。赤彩。	口縁部ナデか。整形痕不明瞭、平滑。赤彩。胴部ヘラナデ。	南周溝	口縁部下半1/2周	ABD	良好	赤色 橙色	(6.8)		
	20	土師器	甕	ハケ(下上)(11/2cm)。口縁部はヨコナデを加える。	口縁部ハケ(右左)(11/2cm)のちヨコナデ。胴部ヘラナデ。	南周溝	口縁部1/5	ABCDE	良好	灰黄褐色 にぶい赤褐色	(19.7) (6.0)		
	21	土師器	甕	頸部より上下方向にハケ(8/2cm)。そのち口縁部中位まで強いヨコナデ。	口縁部ハケ(左右)のち口唇部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	墳頂部 西周溝	口縁部1/6周	AB>D	良好	黒褐色 にぶい赤褐色	(15.6) (4.7)		
	23	弥生土器	碗	ハケ(右左)(10/1cm)のち口縁部ヨコナデ、底部周辺および胴部一部粗いヘラナデ。赤彩。	ハケ(右左)のちヘラナデ状の粗いミガキ。赤彩。	周溝覆土 fig.31・32	ほぼ完存	ABD	良好	明赤褐色	11.1 5.9	3.2	280 303
	24	土師器	埴	略整形。指ナデのち体部上半ヨコナデ。	ハケのちヘラナデ、指ナデ(右左)。	開口部側 カクラン	口縁部1/3欠	A>B>㊸	良好	橙色	6.05 6.9	7.3 4.3	130 130
	25	土師器	埴	ナデ。頸部にハケ(上下)(22/1cm)を加える。	ナデ。	周溝覆土 fig.32	胴部上半1/3	A E	良好	黒褐色 灰褐色	(3.4)	(7.6)	
	26		埴	ナデ。	ナデ。	周溝覆土 fig.32	底部1/2	A B E	良好	淡橙色 灰褐色	(2.0)	2.7	
	27		埴	ハケ(12/1cm)のち粗いミガキ。	ヘラナデ(右左、左右)。	開口部側 カクラン	胴部下半1/2	B E>A	良好	橙色	(10.65) (3.9)		
	28		手握ね	指ナデ。	指ナデ。	周溝一拵	底部1/2	A>B E	良好	赤橙色	(2.1)	4.8	
	29	土師器	器台	ミガキ。赤彩。胴部4孔(2孔確認)。貫通孔。	器受部ハケのちミガキ。赤彩。胴部ナデか。	開口部側 カクラン	胴部欠	ABD	良好	赤色 にぶい橙色	(8.0) (5.2)		49
	30		器台	略整形のち小孔(3孔)。のちにケズリ状のヘラナデ(下上)。赤彩。	ハケのちナデ。	開口部側 カクラン	胴部下半5/6周	㊸>A B D	良好	赤褐色 にぶい橙色	(4.8)	11.7	
	31	弥生土器	広口壺	複合部上下端棒状工具による押捺。体部ヘラナデ(右左)。胴部はミガキ状となる。	ヘラナデ(右左)。	周溝底面 fig.32	口縁部1/4	㊸>A B	不良	灰褐色	(22.9) (10.9)		

Ⅲ 小田部向原遺跡

01	32	土師器	甕	胴部ハケ(右左)(8/1cm)のちヨコナデ。ハケ(18/1cm)、ヨコナデ。全体黒化。	口縁部ハケ(18/1cm)、ヨコナデ。胴部ヘラナデ。胴部ヘラナデ。	周溝覆土 fig.31-32	胴部上半 3/4周	㊥>ABC	良好	灰褐色 にぶい橙色	18.0 (15.1)	(25.3)
	33	土師器	甕	口縁部ハケ(下上)(9/1cm)のちヨコナデ。胴部ハケ。	口縁部ハケ(右左)(5/1cm)のちヘラナデ。	確認面	口縁部 1/8周	B>ADE	良好	赤色 橙色	(23.8) (6.5)	
	34		台付甕	ハケ(8/1cm)。接合部より上下方向。胴部下半(下上)。脚部上半ヘラナデ(下上)、再調整。	胴部ヘラナデ。脚部ハケ(左右)。	確認面	脚接合部全周	AB>㊥>C D	良好	赤褐色	(6.9)	
	35		壺	ハケのちミガキ。整形痕を明瞭に残す。底面ヘラナデ。	ハケ(右左)(5/1cm)のちヘラナデ(右左)。	周溝一拵	底部全周、脚部下半1/2周	AE>BD	良好	橙色 にぶい黄橙色	(5.1)	8.5
	36		壺	ミガキ。底面も1方向のミガキ。	細いハケ状の条線を残すヘラナデ(右左)。	開口部側 カクラン	底部1/4	BD>ACE	良好	黄橙色 にぶい橙色	(4.3)	(8.8)
	37	土師器	甕	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	周溝一拵	口縁部1/8	A>BCD	良好	黒褐色 灰褐色	(21.2) (4.6)	
	38	土師器	甕	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/8	㊥>AECD	良好	橙色 にぶい橙色	(17.2) (4.3)	
	39	土師器	甕	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。粘土紐積み上げ痕を部分的に残す。	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/3	㊥>CE	良好	明赤褐色 黒褐色	(18.9) (5.5)	
	40	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、指頭痕を残す。体部ヘラナデ(右左)。部分的に煤附着。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ(右左)。	周溝覆土 fig.32	体部上半 1/8	㊥BCDE	良好	にぶい赤褐色 明赤褐色	(20.6) (5.3)	
	41	土師器	甕	ヨコナデ。ミガキ状のナデを加える。	ヨコナデ。	確認面	口縁部 1/4周	AB	良好	黒褐色	(17.2) (3.8)	
	42	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ(右左、下上)。	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/5	㊥>A>B	良好	にぶい橙色	(16.2) (5.8)	
	43	土師器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/7	AB	良好	橙色	(17.6) (4.1)	
	44	土師器	甕	横方向のヘラナデ、ヨコナデ。	ヨコナデ。	周溝一拵	口縁部1/5	AB>D	良好	にぶい褐色	(17.2) (3.2)	
	45	土師器	甕	ヘラナデのちヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ(下上)。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/4	AB>㊥	良好	灰褐色 橙色	(18.6) (5.2)	
	46	土師器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	周溝一拵	口縁部1/4	AB>CE	良好	にぶい橙色	(16.6) (3.3)	
	47	土師器	埴	ヘラナデ、胴部下半ヘラナデ(右左)のち、口縁部ヘラナデ。赤彩。	口縁部ヨコナデ、赤彩。胴部ヘラナデ。	周溝覆土 fig.32	口縁部1/2、 胴部1/3	㊥>ABD	良好	赤褐色 にぶい橙色	(9.8) (9.95)	11.7 2.7 499

III 小田部向原遺跡

遺構 番号	挿図 番号	器種 種別	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置 fig.32	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径	
											底 径	容量A 容量B
01	48	土師器 杯	ヘラナデ(左右)のちヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ(右左)のちナデ。赤彩。	周溝覆土 fig.32	体部1/5周	A E > B	良好	赤褐色 赤色	(15.2) (7.0)	(15.9)	759
49	49	土師器 杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ(右左)。口縁部下はミガキ状となる。赤彩。	ヘラナデのちナデ。	周溝一括	体部1/5周	B > A > C E	良好	赤褐色 赤色	(16.3) (5.45)	16.75	667
50	50	土師器 杯	ヘラナデ(右左)、口唇部ヨコナデのち粗いミガキ。赤彩。	ナデのち部分的に粗いミガキ。赤彩。	周溝覆土 fig.32	体部1/3周	Ⓔ	良好	赤褐色 赤色	(13.8) (4.6)	(14.0)	346
51	51	土師器 杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ(左右)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	周溝覆土 fig.32	体部上半 1/8	A B	良好	橙色 明赤褐色	(13.9) (5.2)	(14.6)	
52	52	土師器 杯	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ(右左)、ヨコナデ。赤彩。	確認面	杯部上半 1/4周	Ⓔ > A B	良好	赤褐色 赤色	(15.1) (4.0)	(15.6)	
53	53	土師器 杯	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ(右左)。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ、ナデ。	周溝覆土 fig.32	体部上半 1/6	A B > E	良好	赤褐色 赤色	(13.2) (4.6)		
54	54	土師器 高杯	ヘラナデ(右左)、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ(右左)、ヨコナデ。赤彩。	確認面	杯部4/5周	A B E	良好	赤褐色 赤色	12.9 (4.5)	13.0	280 292
55	55	土師器 杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	周溝覆土	口縁部1/7	A B E	良好	赤色	(15.4) (3.8)		
56	56	土師器 高杯	ナデ。赤彩。	ナデ。赤彩。	周溝覆土 fig.32	体部1/4周	A B	良好	赤色	(13.15) (3.6)		240
57	57	土師器 杯	ヘラナデ、ヨコナデ。一部粗いミガキ。赤彩。	ナデ。	開口部側 カクラン	体部上半 1/7周	A B > Ⓔ > C	良好	赤褐色	(14.4) (3.75)		
58	58	土師器 杯	ヘラナデ(右左)のちヨコナデ。赤彩。	ナデ。赤彩。	周溝覆土 fig.32	体部1/4周	A B C D	良好	赤色 赤褐色	(12.3) (3.5)		
59	59	土師器 杯	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ(右左)。赤彩。	口縁部ヨコナデ、体部ナデ。赤彩。	周溝一括	体部上半 1/3周	Ⓔ > A B C	良好	赤色	(12.7) (3.7)	(13.35)	
60	60	土師器 高杯	縦方向のヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	杯部ナデ。	周溝覆土 fig.32	脚部上半のみ	A B > E	良好	赤褐色	(5.9)		
61	61	土師器 高杯	縦方向のヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ。	周溝一括	脚部上半全周	A B > C E	良好	赤色 褐灰色	(3.9)		
62	62	土師器 高杯	縦方向のヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	ヨコナデ。	周溝覆土 fig.32	脚部下半 1/2	A > B E	良好	赤色 橙色	(3.1)	8.6	

III 小田部向原遺跡

01	63	高杯	縦方向のヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	杯部ナデか。赤彩不明瞭。脚部ヘラナデ(右左)。	周溝覆土 fig.32	脚部上半のみ	㊶B	良好	明赤褐色 赤褐色	(3.1)	
	64		平滑。赤彩。	平滑。黒化。赤彩の可能性。	周溝一括	底部1/2	AB>CE	良好	浅黄褐色 黒褐色	(2.3)	6.8
	65		底部周辺ヘラナデ。	ミガキ。赤彩。	周溝一括	底部のみ	ABDE	良好	橙色 赤色	(1.85)	6.6
	66		底部周辺ヘラナデ。	ヘラナデか。平滑。黒化。	周溝一括	底部のみ	A	良好	にぶい橙色 灰褐色	(1.7)	7.45
	67		ヘラケズリ(右左)。底部1方向のハケ。	ヘラナデ(右左、下上)。	周溝一括	底部のみ	ABD>CE	良好	にぶい橙色 橙色	(3.5)	4.05
	68		指頭痕等を全体に残す。略整形。	略整形。	周溝一括 fig.32	底部のみ	㊶B>DE	良好	にぶい橙色	(1.6)	6.1
	69	埴	ヘラケズリ(左右)。底部はナデ。	ヘラナデ。	周溝覆土 fig.32	底部のみ	AB>D	良好	橙色	(1.2)	4.3
	70	杯蓋	ロクロ調整。天井部回転ヘラケズリ(右左)。	ロクロ調整。	周溝一括	体部1/4周	AB	良好	褐灰色	(13.15) (4.9)	
	71	壺	口唇部、複合部単節斜縄文。のちに複合部下端縄文原体による押捺。摩滅のため整形、赤彩不明。	口唇部押捺。縄文原体か。摩滅により不明。	開口部側 カクラン	口縁部 1/4周	㊶E	良好	にぶい橙色	(20.1) (4.6)	
	72	壺	複合部ハケ状工具による押捺。ミガキ。	ヘラナデ。ミガキか。	確認面		E>A	良好	にぶい赤褐色 黄褐色		
	73	壺	ヘラナデ、ヨコナデ。複合部下端押捺。原体不明。	ヘラナデ、ヨコナデ。横方向のミガキか。	周溝一括		ABCDE	良好	にぶい橙色		
	74	壺	複合部単節斜縄文。複合部下端ヘラ先による刺突文。ヘラナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	周溝一括		E	良好	にぶい橙色 赤褐色		
	75	壺	ヘラナデ、ヨコナデ。口唇部に棒状工具による押捺。	ヨコナデ。	周溝覆土 fig.32		㊶E>ABC	良好	褐灰色 にぶい黄褐色		
	76	壺	半截竹管区画による文様帯。上下綱目状燃糸文。中単節斜縄文3段を地文とし、上下山形文。	摩滅により整形痕不明瞭。	開口部側 カクラン		㊶B>A>CD	良好	橙色 にぶい橙色		
	77	壺	沈線区画。単節斜縄文帯。無文区はミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	開口部側 カクラン		㊶A>BC	良好	赤褐色 浅黄褐色		
	78	壺	結節文7条、上下に単節斜縄文を地文とし、沈線による山形文。山形文左右をミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	周溝一括		AB	良好	橙色		

III 小田部向原遺跡

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径		容量 A 容量 B
											器 高	底 径	
01	79	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上を地文とし、結節文による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	開口部側 カクラン		A B C D	良好	赤色 橙色			
	80	弥生土器	壺	沈線区画による山形文。網目状燃糸文地文。無文区ミガキ、赤彩。	ナデか。	周溝一括		A B > D	良好	にぶい橙色			
	81	弥生土器	甕	口唇部上下からの押捺。胴部有段。ヘラナデ。	ヘラナデののち粗いミガキ。	周溝一括		E > A B	良好	橙色 にぶい橙色			
	82	弥生土器	甕	ヘラナデ。胴部有段。縄文原体による押捺。	ヘラナデののち粗いミガキ。	確認面		E > A B	良好	浅黄橙色			
	83	弥生土器	甕	胴部有段。縄文原体による押捺。ヘラナデ。全体に煤付着。	ヘラナデ。粗いミガキ。	周溝一括 fig.32		E > A B	良好	黒褐色 浅黄橙色			
	84	弥生土器	甕	ハケ(上下)(8/1cm)ののちヨコナデ。ハケ工具による押捺。	ハケ(右左)。ヨコナデ。	確認面		A B > C E	良好	にぶい黄褐色			
	85	弥生土器	碗	口唇部、口縁部上半無節斜縄文。文様帯を除きミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。	周溝一括		B > A	良好	橙色 赤橙色			
	86	弥生土器	碗	複合部結節文。棒状工具による押捺文。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキか。赤彩。	周溝一括		E > A B	良好	にぶい橙色			
	87	弥生土器	碗	網目状燃糸文。無区画。無文区ミガキ、赤彩。口唇部無文。	ヘラナデののち粗いミガキ。	周溝一括		E > A B	良好	浅黄橙色			
	88	弥生土器	碗	単節羽状縄文。沈線による区画。沈線下に円形の刺突文。	ミガキか。	確認面		A B	良好	橙色			
02	1	弥生土器	壺	ハケ(上下)(7/1cm)。	ヘラナデ(右左)。		口縁部 1/4	A B E	良好	明赤褐色	(6.3)		
	2	弥生土器	壺	ミガキ。	ヘラナデ(右左)ののちミガキ。	覆土	胴部上半 1/6	㊦ > A B D	良好	にぶい橙色	(9.1)		
	3	弥生土器	壺	縦方向のヘラケズリののち粗いミガキ。底面ヘラナデ。	ナデ。平滑。	覆土	胴部下半 1/5	㊦ > A B	良好	暗赤褐色 にぶい赤褐色	(5.2)	(7.2)	
	4	弥生土器	壺	丁寧なミガキ。赤彩。	丁寧なミガキ。胴部下半器面剥落により不明。ミガキか。	覆土	胴部上半 1/2周	㊦㊧㊨㊩	良好	明赤褐色	(16.2)	(26.2)	
	5	弥生土器	甕	ヘラナデ。口唇部横方向より1方向の押捺。	ヘラナデ。粗いミガキ。	覆土	口縁部 1/4	㊦ > A B	良好	橙色	(19.6) (2.4)		

Ⅲ 小田部向原遺跡

02	6	弥生土器	壺	器面状態不良。整形不明。結節文帯2帯。	器面状態不良。ヘラナデか。	覆土	頸部1/3	A B E	良好	にぶい 橙色 橙色	(4.4)	
	7	弥生土器	埴	ハケ(下上)(8/1cm)のちヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/6	E>A B	良好	灰褐色 にぶい 橙色	(10.3) (1.75)	
	8	弥生土器	手捏ね	略整形。ナデ。赤彩。	ナデ。赤彩。	覆土	口唇部 1/2欠	A B D>C E	良好	赤色	5.9 2.6	30
	9	弥生土器	台付甕	ヘラナデ。ミガキを加える?。脚接合部に帯状の粘土紐を付加。	ヘラナデ。ミガキを加える?。	床面	脚接合部のみ	⑤>④③	良好	暗赤色	(3.2)	
	10	弥生土器	甕	胴部有段。ヘラナデ(右左)。	ヘラナデ。一部ミガキか。	覆土		⑤>A B D	良好	浅黄橙色		
	11	弥生土器	壺	結節文。沈線による山形文。	ヘラナデ。			A>B E	良好	橙色		
	12	弥生土器	壺	単節斜縄文帯。結節文による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	覆土		④③⑤	良好	橙色 にぶい 橙色		
	1	弥生土器	壺	複合部、口唇部単節羽状縄文。円形朱文。2個1対か。複合部下端縄文原体による押捺。	ヘラナデ(右左)。一部ミガキ状。	覆土	口縁部1/4	⑤	良好	にぶい 橙色 赤色	(21.3) (5.4)	
	2	弥生土器	壺	胴部下半ヘラナデ(下上)ののち胴部中位ミガキ状のナデ(右左)。胴部下半のみ再利用か。	ヘラナデ(右左)。胴部上半器面状態不良。	貯蔵穴覆土	胴部下半全周	A B>E>C D	良好	にぶい 橙色	(13.8)	9.5
	3	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。胴部有段、棒状工具による押捺。ヘラナデ(右左)。	ヘラナデ。一部ミガキ状。	覆土	胴部上半 1/2	A B	良好	橙色 にぶい 橙色	(18.2) (2.6)	
	4	弥生土器		ヘラナデ。一部ミガキか。	ヘラナデ。底面には指頭痕を残す。	貯蔵穴覆土	底部のみ	A B D E	良好	赤褐色	(2.0)	6.4
	5	弥生土器	ミニ	縦方向ヘラナデ。		覆土	脚柱状部のみ	A B E	良好	にぶい 橙色	(3.0)	
04	1	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文、押捺。胴部単節斜縄文。結節文区画。施文後に無文区ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	床面	頸部全周	⑤	良好	明赤褐色	(13.3) (9.7)	
	2	弥生土器	甕	胴部有段。ヘラナデ。	ヘラナデ。口縁部ミガキを加える。	貯蔵穴覆土	胴部1/4	⑤>A B	良好	赤褐色 橙色	(14.1)	(19.7)
05	1	弥生土器	広口壺	複合部単節斜縄文。複合部下端ヘラ先による押捺。無文区ヘラナデ(右左)、赤彩。	ヘラナデ(右左)。赤彩。	床面	口縁部1/2	A B C E	良好	灰褐色 赤色	(23.6) (5.5)	
	2	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文。複合部下端縄文原体による押捺。無文区ヘラナデ、赤彩か。	ヘラナデ。赤彩。	床面		A B C D E	良好	にぶい 黄橙色		

Ⅲ 小田部向原遺跡

遺構 番号	棟図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容量A 容量B
05	3	弥生土器	甕	口唇部2方向からの押捺。粗いヘラナデ(右左)。	ヘラナデ。	床面		㊥>AB	良好	橙色			
	4	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。結節文による区画。無文区赤彩。	ヘラナデ。			㊥>ABCD	良好	にぶい橙色 明黄褐色			
	5	弥生土器	壺	単節斜縄文。無区画。無文区ヘラナデ、赤彩。	ヘラナデ。赤彩。	覆土		AB	良好	にぶい橙色 赤色			
06	1	土師器	杯	ヘラケズリ(右左)。口縁部はヨコナデ。上半部のみ赤彩。	ヨコナデ。赤彩。	床面～覆土	杯部上半全周	AB>CD	良好	灰黄褐色 橙色	15.1 (5.2)	15.55	610
	2	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヨコナデ。赤彩。		体部上半 1/5	㊥	良好	赤色 赤橙色	(12.9) (3.7)	(13.1)	
	3	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	体部上半 1/6	A>B>E	良好	赤色 赤橙色	(12.7) (4.1)	(13.05)	
	4	土師器	高杯	器面摩滅。赤彩か。	器面摩滅。杯部赤彩か。脚部シボリ痕。	カマド	杯部完存	㊥>AB	不良	橙色	13.3 (8.5)	13.7	380 349
	5	土師器	高杯	柱状部ヘラケズリ(上下)のち、端部から柱状部下半までヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ(左右)、ヨコナデ。		脚部のみ	㊥>AB>C	良好	赤橙色 浅黄褐色	(4.8)	9.7	
	6	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(下上)。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	覆土	口縁部3/4 欠	ABE>CD	良好	にぶい橙色	(15.4) 24.3	20.2 6.7	4200 4653
	7	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部縦方向のヘラケズリ(上下)のち横方向のヘラケズリ(右左)。再調整。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	覆土	胴部部分的に 1/4欠	E>AB	良好	赤色	13.4 21.4	15.8 6.4	2300 2639
	8	土師器	甕	ヘラナデのちヨコナデ。	ヨコナデ。	貯蔵穴下層	口縁部1/4	AB>C>D E	良好	にぶい橙色	(18.4) (3.6)		
	9	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。脚部下半(左右、下上)ヘラケズリ。胴部上半はヘラナデ状になる。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	覆土	ほぼ完存	AB>CD	良好	橙色 にぶい橙色	17.9 32.2	23.9 6.5	7440 7859
10	土師器	甕	胴部上半ナデ状のケズリ(下上)、底部周辺ヘラケズリ(左右)。脚部下半にミガキを加える。	胴部ヘラナデ(右左)のち下半部にミガキ。	覆土	ほぼ完存	AB>CDE		良好	にぶい橙色	16.1 22.2	19.6 6.8	3930 4151
11	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(右左)のち粗いミガキ。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	覆土	胴部上半 2/3	E>AB		良好	赤色	19.3 (12.9)	22.3	
12	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ(右左)。胴部ヘラケズリ(上下)。	ヘラナデ、ヨコナデ。	覆土	胴部上半 1/4	B>AC		良好	橙色	(17.4) (11.1)	(18.0)	

Ⅲ 小田部向原遺跡

06	13	土師器	甕	ヘラケズリ(下上)。	器面摩滅。	覆土	脚部下半全周	$AB > E > C_D$	良好	赤褐色	(6.3)	6.3	
	14	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)のち胴部下半を中心に粗いミガキ。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	床面	口縁部、脚部下半一部欠	$B > A > C_D E$	良好	にぶい橙色 橙色	24.3 22.0	6.4	4550 4323
	15	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。胴部下半器面摩滅。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部器面摩滅。	カマド	胴部上半1/4	$C > ABDE$	良好	赤褐色 橙色	(22.8) (16.5)		
07	1	弥生土器	埴	ヘラナデのちヘラ先によるミガキ状のナデ。口唇部部分的に面取り。	ヘラナデ。一部ミガキ。	P ₁ 内底面	口縁部のみ	$ABD > C$	良好	にぶい橙色	10.6 (4.2)		
	2	弥生土器	壺	結節文を区画文とし単節斜縄文3段以上。無文区ミガキ、赤彩。	ミガキ、赤彩。下半部器面剥落。	覆土	頸部1/2	$AB > CDE$	良好	橙色 明赤褐色	(6.8)		
	3	弥生土器	甕	胴部有段。ヘラナデ(右左)。とくに段部より下は整形痕が明瞭。	ヘラナデ。	床面		$AB > E > C_D$	良好	にぶい赤褐色			
08	1	弥生土器	広口壺	横方向のヘラナデ。口唇部2方向による押捺。複合部下端棒状工具による押捺。	ヘラナデ。	覆土下層		AE	良好	にぶい橙色			
	2	弥生土器	壺	単節斜縄文。結節文による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			$B > AD$	良好	橙色 にぶい橙色			
	3	弥生土器	碗	結節文2条。口唇部部分的に面取り。口唇部にも施文か。ヘラナデ。赤彩範囲は不明確。	ヘラナデ、赤彩。			$AE > BD$	良好	にぶい橙色			
	4	弥生土器	碗	単節斜縄文。沈線による区画。無文区ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。			$E > AB$	良好	にぶい赤褐色 赤色			
09	1	土師器	甕	胴部ヘラナデ(上下)のち胴部下半ヘラケズリ(右左)。頸部より上下にハケ(6/1cm)。口縁部にヨコナデを加える。	口縁部ヘケ(右左)(6/1cm)。胴部ヘラナデのち粗いミガキ。	床面	胴部一部欠	$ABC > E$	良好	橙色	25.5 26.4	9.9	8010 8570
	2	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(上下)。全体として粗略で粘土組織等残す。	器面摩滅。ヘラケズリ(右左)。	11号と接合床面	口縁部3/4、 胴部1/4欠	$E > ABD$	良好	にぶい橙色 橙色	(23.3) 24.6	24.7 8.9	7760 (6382)
	3	土師器	甕	横方向のヘラナデ。ヨコナデか。	ヘラナデ、ヨコナデ。	床面	口縁部1/5	$AB > CD > E$	良好	明赤褐色	(28.0) (7.3)		
	4	土師器	甕	ヘラナデ。整形痕不明瞭。底面同心円状のヘラナデ。	ヘラケズリ(右左)。	覆土	底部のみ	$B > ACD$	良好	にぶい橙色	(4.0)	6.1	
	5	土師器	甕	ヘラケズリ(下上)。底面ヘラナデ。	ナデ。	覆土	底部のみ	$A > BD$	良好	橙色 にぶい赤褐色	(2.55)	6.3	
	6	土師器	甕	口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部ヘラケズリ(下上)。	ヘラナデ、口縁部はヨコナデを加える。	覆土	胴部上半1/4	ABE	良好	橙色	(15.4) (8.3)		

Ⅲ 小田部向原遺跡

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径		容量A 容量B
											器	底	
09	7	土師器	甕	ヘラケズリ(下上、右左)。底部1方向のヘラケズリ。	ヘラケズリ(左右)。	床面	胴部下半 1/5	ABE	良好	赤褐色 にぶい赤褐色	(8.5)	(6.8)	
	8	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	床面	口縁部 1/2欠	AB>CDE	良好	赤色	15.3 6.6		610 674
	9	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ状のヘラケズリ(右左)。赤彩。	口縁部ヨコナデ。体部ミガキ状のヘラナデ。赤彩。	床面	体部上半 1/3欠	AB>CDE	良好	赤褐色	13.9 5.9		410 438
	10	土師器	杯	ヘラケズリ(左右)。口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	床面	体部上半 1/4	B>A	良好	橙色	(15.7) (4.5)		
	11	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)のち粗いミガキ。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	貯蔵穴下層	体部上半 1/6	④>BDE	良好	明赤褐色	(14.6) (4.9)		
	12	土師器	碗	ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	底部のみ	B>AD	良好	赤褐色 赤色	(2.4)	4.1	
	13	土師器	碗	ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	底部のみ	B>A>CD	良好	赤褐色 赤色	(2.4)	4.5	
	14	土師器		底部周辺ヘラケズリ(左右)。赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土	底部のみ	BD>AC	良好	にぶい橙色 赤褐色	(3.1)	3.4	
	15	土師器	高杯	ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	杯部1/5	⑥>C	良好	橙色 赤褐色	(21.8) (7.5)		411
	16	土師器	高杯	口縁部胴裾部ヨコナデ。杯部(右左)、脚部(上下)ヘラナデ。赤彩。	杯部ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。 脚部ヘラナデ、ヨコナデ。	カマド袖内	胴裾部 1/2欠	AB>CD	良好	赤色 にぶい赤褐色	13.2 8.3	9.2	270 253
	17	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ヘラケズリ(右左)。脚部ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。杯部赤彩。	床面	杯部上半 1/3欠	ABCDE	良好	赤褐色 橙色	12.7 8.4	12.8 9.0	300 300
	18	土師器	高杯	ヘラケズリ(右左)。ヨコナデを加える?。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。	床面	杯部完存	ABD>CE	良好	赤褐色 赤色	13.2 (4.7)		260 229
	19	土師器	杯	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。		体部上半 1/6	E>AB	良好	明赤褐色 赤色	(14.3) (4.1)	(14.4)	
	20	土師器	杯	ヘラケズリ(左右)。口縁部ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデのちヨコナデ。赤彩。		杯部上半 1/3	AB>E	良好	赤色	(13.5) (4.2)	(13.7)	
	21	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ状のヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	体部上半 1/2	AB>E	良好	明赤褐色	15.4 (5.6)		195

Ⅲ 小田部向原遺跡

09	22	土師器	高杯	器面摩滅。脚柱状部はヨコナデか。赤彩。	器面摩滅。シボリ。	床面	脚部上半全周	㊥>A B	良好	浅黄橙色	(6.3)	
	23	土師器	高杯	脚部器面摩滅。ヨコナデ。赤彩か。	杯部ヘラナデ。赤彩。脚柱状部略整形。シボリ。脚裾部ヨコナデ。	覆土	脚柱状部全周、脚裾部1/3	A B>D	良好	淡赤橙色 橙色	(5.05)	(9.0)
	24	土師器	高杯	ヨコナデ。赤彩。	脚柱状部ヘラナデ。脚裾部ヨコナデ。	覆土	脚柱状部全周、脚裾部1/5	A B D	良好	明赤褐色 にぶい橙色	(4.15)	(9.4)
	25	土師器	高杯	脚柱状部ヘラケズリのうち全体にヨコナデ。赤彩。	脚端部ヨコナデ。シボリ。	床面	脚柱状部全周、脚端部1/5	A B C>D E	良好	赤色 橙色	(3.8)	(8.6)
	10	弥生土器	甕	口唇部1方向による刻目押捺。ヘラナデ。	ヘラナデ(右左)。	覆土下層	口縁部1/3	B D>A C>E	良好	明赤褐色	(22.8) (3.6)	
11	2	弥生土器	埴	ヘラナデ(下上)のうちヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ(右左)、ヨコナデ。赤彩。		口縁部1/4	A>B E	良好	橙色	(8.05) (3.8)	
	1	土師器	器台	ハケのち接合部より上下にミガキ。口唇部、脚裾部ヨコナデ。赤彩不明確。貫通孔。脚部4孔。	器受部ハケのちミガキ、ヨコナデ。脚部ハケ(右左)(6/1cm)。脚部下ヨコナデを加える。	床面	器受部1/2、脚部1/4欠	A B>C	良好	赤褐色	(8.7) 9.4	13.4 47
	2	土師器	器台	ミガキ、ヨコナデ。ハケはみられない。赤彩。貫通孔。脚部3孔。	器受部器面摩滅。脚部ミガキ。赤彩。	床面	口縁部1/2、脚部一部欠	A B>E>C D	良好	赤褐色	8.4 8.2	50 51
	3	土師器	器台	ミガキ。赤彩。貫通孔。	ミガキ。赤彩。		器受部1/3	A B	良好	赤褐色	(7.0) (1.9)	
	4	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケ(10/1cm)。	ハケのちヨコナデ。	覆土	口縁部1/6	A>B>㊥	良好	黒褐色 にぶい赤褐色	(15.8) (3.4)	
12	1	土師器	壺	複合部ハケ(右左)のうちヨコナデ。口縁部ハケ(下上)(7/1cm)。	横方向のハケのちミガキ状のヘラナデ。	床面～ 貯蔵穴	口縁部1/3欠	A B>C D>E	良好	淡赤褐色 明赤褐色	17.1 (8.4)	
	2	土師器	壺	ハケのちヨコナデ、ヘラナデ。口縁部はミガキ状。	口縁部ハケのちヨコナデ、ヘラナデ(右左)。胴部ヘラナデ(右左)。	床面	口縁部全周	㊥>A B	良好	橙色	13.9 (7.3)	
	3	土師器	壺	複合部横方向、口縁部縦方向(下上)のハケのち口縁部全体にヨコナデ。	ハケ(右左)のち口唇部ヨコナデ。器面摩滅。	床面	口縁部全周	㊥>E	良好	明赤褐色	12.3 (5.4)	
	4	土師器	壺	粗いミガキ。ハケは認められない。	器面剥。	覆土	底部周辺1/3	A B>㊥>C	良好	赤褐色	(4.7)	(8.15)
	5	土師器	埴	ハケ(右左)(11/1cm)のうち胴部下半にヘラナデ(右左)。	ヘラナデ。	床面	胴部1/2、底部完存	A B	不良	にぶい黄色 赤色	(11.8) (10.1)	4.3
	6	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。胴部ハケのちヘラナデ状のミガキ。ハケは認められない。	口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ヘラナデ、粗いミガキ。	床面～ 貯蔵穴	口縁部1/3、胴部1/3	A B>D	良好	橙色 にぶい橙色	(14.6) (10.35)	977 4.5

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容量A 容量B
12	7	土師器	甕	口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ハケ(右左)(6/1cm)。全体に黒化。	口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	床面	胴部上半ほぼ全周	C>AB>D	良好	黒褐色 橙色	17.3 (16.1)	23.8	
8	8	土師器	甕	口縁部ハケ(下上)(9/1cm)のちヨコナデ。	ハケ、ヨコナデのち粗いミガキ。	覆土	口縁部1/4	A>B⑥>C D	良好	にぶい赤褐色 にぶい橙色	(18.5) (4.1)		
9	9	土師器	甕	口縁部ハケ(下上)(8/1cm)のちヨコナデ。胴部ハケ(下上)。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケ(右左)。	覆土	胴部上半1/6	AB>CDE	良好	灰褐色 にぶい橙色	(13.8) (7.5)	(15.3)	
10	10	土師器	甕	ハケ(7/1cm)のちヘラナデ。底面ヘラナデ。	ハケ(左右)。		底部1/2、 胴部下半1/5	⑥>ABD	良好	にぶい橙色	(5.3)	7.3	
11	11	土師器	甕	ヘラナデ。	全体に黒化。整形痕不明確。	床面	底部のみ	AB>CD	良好	赤褐色 黒褐色	(2.8)	6.0	
12	12	土師器	甕	器面摩滅。ヘラナデ、ハケか。底部凹底。	器面摩滅。	床面～ 貯蔵穴	底部3/4	AB>E>C D	良好	にぶい橙色 黄褐色	(2.3)	5.0	
13	13	土師器	甕	口縁部ハケ(右左)(12/1cm)のち粗いミガキ。体部ヘラナデ、粗いミガキ。	口縁部ハケ(右左)、体部ヘラナデのち粗いミガキ。	覆土	口縁部1/6	AB>⑥	良好	明赤褐色	(20.3) (5.5)	(20.6)	
14	14	土師器	埴	ヘラ先によるミガキ状のナデ。一部にハケが確認できる。底面ヘラナデ。赤彩。	横方向のハケのちヘラ先によるミガキ状のナデ。赤彩か。	床面	胴部一部欠	ABD	良好	赤褐色	6.9 7.6	8.7 3.4	240 294
15	15	土師器	埴	ミガキ。赤彩。	口縁部ミガキ。赤彩。胴部ヘラナデ(右左)。	床面～ 貯蔵穴	口縁部1/3、 胴部1/4	A>BE	良好	赤褐色 橙色	(14.4) (14.4)		
16	16	土師器	埴	ヘラナデ、口唇部ヨコナデのちミガキ。一部にハケが確認できる。	口縁部ミガキ。胴部ヘラナデ(右左)。	床面～ 貯蔵穴	1/2周	AE	良好	にぶい橙色	9.3 14.6	12.9 2.8	889
17	17	土師器	埴	ハケのちミガキ、赤彩。	ミガキ。赤彩。ハケはみられない。	床面	口縁部一部欠	A>B	良好	赤色	17.7 11.0	4.7	1200 1272
18	18	土師器	埴	ハケのち口縁部ヨコナデ、ミガキ、赤彩。	口縁部ハケのちヨコナデ、ミガキ。胴部ミガキ。赤彩。	床面～ 貯蔵穴	口唇部1/3、 胴部一部欠	AB	良好	赤褐色	15.9 8.9	4.5	760 818
19	19	土師器	鉢	ヘラナデ、口縁部ヨコナデのちミガキ、赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。ミガキ?。赤彩。	覆土上層	体部1/4	C>AB	良好	赤褐色	(14.9) (5.9)		543
20	20	土師器	器台	ハケ(15/1cm)のち器受部粗いミガキ。脚部ミガキ状のヘラナデ。赤彩。貫通孔。脚部3孔。	器受部ハケのちヨコナデ、一部ミガキか。赤彩。	床面～ 貯蔵穴	器受部2/3欠、 脚部1/2	B>AD	良好	明赤褐色	(9.6) 10.3	(12.8)	70 77
21	21	土師器	器台	器受部ヘラケズリのちヨコナデ、ミガキ。脚部ハケのちヨコナデ、ミガキ。赤彩か。	器受部ヘラケズリ、ミガキ、脚部ハケ(左右)(8/1cm)、ヨコナデ。	床面	器受部1/2、 脚部3/4欠	AB>E	良好	にぶい赤褐色 赤褐色	(9.9) (9.7)	13.8	62

Ⅲ 小田部向原遺跡

12	22	土師器	高杯	縦方向のハケののち、脚裾部ヨコナデ、ミガキ。赤彩。小孔なし。	ハケ(左右)(9/1cm)。	床面～ 貯蔵穴	杯部欠、脚裾部1/4欠	ABC>DE	良好	赤色 にぶい橙色	(6.6)	14.3
	23	土師器	高杯	縦方向のハケののちミガキ、赤彩。脚部3孔。	ハケ(左右)(9/1cm)。脚裾部弱いヨコナデ。	床面～ 貯蔵穴	杯部、脚裾部1/3欠	ABE>CD	良好	明赤褐色 にぶい橙色	(6.6)	13.7
13	1	弥生土器	甕	口唇部1方向からの押捺。胴部有段。有段部棒状工具による押捺。胴部ヘラナデ(右左)。	ヘラナデ(右左)。	床面	体部1/2	AB>CD	良好	暗赤褐色 にぶい橙色	14.9 14.9	15.1 4.7 1448
	2	弥生土器	甕	口唇部2方向からの押捺。口縁部粘土紐痕2段を若干残す。胴部ヘラナデ。胴部中央より上黒化。	ミガキ。胴部下半はヘラナデ状となる。	床面	胴部上半1/2	AB>D>CE	良好	暗灰黄色 にぶい橙色	(14.9) (10.6)	15.8
	3	弥生土器	甕	ヘラナデ、粗いミガキ。	ヘラナデ。	床面	胴部下半1/4	⑨>④C>D	良好	橙色	(4.6)	(7.0)
14	1	土師器	壺	ハケ原痕2種。胴部下半ハケ(右左)(7/1cm)、胴部上半縦方向のハケ(11/1cm)、その間に胴部中央斜方向のハケ(右左)。頸部ヨコナデ。	胴部ハケ(7/1cm)。指頭痕を残す。	覆土	胴部1/3	⑨>AB>D	良好	明赤褐色 にぶい橙色	(11.6)	(14.0)
	2	土師器	鉢	口頸部ヘラナデ(下上)ののちヨコナデ、粗いミガキ。底部周辺ヘラケズリ(左右)。赤彩か。	口縁部ミガキ。体部器面摩滅。赤彩。	床面	各部一部欠	⑨>ABD	良好	にぶい橙色	16.8 7.2	4.7 860 850
	3	土師器		ハケののち胴部下半ヘラケズリ(左右)。	ヘラナデ(右左)。		胴部下半1/3	AB>E	良好	橙色 にぶい橙色	(4.5)	(6.1)
	4	土師器		ハケ(下上)(6/1cm)、ヘラナデ(下上)。一部ミガキ状。底部1方向のヘラナデ。	ハケ、ヘラナデ。		底部周辺全周	D>ABC	良好	にぶい橙色	(4.3)	5.4
	5	土師器		ミガキ。赤彩。	ヨコナデ。	覆土	脚部下半1/5	A	良好	赤色 にぶい橙色	(2.2)	(10.1)
	6	土師器		ハケののちミガキ。	ヘラナデ、ヨコナデ。黒化。	覆土	脚部下半1/3	AB	良好	橙色 黒褐色	(3.0)	(10.4)
	7		壺	口唇部面取り。クシによる刺突文。ヨコナデ。	ヨコナデ。			BE	良好	淡橙色		
	8	土師器	甕	ハケ(右左)(7/1cm)。	ハケ(右左)。	覆土		ABE	良好	赤橙色		
15	1	弥生土器	高杯	ハケ(6/1cm)。ハケは複合部下へおよぶ。複合部単節斜縄文2段。縄文原形による押捺。赤彩。	ヨコナデ。部分的に赤彩痕。	床面	脚部完存	E>AB	良好	赤橙色 黄褐色	(6.3)	11.8
	2	弥生土器		ヘラケズリ(右左)。底部不定方向のヘラケズリ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		底部完存	AB>CD	良好	橙色 赤灰色	(3.6)	7.5
	3	弥生土器		ヘラナデ。	ヘラナデ。		底部3/4	B>AD	良好	にぶい橙色 暗赤灰色	(1.6)	6.2

III 小田畠向原遺跡

遺構番号	挿図	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	出土位置	現存量	胎土	焼成	色調(外)	口径 器高	最大径 底径	容量A 容量B
15	4	弥生土器	甕	口唇部2方向からの押捺。ヘラナデ。	横方向のミガキ。			B>A C D>E	良好	赤褐色			
5		弥生土器	壺	結節文6条以上。単節斜縄文。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	覆土		④>⑤>B C D	良好	にぶい橙色			
6		弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ナデ。	床面		⑤>A B	良好	にぶい橙色			
7		弥生土器	椀	口唇部にかけて結節文。	ミガキ。赤彩。	覆土		④>E>B C	良好	にぶい橙色 赤橙色			
8		弥生土器	椀	無節斜縄文、口唇部1段、口縁部2段。無区画。無文区赤彩。	ヨコナデ。赤彩。			E	良好	橙色			
9		弥生土器	壺	無節斜縄文による複合鋸歯文帯。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			A B>C D	良好	赤灰色 橙色			
16	1	土師器	杯	口縁部ヨコナデ、ミガキ。赤彩。体部ヘラケズリ(左右)。	ヘラナデ、ヨコナデのちにミガキ。赤彩。	床面	体部3/4	A B C	良好	橙色 赤褐色	12.7 4.7	13.1	335
2		土師器	杯	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヨコナデ。粗いミガキ。赤彩か。	床面～ 貯蔵穴	体部1/3	A B E	良好	赤褐色	(13.9) (4.3)		375
3		土師器	杯	器面摩滅。赤彩か。	器面摩滅。赤彩か。	覆土	体部上半 1/6	A B	良好	橙色	(14.3) (3.4)		
4		土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。	ヨコナデ。		体部上半 1/6	⑤	良好	灰褐色	(12.5) (2.9)	(13.6)	
17	1	土師器	甕	横方向のヘラナデ(右左)のちのち胴部下半ヘラケズリ(上下)。	横方向のヘラナデのち縦方向のヘラナデ(下上)。	覆土	底部、各一部 部欠	A B>E	良好	橙色	14.1 17.4	14.1 8.6	1520 1739
2		土師器	甕	ハケ(下上)(6/1cm)。ハケは胴部下半接合部上下に連続しない。粗いミガキ。胴部下半のみ再利用か。	ヘラナデ(左右)。	貯蔵穴	胴部下半のみ	A B>C D	良好	明赤褐色	(14.8)	(21.5) 7.1	(2900)
3		土師器	椀	口縁部ヨコナデ。体部横方向のヘラナデ(右左)のちのち体部上半ミガキ状のヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ。赤彩。	覆土	体部上半 2/3欠	A>B C D	良好	赤褐色	(14.6) 9.8	16.2	1170 1235
4		土師器	椀	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	口縁部1/4	A>B E	良好	明赤褐色 橙色	(12.1) (3.7)	(15.45)	
5		土師器	椀	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。赤彩。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。赤彩。	貯蔵穴	完存	A B D	良好	赤色	13.8 7.2	15.2	720 789

Ⅲ 小田部向原遺跡

17	6	土師器	杯	口縁部ヨコナデ、ヘラナデ(右左)。体部下半にハケ(8/1cm)を加える。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	口縁部1/5	⑤>AB	良好	赤色	(13.4) (6.3)	(14.0)	
	7	土師器	甕	ヘラナデ。	ヘラナデ。炭化物付着。	床面	底部2/3	B>A	良好	にぶい黄橙色	(2.2)	(9.1)	
	8	土師器	高杯	ヨコナデ。赤彩。	ヨコナデ。赤彩。	覆土	口縁部1/8	AB>D>C E	良好	赤色	(22.3) (3.3)		
	9	土師器	高杯	口縁部、脚裾部ヨコナデ。体部ヘラナデ。脚柱状部ヘラケズリ(上下)。赤彩。	杯部ヨコナデ、ヘラナデ。赤彩。脚部ヘラナデ、ヨコナデ。	床面	口縁部、脚裾部一部欠	ABCDE	良好	赤色 橙色	13.7 8.6	13.8 9.0	300 340
	10	土師器	蓋	ヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	覆土	鈕、口縁部欠	AB	良好	明赤褐色 赤褐色	(3.0)	7.8	
	11	土師器	高杯	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ。		脚部1/2	D>AB	良好	赤褐色 橙色	(4.0)		
18	1	弥生土器	壺	単節斜縄文3段以上。結節文による区画。無文区細い条線を残すヘラナデ(右左)。赤彩。	ヘラナデ(右左)。	床面	胴部1/3周	E>ABCD	良好	にぶい橙色	(8.0)		
	2	弥生土器	壺	斜縄文(単節か)1段以上。結節文による区画。無文区ミガキ。赤彩の可能性あり。	器面状態不良。	覆土	胴部下半 1/3	AB>D>C	良好	黄灰色 浅黄色	(14.0) (9.9)	5.5	
	3	弥生土器	壺	器面状態不良。赤彩か。	ヘラナデ(右左)。	覆土	胴部下半 1/5	E>AB>D	良好	橙色	(12.0)	(8.4)	
	4	弥生土器		ヘラナデ。	ヘラナデ。	床面	底部1/2	⑤>AB	良好	にぶい橙色 淡橙色	(3.4)	6.1	
	5	弥生土器		ヘラナデ。	ヘラナデ。一部ミガキ状の光沢。		口縁部1/4	E>AB	良好	にぶい橙色	(8.1) (1.65)		
	6	弥生土器	高杯	ヘラナデ。赤彩。	ヘラナデ。赤彩。	覆土	杯底部欠	E>AB	良好	橙色	(1.8)		
	7	弥生土器	甕	遺存状態不良。口唇部2方向による押捺。胴部有段。段部棒状工具による押捺。ヘラナデ。	ヘラナデ(右左)。	床面	出土時ほぼ完 存	⑤>AB	不良	灰褐色 にぶい橙色	28.0 23.0	8.1	8077
	8	弥生土器	壺	複合部無節縄文。複合部下端押捺。口縁部ヘラナデ、赤彩。	ヘラナデ。赤彩。	床面		⑤A	良好	赤褐色			
	9	弥生土器	壺	複合部附加条による原体か。複合部下端縄文原体による押捺。	内面ミガキ、赤彩。			AB>CD	良好	にぶい橙色 橙色			
	10	弥生土器	碗	口唇部および外面単節縄文2段。沈線による区画。無文区ミガキ。	ミガキ。			AB	良好	にぶい橙色			

Ⅲ 小田部向原遺跡

遺構番号	挿図番号	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	出土位置	現存量	胎土	焼成	色調(外内)	口径		容量A 容量B
											器高	底径	
18	11	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。粘土紐痕2段。横方向のヘラナデ。	ヘラナデ。			AB>CD	良好	黒褐色			
	12	弥生土器	壺	上から単節縄文3段施文。その後ヘラ先による沈線区画。無文区赤彩。	ヘラナデ。粘土紐痕を残す。	床面		E	良好	にぶい橙色			
	13	弥生土器	壺	単節斜縄文1段。これを地文とし山形文を描く。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。	覆土		AB	良好	にぶい橙色 淡橙色			
	14	弥生土器	壺	無節斜縄文2段以上。その後結節文による区画。無文区赤彩。	ヘラナデ。			AB>E	良好	にぶい橙色 橙色			
	15	弥生土器	広口壺	胴部有段。単節斜縄文。段部縄文原体による押捺。無文区横方向のヘラナデ、赤彩。	ヘラナデ。			AB	良好	赤色 にぶい橙色			
A 3	1	土師器	台付碗	ハケ(13/1cm)(右左)のち口縁部ヘラナデ(右左)、ヨコナデ。	ハケのち口縁部ヘラナデ。体部ヘラナデ、ヘラケズリ。	確認面	体部ほぼ完存	AB	良好	にぶい赤褐色 橙色	11.5 (5.9)		300 301
A 1	2	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(左右)。	ヘラナデ、ヨコナデ。	確認面	体部1/4	AB	良好	赤褐色 橙色	(13.6) (4.0)		
B 2	3	土師器	高杯	縦方向のヘラケズリのちヨコナデ。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。一部赤彩。	確認面	胴部1/2	AB	良好	赤色 灰オリーブ色	(4.7)	10.8	
	4	弥生土器	甕	胴部有段、縄文原体による押捺。ヘラナデのちミガキ。	ヘラナデ、ミガキ。		胴部中位 1/3	㊥>AB	良好	橙色 にぶい橙色	(9.6)		
	5	弥生土器	高杯	脚部複合部単節斜縄文2段、押捺。長三角形あるいは長台形の透孔。ヘラナデのちミガキ。	ヨコナデのち粗いミガキ。		脚部1/4周	AB	良好	橙色 浅黄褐色	(13.4)	(16.1)	
	6	弥生土器	高杯	脚部ヘラナデのちヨコナデ、赤彩。凸帯縄文原体?による押捺。	ナデ、赤彩。		脚部上半全周	㊥>AB	良好	赤褐色 明黄褐色	(4.1)		
	7	弥生土器	高杯	突帯縄文原体による押捺。ヘラナデ、ミガキ。赤彩。	器面状態不良。杯部赤彩。		脚部上半全周	㊥>B>E	良好	赤褐色 赤灰色	(4.6)		
	8	土師器	甕	ヘラナデのち胴部粗いミガキ。口縁部ヨコナデ。全体に黒化。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。		胴部上半 1/6	E>A	良好	黒褐色 にぶい赤褐色	(14.2) (9.5)	(18.0)	
	9	土師器	甕	ハケ(14/1cm)(下上、頸部から上下)。口縁部ヨコナデを加える。	口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ハケ(下上)のち一部ミガキ。		胴部上半 1/3	AB>E>C D	良好	赤褐色 灰褐色	(5.3)		
	10	土師器	器台	ヘラナデ、ヨコナデのち粗いミガキ。貫通孔不明。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデのち粗いミガキ。赤彩。		器受部1/4	㊥>BCD	良好	にぶい赤褐色	(9.1) (2.3)		

Ⅲ 小田部向原遺跡

11	土師器	高杯	杯部ヘラナデ。脚部縦方向のヘラナデのちヨコナデか。赤彩。	杯部ヘラナデ。赤彩。脚部ヘラナデ、ヨコナデ。		脚部上半のみ	AB>E	良好	赤色 橙色	(5.5)		
12	土師器	高杯	脚部ヘラケズリ(下上)。赤彩。	杯部ヘラナデ、赤彩。脚部ヘラナデ、ヨコナデ。		脚部上半のみ	E>AB	良好	赤色 灰褐色	(4.6)		
13	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		体部上半1 / 4、底部全周	B>AE	良好	明赤褐色 赤色	(15.1) 5.3	(15.4) 2.4	537
14	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ(右左)。体部下半はハケ状の条線を残す。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		杯部1 / 5	ABE	良好	赤色 赤橙色	(14.8) (4.4)		388
15	土師器	杯	体部ヘラケズリ(右左)。口縁部ヨコナデを加える。赤彩。	ヘラナデ、ヨコナデ。赤彩。		杯部上半 1 / 5	ABD	良好	赤色	(15.1) (3.9)	(15.9)	
16	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。器面摩滅。	ヨコナデか。		体部2 / 3	E>AB	良好	赤橙色	13.0 4.7		310 318

IV 雲ノ境遺跡

1 調査の概要

雲ノ境遺跡は、市原市菊間字雲ノ境2842-1番地ほかに所在する。

調査は、ゴルフ練習場造成にともなうものであり、その防球ネット支柱部分についてのみ発掘調査を実施した。調査面積は410㎡である。調査は、A・B・C各列にトレンチを設定し、遺構が検出された部分については、可能な限り調査区を拡張した。なお、C列トレンチでは、近年の攪乱によると考えられるものを除き、遺構は検出されていない。

検出された遺構は、竪穴住居跡18軒、古墳周溝1基、掘立柱建物跡1棟ないしは掘立柱列、土坑3基、溝10条である。

なお、A列軸線は真北に対してN-22°-Eである。ただし、基準点測量を実施することができなかったため、磁北および1/2,500地形図より仮定したものである。A・B列軸線は内角70°、B・C列軸線は内角120°に設定されている。

2 遺構と遺物

01号遺構(fig. 70)

竪穴住居跡。Aトレンチ北端部に位置する。埋没した浅い谷地形の底にあり、また盛土により、現地表面からローム確認面までは約1.5mを測る。竪穴住居跡03号遺構、土坑02号遺構と重複する。本遺構が新。大半が調査区外におよぶ。建替えは確認できない。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は不明。主軸方位は、西辺を主軸方向と仮定した場合N-28°-Wである。残存壁高は確認面から約13cmを測る。P₁は支柱穴と考えられ、その深さは、床面よりP₁が78cm、P₂が25cmを測る。炉等他の施設は検出されていない。床は貼り床構造をもち、一部は03号遺構覆土上につくられている。周溝は調査範囲では全周する。fig70土層1層は盛土層、2層は暗灰褐色土層、3層は粒状の暗褐色土層、4・5層は明黒褐色土層、6層は黒褐色土層、7層は暗黄褐色土層、8層はロームブロックを含む明黒褐色土層、9層は黒褐色均質土層、10層は明黒褐色土層、11・13層は黒褐色均質土、12・14・15層はローム崩落土である。覆土は自然堆積と考えられる。11～14層は02号遺構。

出土遺物は、1・2・4が床面から、3は一括出土遺物である。

tab.13 雲ノ境遺跡新旧遺構番号対照表

新	旧	遺 構	新	旧	遺 構	新	旧	遺 構	新	旧	遺 構
01	11	竪穴住居跡	09	05	竪穴住居跡	16	10	竪穴住居跡	24	21	竪穴住居跡
02	12	土坑(落し穴)	10	02	溝	17	10	溝	25	22	溝
03	13	竪穴住居跡	11	02	溝	18	16	竪穴住居跡	26	23	竪穴住居跡
04	01	竪穴住居跡	12	06	竪穴住居跡	19	18	竪穴住居跡	27	24	竪穴住居跡
05	14	溝	13	29	竪穴住居跡	20	19	掘立柱列	28	26	竪穴住居跡
06	01	溝	14	15	竪穴住居跡	21	25	土坑	29	27	溝
07	03	(竪穴住居跡)	15 a	08	古墳	22	28	土坑(炉穴)	30	27	竪穴住居跡
08	04	竪穴住居跡	15 b	17	古墳	23	20	竪穴住居跡			

IV 雲ノ境遺跡

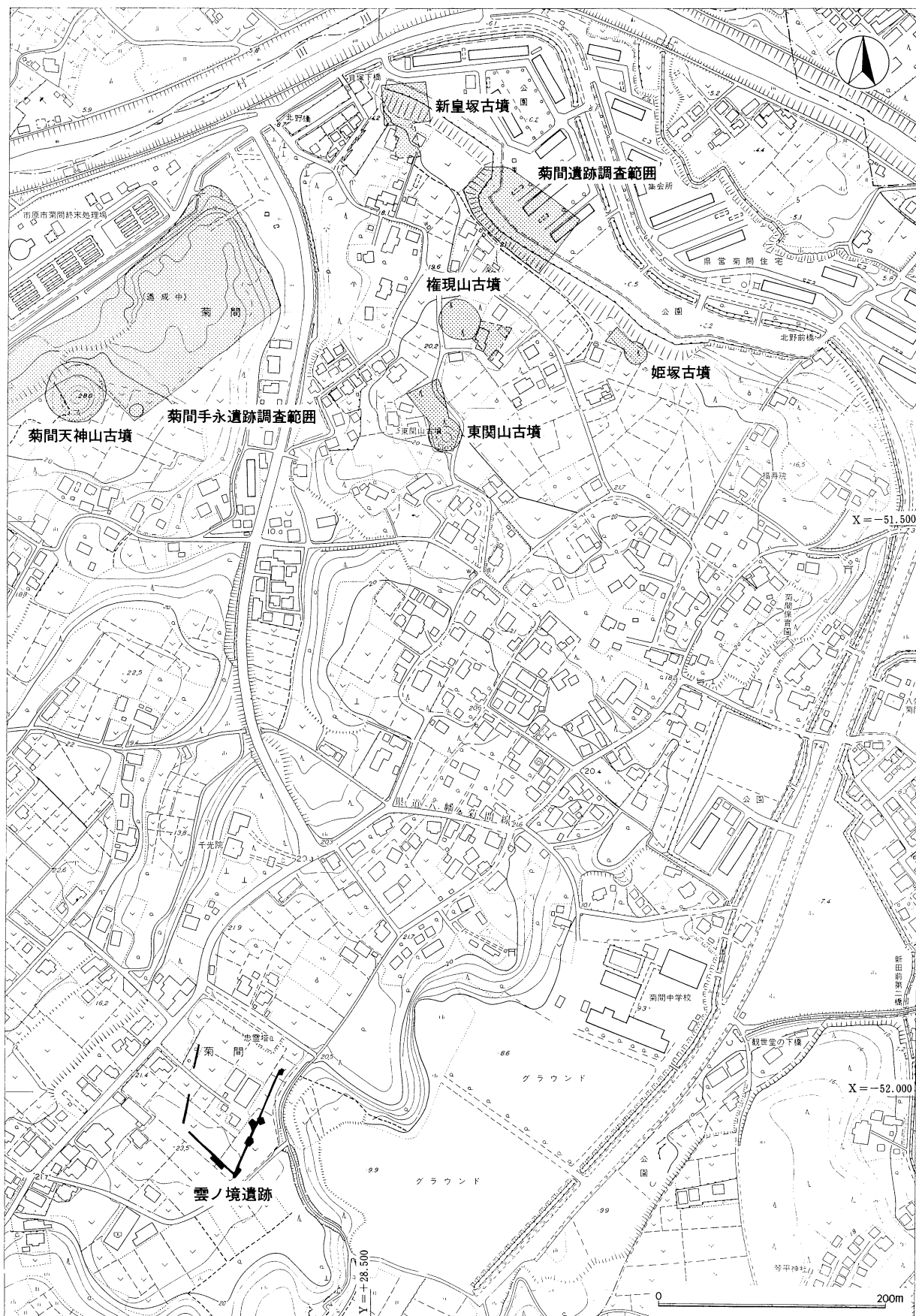


fig.66 雲ノ境遺跡周辺地形図(1/5,000)

(1980年測図 市原市地形図A-6、B-6より)

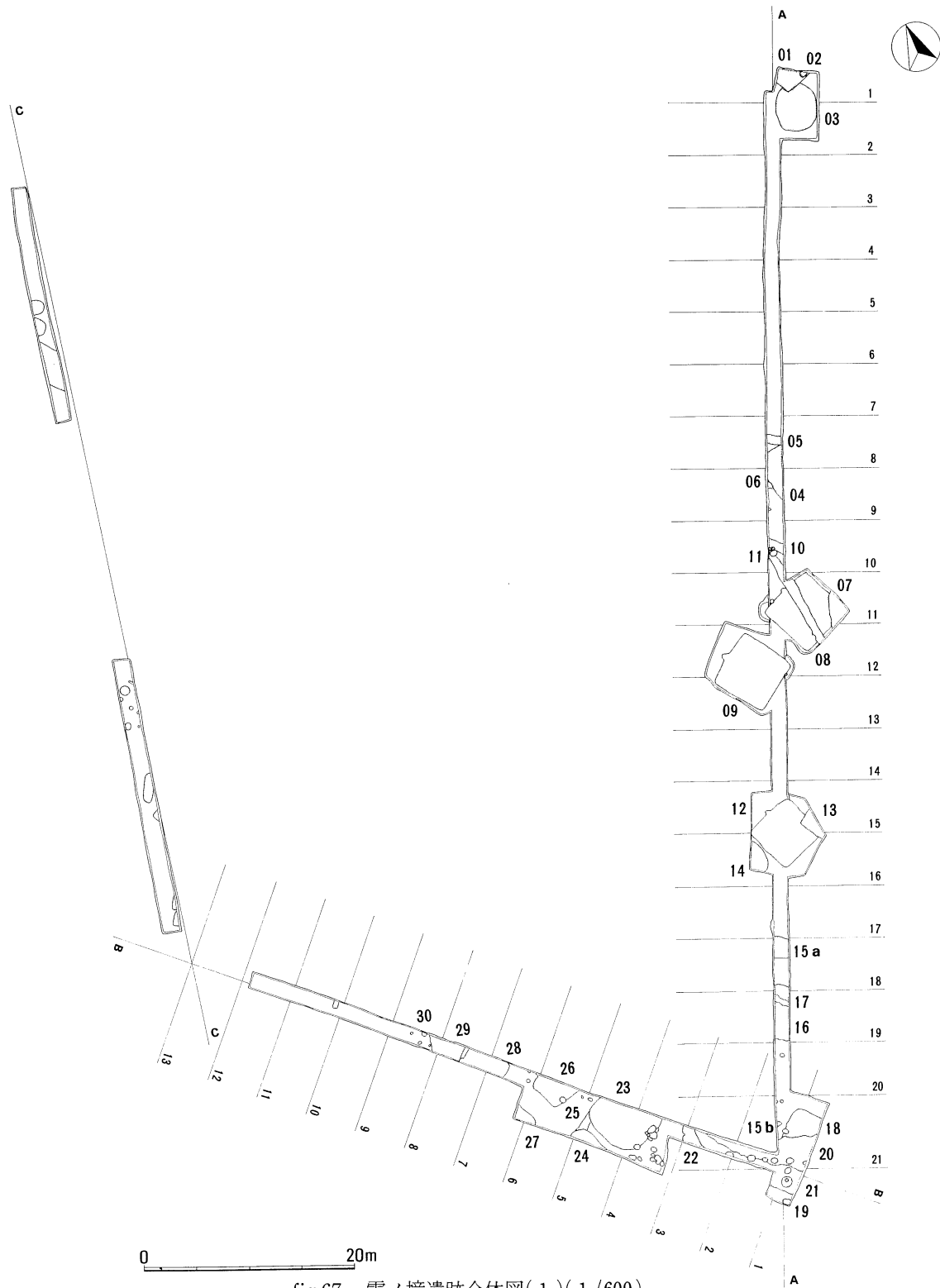


fig.67 雲ノ境遺跡全体図(1)(1/600)

02号遺構(fig. 70)

土坑。落とし穴と考えられる。竪穴住居跡02号遺構掘形面において検出された。検出面最大幅65cm、02号遺構掘形面より1.15mを測る。主軸方位はおおよそN-15°-Eである。土層は01号遺構で記載した。自然堆積と考えられる。

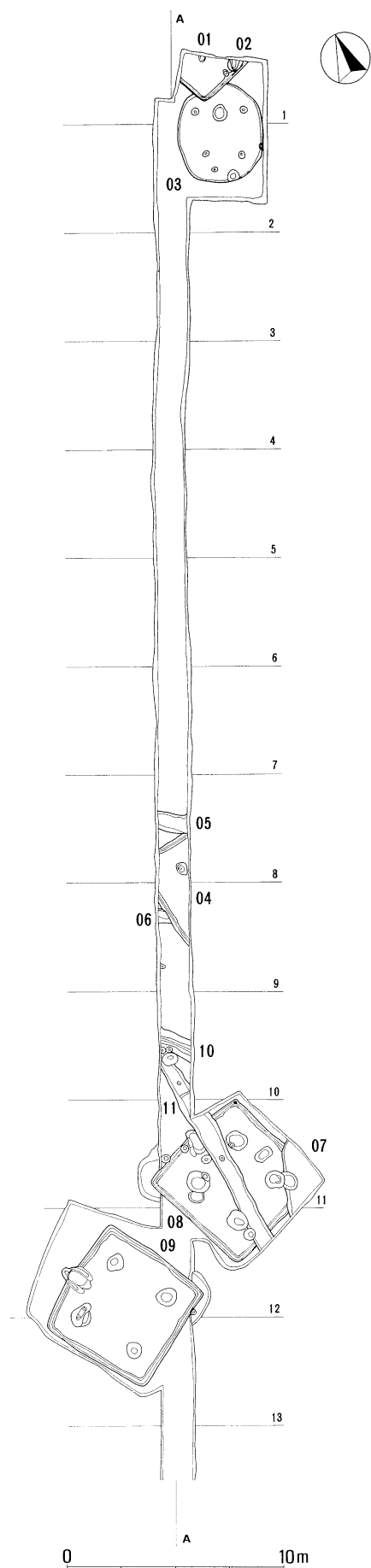


fig.68 雲ノ境遺跡全体図(2)(1/300)

遺物は出土していない。

03号遺構(fig. 70)

堅穴住居跡であり、完掘することができた。堅穴住居跡01号遺構と重複する。本遺構が古。建替えは確認できない。堅穴平面形態は楕円形を呈し、規模は、4.53(主軸)×3.93m、確認面面積15.0㎡、床面13.34㎡、内区3.87㎡を測る。主軸方位はN-21°-W、残存壁高は26~32cmである。P₁~P₄は支柱穴、P₅は梯子穴、P₆が貯蔵穴である。その深さは、床面よりP₁が23cm、P₂が18cm、P₃が32cm、P₄が38cm、P₅が10cm、P₆が20cm、P₇が4cmを測る。支柱穴はいずれも浅い。P₆平面規模は57×53cmを測る。炉は、主軸線上北側にあり、平面規模74×64cm、深さ6cmであり、底面はあまり焼けていなかった。床は貼り床構造をもたない。全体に比較的硬質であった。周溝は明確ではなかった。覆土は暗褐色土層を基調とするが、下層には焼土とローム粒の混合土の堆積認められた。火災に遭ったものと考えられる。

出土遺物は、いずれも覆土から一括出土したものである。

04号遺構(fig. 71)

堅穴住居跡。溝05・06号遺構と重複する。本遺構が古。大半が調査区外におよぶ。建替えは確認できない。堅穴平面形態は方形を呈し、規模は不明。主軸方位は、西辺を主軸方向と仮定した場合N-4°-Wである。残存壁高は確認面から約23~53cmを測る。P₁は支柱穴と考えられ、深さは床面より67cmを測る。カマド等他の施設は検出されていない。床は貼り床構造をもち、比較的硬質であった。周溝は調査範囲では全周する。fig. 71土層1層は盛土層、2層は暗灰褐色土層、3・6層は明黒褐色土層、4層は黒褐色土層、5層はロームを局部的に混合する暗褐色土層、7・8層はロームブロック、ローム粒を多量含む暗褐色土層、9層は明黒褐色均質土層、10層は粒状の黒褐色土層、11層が暗黄褐色土層、12層はロームブロックを含む明黒褐色土層、13層が黒褐色均質土層、14層が明黒褐色土層、15層が暗灰褐色土層、16層が明黒褐色土層であり、覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、2が覆土上層から、他は一括出土遺物である。

05号遺構(fig. 71)

溝。堅穴住居跡04号遺構と重複する。本遺構が新。溝断面形態はU字形を呈し、北壁の傾斜がやや急である。断面セクショ

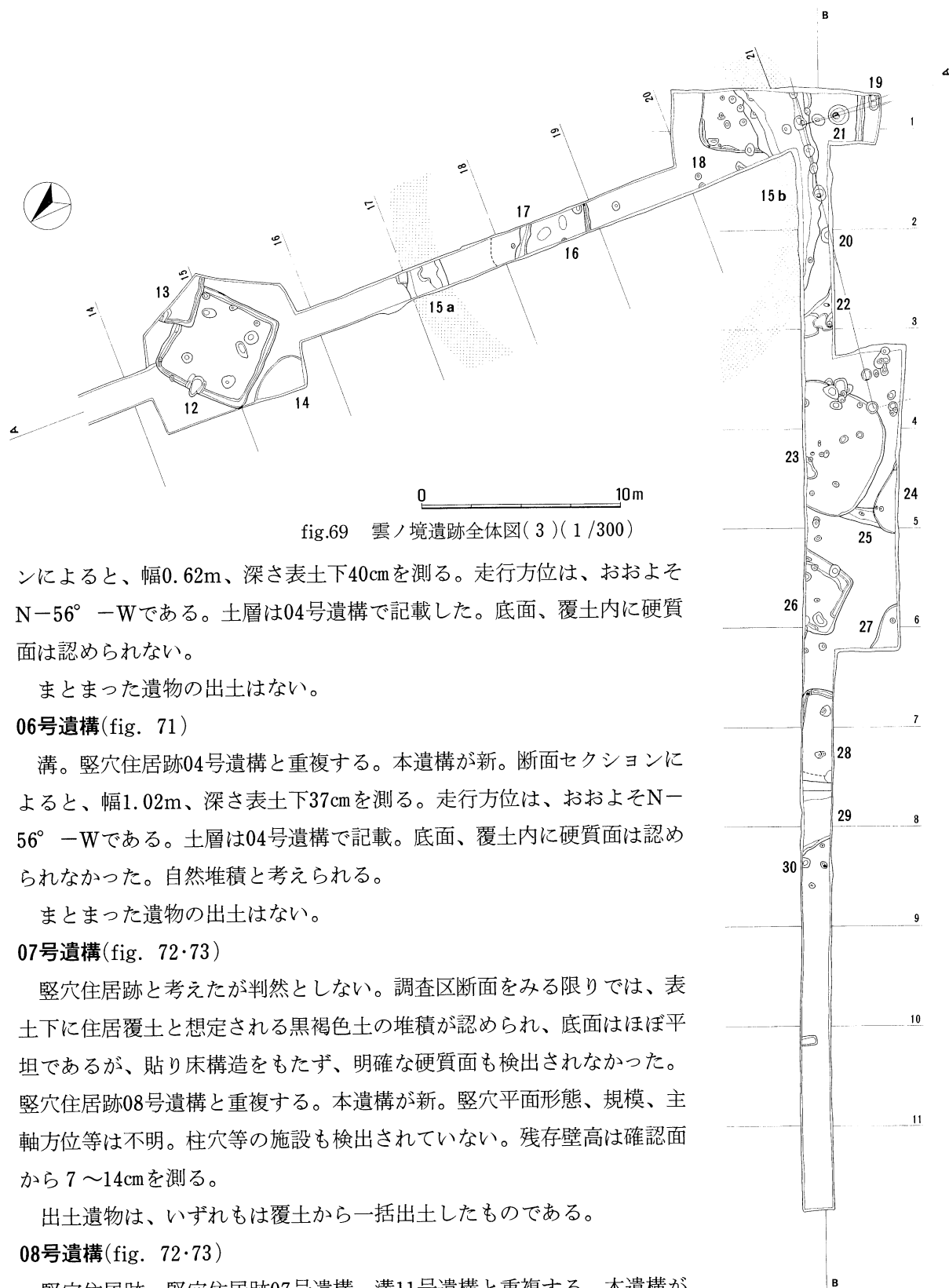


fig.69 雲ノ境遺跡全体図(3)(1/300)

ンによると、幅0.62m、深さ表土下40cmを測る。走行方位は、おおよそN-56°-Wである。土層は04号遺構で記載した。底面、覆土内に硬質面は認められない。

まとまった遺物の出土はない。

06号遺構(fig. 71)

溝。堅穴住居跡04号遺構と重複する。本遺構が新。断面セクションによると、幅1.02m、深さ表土下37cmを測る。走行方位は、おおよそN-56°-Wである。土層は04号遺構で記載。底面、覆土内に硬質面は認められなかった。自然堆積と考えられる。

まとまった遺物の出土はない。

07号遺構(fig. 72・73)

堅穴住居跡と考えたが判然としない。調査区断面をみる限りでは、表土下に住居覆土と想定される黒褐色土の堆積が認められ、底面はほぼ平坦であるが、貼り床構造をもたず、明確な硬質面も検出されなかった。堅穴住居跡08号遺構と重複する。本遺構が新。堅穴平面形態、規模、主軸方位等は不明。柱穴等の施設も検出されていない。残存壁高は確認面から7~14cmを測る。

出土遺物は、いずれもは覆土から一括出土したものである。

08号遺構(fig. 72・73)

堅穴住居跡。堅穴住居跡07号遺構、溝11号遺構と重複する。本遺構が古。建替えは確認できない。堅穴平面形態は方形を呈し、規模は5.69(主軸)×5.60m、確認面推定面積31.06㎡、床面28.63㎡、内区6.64㎡を測る。主軸方位はN-20°-Wである。残存壁高は4~35cm。P₁~P₄

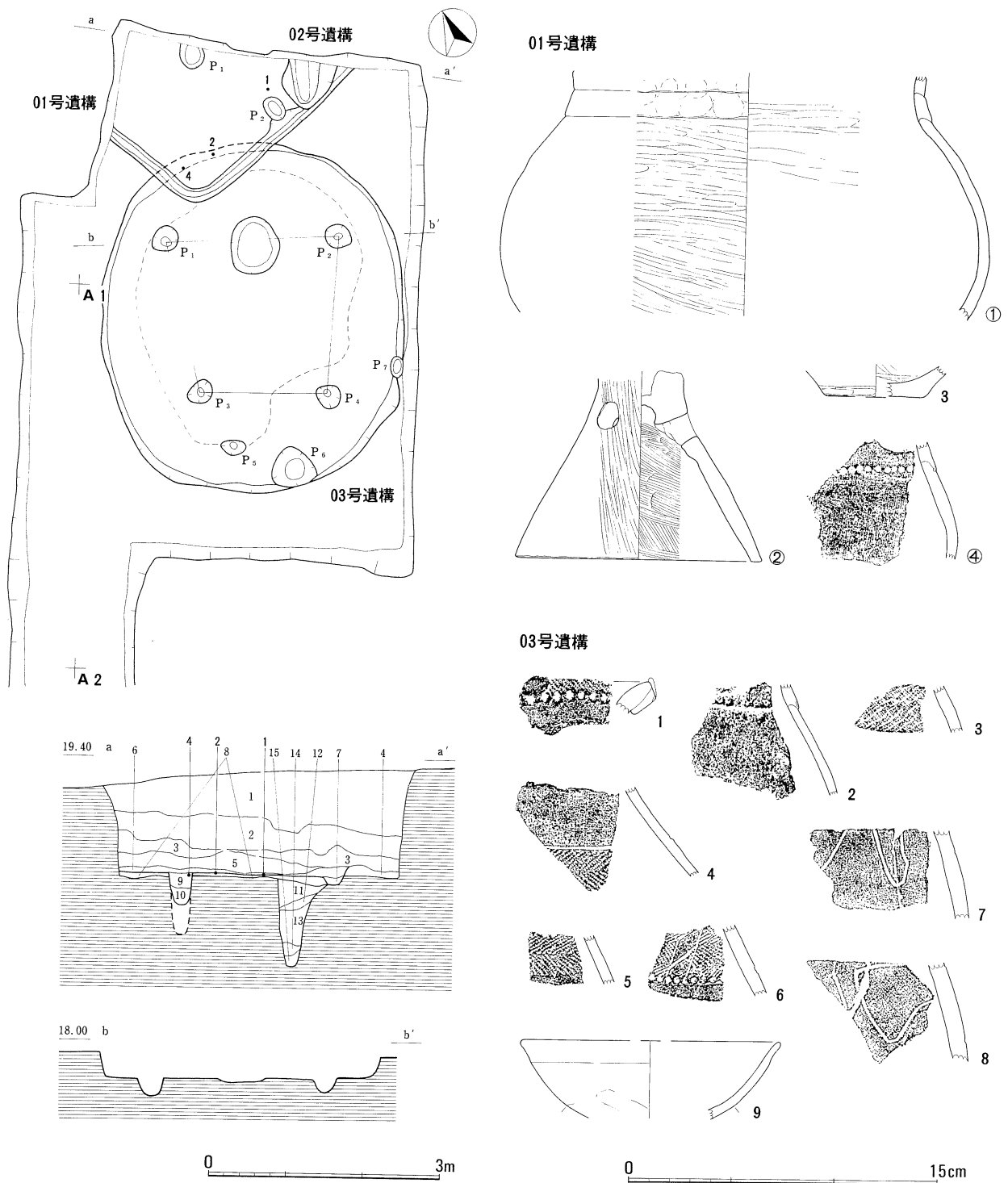


fig.70 01・02・03号遺構実測図(1/80)、01・03号遺構出土遺物実測図(1/3)

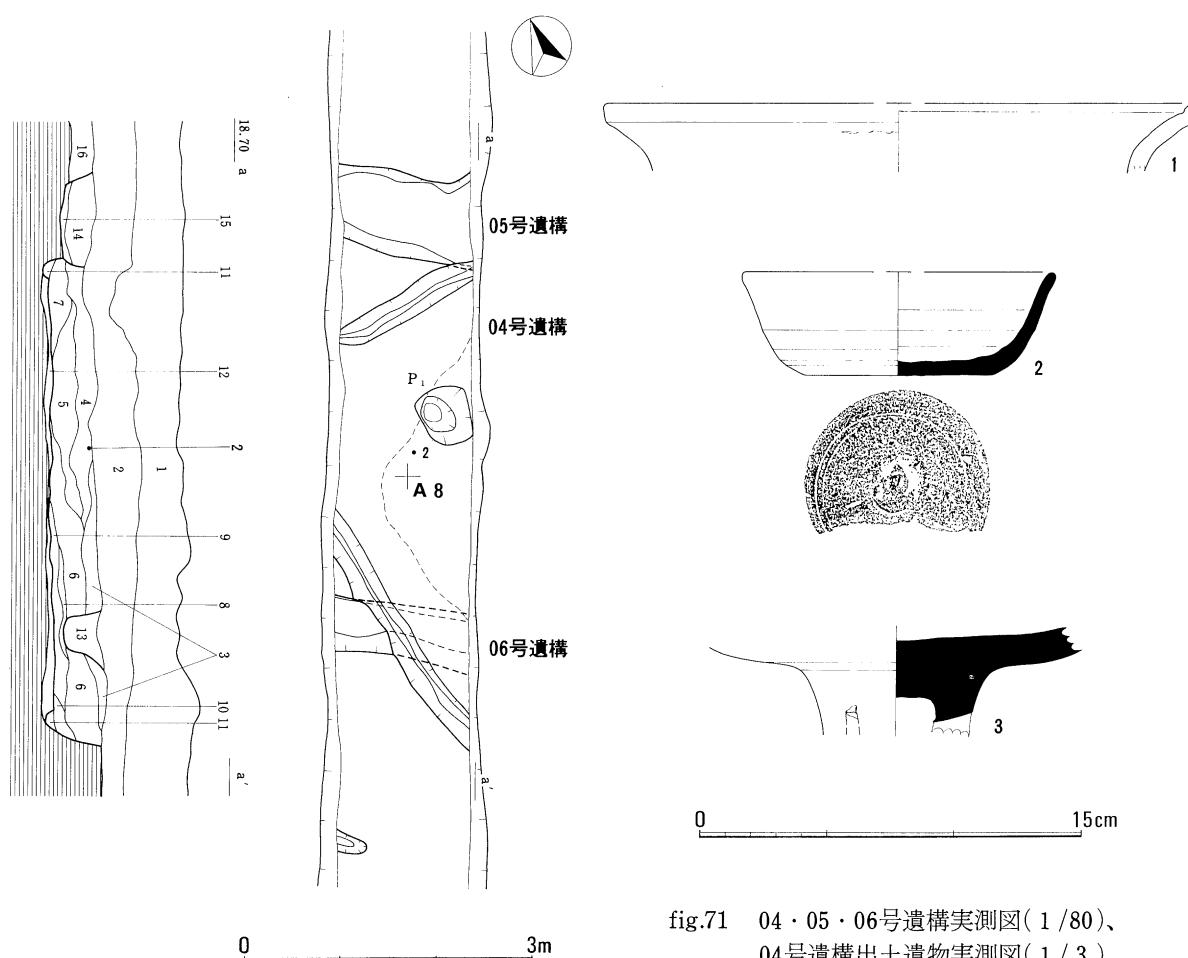


fig.71 04・05・06号遺構実測図(1/80)、
04号遺構出土遺物実測図(1/3)

は主柱穴であるが、他は本遺構に帰属するものとはかぎらない。深さは床面よりP₁が59cm、P₂が68cm、P₃が61cm、P₄が66cm、P₅が34cm、P₆が32cm、P₇が23cm、P₈が29cm、P₉が14cm、P₁₀が41cm、P₁₁が11cm、P₁₂が確認面から38cmを測る。貯蔵穴は検出されなかった。P₂脇床面上には薄い白色粘土層が認められた。カマドはほぼ主軸線上北壁にあり、左袖基部および火床面のみ遺存する。袖構築材は白色粘土と山砂を主とし、黒色土を混合する。焚き口は掘り込みをもち段状になる。火床面はよく焼けていた。床は中央部のみ硬質であった。掘形は壁際周囲が深くなる。周溝は全周する。fig. 72土層は、1層が盛土層、2層が暗灰褐色土層、3層が明黒褐色土層、4層が黒褐色均質土層、5層が暗黄褐色土層、6層が明黒褐色土層、7層がロームを多量に含む明黒褐色土層、8層が暗褐色土層、9層が黒褐色均質土層、10層が褐色ブロックを含む明黒褐色土層、11層がローム粒を含む明黒褐色土層、12層が山砂粘土粒を含む黒褐色土層、13層がロームを多量に混合する明黒褐色土層、14層が明黒褐色均質土層、15層が山砂粘土混合土層、16層が黒色土と山砂粘土混合土層、17層が山砂粘土、焼土粒を混合する黒褐色土層、18層がボロボロの焼土ブロックからなる層、19・23層が黒褐色均質土層、20・21・24層がローム主体の暗黄褐色土層、22層がロームブロックを局部的に混合する明黒褐色土層であり、覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、いずれも覆土から一括出土したものである。

09号遺構(fig. 72・73)

竪穴住居跡。建替えは明確ではない。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は5.72(主軸)×5.84m、確

IV 雲ノ境遺跡

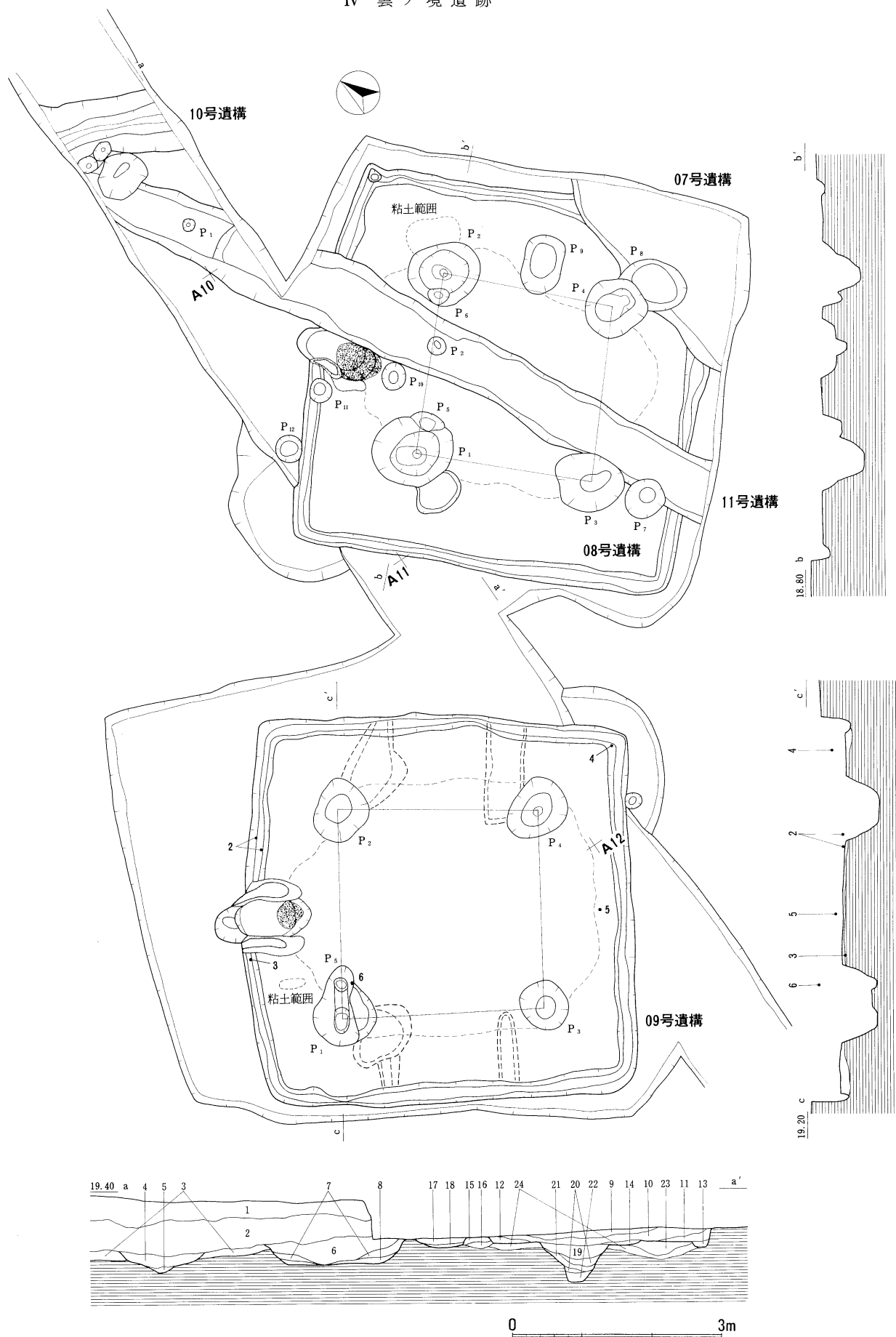
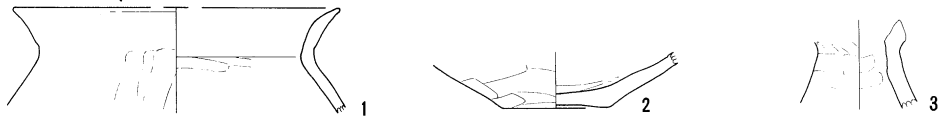


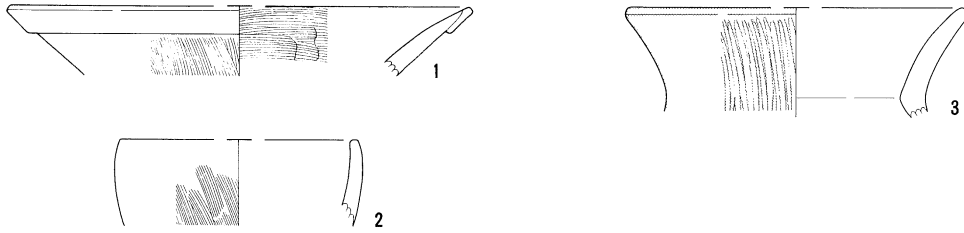
fig.72 07・08・09・10・11号遺構実測図(1/80)

IV 雲ノ境遺跡

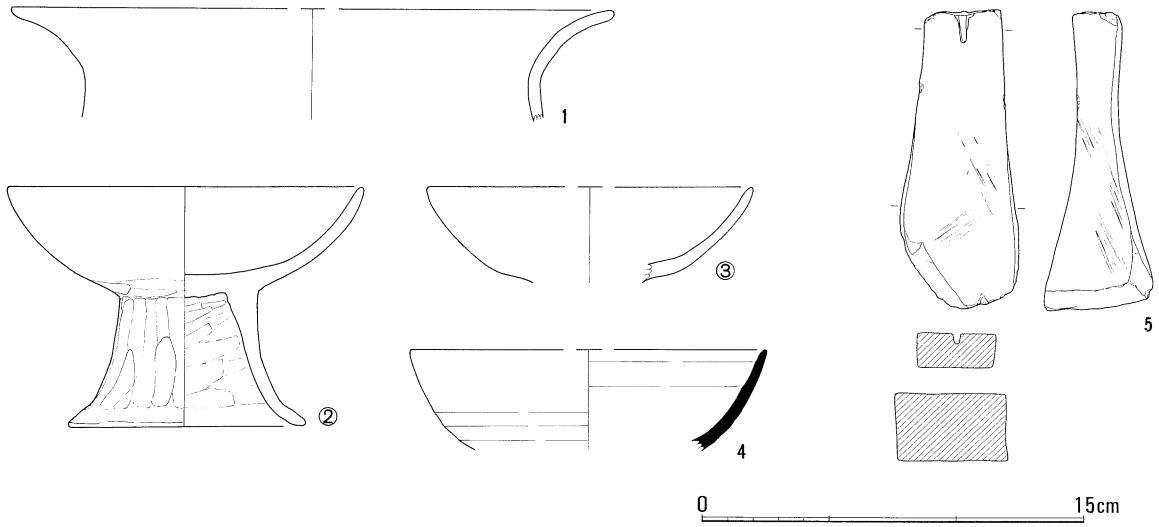
07号遺構



08号遺構



09号遺構



11号遺構

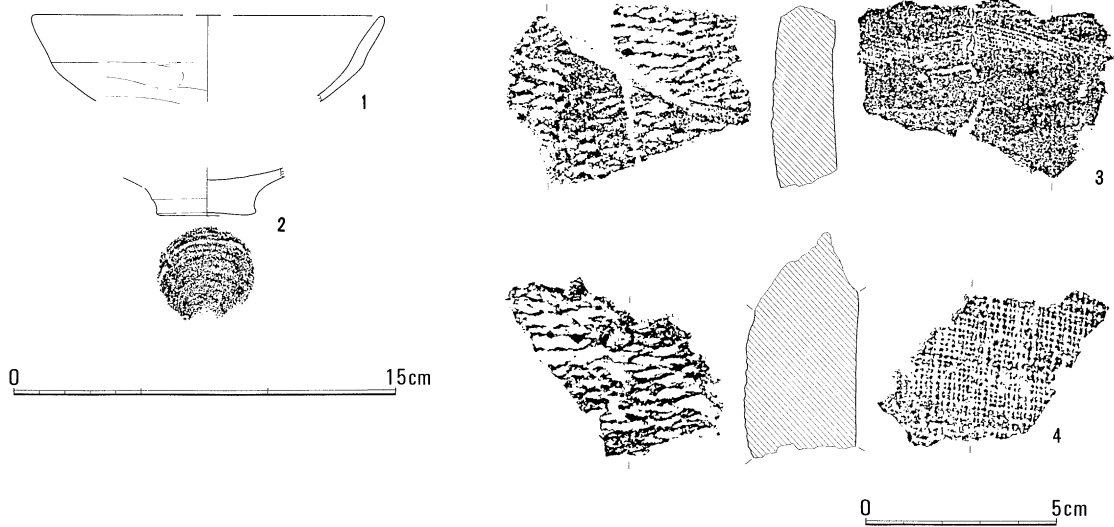


fig.73 07・08・09・11号遺構出土遺物実測図(1/3、1/2)

認面面積31.02㎡、床面28.28㎡、内区8.67㎡を測る。主軸方位はN-31°-Wである。残存壁高は8～49cm。P₁～P₄は支柱穴であり、P₅はP₁の支柱であろうか。深さは床面よりP₁が47cm、P₂が50cm、P₃が38cm、P₄が48cm、P₅が47cmを測る。貯蔵穴は検出されていない。間仕切りと考えられている溝は、掘形面によって検出されたものである。床面での痕跡は明確ではなかった。カマドはほぼ主軸線上北壁にある。袖部は、上下2層からなり、基部は黒褐色土、上層は白色粘土と山砂を主とし黒色土を混合する。焚き口は掘り込みをもち若干深くなる。火床面はよく焼けていたが広範囲ではない。床は比較的全体に硬質であった。掘形は壁際周囲が深くなるが全体に浅い。カマド左脇床面上に、白色粘土ブロックが認められた。周溝は全周する。本住居跡は火災に遭ったと思われ、とくに西壁際に焼土の堆積が認められた。壁際は底面と若干の間層をおく。

遺物は、2・3が床面より、1・4・5・6が覆土より出土した。5は砥石であり、4面とも使用され線条痕を残す。一方の頭部には挟り込みをいれる。長さ11.72cm、最大幅4.78cm、厚さ4.30cm、重さ199.7gを測る。石質は凝灰岩質である。6(pl. 46)は鏡であり、ほぼ確認面レベルより、鏡面を下にして出土した。本遺構に帰属するものではないが、周囲に土坑等は確認されていない。計測値についてはpl. 46に記した。ほぼ完存するが、遺存状態は不良であり、全体として文様は鮮明ではない。鏡面はやや凸面となり、高い角縁に断面半円形の界圈をまわし内外区をわけ、外区には2段に櫛歯文が巡り、内区には鈕をはさんで一對の雀が配される。草木は松枝と考えられる。

10号遺構(fig. 72)

溝。溝11号遺構と重複するが、新旧関係は不明。断面セクションによると、幅1.25m、深さ表土下29cmを測る。2段掘りとなり、底面は細い溝状となる。走行方位は、おおよそN-43°-Wである。土層は08号遺構において記載。底面、覆土内に硬質面は認められなかった。自然堆積と考えられる。

近現代の瓦片が多量に出土している。菊間藩藩庁に関連する遺構であろうか。

11号遺構(fig. 72・73)

溝。竪穴住居跡08号遺構、溝11号遺構と重複するが、11号遺構とは新旧関係不明。08号遺構よりは新。検出部分での延長距離は10.4m、最大幅1.04mを測る。断面は逆台形であり、断面セクションによると深さ表土下29cmである。掘り直しは認められない。走行方位は、おおよそN-4°-Wである。P₁が底面からの深さ22cm、P₂が16cmを測るが、帰属は明確ではない。P₁脇が段状となり、比高は8cmである。土層は08号遺構で記載。底面、覆土内に硬質面は認められなかった。自然堆積と考えられる。

出土遺物1～4は、覆土から出土したものである。3・4は、菊間廃寺跡に関連するものであろうか。これとは別に、近現代の瓦片が多量に出土している。

12号遺構(fig. 74)

竪穴住居跡。竪穴住居跡13号遺構と重複する。当初13号遺構を考慮せずに掘り上げてしまったが、重複部分に床面が認められなかったことから、本遺構が古いと判断した。建替えは明確ではない。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は5.05(主軸)×4.96m、確認面面積24.27㎡、床面21.75㎡、内区6.09㎡を測る。主軸方位はN-18°-Wである。残存壁高は4～18cm。P₁～P₄は支柱穴である。深さは床面よりP₁が45cm、P₂が46cm、P₃が36cm、P₄が35cm、P₅が15cm、P₆が8cm、P₇が12cm、P₈が確認

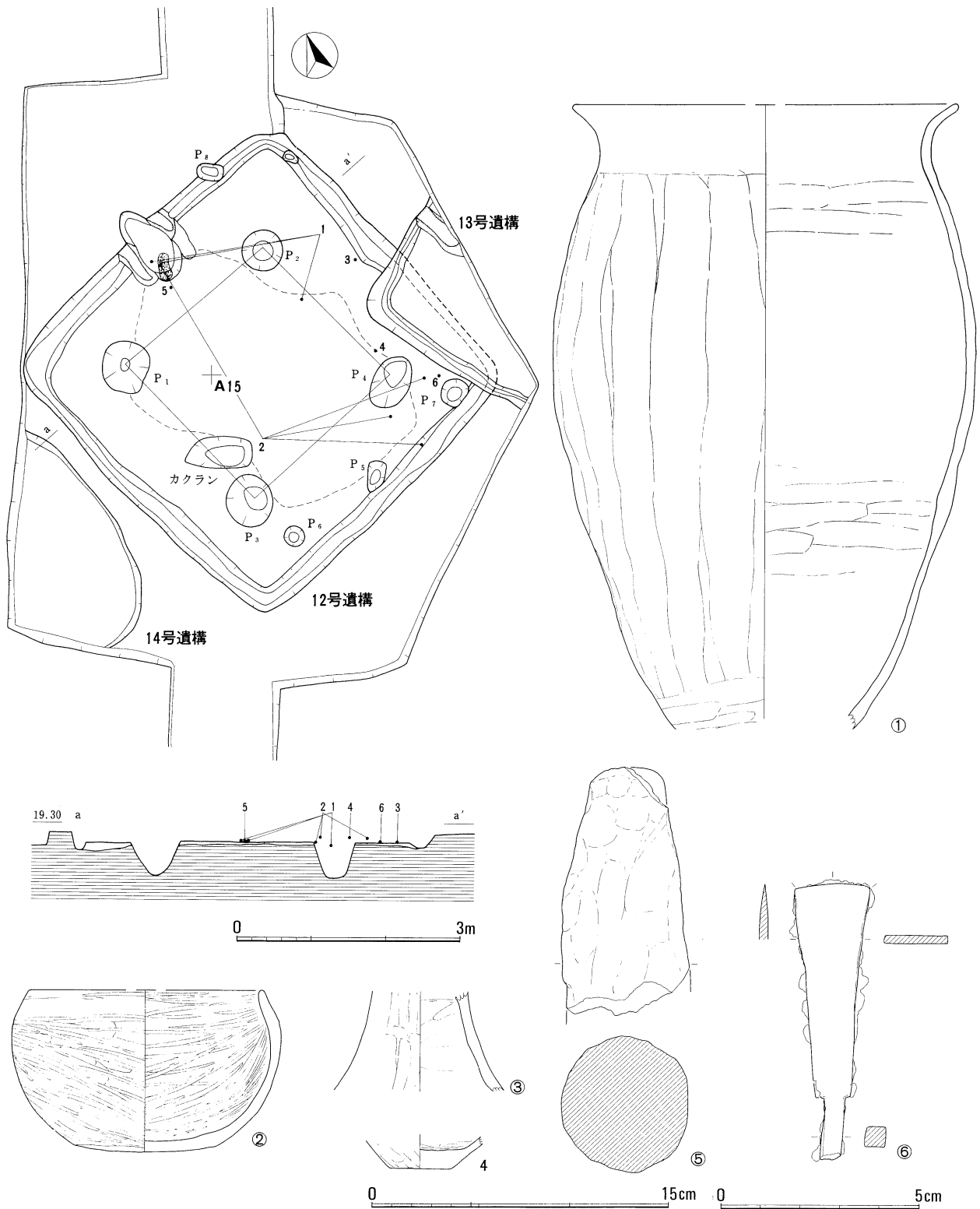


fig.74 12・13・14号遺構実測図(1/80)、12号遺構出土遺物実測図(1/3、2/3)

面より19cmを測る。貯蔵穴は検出されていない。カマドはほぼ主軸線上にあり、白色粘土による袖部基部のみが検出された。焚き口は掘り込みをもち若干深くなる。火床面はよく焼けていたが広範囲ではない。床は比較的全体に硬質であった。掘形は壁際周囲が深くなるが全体に浅い。周溝は全周する。覆土上層に焼土層が認められたが、火災住居とは考えられない。基本的に自然堆積と考えられる。

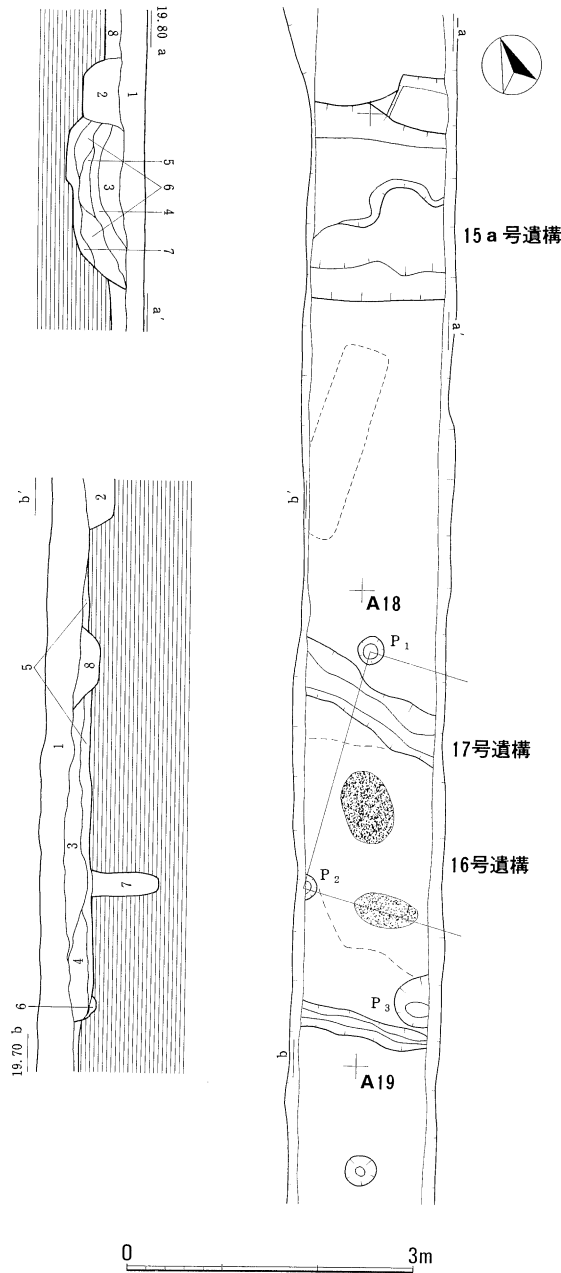


fig.75 15a・16・17号遺構実測図(1/80)

遺物は、4をのぞき床面から出土したものである。5は土製支脚であり、基部が欠損する。全長で12.6cm、重さを520gを測る。器面はにぶい橙色を呈し、胎土は白色粒を多量に混合する。6は鉄鏃であり、頭部に刃部をつくる。圭頭斧箭形式ないしは関部をつくることから鏃頭式に分類される。茎は半折し、現存長7.12cm、刃部幅1.97cm、重さ7.92gを測る。

13号遺構(fig. 74)

竪穴住居跡。竪穴住居跡12号遺構と重複する。本遺構が新。竪穴平面形態は方形と考えられるが、大半は調査区外となり、規模、住居内施設等不明。主軸方位はN-31°-Wである。残存壁高は8~22cmを測る。カマドは北東壁にあり、白色粘土と山砂混合土を構築材とする。床は全体に軟質であった。掘形は壁際周囲が深くなるが全体に浅い。周溝は検出範囲内では全周する。覆土は黒褐色土を基調とし、自然堆積によると考えられる。

遺物は出土していない。

14号遺構(fig. 74)

竪穴住居跡と判断した。竪穴平面形態は胴張り隅丸方形ないしは楕円形と考えられるが、大半は調査区外となり、規模、主軸方位、住居内施設等不明。残存壁高は17cm前後を測る。床は貼り床構造をもたない。全体に軟質であったが、部分的に硬質面が認められた。覆土は暗褐色土を基調とし、自然堆積によると考えられる。

遺物は出土していない。

15号遺構(fig. 75・76・77・78)

古墳周溝と考えられる。竪穴住居跡18号遺構、掘立柱列20号遺構と重複する。18号遺構より新、20号遺構より古。15a号遺構とした部分は、確認面における幅2.08m、深さ確認面より0.47mを測る。外壁一部に攪乱をうける。底面は2段になるが、掘り直しは認められない。土層は、1層が表土層、2層が攪乱層、3層が褐色ブロックを含む黒褐色土層、4・5・8層が明黒褐色土層、6層が暗褐色土層、7層がロームブロックを主体とする層である。15b号遺構部分は、検出部分延長距離約10.5m、調査区断面セクションで幅4.07m、底面幅2.3m、表土下深さ1.2~1.6mを測る。fig. 77土層は、1層が表土層、2・4層が明黒褐色土層、3層が暗褐色土層、5層がローム粒を多量に混合する黒褐色土層、6層がローム粒を多量に混合する明黒褐色土層、7層が焼土粒を混合する黒褐色土層、8層が黒褐色土層、9~14層がロームを多量に混合する明黒褐色土層であり、とくに11・12・14層はロームブ

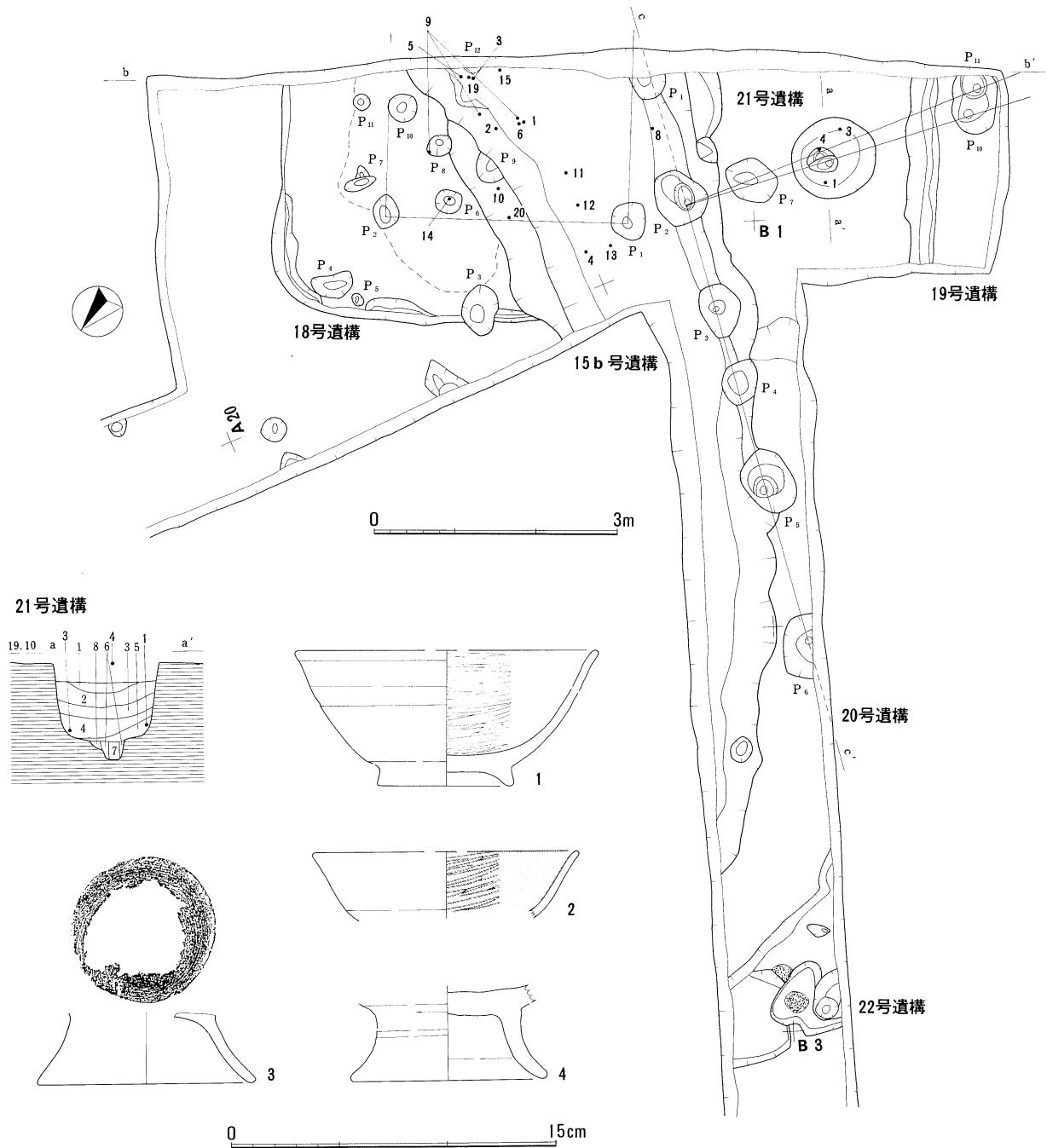
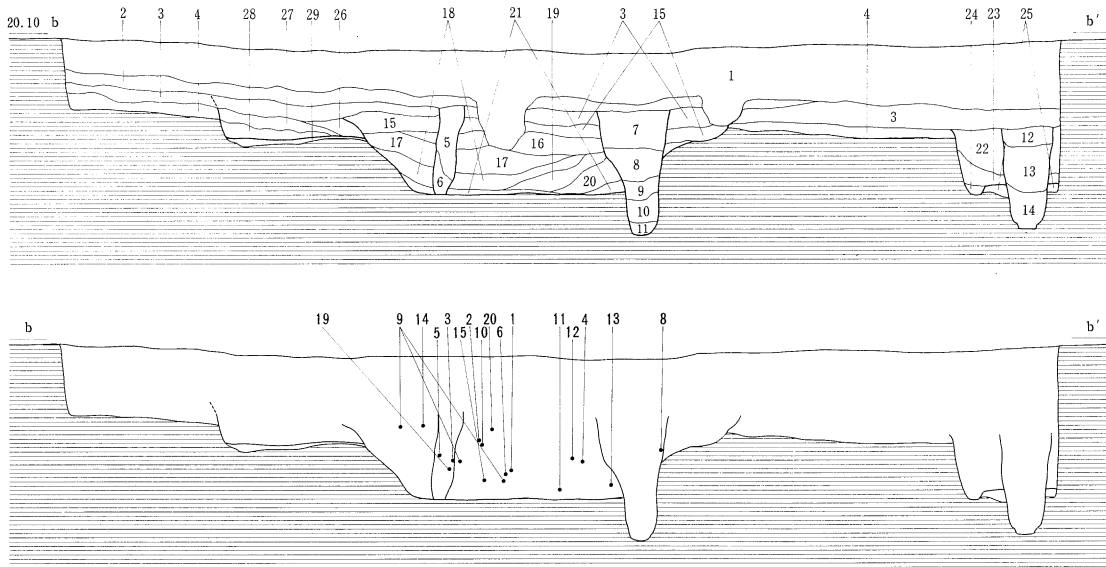


fig.76 15b・18・19・20・21号遺構実測図(1/80)、21号遺構出土遺物実測図(1/3)

ロック主体。また、15・19層が明黒褐色土層、16層がローム粒を多量に混合する明黒褐色土層、17層が暗黄褐色土層であり、焼土を局部的に混合する。18・20層が暗褐色土層、21層がロームブロックを主体とする層である。22層は黒褐色土層、23層は暗黄褐色土層、24層は粒状ロームからなる層、25層はロームブロックを多量に混合する明黒褐色土層、26層はローム粒を多量に混合する明黒褐色土層、27層は明黒褐色土層、28層は焼土と粒状ロームからなる層、29層はロームブロックを主体とする層である。15号遺構覆土は自然堆積によると考えられる。

円墳と想定され、確認面外径で21.75m、内径で17.20m、底面内径で18.20mを測る。底面絶対高は、15b号遺構で18.3～18.4m前後を測り、一方への傾斜は認められない。15a号遺構底面は17.95m

15b・18・19・20号遺構



20号遺構

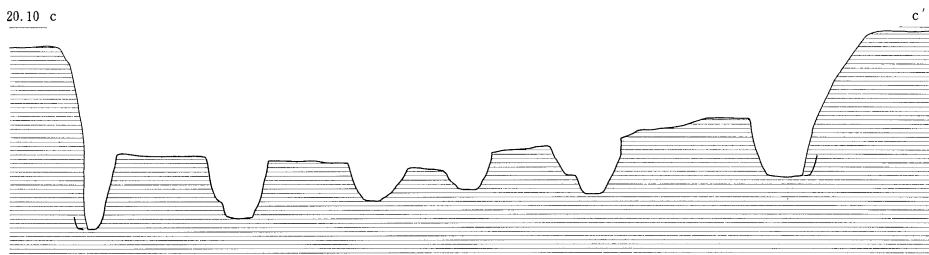


fig.77 15b・18・19・20号遺構実測図(1/80) 0 3m

前後である。

本遺構に帰属すると判断されるものはない。fig. 78は、基本的に15b号遺構より出土したものであるが、内側からの流れ込みが明瞭であり、本来は竪穴住居跡18号遺構に帰属するものが大半であろう。15a号遺構からは遺物は出土していない。19は、棒状の鉄製品であり、全長5.47cm、最大幅0.62cm、重さ3.27gを測る。20は、管状の土製品であり器面はミガキによる。全長3.12cm、最大径2.37cm、重さ24.7gを測る。

16号遺構(fig. 75)

竪穴住居跡。溝17号遺構と重複する。本遺構が古。また、遺存部分において直接重複しないものの、古墳15号遺構のなかに位置する。確認段階で床面が露呈し、北側部分については範囲を確定することができない。竪穴平面形態は、規模は不明。P₁～P₂を支柱穴とし、これと直交する主軸方位を仮定した場合、N-68°-Wになる。残存壁高は0～10cmである。柱穴の深さは床面よりP₁が71cm、P₂が49cm、P₃が8cmを測る。床面上2箇所火床面が検出された。ともに掘り込みをともなわない。範囲規模は、77×55cm、69×35cmを測る。周溝は南辺において検出された。床は、貼り床ではないが硬質であった。土層は、1層が表土層、2層が攪乱層、3層が明黒褐色土層、4層が暗褐色土層、5層が明黒褐色土層であり、焼土を局部的に混合する。6層が暗黄褐色土層である。7層は黒褐色土層

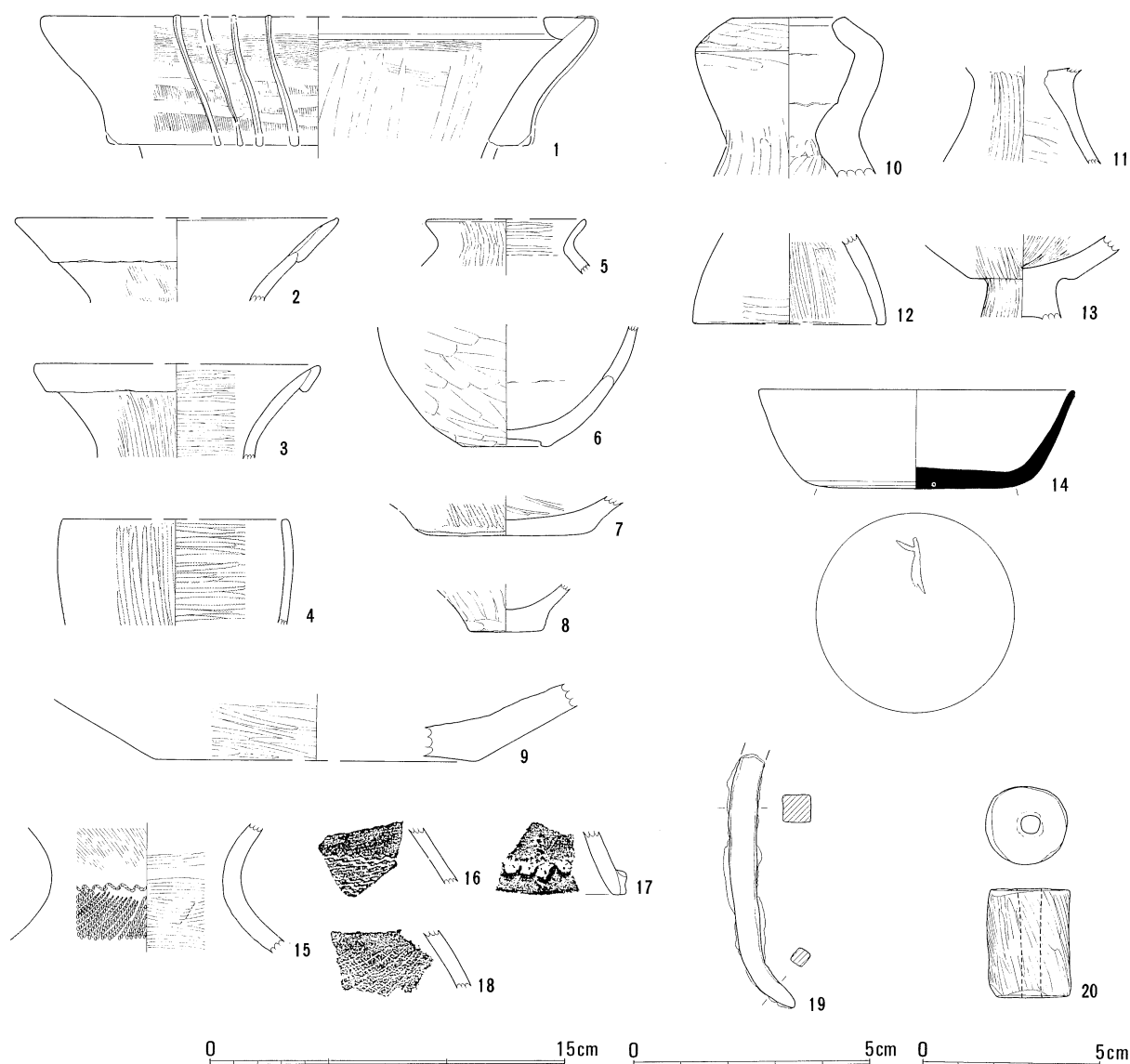


fig.78 15b・18号遺構出土遺物実測図(1/3、2/3、1/2)

であり、柱痕跡は明確ではない。

遺物は出土していない。

17号遺構(fig. 75)

溝。竪穴住居跡16号遺構と重複する。本遺構が新。確認面最大幅0.56mを測る。断面はU字形であり、16号遺構床面からの深さ6～13cmである。掘り直しは認められない。走行方位は、おおよそN-39°-Wである。土層8層は、粒状の黒褐色土層である。

遺物は、出土していない。

18号遺構(fig. 76・77・78)

竪穴住居跡。古墳15号遺構と重複する。本遺構が古。竪穴平面形態は方形ないしは長方形になる。規模は不明。P₁～P₂主柱穴の配置から復原すると、一辺約5.7mと想定される。これと直交する主軸方位を仮定した場合、N-39°-Wになる。残存壁高は0～22cmである。柱穴の深さは床面レベルよりP₁が93cm、P₂が80cm、P₃が33cm、P₄が6cm、P₅が8cm、P₆が23cm、P₇が12cm、P₈が34cm、P₉が30cm、P₁₀が34cm、P₁₁が40cm、P₁₂が61cmを測る。P₁・P₂以外の帰属については明らかではない。とく

にP₁₂については、15号遺構より後出する。炉、貯蔵穴等の住居内施設は検出されていない。床は貼
り床であり、中央部分は比較的硬質であった。掘形は壁際周囲が深くなるが全体に浅い。周溝は断続
する。土層については15号遺構で記載。流れ込みによる自然堆積と考えられるが、火災に遭ったこと
が想定される。

fig. 78出土遺物は、9・14が本遺構覆土から出土した以外、15b号遺構から出土したものであるが、
その大半は本遺構に帰属する可能性が高い。

19号遺構(fig. 74)

竪穴住居跡。掘立柱列20号遺構と重複する。本遺構が古。大半が調査区外となり、竪穴平面形態、
規模、住居内施設等不明。壁は検出部分ではほぼ直線的であり、これを基準とした場合、主軸方位は
N-41° -Wである。残存壁高は50cm前後を測る。床は、貼り床構造をもち、掘形は壁際周囲が深く
なる。周溝は検出されている。覆土土層は15号遺構で記載。自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

20号遺構(fig. 76・77・79)

掘立柱列。掘立柱建物跡ないしは掘立柱柵・塀跡と考えられる。円墳15号遺構、竪穴住居跡19・23号
遺構、土坑21号遺構と重複する。21号遺構をのぞき本遺構が新。また位置関係からは竪穴住居跡18号
遺構とも重複する。柱掘形P₁～P₁₉から構成されるが、P₁₄～P₁₈については直接関連しない。竪穴住居
跡23号遺構南辺に重複する柱掘形と組合せをもつ可能性もある。検出範囲では、P₁ - P₁₃列、重複す
るP₂ - P₁₀列、P₂ - P₁₁列、P₁₃ - P₁₉列からなる。P₂ - P₁₀列、P₂ - P₁₁列はP₂ - P₁₁列が新。P₁ - P₁₃列は、
方位をN-57° -Wにとり、これに対してP₂ - P₁₀列は91°、P₂ - P₁₁列は96° 振れる。柱間心々距離
は、P₁P₂が1.67m、P₂P₃が1.35m、P₃P₄が0.97m、P₄P₅が1.32m、P₅P₆が2.03m、P₁₂P₁₃が2.07m、
P₂P₈が1.83m、P₂P₉が1.73m、P₈P₁₀が1.80m、P₉P₁₁が2.11m、またP₁P₁₃の延長距離が16.23mを測
る。各掘形の絶対高は、P₁が17.96m、P₂が18.10m、P₃が18.28m、P₄が18.37m、P₅が18.35m、P₆
が18.55m、P₇が18.75m、P₈が18.11m、P₉が18.21m、P₁₀が17.92m、P₁₁が18.02m、P₁₂が18.28m、
P₁₃が18.45m、P₁₄が18.82m、P₁₅が18.45m、P₁₆が18.30m、P₁₇が18.71m、P₁₈が18.43m、P₁₉が18.84m
を測る。fig. 77土層は、15号遺構に記載した。調査区断面セクションでは柱痕跡は検出されなかつ
た。

いずれも遺物は出土していない。

21号遺構(fig. 76)

土坑。掘立柱列20号遺構P₈、P₉と重複する。本遺構が新。平面形態はほぼ円形を呈し、径1.05～
0.98mを測る。深さは、確認面から72cmを測る。土層は、1・3・5・7層が明黒褐色土層、2層が暗
褐色土層、4層が暗黄褐色土層、6層が黒褐色均質土層である。

出土土器fig. 76-1～4は、層位的には安定していないが、ほぼ同時期の所産であろうか。

22号遺構(fig. 76・82)

土坑。縄文時代の炉穴と考えられる。火床面を2箇所にもつことから複数期の重複が想定される。
ただし、範囲、規模とも判然としない。

fig. 82-1が出土している。

23号遺構(fig. 79・80)

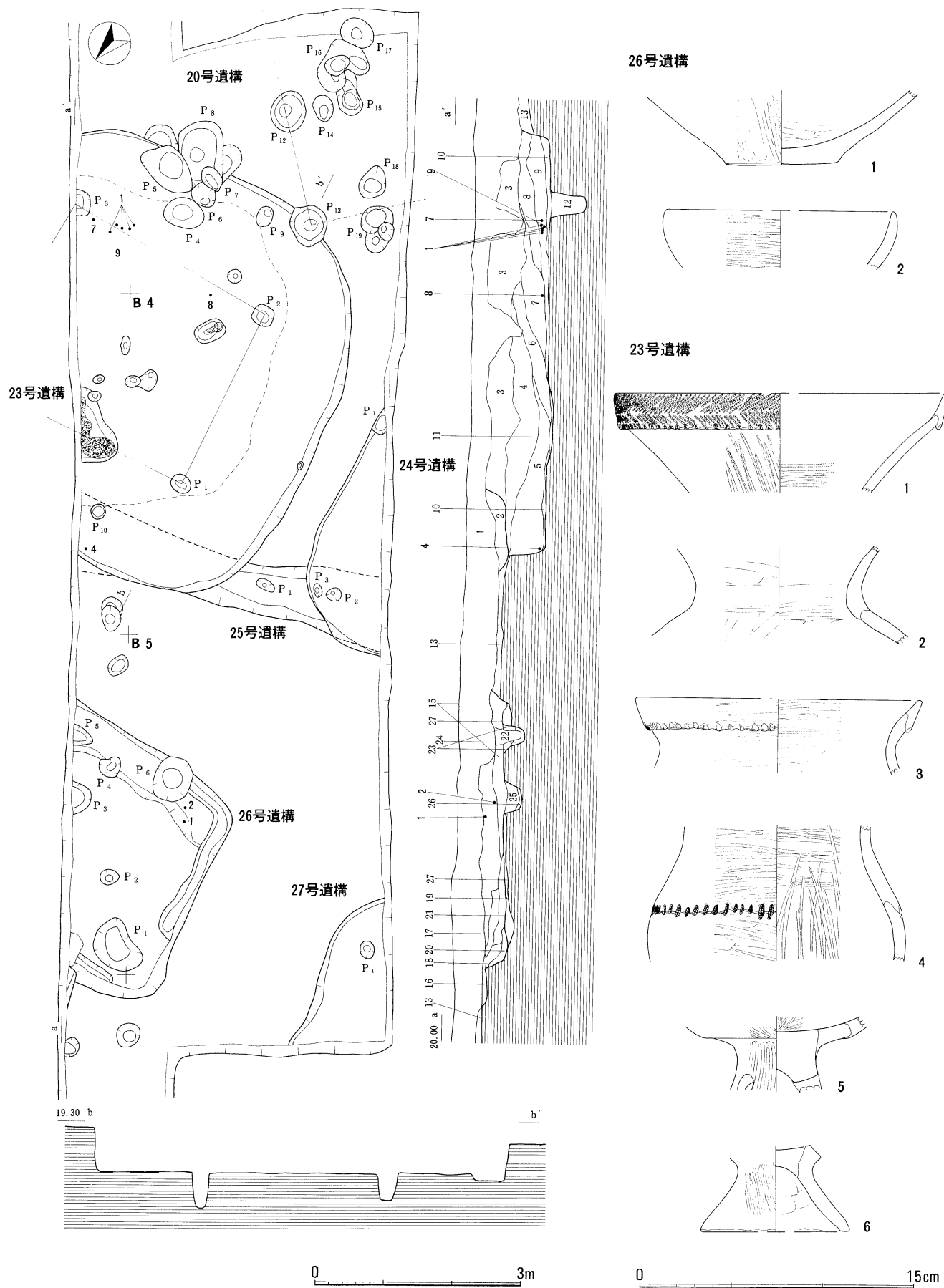


fig.79 20·23·24·25·26·27号遺構実測図(1/80)、23号遺構(1)、26号遺構出土遺物実測図(1/3)

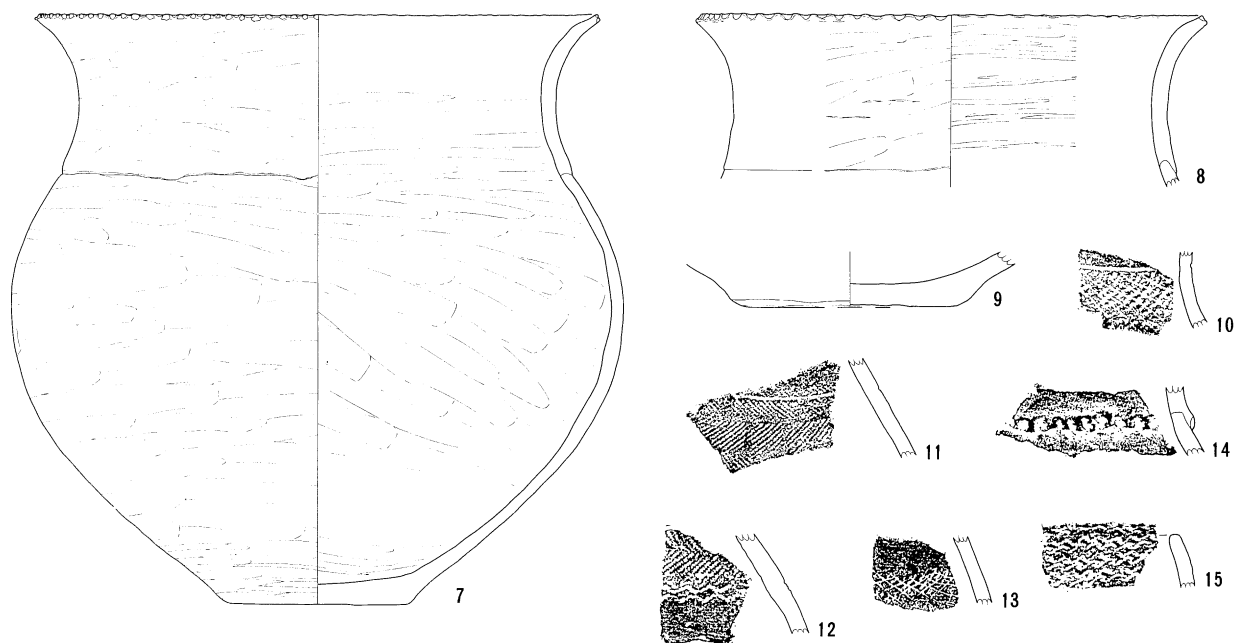


fig.80 23号遺構出土遺物実測図(2)(1/3)

竪穴住居跡。掘立柱列20号遺構、溝25号遺構と重複する。本遺構が古。建替えは確認できない。竪穴平面形態は隅丸胴張り長方形を呈し、規模は、主軸長6.02m測る。主軸方位はN-17°-W、残存壁高は18~63cmである。P₁~P₃は支柱穴であるが、P₄~P₁₀についてはかならずしも本遺構に帰属するものではない。P₈は、柱痕跡をともなう柱掘形であり、組合せは不明確であるが、20号遺構と関連する可能性がある。P₅は貯蔵穴であろうか。その深さは、床面よりP₁が49cm、P₂が41cm、P₃が45cm、P₄が22cm、P₅が16cm、P₆が37cm、P₇が76cm、P₈が13cm、P₉が18cm、P₁₀が7cmを測る。当該期における支柱穴掘形としては小規模である。炉は2基あり、主軸線上北側のものは平面不定形にあり、深さ5cmを測る。底面はよく焼けていた。P₂脇のものは、平面規模47×30cm、深さ4cmを測る。床は貼り床構造をもたない。全体に比較的硬質であった。周溝は明確ではなかった。fig. 79土層は、1層が表土層、2層は黒褐色均質土層であり、25号遺構に対応する。3層は暗褐色土層、4層は黒褐色土層であり最も暗。5層はロームを多量に混合する暗褐色土層、6・9層はロームを多量に混合する暗黄褐色土層、7層は黒褐色土層、8層は明黒褐色土層、10層は黒褐色土とロームを粒状に混合する層、11層は焼土ブロックからなる層、12層は粒状の黒褐色土層、13層はソフトローム層である。覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、1・4・7・8・9が覆土から、他は一括出土土器である。

24号遺構(fig. 79)

竪穴住居跡。竪穴住居跡22号遺構と重複する。本遺構が古。竪穴平面形態は胴張り隅丸方形ないしは長方形と考えられる。大半は調査区外となり、規模、住居内施設等不明。主軸方位は東辺を基準とした場合N-7°-Wである。残存壁高は18~39cm前後を測る。床は貼り床構造をもたない。全体に軟質であったが、部分的に硬質面が認められた。覆土は明黒褐色土を基調とし、自然堆積によると考えられる。

遺物は出土していない。

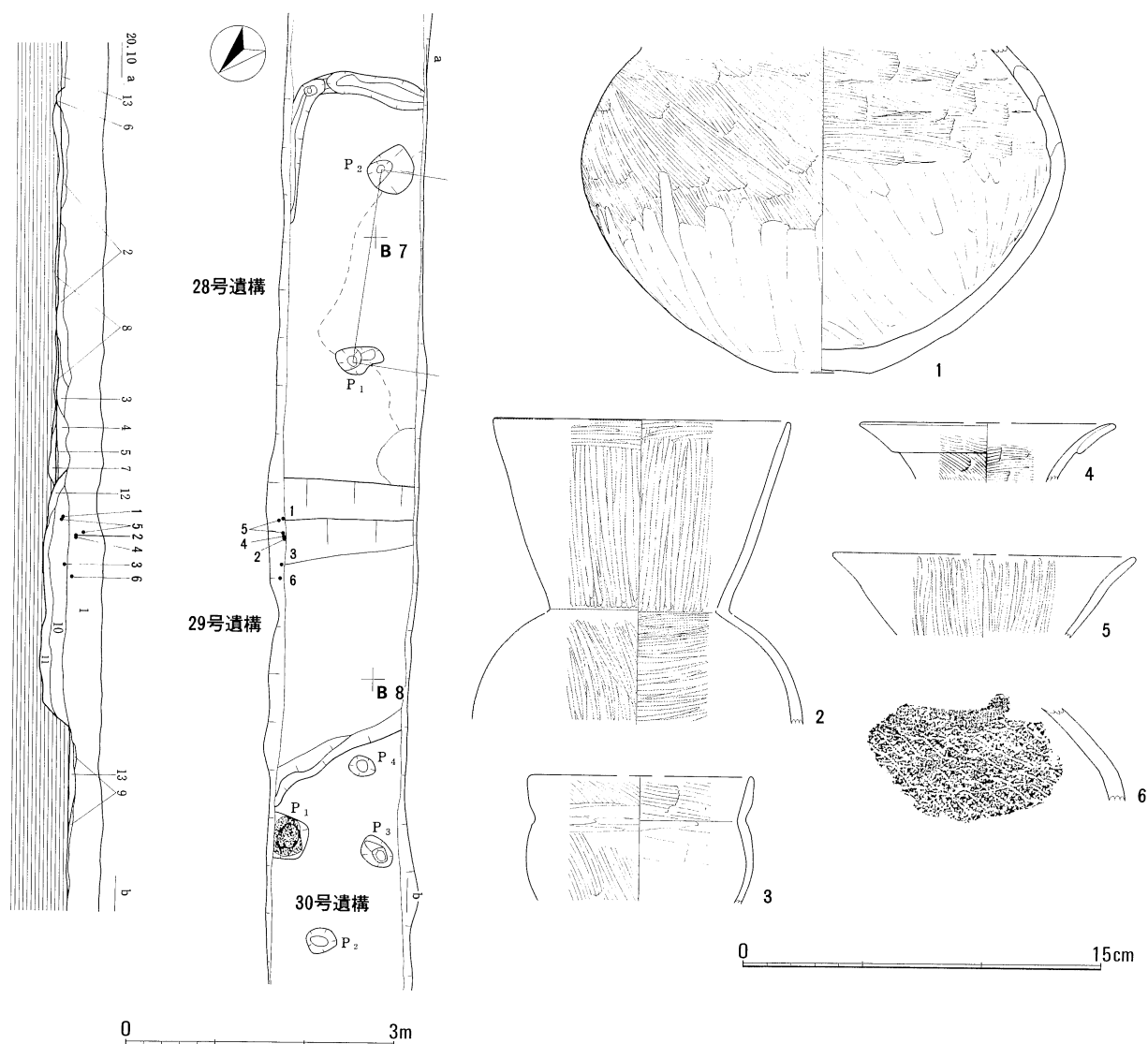


fig.81 28・29・30号遺構実測図(1/80)、29号遺構出土遺物実測図(1/3)

25号遺構(fig. 79)

溝。竪穴住居跡23・24号遺構と重複する。本遺構が新。溝断面形態はU字形ないしは逆台形を呈す。断面セクションによると、幅1.25m、深さ表土下40cm程度を測る。走行方位は、おおよそN-7°-Wであるが若干蛇行する。P₁は底面から18cmを測る。底面、覆土内に硬質面は認められない。土層は23号遺構で記載した。自然堆積と考えられる。

まとまった遺物の出土はない。

26号遺構(fig. 79)

竪穴住居跡。竪穴平面形態は方形を呈し、規模は主軸長で3.51mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。残存壁高は10~32cm。主柱穴は検出されなかった。Pitの深さは床面よりP₁が8cm、P₂が24cm、P₃が24cm、P₄が32cm、P₅が20cm、P₆が32cmを測る。その性格、帰属は不明。貯蔵穴は検出されていない。カマドは北壁調査区断面部分で検出された。袖部の範囲など明確ではなかった。煙道は長く突出する。床は全体に軟質であった。掘形は壁際周囲が深くなるものであり、南壁際は掘形にそって掘りすぎてしまった。周溝は断続する。土層14層は明黒褐色土層、15層はしみ状に褐色土を含むを

IV 雲ノ境遺跡

黒褐色土層、16層は黒褐色土と山砂粘土を粒状に混合する層、17層は黒褐色均質土層、18層は黒褐色土を地層としてブロック状の山砂粘土、焼土粒を混合する層、19層はブロック状の山砂粘土、焼土粒を混合する層、20層は山砂粘土層、21層は焼土ブロックからなる層、22・25層は黒褐色均質土層、23層は明黒褐色土層、24層はロームブロックを主体とする暗黄褐色土層、26層は暗黄褐色土層、27層はロームブロックを多量に混合する明黒褐色土層である。基本的に自然堆積と考えられる。

遺物1・2は、覆土上層より出土したものである。

27号遺構(fig. 79)

竪穴住居跡。大半は調査区外となり、規模、主軸方位、住居内施設等不明。残存壁高は10cm前後を測る。床は貼り床構造をもつ。全体に軟質であった。覆土は明黒褐色土を基調とし、下層に焼土の堆積が認められた。火災に遭ったことが想定される。

遺物は出土していない。

28号遺構(fig. 81)

竪穴住居跡。溝29号遺構と重複する。本遺構が古。確認段階で床面が露呈し、北側部分については範囲を限定することができない。竪穴平面形態は方形と考えられる。規模は、カマド位置から推定すると主軸長4.20mを測る。主軸方位は、おおよそN-34°-Wである。残存壁高は0～5cmを測る。P₁～P₂は支柱穴である。深さは床面よりP₁が53cm、P₂が48cmを測る。P₁は柱抜き取り穴をとまう。カマドは、遺存部分が少なく、山砂粘土範囲を図示した。貯蔵穴は検出されていない。床は、貼り床構造をもち中央部は硬質であった。周溝は北、東辺で検出した。土層は、1層が表土層、2層が明黒褐色土層、3層が山砂粘土ブロックを混合する明黒褐色土層、4層が山砂粘土層、5層が明黒褐色土層であり、焼土、山砂粘土を混合する。6層が暗黄褐色土層、7層が黒色土と山砂粘土、焼土ブロッ

tab.14 雲ノ境遺跡竪穴住居跡一覧表

(m, m²)

遺構	時期	主軸×副軸	面積			主軸方位	柱穴	カマド	炉	貯蔵穴	備考
			確認面	床	内区						
01	II	—×—	—	—	—	(N-28°-W)	○	×	—	○	02・03号遺構と重複。02・03号遺構より新。
03	I	4.53×3.93	(15.00)	(13.34)	3.87	N-21°-E	○	×	○	○	01号遺構と重複。01号より古
04	—	—×—	—	—	—	(N-4°-W)	○	—	—	—	05・06号遺構と重複。05・06号より古。
07	—	—×—	—	—	—	—	—	—	—	—	住居跡ではない可能性が高い。
08	(IV)	5.69×5.60	(31.06)	(28.63)	6.64	N-20°-W	○	○	×	×	07・11号遺構と重複。07・11号より古。
09	IV	5.72×5.84	31.02	28.28	8.67	N-31°-W	○	○	×	×	
12	IV	5.05×4.96	(24.27)	(21.75)	6.09	N-18°-W	○	○	×	×	13号遺構と重複。13号より古。
13	(IV)	—×—	—	—	—	N-31°-W	—	○	—	—	12号遺構と重複。12号より新。
14	—	—×—	—	—	—	—	—	—	—	—	
16	(I~II)	—×—	—	—	—	(N-49°-W)	○	×	○	—	17号遺構と重複。17号より古。
18	(II~III)	—×—	—	—	—	(N-39°-W)	○	—	—	—	15号遺構と重複。15号より古。
19	—	—×—	—	—	—	(N-41°-W)	—	—	—	—	20号遺構と重複。20号より古。
23	I	6.02×—	—	—	—	N-17°-W	○	×	○	△	20・25号遺構と重複。20・25号より古。
24	—	—×—	—	—	—	(N-7°-W)	—	—	—	—	25号遺構と重複。25号より古。
26	(IV)	3.51×—	—	—	—	N-14°-W	×	○	×	—	
27	—	—×—	—	—	—	—	—	—	—	—	
28	(IV)	4.20×—	—	—	—	N-34°-W	○	○	×	—	29号遺構と重複。29号より古。
30	—	—×—	—	—	—	—	△	×	△	—	竪穴住居跡の可能性。29号遺構と重複。29号より古。

時期 I 期 久ヶ原式 III 期 五領式
II 期 鴨居上ノ台式 IV 期 鬼高式～



fig.82 22号遺構、遺構外出土遺物実測図(1/3、2/2) (1、22号遺構 2~26、遺構外出土遺物)

クを混合する層、8・9層が硬質の明黒褐色土層、10層が黒褐色土層、11層がロームブロックを多量に混合する明黒褐色土層、12層が焼土を若干混合する明黒褐色土層、13層がソフトローム層である。

遺物は出土していない。

29号遺構(fig. 81)

溝。竪穴住居跡28・30号遺構と重複する。本遺構が新。溝断面形態は皿状であり、北壁の傾斜が急になる。確認面で幅2.73～3.70m、30cm程度を測る。走行方位は確定できない。底面、覆土内に硬質面は認められない。土層は28号遺構で記載した。自然堆積と考えられる。

調査区断面部分より1～6がまとまって出土した。6は明確ではないが、他はほぼ同時期のものと考えられる。

30号遺構(fig. 81)

炉状の施設P₁から竪穴住居跡である可能性を想定した。また、土層9層が、床と考えられる。P₁平面規模は最大径で49cm、深さ11cmを測る。底面はよく焼けていた。P₂～P₄は、本遺構に帰属する可能性を考えておきたい。その深さは、確認面よりP₂が15cm、P₃が47cm、P₄が26cmを測る。

遺物は出土していない。

3 遺構外出土遺物

fig. 82-2～26は、遺構外から出土した遺物である。2～10は、条痕文系の縄文土器であり、11～20は、弥生土器であり、後期に比定される。22は、S字状口縁台付甕形土器、23は内耳土器である。24は軒瓦であり、10・11号遺構で多量に出土した瓦片とおそらく対応する。器面は灰色を呈す。25・26は、泥面子であろう。

4 小 結

調査範囲も限られており、またA列トレンチ北側を除き、表土層から浅く遺存状態が不良であった。したがって検出された遺構数に比較して遺物も少なく、時期が限定できない遺構が多い。弥生時代以降における集落の開始期は、確実に後期であり、同じ台地上においても村田川あるいは海岸平野に直接対面する菊間遺跡、菊間手永遺跡に対して2次的な新開集落である。おそらくこれらの拡大、拡散にともない成立したことが考えられる。しかし、その後も経営期は断続的といえよう。

検出された古墳については時期が明らかではない。古墳時代後期において形成される菊間古墳群の系列下にある支群を構成すると考えられるが、現状では首長墓群を除き散在的である。今後の周辺地域における調査に期待したい。

tab.15 甕ノ埴遺跡出土土器観察表

遺構	構図 番号	種別	器種	外面の特 徴	内面の特 徴	出土位置	現存量	胎土	焼成	色調(外) (内)	口径 器高	最大径 底径	(cm)	(ml)
01	1	弥生土器	甕	口頸部多段。指頭痕を残す。胴部ヘラ先によるナデ。	ヘラナデ(右左)。	床面	胴部中位 1/3	B>A>C E	良好	にぶい橙色	(11.9)	(23.9)		
	2	弥生土器	高杯	ミガキ。脚部3孔。	ハケ(12/1cm)(左右)。	床面	脚部のみ	⑥>A>B D	良好	にぶい橙色 橙色	(9.2)	12.1		
	3	弥生土器	壺	ヘラナデ。	ヘラナデ。		底部1/3	E>A B	良好	にぶい黄橙色	(1.6)	(4.8)		
	4	弥生土器	甕	胴部有段。竹管による押捺。胴部ミガキ。	ヘラナデ。	床面		C>A>D	良好	赤灰色 にぶい黄褐色				
03	1	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文1段。縄文原体による押捺。円形浮文。	ミガキ。赤彩。			A>B E	良好	明黄褐色 赤褐色				
	2	弥生土器	甕	胴部有段。竹管による刺突文。ヘラナデ。平滑。	ヘラナデ。			A	良好	黄灰色				
	3	弥生土器	壺	縄軸による網目状然糸文。	ヘラナデ。			B>A D E	良好	赤褐色 橙色				
	4	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。沈線による区画。無文区ヘラナデ。	ヘラナデ。			A>B	良好	極暗赤褐色 にぶい橙色				
	5	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。無文区赤彩。	ヘラナデ。赤彩か。			C>A B D	良好	にぶい橙色 赤褐色				
04	6	弥生土器	壺	沈線および棒状工具による刺突文で区画された単節斜縄文3段以上。区画外無文区赤彩。	器面状態不良。			E>A B	良好	にぶい黄橙色				
	7	弥生土器	壺	沈線による結紐文か。地文なし。全体に赤彩。ミガキ。	ヘラナデ。			A B	良好	赤褐色 橙色				
	8	弥生土器	壺	沈線による三角文か。地文なし。区画帯内赤彩。ミガキ。	ヘラナデ。			A B	良好	灰赤色 橙色				
	9	土師器	杯	ロクロ調整。体部下半手持ちヘラケズリ(左右)。	ロクロ調整。		体部1/4	A>B	良好	橙色 赤褐色	(12.8) (3.8)			
	1	土師器	甕	ヘラナデ、ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/10	B	良好	暗赤灰色 にぶい橙色	(23.3) (2.8)			
	2	須恵器	杯	ロクロ調整。体部下端、底部全面回転ヘラケズリ(左右)。底部切り離し不明。	ロクロ調整。	覆土	体部1/3、 底部3/4	A	良好	褐灰色	(12.4) 4.1	7.4		277

04	3	須恵器	高杯	ロクロ調整。透孔3孔。	ロクロ調整。		脚接合部	AB	良好	明灰褐色	(4.4)	
07	1	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ、ハケ状の条線を残す(上下)。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。		口縁部1/6	ABCD	良好	にぶい赤橙色 にぶい橙色	(12.9) (4.2)	
	2	土師器	甕	ヘラケズリ(右左)。	ヘラナデ。		底部1/4	C>ABD	良好	赤褐色 にぶい橙色	(2.2) (4.3)	
	3	土師器		ヘラナデ(上下、左右)。	ヘラナデ(右左)。		脚部上半 1/3	⑤>AB	良好	にぶい橙色	(3.6)	
08	1	土師器	壺	ハケ(10/1cm)(下上)のち口縁部ヨコナデ。	ハケ(右左)。		口縁部1/8	AB	良好	にぶい橙色 橙色	(18.4) (3.8)	
	2	土師器	埴	ハケ(12/1cm)のち口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。		口縁部1/5	ABE	良好	橙色	(9.4) (3.4)	
	3	土師器	壺	ヨコナデ、ミガキ。赤彩。	ヨコナデ。平滑。		口縁部1/5	AB>⑥	良好	橙色 浅黄橙色	(13.7) (4.3)	
09	1	土師器	甕	ヘラナデ、ヨコナデ。	ヘラナデ、ヨコナデ。		口縁部1/7	A>BE	良好	暗赤灰色 赤色	(23.8) (4.4)	
	2	土師器	高杯	杯部器面状態不良。ヨコナデか。胴部ヘラケズリ(上下)。脚端部ヨコナデ。	杯部ヘラナデ、ヨコナデ。平滑。 脚部ヘラケズリ(右左)。	床面	杯部1/4欠	⑤>AB	良好	橙色 黄橙色	14.1 9.5	320 316
	3	土師器	高杯	器面状態不良。	器面状態不良。ミガキか。	床面	杯部1/5	AB	良好	黄橙色 褐灰色	(12.9) (3.8)	
	4	須恵器	杯	ロクロ調整。	ロクロ調整。	覆土	体部1/6	緻密	良好	灰白色	(14.2) (4.0)	
11	1	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ(右左)。	ヨコナデ。		口縁部1/5	CD>AB	良好	橙色	(14.0) (3.4)	
	2	土師器	杯	ロクロ調整。底部回転糸切り未調整。	ロクロ調整。		底部のみ	E>AB	良好	浅黄橙色	(1.9)	4.0
12	1	土師器	甕	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラケズリ(下上、右左)。	口縁部ヘラナデ、ヨコナデ。胴部ヘラナデ(右左)。	床面	体部2/3欠	⑤	良好	橙色 にぶい橙色	(19.6) (31.7)	21.4
	2	土師器	埴	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ(のち粗いミガキ)。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデのち粗いミガキ。	床面	体部上半 2/3欠	ABE	良好	にぶい褐色 黒褐色	(11.9) (8.2)	(13.7) 7.2
	3	土師器	高杯	ヘラケズリ(上下)。	ヘラナデ(左右)。	床面	脚部1/4周	AB	良好	にぶい黄橙色	(5.1)	

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外) (内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容量A 容量B
12	4	土師器		ヘラナデ。赤彩か。	ヘラナデ。	覆土	底部のみ	㊦>AB	良好	赤橙色	(1.8)	3.1	
15b 18	1	土師器	壺	ハケ(12/1cm)(右左、上下)ののち一部にヘラナデを加える。4本1単位の断面三角形の棒状浮文。	ハケののちミガキ状のナデ。	覆土	口縁部1/8	㊢>㊤>㊦>CD	良好	黄橙色	(23.6) (5.4)		
	2	土師器	壺	ハケののちヨコナデ、ミガキか。器面状態不良。	ハケののちヨコナデ、ミガキか。器面状態不良。	覆土	口縁部1/5	C>DB>AE	良好	橙色 明黄橙色	(13.8) (3.6)		
	3	土師器	壺	複合部ヘラナデ、ヨコナデ。口縁部ミガキ。	ミガキ。	覆土	口縁部1/5	E>AB	良好	橙色	(12.2) (4.1)		
	4	土師器	埴	ミガキ。赤彩。	ミガキ。赤彩。	覆土	口縁部1/6	AB	良好	橙色	(9.5) (4.5)		
	5	土師器	埴	ミガキ。	口縁部ミガキ。胴部ナデ。	覆土	口縁部1/4	AB>C>㊦	良好	にぶい橙色	(6.9) (2.4)		
	6	土師器	埴	ヘラケズリ(右左)。	ヘラナデ。平滑。	覆土	胴部下半 1/2	C>ABE	良好	橙色 赤褐色	(5.2)	3.6	
	7	土師器	壺	ミガキ。赤彩。赤彩は底面におよぶ。	ヘラナデ、一部ミガキ状。		底部のみ	AB	良好	赤褐色 橙色	(1.7)	6.7	
	8	土師器	埴	ヘラナデ。一部ミガキ状。	器面状態不良。	覆土	底部のみ	AB>E>CD	良好	にぶい橙色	(2.0)	3.1	
	9	土師器	壺	ミガキ。底面ナデ、平滑。	器面剥落。	覆土	底部1/3周	㊦>AB	良好	浅黄色	(2.8)	(13.7)	
	10	土師器	支脚	ヘラナデ。一部ミガキ状。	ナデ。	15b・18号 覆土	頭部のみ	A>BE	良好	橙色 にぶい橙色	4.8 (6.8)	8.0	
	11	土師器	高杯	ミガキ。胴部小孔は確認できない。	ヘラケズリ(右左)。	覆土	脚部上半 1/3	㊦>AB	良好	橙色	(4.1)		
	12	土師器	台付甕	ヘラナデ。	ハケ(9/1cm)(上下)。	覆土	脚台部下半 1/6	AB	良好	にぶい黄橙色 にぶい橙色	(3.85)	(8.2)	
	13	土師器	高杯	ミガキ。脚部小孔は確認できない。	杯部ミガキ。	覆土	脚接合部のみ	AB>CD	良好	明褐灰色 にぶい橙色	(3.6)		
	14	須恵器	杯	ロクロ調整。底部全面回転ヘラケズリ(左右)。火ダスキ。墨書。	ロクロ調整。火ダスキ。口唇部タール状の付着物、灯明皿として使用か。	18号覆土	口縁部一部欠	ABC	良好	灰オリーブ色	13.5 4.2	8.4	340 341

15b 18	15	弥生土器	壺	ハケ(9/1cm)のちナデか。頸部単節斜縄文1段以上。結節文による区画。	覆土	頸部1/4	B>AE	良好	明黄褐色	(5.5)	
	16	弥生土器	壺	結節文。無区画。無文区ミガキ、赤彩か。			E	良好	明黄橙色		
	17	弥生土器	高杯	複合部竹管による押捺。ヘラナデ。			B>AE	良好	黄橙色		
	18	弥生土器	壺	網目状然糸文。無区画。			⑤>A	良好	にぶい橙色 明黄橙色		
21	1	土師器	高台付杯	ロクロ調整。杯部上半ロクロ回転によるヘラナデ。ハケ状の条線を残す。	覆土	高台部完存、 体部1/3	AE	良好	にぶい赤橙色 赤褐色	(14.1) (6.3)	6.3 408
	2	土師器	杯	ロクロ調整。	覆土	口縁部1/6	AE	良好	にぶい黄色 黒褐色	(12.4) (3.15)	
	3	土師器	高台付杯	ロクロ調整。底面剥落面に回転糸切り跡。	覆土	高台部のみ	A	良好	橙色	(3.3)	10.2
	4	土師器	高台付杯	ロクロ調整。	覆土	高台部のみ	AB	良好	橙色 にぶい橙色	(4.4)	9.1
23	1	弥生土器	壺	複合部単節斜縄文2段。複合部下端縄文原体による押捺。無文区ミガキ、赤彩。	覆土	口縁部1/2	ABE	良好	橙色	(18.4) (5.5)	
	2	弥生土器	壺	ヘラナデ。一部深いハケ状の条線を残す。		頸部1/5	E>AB	良好	にぶい黄橙色	(5.5)	
	3	弥生土器	広口壺	複合部下端棒状工具による上方からの刺突。ヘラナデ、ヨコナデ、一部ミガキ。		口縁部1/4	AB>E	良好	橙色 にぶい黄橙色	(15.8) (4.2)	
	4	弥生土器	甕	胴部有段。縄文原体による押捺。ヘラナデのちミミガキ。	覆土	胴部中位 1/3	ABE	良好	にぶい赤褐色 灰赤色	(7.5)	(14.2)
	5	土師器	高杯	ミガキ。胴部3孔。		胴接合部	E>ABCD	良好	橙色 淡黄橙色	(4.2)	
	6			ハケ(下上)のち胴端部ヨコナデ。		胴部1/4	⑤>AB>C D	良好	橙色	(4.8)	(8.2)
	7	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。胴部有段。ヘラナデ(右左)、一部ミガキ状。	覆土	胴部上半 2/3欠	⑤>AB	良好	褐灰色	(22.3) 23.2	(24.2) 7.2 6801
	8	弥生土器	甕	口唇部押捺。胴部有段。ヘラナデ(右左)。	覆土	口縁部1/4	E>AB	良好	灰黄褐色 橙色	(20.2) (6.8)	

IV 甕ノ埴遺跡

遺構 番号	挿図 番号	種別	器種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	出土位置	現 存 量	胎 土	焼 成	色 調 (外内)	口 径 器 高	最大径 底 径	容量A 容量B
23	9	弥生土器	甕	ヘラナデ。	ヘラナデ。黒化。	覆土	底部1/3	B>A E	良好	明黄橙色 褐灰色	(2.2)	(8.4)	
	10	弥生土器	壺	網目状燃糸文。沈線による区画。	ヘラナデ。			A>B E>C D	良好	にぶい赤橙色 にぶい橙色			
	11	弥生土器	壺	単節斜縄文3段以上。沈線による区画。無文区 ミガキ。	ヘラナデ。			A>B D	良好	明黄橙色			
	12	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。結節文による区画。無文 区ヘラナデ、赤彩。	器面状態不良。			B E>A	良好	橙色 灰赤色			
	13	弥生土器	壺	網目状燃糸文。無区画。無文区施文後にミガ キ、赤彩。	ヘラナデ。			A B	良好	橙色 にぶい橙色			
26	14	弥生土器	甕	胴部有段。押捺原形不明。	ヘラナデ。			㊦>B>A	良好	にぶい赤橙色 褐灰色			
	15	弥生土器	碗	結節文。	器面状態不良。			A B C D	良好	黄橙色			
	1	土師器	壺	ミガキ。底面ヘラナデ。	ヘラナデ。	覆土	底部3/4	A>B C D E	良好	にぶい赤橙色 浅黄橙色	(4.1)	6.15	
	2	土師器	杯	ミガキ。	ヘラナデ、ヨコナデ。平滑。	覆土	口縁部1/8	A B E	良好	黒褐色 にぶい黄褐色	(12.5) (3.2)	(13.0)	
	1	土師器	甕	ハケ(8/1cm)(右左)のち胴部ヘラケズリ(上 下)。頸部にヨコナデを加える。	胴部下半ヘラケズリ(右左)。胴部 上半ハケ(右左)。	覆土	胴部1/2	A B>E	良好	灰褐色 にぶい赤褐色	(17.7)	20.4 4.1	
29	2	土師器	埴	丁寧なミガキ。赤彩。	丁寧なミガキ。赤彩。	覆土	口縁部2/3、 胴部1/8	A B	良好	赤色	12.8 (12.7)		
	3	土師器	埴	ハケ(6/1cm)(下上)のち頸部ヘラケズリ。口 縁部ヨコナデ。	口縁部ハケ(右左)、ヨコナデ。胴 部ナデ。	覆土	体部上半 1/4	A B>E	良好	橙色 にぶい黄色	(9.65) (5.3)		
	4	土師器	壺	ハケ(9/1cm)(右左)のち腹台部ヨコナデ。	ハケ(右左)のちヨコナデ。	覆土	口縁部1/6	A B>E	良好	にぶい赤褐色 (10.8) (2.5)			
	5	土師器	埴	脚部の可能性あり。ミガキ。赤彩。	ハケのちミガキ。赤彩。	覆土	口縁部1/3	A B E>C D	良好	赤色 (12.8) (2.5)			
	6	弥生土器	壺	縄軸の網目状燃糸文。	ヘラナデ。	覆土		㊦>A B C	良好	にぶい赤褐色			

11	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。ヘラナデ。	口縁部有段。段部に竹管による押捺。			E>AB>C D	良好	黄灰色 にぶい橙色		
12	弥生土器	甕	口唇部2方向による押捺。ヘラナデ。	ヘラナデ。			ABE	良好	にぶい橙色		
13	弥生土器	甕	口唇部押捺。	有段。			E>ABCD	良好	灰黄橙色 にぶい黄橙色		
14	弥生土器	甕	ヘラナデ。有段部押捺文。原体不明。	ヘラナデ。			CD>AB> E	良好	橙色 にぶい橙色		
15	弥生土器	壺	単節斜縄文2段以上。結節文による区画。無文区赤彩。	ヘラナデ。			AB	良好	淡橙色		
16	弥生土器	壺	複合部結節文。複合部下端押捺。原体不明。ミガキ。	ミガキ。			E	良好	にぶい橙色		
17	弥生土器	碗	複合部単節斜縄文3段。口唇部も施文。複合部下端押捺。原体不明。	ミガキ。			ABCE	良好	浅黄橙色		
18	弥生土器	碗	単節斜縄文。無区画。	ミガキ。赤彩。			AB	良好	淡橙色 赤橙色		
19	弥生土器	壺	単節斜縄文。沈線区画による山形文帯。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			CD>AB	良好	橙色 にぶい橙色		
20	弥生土器	壺	結節文、沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			AB>㊦	良好	赤褐色 にぶい橙色		
21	弥生土器	壺	網目状燃糸文。沈線による区画。無文区ミガキ、赤彩。	ヘラナデ。			E>C>AB	良好	赤褐色 橙色		
22	土師器	甕	ハケ。S字状口縁台付き甕。	ナデ。			A>B>CD	良好	灰白色		

V 付 篇

小田部古墳出土のガラス玉に関する 2、3 の科学的知見

国立歴史民俗博物館 情報資料研究部 永 嶋 正 春

1 はじめに

標記の古墳からは、ガラス小玉218個以上、ガラス丸玉64個以上が出土しているが、それらの材質や技法に関する分析調査は小田幸子氏により実施され、「小田部古墳から出土したガラス玉の化学的研究」として報告されている¹⁾。

筆者はこれらのガラス玉の内、小玉215個について観察する機会に恵まれた。その機に於いて、215個全部のX線透過検査と6個についての蛍光X線分析とを実施した。今回の補足的調査の結果は、小田氏の報告内容と大方同じではあるが、2、3の補足すべき点もあるのでここに報告する。

2 調査結果

調査方法 X線透過検査として、軟X線によるX線写真撮影を行った。その目的は、アルカリガラスか鉛ガラスかの識別、孔や気泡の形態把握などである。撮影には歴博設置のX線透過検査システムを、またフィルムとしては富士ソフテックスフィルムFGタイプを使用した。蛍光X線分析には同じく歴博設置の大型試料用波長分散型を使用し、真空中で軽元素系までの測定をおこなった。これはガラス素材及び着色剤についての知見を得るためである。なお資料は完形のままで測定に供した。

X線透過検査結果 ガラス小玉215個は、軟X線の範囲で良好なX線透過性を示すことから、すべてアルカリガラスと判断できる。これは、小田氏の極一部についての化学分析結果およびそれぞれのガラス小玉の外観的特徴とにより推定できたことであつたが、改めてここに確認されたことになる。孔中央の孔径は1～4mmの間で様々であるが、その大きさは孔口を除きほぼ一定している。しかしながら、孔径に変化を有するものも若干認められる。ガラス玉内部の気泡の大半は球形を呈しており、既報告のような孔に沿った気泡の列や気泡の伸びは、それと見た場合に僅かに認められる程度である。一般にガラス管の輪切り法によると推定出来るガラス玉の場合、例えば江子田金環塚古墳の例のように²⁾、孔に沿った気泡が顕著に確認できるのであるが、本古墳のものには、それほど顕著なものは認められないのである。これを、素材的な特質あるいは製作技術の優秀さのため、ガラス管の輪切り法でありながら気泡が独立し球形化が進んだと解釈すべきなのか、あるいは別種の製作方法によるものと考えらるべきなのかは、にわかには判断できない。小田氏は破玉等をも観察した結果として、ガラス管の輪切り法としておられるので、この点に関しては今後改めて十分な観察と類例の捕捉を行い結論づけたいと考える。

蛍光X線分析結果 215個のガラス小玉の色調は紫紺色で、濃淡や透明度の違いを別にすれば、基本的には1種類と見られる。その中で形態、濃淡などを考慮して、No.1、86、96、110、139、184の

6点を選択し分析した。結果は、検出された元素それぞれの相対的なピーク強度の比は若干異なるものの、構成成分元素については6点共同であった。その内容は、ピーク強度の大きなものとしては、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、珪素(Si)、小さなものあるいは微小なものとしては、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マンガン(Mn)、バリウム(Ba)、ジルコニウム(Zr)、ストロンチウム(Sr)、チタン(Ti)、コバルト(Co)、などである。なおナトリウム(Na)については、装置上の理由で検出されない。以上の結果からみると、本古墳出土のガラス小玉はコバルトを主たる着色剤とするカリウム石灰ガラスと判断できる。更に特徴的な点としては、マンガン、バリウムが少量存在すること、銅(Cu)がほとんど含まれていないこと、鉛(Pb)が検出されないことが挙げられる。これらの内で小田氏の報告には触れられていないものとして、バリウムの存在、鉛の不存在に注意すべきである。

3 おわりに

小田部古墳出土のガラス小玉215個について非破壊的なX線調査を行い、上記のような結果を得た。本古墳からは64個以上のガラス丸玉が出土しているが今回の調査では対象とはしなかった。今後、ガラス丸玉の検討、ガラス小玉の再検討を進めると共に、本古墳以外のガラス関係資料についても有機的な関連性を持って調査を行うべきものと考えている。

本調査は(財)市原市文化財センター 大村 直、古墳研究家 田中新史の両氏による御配慮、御助力により行われたものであることを記し、改めて感謝の意を表することとしたい。

1)「市原市埋蔵文化財調査報告6 小田部古墳の調査」 市原市教育委員会 1972

2)「上総 江子田金環塚古墳」 市原市教育委員会 1985